

茨城県教育財団文化財調査報告第113集

牛久東下根特定土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書

中下根遺跡

西ノ原遺跡

隼人山遺跡

平成8年6月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第113集

牛久東下根特定土地区画整理事業 地内埋蔵文化財調査報告書

なか しも ね 遺 跡
中 下 根
にし の はら 遺 跡
西 ノ 原
はや と やま 遺 跡
隼 人 山

平成8年6月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団



遺跡遠景（右から西ノ原遺跡，華人山遺跡）



中下根・西ノ原・華人山遺跡の出土遺物

序

茨城県南部の牛久市周辺地域には、国の首都圏整備計画による「つくば・土浦・牛久業務核都市構想」、茨城県による「グレートつくば構想」等が計画されております。

住宅・都市整備公団では、県南地域における牛久市のもつ地理的条件を勘案し、JR常磐線新駅の設置や首都圏中央連絡道の建設等の広域交通拠点性を生かした整備を行い、新駅を中心とする、より広域的重要拠点としての業務機能並びに都市機能を備えた新都心の形成と、良好な居住環境を有する住宅の供給を行うための土地区画整理事業を進めております。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成5年4月から平成7年9月にかけて発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成5年度から平成7年度に調査を実施した中下根遺跡、西ノ原遺跡及び単人山遺跡の調査成果を取録したものであり、本書が学術的な資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である住宅・都市整備公団よりいただいた多大な御協力に対し厚くお礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、牛久市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成8年6月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成5年4月から平成7年9月まで発掘調査を実施した、茨城県牛久市に所在する中下根遺跡、西ノ原遺跡及び単人山遺跡の発掘調査報告書である。

なお、3遺跡の所在地は次のとおりである。

中下根遺跡 牛久市下根町字中下根1,557番地ほか
 西ノ原遺跡 牛久市下根町字西原1,504番地の29ほか
 単人山遺跡 牛久市下根町字単人山432番地の20ほか

2 中下根遺跡、西ノ原遺跡、単人山遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯橋 田本 勇昌	昭和63年4月～平成7年3月 平成7年4月～	
副 理 事 長	角小 田 芳夫 中 林 秀 齋 島 弘 齋 藤 佳	平成3年7月～平成6年3月 平成6年4月～平成8年3月 平成7年4月～ 平成8年4月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～平成7年3月	
常 務 理 事	一 梅 木 邦彦 澤 秀 彦	平成7年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
事 務 局 長	藤 枝 宣一 齋 藤 紀 齋 藤 隆	平成4年4月～平成7年3月 平成7年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
埋 藏 文 化 財 部 長	安 沼 藏 田 幸重 沼 田 幸 夫	平成5年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
埋 藏 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 小 敏 夫 根 橋 弘 達	平成4年4月～平成8年3月 平成8年4月～
	課 長 代 理	小 根 本 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)
	係 長	清 水 正 一	平成8年4月～
	任 務 調 査 主 任 員	川 井 澤 一 彦	平成5年4月～平成6年3月
	任 務 調 査 主 任 員	海 老 澤 隆 二	平成6年4月～平成8年3月
	任 務 調 査 主 任 員	小 高 山 五 十 一	平成8年4月～ 平成4年4月～平成6年3月
経 理 課	課 長	小 河 弘 孝 鈴 木 明 鈴 木 典	平成5年4月～平成8年3月 平成8年4月～ 平成7年4月～平成8年3月(平成5年4月～平成7年3月課長代理)
	課 長 代 理	大 所 三 佳	平成8年4月～
	課 主 任 員	大 飯 善 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)
	課 主 任 員	高 島 康 夫	平成4年4月～平成6年3月
	課 主 任 員	池 司 孝 作 柳 澤 浩 松	平成7年4月～ 平成5年4月～平成8年3月 平成8年4月～
調 査 課	課 長 (部 長 兼 務)	安 沼 藏 田 幸重 小 川 林 正 一	平成5年4月～平成8年3月 平成8年4月～
	調 査 第 一 班 主 任 員	藏 田 泉 井 川 正 正 憲	平成5年4月～平成7年3月 平成7年4月～平成7年9月
	調 査 第 二 班 主 任 員	小 川 緑 深 松 博 幸	平成5年4月～平成6年3月 平成5年4月～平成7年3月
	調 査 第 三 班 主 任 員	深 松 博 幸	平成5年4月～平成6年3月
	調 査 第 四 班 主 任 員	柴 田 博 幸	平成6年4月～平成6年9月
	調 査 第 五 班 主 任 員	柴 田 博 幸	平成6年4月～平成7年9月
	調 査 第 六 班 主 任 員	柴 田 博 幸	平成7年4月～平成7年9月
整 理 課	課 主 任 員	山 深 本 静 深 谷 憲 博	平成7年4月～ 平成7年4月～平成8年3月整理・執筆・編集 平成8年4月～平成8年6月整理・編集

- 3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、須恵器について奈良教育委員会文化財保存課の木下亘氏から、石器について千葉県立中央博物館の橋本勝雄氏に御指導をいただいた。
- 5 西ノ原遺跡の土壌自然科学分析及び卑人山遺跡の炭化材樹種同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析結果は付章として報告する。
- 6 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

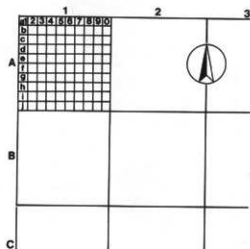
7 遺跡の概略

ふりがな	うしくひがしむねとくいでちくくせいのじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	牛久東下根特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	中下根遺跡・西ノ原遺跡・卑人山遺跡						
巻次							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第113集						
編著者名	深谷 憲二 柴田 博行						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587						
発行年月日	1996(平成8)年6月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
中下根遺跡	茨城県牛久市 下根町字中下根 1,557番地ほか	08219 -0149	36度 00分 08秒	140度 10分 05秒	19930401～ 19950930	23,369㎡	
西ノ原遺跡	茨城県牛久市 下根町字西原 1,504番地の29ほか	08219 -0150	36度 00分 23秒	140度 10分 16秒		13,227㎡	牛久東下根特定 土地区画整理事 業に伴う調査
卑人山遺跡	茨城県牛久市 下根町字卑人山 432番地の20ほか	08219 -0151	36度 00分 38秒	140度 10分 02秒		16,481㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
中下根遺跡	集落跡	縄文時代	陥し穴 9基				標高24m 隣接するヤツノ上遺 跡、中久喜遺跡とと もに古墳時代の大 集落を形成する。
		古墳時代	竪穴住居跡 25軒		土師器、須恵器、土製 品、石製品、ガラス玉		
			竪穴遺構 6基 土坑 1基		土師器 土師器		
			平安時代 竪穴住居跡 2軒 土坑 1基		土師器、須恵器 土師器		
時期不明	土溝 坑 156基 土溝 1条		土師器				
西ノ原遺跡	集落跡	旧石器時代	石器集中地点5か所		ナイフ形石器、ピエス・ エスキュー、剝片		標高24m 石器集中地点が確 認され、石器が出 土している。
		縄文時代	陥し穴 4基				
		古墳時代	竪穴住居跡 21軒		土師器		
			竪穴遺構 1基 土坑 4基		土師器 土師器、石製模造品		
時期不明	土溝 坑 37基 土溝 1条		土師器、剝片				
卑人山遺跡	集落跡	縄文時代	陥し穴 8基				標高24m 線刻された紡錘車 や臼玉が多量に出 土している。
		古墳時代	竪穴住居跡 31軒		土師器、須恵器、土製 品、石製品、鉄製品		
			竪穴遺構 3基 土坑 2基		土師器 土師器		
			平安時代 竪穴住居跡 1軒		須恵器		
時期不明	土溝 坑 91基 土溝 1条		土師器片				

凡 例

- 1 中下根遺跡・西ノ原遺跡・隼人山遺跡の発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。調査区は日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し、X軸(南北)920m、Y軸(東西)30,000mの交点を基準点(A1a1)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々十等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、その組み合わせで「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2a2区」のように呼称した。



第1図 調査区呼称方法概念図

- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡—S I 竪穴遺構—S X 土坑—S K 溝—S D

遺物 土器—P 土製品—D P 石器・石製品—Q 古銭・金属製品—M 拓本土器—T P

土層 攪乱—K

- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示

 = 炉
  = 粘土
  = 赤彩土器
  = 黒色処理
  = 焼土

● = 土器 □ = 石器・石製品 △ = 金属製品 ○ = 土製品

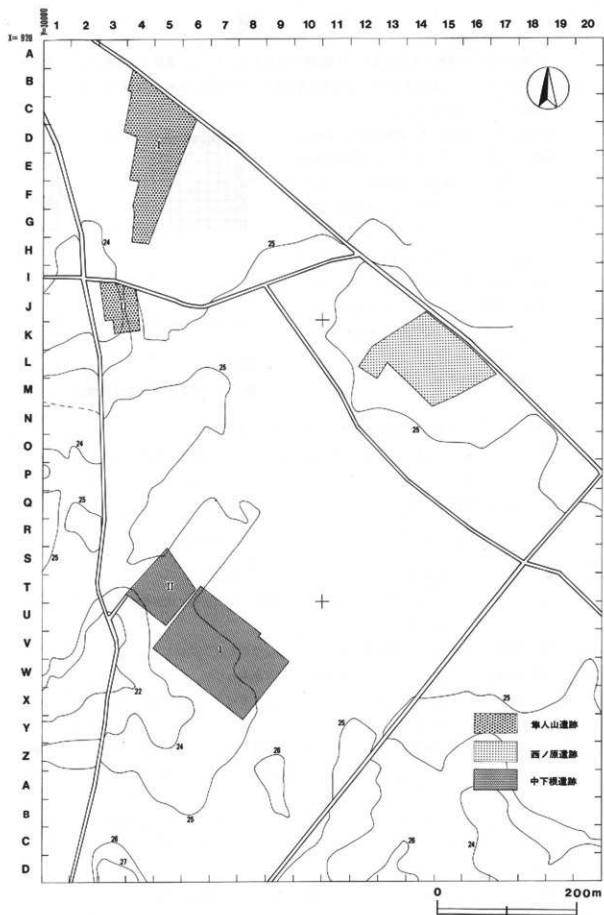
- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、以下のとおりである。

- (1) 各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- (2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に $S = 1/6$ 等と表示した。
- (3) 「主軸方向」は、炉・竈を通る軸線を主軸あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 $N-10^{\circ}-E$ $N-10^{\circ}-W$)
なお、[] を付したものは推定である。
- (4) 計測値は、A—口径 B—器高 C—底径 D—高台径 E—高台高 F—体部径とし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

- 6 遺構番号

遺構番号については、調査の過程において遺構の種別ごと・調査順に付したが、整理の段階で遺構でないかと判断したものは欠番とした。



第2図 中下根・西ノ原・華人山遺跡地区設定図

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 中下根遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1)陥し穴	10
2 古墳時代の遺構と遺物	15
(1)竪穴住居跡	15
(2)竪穴遺構	100
(3)土坑	108
3 平安時代の遺構と遺物	109
(1)竪穴住居跡	109
(2)土坑	113
4 その他の遺構と遺物	114
(1)土坑	114
(2)溝	118
5 遺構外出土遺物	119
第4節 まとめ	127
第4章 西ノ原遺跡	129
第1節 遺跡の概要	129
第2節 基本層序	129
第3節 遺構と遺物	130
1 旧石器時代の遺構と遺物	131
(1)石器集中地点	131
2 縄文時代の遺構と遺物	150
(1)陥し穴	150

3 古墳時代の遺構と遺物	153
(1) 竪穴住居跡	153
(2) 竪穴遺構	214
(3) 土坑	215
4 その他の遺構と遺物	218
(1) 土坑	218
(2) 溝	220
5 遺構外出土遺物	221
第4節 まとめ	226
第5章 卑人山遺跡	228
第1節 遺跡の概要	228
第2節 基本層序	228
第3節 遺構と遺物	229
1 縄文時代の遺構と遺物	229
(1) 陥し穴	229
2 古墳時代の遺構と遺物	233
(1) 竪穴住居跡	233
(2) 竪穴遺構	316
(3) 土坑	320
3 平安時代の遺構と遺物	322
(1) 竪穴住居跡	322
4 その他の遺構と遺物	325
(1) 土坑	325
(2) 溝	331
5 遺構外出土遺物	331
第4節 まとめ	335
付章 西ノ原遺跡・卑人山遺跡自然科学分析報告	
バリノ・サーヴェイ株式会社	337

插图目次

第 1 图	調査区呼称方法概念図	
第 2 图	中下根・西ノ原・単人山遺跡地区設定図	
第 3 图	周辺遺跡分布図	8
第 4 图	中下根遺跡基本土層図	9
第 5 图	第1・2・3・4・5・6号陥し穴実測図	11
第 6 图	第7・8・9号陥し穴実測図	14
第 7 图	第 1 号住居跡実測図	16
第 8 图	第 1 号住居跡出土遺物実測図	18
第 9 图	第 3 号住居跡実測図	19
第 10 图	第 3 号住居跡出土遺物実測図(1)	21
第 11 图	第 3 号住居跡出土遺物実測図(2)	22
第 12 图	第 5 号住居跡実測図	24
第 13 图	第 5 号住居跡出土遺物実測図	25
第 14 图	第 6 号住居跡実測図	26
第 15 图	第 6 号住居跡出土遺物実測図	27
第 16 图	第 7 号住居跡実測図	30
第 17 图	第 7 号住居跡出土遺物実測図(1)	31
第 18 图	第 7 号住居跡出土遺物実測図(2)	32
第 19 图	第 8 号住居跡実測図	35
第 20 图	第 8 号住居跡出土遺物実測図	36
第 21 图	第 9 号住居跡実測図	38
第 22 图	第 9 号住居跡出土遺物実測図	39
第 23 图	第10号住居跡実測図	40
第 24 图	第10号住居跡出土遺物実測図	41
第 25 图	第11号住居跡実測図	44
第 26 图	第11号住居跡出土遺物実測図	45
第 27 图	第12号住居跡実測図	47
第 28 图	第12号住居跡出土遺物実測図	48
第 29 图	第13号住居跡実測図	51
第 30 图	第13号住居跡出土遺物実測図	52
第 31 图	第15号住居跡実測図	55
第 32 图	第15号住居跡出土遺物実測図	55
第 33 图	第16号住居跡実測図	57
第 34 图	第16号住居跡出土遺物実測図	58
第 35 图	第20号住居跡実測図	60
第 36 图	第20号住居跡出土遺物実測図	61
第 37 图	第21号住居跡実測図	63
第 38 图	第21号住居跡出土遺物実測図(1)	64
第 39 图	第21号住居跡出土遺物実測図(2)	65
第 40 图	第21号住居跡出土遺物実測図(3)	66
第 41 图	第21号住居跡出土遺物実測図(4)	67
第 42 图	第21号住居跡出土遺物実測図(5)	68
第 43 图	第23号住居跡実測図	73
第 44 图	第23号住居跡出土遺物実測図	73
第 45 图	第27号住居跡実測図	75
第 46 图	第27号住居跡出土遺物実測図(1)	76
第 47 图	第27号住居跡出土遺物実測図(2)	77
第 48 图	第28号住居跡実測図	79
第 49 图	第28号住居跡出土遺物実測図	79
第 50 图	第29号住居跡実測図	81
第 51 图	第29号住居跡出土遺物実測図	81
第 52 图	第30号住居跡実測図	83
第 53 图	第30号住居跡出土遺物実測図(1)	84
第 54 图	第30号住居跡出土遺物実測図(2)	85
第 55 图	第31号住居跡実測図	88
第 56 图	第31号住居跡出土遺物実測図	89
第 57 图	第32号住居跡実測図	90
第 58 图	第32号住居跡出土遺物実測図	91
第 59 图	第33号住居跡実測図	93
第 60 图	第33号住居跡出土遺物実測図	94
第 61 图	第34号住居跡実測図	96
第 62 图	第34号住居跡出土遺物実測図	97
第 63 图	第35号住居跡実測図	99
第 64 图	第35号住居跡出土遺物実測図	100
第 65 图	第 1 号竪穴遺構実測図	101
第 66 图	第 1 号竪穴遺構出土遺物実測図	101
第 67 图	第 2 号竪穴遺構実測図	102
第 68 图	第 3 号竪穴遺構実測図	103
第 69 图	第 4 号竪穴遺構実測図	104
第 70 图	第 4 号竪穴遺構出土遺物実測図	105

第 71 图	第 5 号整穴遺構実測図	105	第 104 图	第 5 号石器集中地点出土遺物実測図(2)	148
第 72 图	第 5 号整穴遺構出土遺物実測図	106			
第 73 图	第 6 号整穴遺構実測図	107	第 105 图	第 1·2·3·4 号第 1 穴実測図	151
第 74 图	第 6 号整穴遺構出土遺物実測図	108	第 106 图	第 1 号住居跡実測図	154
第 75 图	第 220 号土坑実測図	108	第 107 图	第 1 号住居跡出土遺物実測図	154
第 76 图	第 220 号土坑出土遺物実測図	109	第 108 图	第 2 号住居跡実測図(1)	156
第 77 图	第 2 号住居跡実測図	110	第 109 图	第 2 号住居跡電実測図(2)	157
第 78 图	第 2 号住居跡出土遺物実測図	110	第 110 图	第 2 号住居跡出土遺物実測図	157
第 79 图	第 25 号住居跡実測図	112	第 111 图	第 3 号住居跡実測図	159
第 80 图	第 25 号住居跡出土遺物実測図	113	第 112 图	第 3 号住居跡出土遺物実測図	160
第 81 图	第 67 号土坑実測図	114	第 113 图	第 4 号住居跡実測図	163
第 82 图	第 67 号土坑出土遺物実測図	114	第 114 图	第 4 号住居跡出土遺物実測図	164
第 83 图	第 1 号溝断面図	119	第 115 图	第 5 号住居跡実測図	165
第 84 图	第 1 号溝出土遺物実測図	119	第 116 图	第 5 号住居跡出土遺物実測図	166
第 85 图	遺構外出土遺物拓影図	120	第 117 图	第 6 号住居跡実測図(1)	169
第 86 图	遺構外出土遺物実測図(1)	121	第 118 图	第 6 号住居跡電実測図(2)	170
第 87 图	遺構外出土遺物実測図(2)	122	第 119 图	第 6 号住居跡出土遺物実測図	171
第 88 图	遺構外出土遺物実測図(3)	123	第 120 图	第 7 号住居跡実測図	173
第 89 图	遺構外出土遺物実測図(4)	124	第 121 图	第 7 号住居跡出土遺物実測図	174
第 90 图	西ノ原遺跡基本土層図	129	第 122 图	第 8 号住居跡実測図	177
第 91 图	西ノ原遺跡旧石器集中地点配置図	130	第 123 图	第 8 号住居跡出土遺物実測図	178
第 92 图	第 1 号石器集中地点遺物出土状況図	132	第 124 图	第 9 号住居跡実測図	180
第 93 图	第 1 号石器集中地点出土遺物実測図(1)	133	第 125 图	第 9 号住居跡出土遺物実測図(1)	181
			第 126 图	第 9 号住居跡出土遺物実測図(2)	182
第 94 图	第 1 号石器集中地点出土遺物実測図(2)	134	第 127 图	第 10 号住居跡実測図	185
			第 128 图	第 10 号住居跡出土遺物実測図	185
第 95 图	第 2 号石器集中地点遺物出土状況図	136	第 129 图	第 11 号住居跡実測図	187
第 96 图	第 2 号石器集中地点出土遺物実測図	137	第 130 图	第 11 号住居跡出土遺物実測図	187
第 97 图	第 3 号石器集中地点遺物出土状況図	139	第 131 图	第 12 号住居跡実測図	188
第 98 图	第 3 号石器集中地点出土遺物実測図(1)	140	第 132 图	第 12 号住居跡出土遺物実測図	189
			第 133 图	第 13 号住居跡実測図	190
第 99 图	第 3 号石器集中地点出土遺物実測図(2)	141	第 134 图	第 13 号住居跡出土遺物実測図	191
			第 135 图	第 14 号住居跡実測図	193
第 100 图	第 4 号石器集中地点遺物出土状況図	143	第 136 图	第 14 号住居跡出土遺物実測図	194
第 101 图	第 4 号石器集中地点出土遺物実測図	144	第 137 图	第 15 号住居跡実測図	195
第 102 图	第 5 号石器集中地点遺物出土状況図	146	第 138 图	第 15 号住居跡出土遺物実測図	196
第 103 图	第 5 号石器集中地点出土遺物実測図(1)	147	第 139 图	第 16 号住居跡実測図	198
			第 140 图	第 16 号住居跡出土遺物実測図	199

第141图	第17号住居跡実測図	202	第179图	第9号住居跡実測図	255
第142图	第17号住居跡出土遺物実測図	203	第180图	第9号住居跡出土遺物実測図	256
第143图	第18号住居跡実測図	204	第181图	第10号住居跡実測図	258
第144图	第18号住居跡出土遺物実測図	205	第182图	第10号住居跡出土遺物実測図	258
第145图	第19号住居跡実測図	207	第183图	第11号住居跡実測図	259
第146图	第19号住居跡出土遺物実測図	208	第184图	第11号住居跡出土遺物実測図	260
第147图	第20号住居跡実測図	209	第185图	第12号住居跡実測図	261
第148图	第20号住居跡出土遺物実測図	210	第186图	第12号住居跡出土遺物実測図(1)	263
第149图	第21号住居跡実測図	211	第187图	第12号住居跡出土遺物実測図(2)	264
第150图	第21号住居跡出土遺物実測図	212	第188图	第13号住居跡実測図	268
第151图	第1号竪穴遺構実測図	214	第189图	第13号住居跡出土遺物実測図	269
第152图	第68・77・93・98号土坑実測図	216	第190图	第14号住居跡実測図	271
第153图	第68・77・93・98号土坑出土遺物実測図	217	第191图	第14号住居跡出土遺物実測図	272
第154图	第1号溝断面図	220	第192图	第15号住居跡実測図	274
第155图	第1号溝出土遺物実測図	220	第193图	第15号住居跡出土遺物実測図	275
第156图	遺構外出土遺物拓影図	221	第194图	第16号住居跡実測図	278
第157图	遺構外出土遺物実測図(1)	223	第195图	第16号住居跡出土遺物実測図	279
第158图	遺構外出土遺物実測図(2)	224	第196图	第17号住居跡実測図	281
第159图	隼人山遺跡基本土層図	228	第197图	第17号住居跡出土遺物実測図	281
第160图	第1・2・3・4・5・6号陥し穴実測図	230	第198图	第18号住居跡実測図	284
第161图	第7・8号陥し穴実測図	233	第199图	第18号住居跡出土遺物実測図	285
第162图	第1号住居跡実測図	234	第200图	第19号住居跡実測図	287
第163图	第1号住居跡出土遺物実測図	235	第201图	第19号住居跡出土遺物実測図	287
第164图	第2号住居跡実測図	236	第202图	第20号住居跡実測図	289
第165图	第2号住居跡出土遺物実測図(1)	238	第203图	第20号住居跡出土遺物実測図	290
第166图	第2号住居跡出土遺物実測図(2)	239	第204图	第21号住居跡実測図	291
第167图	第3号住居跡実測図	240	第205图	第21号住居跡出土遺物実測図	292
第168图	第3号住居跡出土遺物実測図	241	第206图	第24号住居跡実測図	293
第169图	第4号住居跡実測図	242	第207图	第25号住居跡実測図	294
第170图	第4号住居跡出土遺物実測図	244	第208图	第25号住居跡出土遺物実測図	295
第171图	第5号住居跡実測図	245	第209图	第26号住居跡実測図	296
第172图	第5号住居跡出土遺物実測図	246	第210图	第26号住居跡出土遺物実測図	296
第173图	第6号住居跡実測図	247	第211图	第27号住居跡実測図	298
第174图	第6号住居跡出土遺物実測図	249	第212图	第27号住居跡出土遺物実測図(1)	299
第175图	第7号住居跡実測図	250	第213图	第27号住居跡出土遺物実測図(2)	300
第176图	第7号住居跡出土遺物実測図	252	第214图	第28号住居跡実測図	302
第177图	第8号住居跡実測図	253	第215图	第28号住居跡出土遺物実測図	303
第178图	第8号住居跡出土遺物実測図	254	第216图	第31号住居跡実測図	306

第217図	第31号住居跡出土遺物実測図	307
第218図	第33号住居跡実測図	309
第219図	第33号住居跡出土遺物実測図	309
第220図	第34号住居跡実測図	311
第221図	第36号住居跡実測図	313
第222図	第36号住居跡出土遺物実測図	314
第223図	第43号住居跡実測図	315
第224図	第43号住居跡出土遺物実測図	316
第225図	第1号竪穴遺構実測図	317
第226図	第2号竪穴遺構実測図	318

第227図	第2号竪穴遺構出土遺物実測図	318
第228図	第3号竪穴遺構実測図	319
第229図	第37・81号土坑実測図	321
第230図	第37・81号土坑出土遺物実測図	321
第231図	第35号住居跡実測図	323
第232図	第35号住居跡出土遺物実測図	324
第233図	第35・40・80・82・83号土坑実測図	326
第234図	第1号清晰面図	331
第235図	遺構外出土遺物拓影図	332
第236図	遺構外出土遺物実測図	333

付 図

中下根遺跡遺構配置図

華人山遺跡遺構配置図

西ノ原遺跡遺構配置図

表 目 次

表1	中下根遺跡・西ノ原遺跡・華人山遺跡 周辺遺跡一覧表	6
表2	中下根遺跡土坑一覧表	115
表3	中下根遺跡住居跡一覧表	126
表4	第1号石器集中地点 出土遺物観察表	134
表5	第1号石器集中地点 石器組成表	135
表6	第1号石器集中地点 接合資料一覧表	135
表7	第2号石器集中地点 出土遺物観察表	138
表8	第2号石器集中地点 石器組成表	138
表9	第3号石器集中地点 出土遺物観察表	141
表10	第3号石器集中地点 石器組成表	141
表11	第3号石器集中地点 接合資料一覧表	142

表12	第4号石器集中地点 出土遺物観察表	145
表13	第4号石器集中地点 石器組成表	145
表14	第4号石器集中地点 接合資料一覧表	145
表15	第5号石器集中地点 出土遺物観察表	149
表16	第5号石器集中地点 石器組成表	149
表17	第5号石器集中地点 接合資料一覧表	149
表18	その他の出土遺物観察表	150
表19	その他の出土遺物組成表	150
表20	西ノ原遺跡土坑一覧表	219
表21	西ノ原遺跡住居跡一覧表	225
表22	華人山遺跡土坑一覧表	328
表23	華人山遺跡住居跡一覧表	334

写真図版目次

- P L 1 中下根遺跡全景，西ノ原遺跡全景
- P L 2 隼人山遺跡全景，第1号石器集中地点遺物出土状況，第2号石器集中地点遺物出土状況，第3・4号石器集中地点遺物出土状況，第5号石器集中地点遺物出土状況
- 中下根遺跡**
- P L 3 遺構確認状況，調査終了全景，第6号陥し穴完掘
- P L 4 第1・3・5号住居跡完掘
- P L 5 第6・7号住居跡遺物出土状況，第9号住居跡完掘
- P L 6 第10号住居跡完掘・遺物出土状況，第11号住居跡完掘
- P L 7 第13号住居跡遺物出土状況，第20・21号住居跡完掘
- P L 8 第21号住居跡遺物出土状況，第23号住居跡完掘
- P L 9 第27号住居跡完掘，第28・29号住居跡遺物出土状況
- P L 10 第2・30・32号住居跡完掘
- P L 11 第1・3・5・6・7号住居跡出土遺物
- P L 12 第7・8・9・10号住居跡出土遺物
- P L 13 第10・11・12・13号住居跡出土遺物
- P L 14 第15・16・20・21号住居跡出土遺物
- P L 15 第21号住居跡出土遺物
- P L 16 第21・23・27・28号住居跡出土遺物
- P L 17 第29・30号住居跡出土遺物
- P L 18 第2・25・30・32・33・34・35号住居跡・第67号土坑出土遺物
- P L 19 遺構外出土遺物，各遺構出土遺物（石器・石製品・石製模造品・鉄製品）
- 西ノ原遺跡**
- P L 20 調査終了全景，第1号陥し穴完掘，第2号住居跡完掘
- P L 21 第4・5号住居跡完掘，第5号住居跡遺物出土状況
- P L 22 第6号住居跡完掘・竈遺物出土状況，第7号住居跡完掘
- P L 23 第7号住居跡遺物出土状況，第8号住居跡完掘・遺物出土状況
- P L 24 第9号住居跡竈完掘，第10号住居跡完掘，第14号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
- P L 25 第15・16号住居跡完掘，第17号住居跡遺物出土状況
- P L 26 第18・19号住居跡完掘，第19号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
- P L 27 第20・21号住居跡完掘，第21号住居跡遺物出土状況
- P L 28 第1号竈穴遺構完掘，第77号土坑遺物出土状況，第1号溝完掘
- P L 29 第1・2・3・4・5号石器集中地点・第2号住居跡出土遺物
- P L 30 第1・3・4・5・6号住居跡出土遺物
- P L 31 第7・8・9号住居跡出土遺物
- P L 32 第9・16・17・20・21号住居跡出土遺物
- P L 33 第21号住居跡・第67・68号土坑出土遺物
- P L 34 第77号土坑・第1号溝出土遺物，各遺構出土遺物（土製品・石器・石製品・石製模造品・鉄製品）
- 隼人山遺跡**
- P L 35 調査終了全景，第1号陥し穴完掘，第2号住居跡完掘
- P L 36 第2号住居跡遺物出土状況，第3号住居跡完掘
- P L 37 第3号住居跡遺物出土状況，第4号住居跡完掘・遺物出土状況
- P L 38 第5号住居跡遺物出土状況，第6・7号住居跡完掘
- P L 39 第8・9号住居跡完掘，第9号住居跡遺物出土状況

- P L 40 第10・11号住居跡遺物出土状況,第12号住居跡完掘
- P L 41 第13・14号住居跡完掘,第14号住居跡遺物出土状況
- P L 42 第14号住居跡貯藏穴遺物出土状況,第15号住居跡完掘・遺物出土状況
- P L 43 第16号住居跡完掘・遺物出土状況,第17号住居跡完掘
- P L 44 第18・19・20号住居跡完掘
- P L 45 第21・26・27号住居跡完掘
- P L 46 第27・33号住居跡遺物出土状況,第28号住居跡完掘
- P L 47 第36号住居跡完掘,第81号土坑遺物出土状況,第35号住居跡完掘
- P L 48 第35号住居跡完掘,第41号土坑完掘,第1号溝完掘
- P L 49 第1・2・3・4号住居跡出土遺物
- P L 50 第4・5・7・9・12号住居跡出土遺物
- P L 51 第9・11・12・14号住居跡出土遺物
- P L 52 第14・15・16・18・27号住居跡出土遺物
- P L 53 第27・31・33号住居跡出土遺物
- P L 54 第28・35・36・37号住居跡・遺構外出土遺物
- P L 55 各遺構出土遺物(土製品・石器・石製品・鉄製品)

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県が進めている「グレーターつくば構想」は、牛久市、土浦市、つくば市の三市を業務核都市として100万田間都市圏の一翼を担うことが期待されており、牛久市の北部地区に隣接して、東下根地区に「竜ヶ崎・牛久都市計画事業牛久東下根特定土地区画整理事業」が計画された。この事業は、業務機能と都市的機能を備えた良好な居住環境を有した市街地の形成を目指すものである。

これにより、平成4年3月25日、住宅・都市整備公団つくば開発局は、茨城県教育委員会に対し、この事業計画地である牛久市東下根地区内における埋蔵文化財の有無等についての照会をした。これを受け、茨城県教育委員会は、牛久市教育委員会と埋蔵文化財の有無の確認とその取り扱いについての協議を行い、平成4年11月16日から19日にかけて、表面観察及び試掘調査を実施した。その結果、地区内に西ノ原遺跡ほか中下根遺跡、華人山遺跡が所在することを確認し、住宅・都市整備公団あてに回答した。平成5年1月28日から、住宅・都市整備公団と茨城県教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を重ねた結果、記録保存の措置を講ずることとし、平成5年2月4日、茨城県教育委員会は、住宅・都市整備公団に、埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団から遺跡発掘調査の依頼を受け、平成5年4月1日、住宅・都市整備公団と委託契約を結び、同年4月から中下根遺跡の発掘調査を、平成6年4月1日から西ノ原遺跡、華人山遺跡Ⅰ区、さらに平成7年4月1日から中下根遺跡Ⅱ区、華人山遺跡Ⅱ区部分の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

中下根遺跡、西ノ原遺跡及び華人山遺跡の発掘調査は、平成5年4月1日から平成7年9月30日までの2年6か月にわたり実施した。中下根遺跡(17,878㎡)については、平成5年4月1日から平成6年3月31日まで実施し、平成6年4月1日から平成7年3月31日まで西ノ原遺跡(13,227㎡)、華人山遺跡Ⅰ区(14,908㎡)の調査について実施した。更に平成7年4月1日から平成7年9月30日まで中下根遺跡Ⅱ区(5,491㎡)、華人山遺跡Ⅱ区(3,242㎡)の調査を実施した。以下、調査経過の概要について月ごとに記述する。

中下根遺跡Ⅰ区

平成5年度

- 4月8日に現地踏査を行い、発掘調査をするための事前準備を行った。続いて発掘器材の搬入など発掘調査の諸準備を行い、14日から中下根遺跡への進入路整地、遺跡清掃を実施、20日には関係者列席のもと、発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って献入式を挙行了。26日からは、調査区の手掘りによる試掘調査を開始した。
- 5月前月に引き続き試掘調査を実施。遺構の存在を確認し、26日からグリッド試掘を全面積の8分の1まで拡大した。
- 6月11日から、重機による表土除去及び遺構確認作業を、調査区の南東部より開始した。

- 7 月 引き続き、重機による表土除去及び遺構確認作業を実施した。表土除去は12日に終え、遺構確認作業も22日には終了し、竪穴住居跡、土坑、溝等の遺構を確認した。遺構確認の全景写真を撮影し、23日からは遺構の掘り込みに着手した。
- 8 月 遺構調査を継続、12日から方眼杭打ち測量（茨城県建設技術公社に委託）を開始した。
- 9 月 竪穴住居跡の調査と並行して、溝の掘り込み調査を開始した。
- 10 月 10日までに、竪穴住居跡16軒、竪穴遺構6基の調査を終えた。
- 11 月 竪穴住居跡の調査を終え、溝と併せて、土坑の掘り込み調査を開始した。また、今後の調査の進め方について、委託者である住宅・都市整備公団と協議し、平成6年1月から3月まで、西ノ原遺跡の山林部伐開と遺構確認を行う事とした。
- 12 月 15日までに、土坑、溝の調査を含め、遺跡全体の調査をほぼ終え、16日に遺跡の航空写真を撮影した。19日には現地説明会を開催し、遺構・遺物を一般に公開した。22日から補足調査と併せて、西ノ原遺跡への現場倉庫移設等物品移送を行った。
- 1 月 5日から中下根遺跡の補足調査と並行して、西ノ原遺跡の休憩所の設置及び遺跡内の清掃を実施した。12日から地権者による立ち木伐採後の雑木焼却作業を行いつつ、25日には、試掘調査を開始した。
- 2 月 前月に引き続き西ノ原遺跡の試掘調査を行い、17日から重機による表土除去と遺構確認作業を開始した。
- 3 月 7日には表土除去を終え、遺構確認作業を進めた結果、竪穴住居跡、土坑、溝等を確認した。17日に遺構確認の全景の写真を撮影して、平成5年度の調査を終えた。

西ノ原遺跡・単人山遺跡1区

平成6年度

- 4 月 単人山遺跡について8日に現地踏査を行い、発掘調査をするための諸準備を行った。14日・15日には西ノ原遺跡の前年度の残りの部分の伐開を終え、試掘調査に着手した。27日には試掘調査を終えた。
- 5 月 西ノ原遺跡の重機による表土除去を待つ間に、単人山遺跡の山林部分を除いた畑地で、試掘調査を開始した。17日から西ノ原遺跡の表土除去がはじまり、23日には単人山遺跡の試掘を終え、24日から西ノ原遺跡の表土除去の進捗に併せて遺構確認作業を開始した。
- 6 月 2日には表土除去及び遺構確認作業を終え、竪穴住居跡、土坑を確認した。3日には前年度分と合わせて遺構確認の全景写真を撮影し、遺構調査を開始した。6日から10日にかけて方眼杭打ち測量（茨城県建設技術公社に委託）を行った。17日から単人山遺跡の業者委託による立ち木の伐開、焼却作業を開始した。
- 7 月 前月に引き続き、西ノ原遺跡の遺構調査を進めた。並行して12日から単人山遺跡の試掘調査を開始した。
- 8 月 1日から単人山遺跡の重機による表土除去と併せて、西ノ原遺跡の遺構調査を進め、竪穴住居跡、土坑の調査を終えた。この間、酷暑による水不足と土埃対策に苦慮する日が続いた。31日には単人山遺跡の遺構確認作業を開始した。
- 9 月 単人山遺跡では竪穴住居跡、土坑等を確認し、遺構確認の全景写真を撮影した。7日からは遺構調査を始めた。12日には西ノ原遺跡の遺構調査をほぼ終え、16日に単人山遺跡の方眼杭打ち測量（茨城県建設技術公社に委託）を実施した。20日には西ノ原遺跡の航空写真撮影を実施した。10月単人山遺跡の遺構調査と並行して、6日から西ノ原遺跡の補足調査と旧石器（石器集中地点）調査を開始し、12日に

は補足調査を終えた。

- 11 月 引き続き、単人山遺跡の遺構調査及び西ノ原遺跡の旧石器調査を実施した。単人山遺跡の調査は、30日までに竪穴住居跡18軒、井戸状の土坑2基の調査を終えた。
- 12 月 単人山遺跡のその他の遺構調査を行いながら、8日から調査区北部の黒色土の広がる部分でトレンチ試掘を実施したが、遺構などは確認されなかった。今月までの作業の進捗状況及び今後の調査の進め方について委託者と協議し、2月から中下根遺跡の平成7年度調査区の遺構確認作業を行うことになった。
- 1 月 単人山遺跡の調査をほぼ終えたのにもない、28日には西ノ原遺跡、単人山遺跡の現地説明会を開催した。31日には遺跡内清掃をして航空写真撮影及び遺跡全景写真撮影を行った。併せて進めていた西ノ原遺跡の旧石器調査では、ナイフ形石器、ピエス・エスキューを伴う石器集中地点が確認された。
- 2 月 西ノ原遺跡の旧石器調査と並行して、中下根遺跡の試掘調査を開始した。9日には現場倉庫を移転し、物品移送を行った。14日から重機による表土除去を開始し、22日には終了した。
- 3 月 7日から、中下根遺跡の遺構確認作業を始め、9日には終え、遺構確認状況の写真撮影を行った。西ノ原遺跡の旧石器調査は、黒曜石を中心とする石器集中地点を5か所確認し調査を終了した。13日から事務所にて、図面、写真等の整理を行い、17日に今年度の現場作業を終えた。

中下根遺跡II区・単人山遺跡II区

平成7年度

- 4 月 7日に現地踏査を行い、発掘調査をするための諸準備を行った。13日には中下根遺跡でタワーの組立、単人山遺跡で清掃を実施した。17日には中下根遺跡内に残る倉庫跡部分の表土除去を人力で開始し、24日からは住居跡の掘り込みと併せて、単人山遺跡の立木の伐開作業に着手した。
- 5 月 8日から単人山遺跡の試掘を行い、土坑及び溝を確認した。26日までに中下根遺跡の住居跡の調査をほぼ終了し、30日から土坑の掘り込みに着手した。
- 6 月 中下根遺跡の掘り込みと併せて、単人山遺跡では、5日から始まった業者による伐開作業が8日に終了し、12日からは業者による表土除去を開始した。16日までに中下根遺跡の土坑の調査もほぼ終了し、20日からは単人山遺跡の遺構確認作業を開始した。22日に業者による表土除去が終了した。29日には中下根遺跡内の清掃を行い、30日に発掘全景写真撮影を実施した。
- 7 月 14日～28日まで中下根遺跡の補足調査を実施し、単人山遺跡の遺構確認作業と併せて現場倉庫の移転を行った。
- 8 月 単人山遺跡では、2日に遺構確認作業を終了したので遺構確認全景写真撮影を行い、3日から土坑の掘り込みを開始し、8日には溝の掘り込みも始めた。23日からは中下根遺跡の一部埋戻し作業に着手、25日までに単人山遺跡の掘り込みもほぼ終了し、30日からは遺跡内清掃を行った。
- 9 月 1日に単人山遺跡の遺構発掘全景写真撮影を行い、6日には中下根遺跡及び単人山遺跡の航空写真を撮影した。13日には中下根遺跡の埋戻し作業が終了し、撤収作業の準備を開始した。26日までにほぼ事務所及び倉庫の物品整理が終了し、28日に現場事務所を解体した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

中下根遺跡他2遺跡は、茨城県牛久市下根町に所在し、牛久市役所の北北東約4kmのところまに位置している。

遺跡のある牛久市は、茨城県南部の中ほどに位置し、東は江戸崎、西は茎崎町、南は竜ヶ崎市、北は阿見町、土浦市、つくば市と境を接している。市域は、東西約15km、南北約10km、面積約59km²を擁している。市の西側には、国道6号線とJR常磐線が平行してほぼ南北に通じ、中央部には国道408号線が東西に走っている。

牛久市の地形は、標高25～28mの洪積台地である稲敷台地と、小野川、乙戸川及び桂川水系の沖積低地とからなっている。稲敷台地には、小野川、乙戸川及び桂川とその支流が入り込み、台地は複雑な地形となっている。小野川はつくば市を水源とし、市のほぼ中央部を北西から南東に流れている。乙戸川は土浦市の乙戸沼を水源とし、土浦市荒川沖町から阿見町荒川本郷地内に入り、町の南部を南東に流れて福田地先で牛久市に入り、井の岡で桂川と合流し、市の南東端で小野川に合流する。小野川は大きく北東に湾曲し、霞ヶ浦に流入している。また、市の西端には牛久沼が形成されている。

稲敷台地は、土浦市、竜ヶ崎市、江戸崎町を結ぶ三角地帯の中にその大部分が入り、台地の東端は東村阿波崎付近にある。台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤層となり、下部から上部にかけて、成田層下部、成田層上部、竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層の順で堆積している。堆積状況は、水平で単調、褶曲や断層はみられない。

中下根遺跡他2遺跡は、牛久市の北東部にあり、南西部の小野川と北東部の乙戸川に挟まれた幅約2kmの舌状台地に立地している。小野川、乙戸川沿岸の谷津は概して浅く長いものが多く、中下根遺跡はその小野川の谷津頭に面する平坦地に位置している。西ノ原遺跡、隼人山遺跡は、乙戸川の谷津頭に向かう緩やかな傾斜面に位置している。

中下根遺跡他2遺跡の標高は19～24mで、遺跡のある台地と小野川、乙戸川の河岸に開ける水田面との比高は1～6mで、調査前の現況は、中下根遺跡が畑地、西ノ原遺跡、隼人山遺跡が畑地・山林である。

参考文献

阿見町 『阿見町史』 1983年3月

茨城県農地部農地課 『土地分類基本調査 土浦』 1983年12月

茨城県農地部農地計画課 『土地分類基本調査 竜ヶ崎』 1987年12月

茨城県農地部農地計画課 『土地分類基本調査 佐原』 1988年12月

蜂須紀夫 『茨城県 地学のガイド』 1986年11月

第2節 歴史的環境

中下根遺跡<1>、西ノ原遺跡<2>及び隼人山遺跡<3>の所在する地域は、河川、低地、台地と変化に富んだ自然環境をもち、台地上には数多くの遺跡が残っている。特に、牛久沼周辺や小野川、乙戸川水系によって形成された台地上には、旧石器時代から中世までの遺跡が分布している。ここでは、当地域の主な遺跡

について時代をおって述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、平成5年度に報告された中久喜遺跡<4>、今回報告する西ノ原遺跡があり、いずれもナイフ形石器や尖頭器等が出土している。

縄文時代の遺跡は、牛久市の守子橋遺跡<5>、平成4年度に報告されたヤツノ上遺跡<6>、東山遺跡<7>、馬場遺跡<8>、荻崎町の下大井遺跡<9>、大井遺跡<10>、土浦市の沖新田道祖神前遺跡<11>、塚下遺跡<12>等がある。守子橋遺跡、下大井遺跡、大井遺跡は、小野川沿いの右岸台地縁辺部に、ヤツノ上遺跡、馬場遺跡は、小野川左岸から入り込む小支谷の東側の台地上に位置している。ヤツノ上遺跡からは、縄文時代晩期の土器片とともに、同時期の土偶が出土し、東山遺跡からは、縄文時代早期から中期の土器片が出土している。馬場遺跡からは、縄文時代早期の土器片と前期の深鉢が出土している。阿見町の於山遺跡<13>からは、縄文時代早期から後期にかけての土器片、磨製石斧が出土している。沖新田道祖神前遺跡は乙戸川右岸台地縁辺部、塚下遺跡は左岸台地縁辺部にあり対峙している。牛久市奥原町の小野川と乙戸川とが合流する左岸台地縁辺部には、縄文時代中期から後期にかけての集落跡である奥原遺跡(出戸地区)があり、牛久市桂町の乙戸川左岸台地縁辺部には赤塚遺跡がある。牛久沼から入り込む小支谷を臨む台地上には、早期から後期の中の台C遺跡が、また、同台地上には、後期中葉から後葉にかけての主演貝塚を形成する城中貝塚がある。

弥生時代の遺跡は、縄文式土器片とともに弥生式土器片の散布がみられる小野川右岸台地縁辺部に位置する坂本遺跡<14>があり、奥原町の天王峯遺跡では、弥生時代後期の集落跡が確認されている。

古墳時代の遺跡は、今回報告する中下根遺跡、西ノ原遺跡、隼人山遺跡のほか、牛久市の中久喜遺跡、ヤツノ上遺跡、馬場遺跡、行人田遺跡<15>、東山遺跡、大久保遺跡<16>、奥原遺跡、すかき台遺跡、源急遺跡、天王峯遺跡、土浦市の向原遺跡、鳥山遺跡、竜ヶ崎市の平台遺跡、長峰遺跡、西ノ原遺跡、阿見町の中根遺跡<17>、宮脇遺跡、阿見東遺跡等がある。

これらの遺跡を時期別にみると、古墳時代前期の遺跡は、すかき台遺跡、奥原遺跡、源急遺跡、向原遺跡、鳥山遺跡等があり、小野川と乙戸川の合流する左岸台地縁辺部に位置する奥原町のすかき台遺跡では、竪穴住居跡9軒、同じく奥原遺跡(姥神地区)では、竪穴住居跡3軒、方形周溝墓3基が確認されている。乙戸川左岸台地上に位置する久野町の源急遺跡からは、6基の方形周溝墓と円形周溝墓が確認されている。花室川の南側にあり、北東から南西に延びる台地上に位置する向原遺跡からは、竪穴住居跡61軒が確認されている。また、鳥山遺跡からは、同時期の竪穴住居跡16軒が確認され、そのうち11軒の住居跡内から勾玉、管玉の未製品が大量に出土していることから、玉造工房跡と考えられている。

古墳時代中期の遺跡は、牛久市中根町付近の小野川と、阿見町本郷付近を流れる乙戸川水系の小支谷によって開析された台地上に、中下根遺跡、西ノ原遺跡、隼人山遺跡、ヤツノ上遺跡、中久喜遺跡があり、広範囲にわたって古墳時代中期の集落跡が確認されている。これらの遺跡は、古墳時代中期中葉から後期初頭のもので、主に小支谷をのぞむ台地の中央部から緩斜面上にかけて集落を形成しているのが特徴である。阿見町北西部の清明川によって開析された台地上に位置する宮脇遺跡(第II期)からは、同時期の竪穴住居跡23軒が確認されている。また、宮脇遺跡の東側に位置する阿見東遺跡からは、石製模造品が多数出土しており、石製品工房跡と考えられている。竜ヶ崎市の長峰遺跡、平台遺跡からは、古墳時代中期前半の集落跡が確認されている。

古墳時代後期の遺跡は、西ノ原遺跡のほか、馬場遺跡、天王峯遺跡、奥原遺跡等がある。馬場遺跡では、竪穴住居跡2軒、天王峯遺跡でも竪穴住居跡2軒、奥原遺跡では竪穴住居跡が20軒ちかく確認されている。

古墳は、集落に付随するようになり、嵯崎町の下大井古墳群⁽¹⁾〈18〉、阿見町の内記古墳群⁽¹⁹⁾〈19〉、実穀古墳群⁽²⁰⁾〈20〉、だめき古墳⁽²¹⁾〈21〉、牛久市猪子町の道山古墳群⁽²²⁾〈22〉がある。なかでも9基からなる道山古墳群は小野川に流れる一支流に面した標高20mの台地上にあり、その中の第3、4、5号墳からは直刀が出土している。その他、この付近には宮坂古墳⁽²³⁾〈23〉、愛宕脇古墳⁽²⁴⁾〈24〉、琴塚古墳⁽²⁵⁾〈25〉、水落下古墳⁽²⁶⁾〈26〉、梨の木古墳⁽²⁷⁾〈27〉がある。これらの古墳は、いずれも6世紀後半から7世紀前半のものである。

奈良・平安時代の遺跡は、中下根遺跡、隼人山遺跡のほか、ヤツノ上遺跡、中久喜遺跡、奥原遺跡、行人田遺跡等がある。このうち、ヤツノ上遺跡では平安時代の竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡2棟が確認され、土師器の高台付杯、及び高台付皿、須恵器の甕、高坏、坏、及び坏蓋などが出土している。奥原遺跡(姥神地区)からは、奈良時代の竪穴住居跡16軒、平安時代の住居跡58軒及び掘立柱建物跡4棟が確認され、須恵器の宝珠形陶甕や墨書土器が出土している。

中世の遺跡は、岡見城跡⁽²⁸⁾〈28〉、小坂城跡⁽²⁹⁾、上小池城跡⁽³⁰⁾〈29〉等がある。岡見城跡は、牛久市岡見町に所在し、室町時代初期ごろから勢力を拡大していった岡見氏発祥の城跡であり、同市小坂町の小坂城跡は戦国期に岡見氏によって築造されたものと考えられている。また、阿見町小池に所在する上小池城跡についても、戦国時代末期に土岐氏によって構築されたものと考えられている。

江戸時代の遺跡としては、土浦市の荒川沖一里塚⁽³¹⁾〈30〉、牛久市の東猫穴一里塚⁽³²⁾〈31〉等がある。東猫穴一里塚は、国道6号線の両側に直径10m前後の円形の塚が2基現存している。

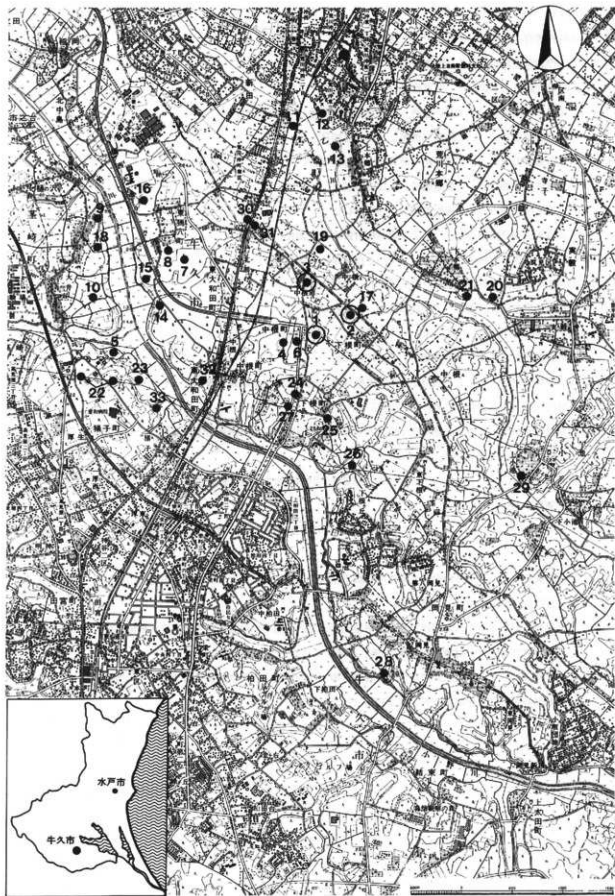
*文中の〈 〉内の番号は、表1、第3図中の該当番号と同じである。

表1 中下根遺跡・西ノ原遺跡・隼人山遺跡周辺遺跡一覧表

図中 番号	遺 跡 名	奥 遺 跡 番 号	時 代					図中 番号	遺 跡 名	奥 遺 跡 番 号	時 代				
			旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	中 世				近 世 以 降	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳
1	中下根遺跡					○		17	中根遺跡	5703			○		
2	西ノ原遺跡	○			○			18	下大井古墳群	5730			○		
3	隼人山遺跡				○	○		19	内記古墳群	5702			○		
4	中久喜遺跡	○			○	○		20	実穀古墳群	5697			○		
5	守子橋遺跡	2794	○					21	だめき古墳	5698			○		
6	ヤツノ上遺跡		○		○	○		22	道山古墳群	1706			○		
7	東山遺跡		○		○	○		23	宮坂古墳	3368			○		
8	馬場遺跡	3364	○		○	○		24	愛宕脇古墳	3372			○		
9	下大井遺跡	2811	○					25	琴塚古墳	3377			○		
10	大井遺跡	2808	○					26	水落下古墳	3378			○		
11	沖新田道祖神 前遺跡	5241	○		○			27	梨の木古墳	3373			○		
								28	岡見城跡	1708					○
12	塚下遺跡	5240	○		○			29	上小池城跡	3982					○
13	於山遺跡	5701	○		○			30	荒川沖一里塚	1794					○
14	坂本遺跡	3366	○	○				31	東猫穴一里塚	3991					○
15	行人田遺跡	3365				○	○	32	根柄遺跡	3371			○		
16	大久保遺跡	3363				○		33	中宿遺跡	3369			○		

註・参考文献

- (1) 基崎村教育委員会 『基崎村史』 1973年3月
- (2) 牛久市教育委員会 『牛久町史史料編(一)』 1979年1月
- (3) 阿見町史編さん委員会 『阿見町史』 1983年3月
- (4) 土浦市教育委員会 『土浦の遺跡 埋蔵文化財包蔵地』 1984年3月
- (5) 牛久市教育委員会 『常陸源忠遺跡』 1989年10月
- (6) 阿見町教育委員会 『宮脇遺跡(第II期)』 1990年3月
- (7) 奥原遺跡発掘調査会 『奥原遺跡』 1989年12月
- (8) 赤塚遺跡発掘調査会 『赤塚遺跡』 1984年4月
- (9) 牛久市天王峯発掘調査会 『天王峯遺跡報告書第二次調査』 1988年4月
- (10) 牛久市すかき台遺跡発掘調査会 『すかき台遺跡』 1991年8月
- (11) 土浦市向原遺跡発掘調査会 『向原遺跡』 1987年3月
- (12) 阿見町阿見東遺跡調査会 『阿見東遺跡』 1992年5月
- (13) 国士館大学文学部考古学研究室 『鳥山遺跡』 1988年3月
- (14) 小坂城跡発掘調査会 『小坂城跡』 1979年12月
- (15) 茨城県教育財団 『牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) ヤツノ上遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第81集』 1993年3月
- (16) 茨城県教育財団 『牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) 中久喜遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第86集』 1993年9月
- (17) 茨城県教育財団 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19長峰遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第58集』 1990年3月
- (18) 茨城県教育財団 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書8平台遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第19集』 1983年3月
- (19) 茨城県教育財団 『主要地方道土浦江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書山遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第96集』 1995年3月
- (20) 茨城県教育財団 『牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 馬場遺跡・行人田遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第106集』 1996年3月
- (21) 茨城県教育財団 『牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 東山遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第101集』 1995年9月



第3図 周辺遺跡分布図

第3章 中下根遺跡

第1節 遺跡の概要

中下根遺跡は、牛久市の北北東部、小野川の左岸から南東に湾曲して入り込む谷津頭に面し、標高約24～25mの洪積台地である稲敷台地上に立地する、縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡である。調査前の現況は、畑地で、調査区域は東西に約216m、南北に約108m、面積23,369m²である。

今回の調査によって確認した遺構は、縄文時代の陥し穴9基、古墳時代の竪穴住居跡25軒、平安時代の竪穴住居跡2軒、その他に、竪穴遺構6基、土坑158基、溝1条である。

旧石器時代の遺構は確認できなかったが、表採及び遺構確認面で遺物が出土している。石材は黒曜石、頁岩がほとんどで、他にメノウも少量使用されている。

縄文時代の遺構としては、9基の陥し穴を確認した。

古墳時代の遺構は、調査区中央部付近を中心に確認され、特に南側の谷津頭付近に多く見られた。確認した竪穴住居跡25軒は、いずれも古墳時代中期のものと考えられ、形状は方形や長方形のものが多く、間仕切り溝を伴う住居跡も確認し、既に報告済みのヤツノ上遺跡、中久喜遺跡等の同時期の住居跡と規模、形態はほぼ同様である。特に、当遺跡の大型住居跡である第3号住居跡及び第7号住居跡では、遺物の出土状態から祭祀行為が行われていたと考えられる。また、第21号住居跡からは多量の遺物が投棄された状態で出土している。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒を確認した。第2号住居跡は北東壁に竈が付設され、出土遺物から時期は8世紀後半と考えられる。第25号住居跡は、この時期では類例が少ない南コーナーに竈を付設し、その吹き口に土師器の甕が逆位に伏せた状態で出土していることから、祭祀行為が行われていたとも考えられる。

遺物は遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に50箱ほど出土している。旧石器時代の遺物としては、尖頭器、石刃、剥片が出土している。縄文時代の遺物としては、早期、中期の縄文土器片の他に、石鏃などが遺構確認面や覆土中から出土している。弥生時代の土器片も数点出土している。古墳時代の遺物としては、埴、高埴、埴、甕等の土師器や、埴、埴蓋等の須恵器の他に、土鏃等の土製品、穂摘具などの石器、勾玉、白玉、紡錘車、磁石などの石製品、剣、有孔円板などの石製模造品、ガラス玉が出土している。その他、第27号住居跡出土の埴の体部内土中より炭化米が出土している。

第2節 基本層序

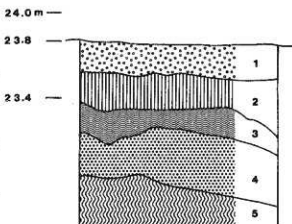
中下根遺跡においては、調査区南西部V47区にテストピットを設定し、第4図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、褐色の耕作土で、厚さは20～28cmである。

第2層は、褐色のソフトローム層への漸移層で、厚さは10～25cmである。

第3層は、明褐色のソフトローム層で、ローム粒子が中量混入しており、厚さは10～22cmである。

第4層は、褐色の黒色バンドで、厚さは24～42cmであ



第4図 中下根遺跡基本土層図

る。

第5層は、黄褐色のハードローム層で、粘性及び締まりとも強く、厚さは80～120cmである。

中下根遺跡の遺構は、表土下30～50cmほどの第3層上面で、明確に確認されている。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 陥し穴

当遺跡で確認した167基の土坑の内、形状や規模から陥し穴と考えられる9基の遺構について記載する。

第1号陥し穴（第5図）

位置 調査区の西部，T6a区。

規模と平面形 長径2.87m，短径1.29mの長楕円形で，深さは1.19mである。

長径方向 N-58°-W

壁面 外傾して立ち上がり，中位で段を成している。

底面 皿状である。

覆土 7層から成る。自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量	5 褐色	ローム粒子中量
2 暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック微量	6 暗褐色	ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
3 褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量	7 褐色	ローム中ブロック中量，ローム粒子微量
4 暗褐色	ローム小ブロック中量，ローム粒子微量		

遺物 出土していない。

所見 本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

第2号陥し穴（第5図）

位置 調査区の西部，U6a区。

規模と平面形 長径1.80m，短径0.77mの不整長楕円形で，深さは0.94mである。

長径方向 N-37°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり，西壁中位に段を成している。

底面 やや凹凸がある。

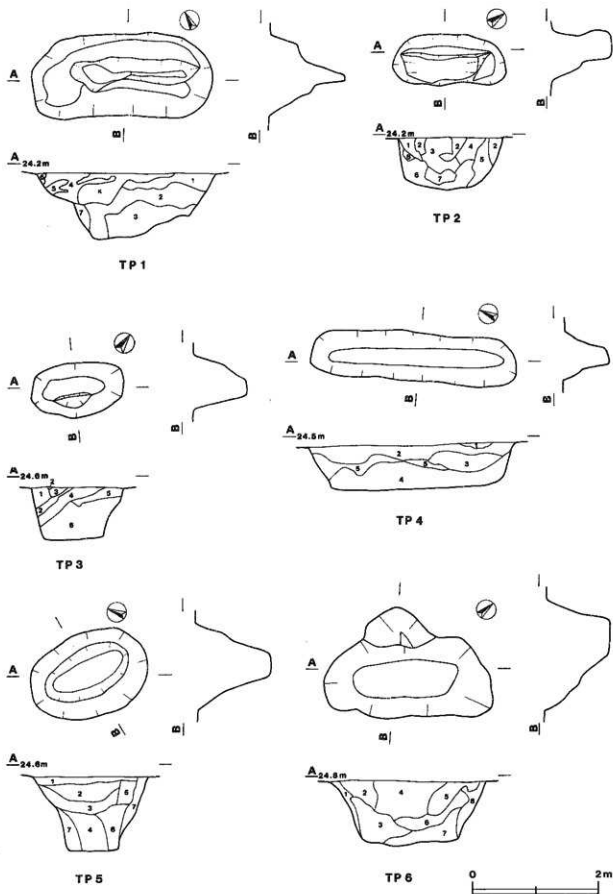
覆土 8層から成る。人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム小ブロック少量，ローム粒子微量	5 褐色	ローム粒子中量
2 暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量	6 褐色	ローム粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極微量	7 褐色	ローム粒子極微量
4 褐色	ローム粒子少量，ローム中ブロック微量，炭化粒子極微量	8 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。



第5图 第1・2・3・4・5・6号陥し穴実測図

第3号陥し穴（第5図）

位置 調査区の西部，V5a区。

規模と平面形 長径1.48m，短径0.85mの楕円形で，深さは0.83mである。

長径方向 N-52°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 6層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子極微量	4 黒褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子少量	5 暗褐色	ローム粒子少量
3 褐色	ローム粒子少量	6 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

第4号陥し穴（第5図）

位置 調査区の中央部，V8n区。

規模と平面形 長径3.25m，短径0.77mの隅丸長方形で，深さは0.70mである。

長径方向 N-23°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり，中位で外傾する。

底面 平坦である。

覆土 5層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量	4 褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2 暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子微量	5 褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，焼土粒子極微量
3 暗褐色	ローム粒子微量，焼土粒子極微量		

遺物 出土していない。

所見 本跡は，遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが，縄文時代の構築と考えられる。

第5号陥し穴（第5図）

位置 調査区の中央部，W6a区。

規模と平面形 長径1.89m，短径1.34mの楕円形で，深さは1.17mである。

長径方向 N-17°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 7層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量，炭化粒子極微量	5 褐色	ローム粒子極微量
2 暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量	6 褐色	ローム中ブロック微量
3 暗褐色	ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量	7 褐色	ローム小ブロック微量
4 褐色	ローム中ブロック少量，ローム粒子微量		

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが、縄文時代の構築と考えられる。

第6号陥し穴（第5図）

位置 調査区の東部，W8a区。

規模と平面形 長径2.63m，短径1.73mの不整形で，深さ1.15mである。

長径方向 N-39°-E

壁面 北西壁は緩やかに立ち上がり，南東壁は中位に膨らみを持ちながら外反する。

底面 平坦である。

覆土 8層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色	ローム小ブロック少量，ローム粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子微量，ローム小ブロック微量
2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	6 黒褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3 黒褐色	ローム粒子微量，ローム小ブロック微量	7 暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量	8 褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが、縄文時代の構築と考えられる。

第7号陥し穴（第6図）

位置 調査区の北西部，U5a区。

規模と平面形 長径2.50m，短径1.78mの不整形円形で，深さは [2.64] mである。

長径方向 N-35°-W

壁面 北東壁は外傾して立ち上がり，南西壁は中位に段を呈する。

底面 底部に向かってV字状に深く落ち込み確認できなかった。

覆土 4層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量
2 褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック少量
3 褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，粘性強
4 明褐色	ローム粒子少量，ローム中ブロック少量，粘性強

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが、縄文時代の構築と考えられる。

第8号陥し穴（第6図）

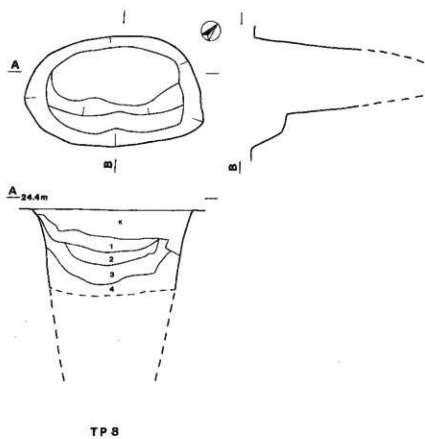
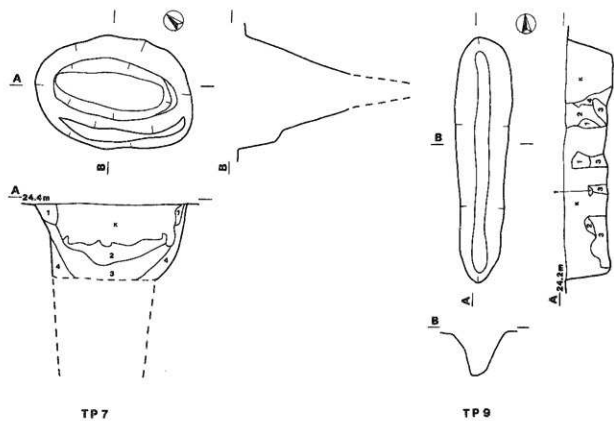
位置 調査区の北西部，U5a区。

規模と平面形 長径2.80m，短径1.74mの不整形円形で，深さは [2.70] mである。

長径方向 N-44°-E

壁面 北西壁はほぼ垂直に立ち上がり，南東壁には凹凸がみられ，外傾して立ち上がる。

底面 底部に向かって深く落ち込み形状は確認できなかった。



第6図 第7・8・9号陥し穴実測図

覆土 4層から成る。レンズ状の堆積状況がみられる。自然堆積である。

土層解説

1	褐 色	ローム粒子少量、ローム小ブロック少量
2	褐 色	ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
3	褐 色	ローム粒子多量、ローム大ブロック少量、粘性強
4	褐 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、粘性強

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが、縄文時代の構築と考えられる。

第9号陥し穴（第6図）

位置 調査区の北西部、T5a2区。

規模と平面形 長径3.85m、短径0.8mの長楕円形で、深さは0.66mである。

長径方向 N-7°-W

壁面 外傾して立ち上がり、断面形はU字形を呈する。

底面 皿状を呈する。

覆土 4層から成る。人為堆積の様相を呈する。

土層解説

1	褐 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
2	褐 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
3	褐 色	ローム粒子多量、粘性強
4	暗 褐色	ローム粒子中量、締まり強

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないので詳細な時期は不明であるが、縄文時代の構築と考えられる。

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡25軒、竪穴遺構6基を確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

確認した竪穴住居跡は25軒（S1-1～35のうち、4、14、17、18、19、22、24、26は欠番）があるが、調査区外へ延びる第28号、第29号、第31号住居跡は一部未調査である。

第1号住居跡（第7図）

位置 調査区の西部、V5a6区。

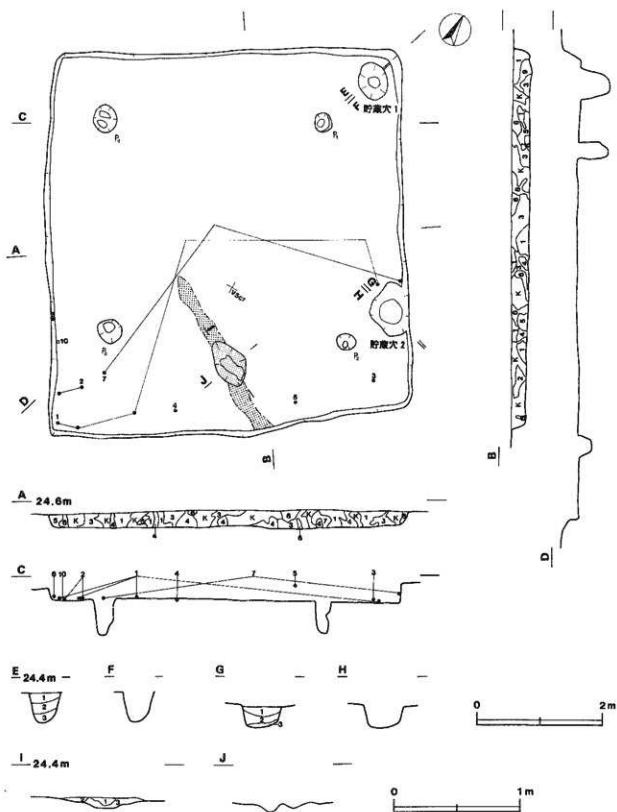
規模と平面形 長軸6.13m、短軸5.73mの方形。

主軸方向 N-31°-W

壁 壁高は18～30cmで、ほぼ外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部は硬く締まっている。床面上には耕作による攪乱と思われる帯状に伸びる焼土が、南東壁中央部から西コーナーに向かって長く伸びている。

ピット 4か所（P1～P4）。P1～P4は長径30～44cm、短径24～38cmの楕円形または不整形楕円形で、深さ



第7图 第1号住居跡実測图

22～58cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 中央付近からやや南東寄りに付設され、平面形は長径80cm、短径50cmの楕円形で、床面を9cm掘り窪めた地床である。炉内覆土は焼土ブロックと焼土粒子を大量に含む赤褐色土が堆積したものである。炉床の中央部は攪乱を受け残存しないが、残存する部分は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土小ブロック多量、ローム粒子微量 3 赤褐色 焼土粒子微量
2 赤褐色 焼土小ブロック少量

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1の平面形は、長径86cm、短径63cmの楕円形である。深さは29cmで、底面には凹凸があり、断面はU字形である。貯蔵穴2は、長径60cm、短径46cmの楕円形で、北東壁中央付近に付設され、壁の一部を北東壁と共有するように掘り込まれている。深さ47cmで、断面はU字状である。

貯蔵穴1土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量、粘性土 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
2 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

貯蔵穴2土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、炭土粒子 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量、粘性土
極微量、粘性強 3 褐色 ローム中ブロック少量、ローム粒子微量

覆土 9層から成る。耕作による攪乱を広く受けている。床面上からは焼土の広がりが見られ、覆土下層から上層にかけて炭化粒子を含む褐色土が複雑に堆積している。南東壁際下層から中層にかけて焼土ブロック、焼土粒子が帯状に堆積する状況が見られるが、焼土の広がり方と層位から耕作によるものと思われる。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

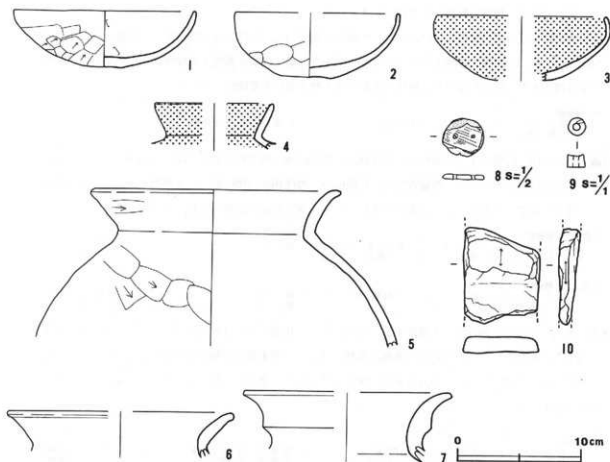
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量 6 黒褐色 焼土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
2 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量 7 黒褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
3 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量 9 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量、炭化粒子極微量

遺物 南コーナー付近の覆土中層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第8図1～3の坏は、いずれも床面直上から出土しているものである。1は南東寄りの広範囲から点在している土師器片が接合し、2は南コーナー付近の床面直上から斜位の状態で出土した坏と土師器片が接合し、3は東コーナー付近から出土している。4の甕は南東寄りの床面直上から横位の状態で出土している。5～7の甕は、5が南東寄りの覆土中層から、6が南西壁際の覆土下層から出土し、7の甕は南寄りの床面直上から出土している口縁部片と北東寄りの覆土中層から出土している土師器片が接合したものである。その他、8と9の双孔円板と白玉が覆土中から、10の磁石が北西壁際の床面直上から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	品名	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第8図1	土師器	A 14.7	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P 1 90% P L 11 南東寄り床面直上
		B 4.6				
		C 4.2				
2	土師器	A [13.3]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラ磨き、内面へラナデ。底部へラ削り。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	P 2 50% 南コーナー付近 床面直上
		B 5.3				
		C 4.2				
3	土師器	A [13.8]	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラ磨き。内・外面赤形。	砂粒・長石・石英 雲母 橙色 普通	P 3 10% 東コーナー床面 直上
		B (6.6)				



第8図 第1号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第8図 4	甕 土師器	A [9.6] B (3.2)	口縁部の破片。口縁部は僅かに外傾する。口縁部内面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P 4 10% 南東寄り床面直上
5	甕 土師器	A 20.1 B (12.5)	体部から口縁部の破片。体部は球形状を呈する。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部外面へラ削り後横ナデ。体部外面へラ削り後へラ磨き、内面へラナデ。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P 5 20% 南東寄り甕土中層
6	甕 土師器	A [18.2] B (3.3)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P 6 5% 南西壁際甕土下層
7	甕 土師器	A [16.8] B 4.7	口縁部の破片。頸部との境に稜をもち、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ後へラ磨き。頸部内・外面へラナデ後へラ磨き。	砂粒・長石・雲母 にふい褐色 普通	P 7 5% 南寄り床面直上 体部外面僅付着

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第8図8	双孔円板	2.2	2.0	0.3	0.2	(2.1)	85	片岩	甕土中	Q1 PL19
9	白玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	100	片岩	甕土中	Q2
10	砥石	(7.7)	6.2	(1.4)	—	(100.2)	40	片岩	北西壁際床面直上	Q3

第3号住居跡 (第9図)

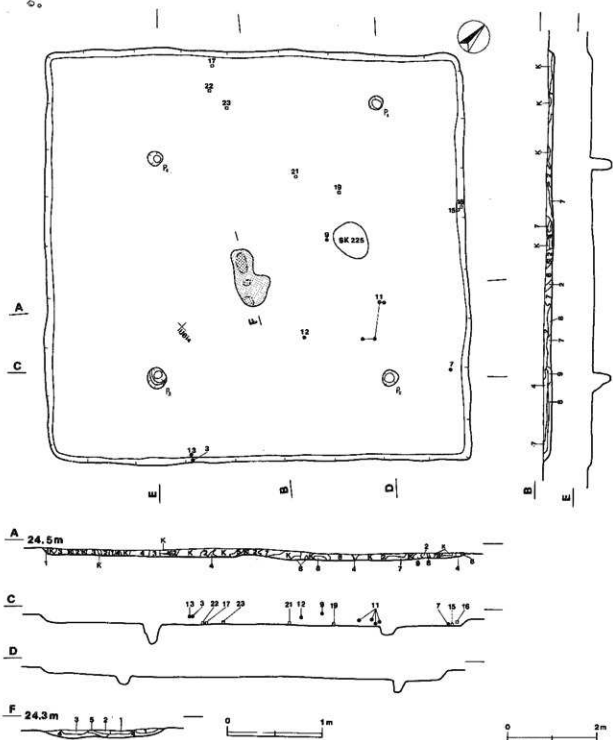
位置 調査区の西側中央部, U6₄区。

重複関係 本跡は, 中央部から東よりの部分を, 第225号土坑に掘り込まれている。本跡のほうが古い。

規模と平面形 長軸8.94m, 短軸8.66mの方形。

主軸方向 N-39°-W

壁 壁高は9~18cmで, ほぼ外傾して立ち上がる。掘り込みが比較的浅く, 耕作による攪乱を全面に受けている。



第9図 第3号住居跡実測図

床 ほぼ平坦であるが、踏み締まりは弱い。耕作用トレンチャーによる攪乱を受けている。

ピット 4か所 (P1~P4)。P1~P4は長径30~48cm、短径29~42cmの楕円形または不整形円形で、深さは16~45cmである。各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 中央付近に付設され、平面形は長径130cm、短径45cmの長楕円形で、床面を9cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロック、焼土粒子を含む暗褐色土が堆積したものである。炉床は耕作による攪乱を受けているが、残存部分は赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子多量	3 暗褐色	焼土粒子・ローム中ブロック多量、焼土小ブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子中量、ローム小ブロック少量	4 暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロック少量
		5 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量

覆土 9層から成る。耕作による攪乱を受けて、全体の堆積状況の把握はできないが、覆土下層から上層にかけて焼土粒子を含む黒褐色土と暗褐色土が複雑に堆積している。

土層解説

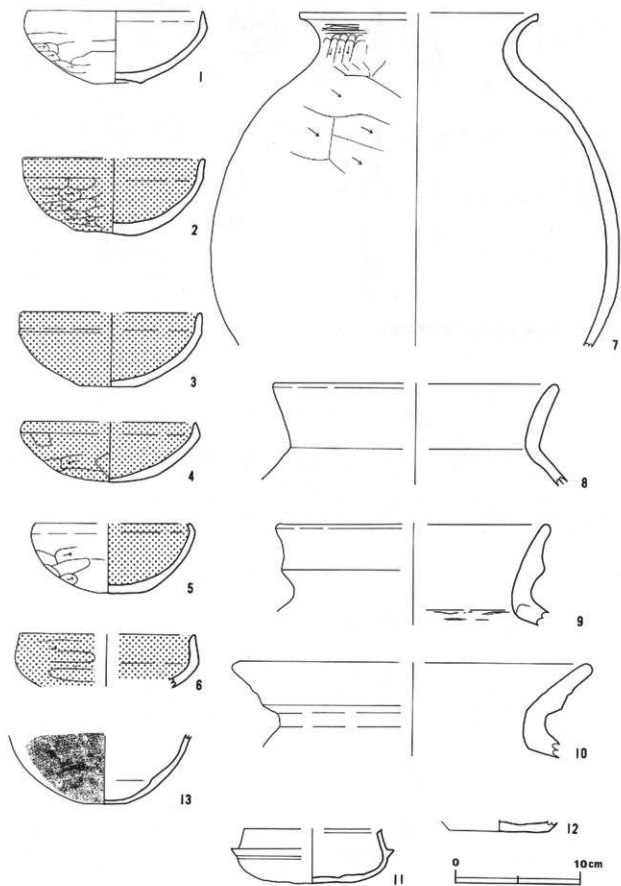
1 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	5 暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量、炭化植物微塵	6 黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、焼土粒子微量	7 暗褐色	焼土粒子・ローム粒子少量、腐り強
4 暗褐色	炭化粒子・ローム粒子微量	8 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
		9 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 覆土上層から床面直上にかけて、坏、甕の土師器片が中量出土し、須恵器の坏、坏身が少量出土している。第10・11図1~6の坏の内、3は南東壁際の覆土上層から、7~10の甕の内、7は北東壁際の床面直上から横位の状態で、9は中央寄りの覆土上層から出土している。11~13は須恵器片で、11が東寄りの覆土下層から出土している。坏片が接合したもので、12、13の坏と甕は中央寄りと南東壁際の覆土中層から出土している。15、16の勾玉と双孔円板は北東壁際の覆土下層と履土中から出土し、17の双孔円板は北西壁際の履土下層から出土している。18~22の白玉は、19、21、22が履土下層から、その他は履土中から出土している。23のガラス玉は北西寄りの履土下層から、24、25の磁石は共に履土中から出土している。その他の出土遺物では、14の勾玉が試掘で出土している。

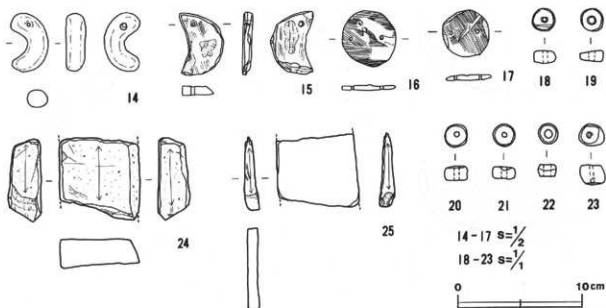
所見 本跡は、当遺跡最大の住居跡である。出土遺物から当遺跡内の住居跡でも特殊な遺構と考えられ、特に祭祀行為等との関係が推測される。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	土師器	A 14.0	底部から口縁部の破片。平底。外部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラ削り後ナデ。底部へラ削り後ナデ。	砂粒・スコリア・炭屑 にふいば色 普通	P14 60% P L11 履土中 内面焼付書
		B 4.6				
		C 3.7				
2	土師器	A [14.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部は僅かに反外する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラ削り後ナデ。底部へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P15 50% P L11 履土中
		B 6.2				
		C 4.7				
3	土師器	A [13.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜を持ち、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。底部へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・炭屑 赤褐色 普通	P16 30% P L11 南東壁際履土層
		B 5.9				
		C 4.5				
4	土師器	A [13.6]	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。底部へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・炭屑 褐色 普通	P17 25% 履土中 二次焼成
		B (4.8)				



第10图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第11図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色器・焼成	備考
第10図 5	坏土師器	A [12.1] B 5.6	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へラ削り後ナゲ、内面ナゲ。底部外面へラ削り後ナゲ。内面赤彩。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P18 30% PL11 覆土中 内面単純
6	坏土師器	A [14.0] B (4.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へラ削り後ナゲ、内面ナゲ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P19 5% 覆土中 二次焼成
7	壺土師器	A [19.0] B (26.7)	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。頸部外面へラ削り、体部外歪へラ削り後へラ磨き、内面へラナゲ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P10 30% P L11 北東壁部床面直上 外面単行書
8	壺土師器	A [23.0] B (7.8)	体部上位から口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。頸部外面へラ削り後へラナゲ。体部内・外面へラナゲ。	砂粒・長石・スコリア 褐色 普通	P11 5% 覆土中
9	壺土師器	A [22.0] B (7.1)	口縁部の破片。頸部と口縁部との間に削い模をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P12 5% 中央寄り覆土上層
10	壺土師器	A [29.0] B (6.7)	口縁部の破片。頸部と口縁部との間に削い模をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P13 5% 覆土中
11	坏須恵器	A [11.0] B 4.4 C (3.0)	底部から口縁部の破片。平底意味の丸底。体部は内彎しながら立ち上がり受部に至る。受部は外上方に伸び、端部はシャープである。口縁部は内傾して立ち上がる。	巻き上げ、横ナゲ整形。体部下位へラ削り。	砂粒・長石・石英 灰白色 良好	P20 30% P L11 東寄り覆土下層
12	坏須恵器	A [7.0] B (7.8)	底部の破片。平底。底部から体部にかけて内彎しながら立ち上がる。	巻き上げ、底部へラ削り。	砂粒・長石・石英 褐灰色 良好	P21 5% 中央寄り覆土中層
13	須恵器	B 5.6 C 3.0	底部から体部下位の破片。丸底で、内面に窪みを持つ。体部は内彎しながら立ち上がる。	巻き上げ、横ナゲ整形。底部内・外面へラナゲ。	砂粒 黒褐色 良好	P22 10% 南東壁部覆土中層

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第11圖14	勾 玉	3.1	1.9	0.9	0.4	7.2	100	メノウ	覆土中	Q4 PL19
15	勾 玉	3.4	2.2	0.5	0.2	6.1	100	片岩	北東壁付近覆土下層	Q5 PL19
16	双孔円板	3.0	2.5	0.3	0.15	4.6	100	片岩	覆土中	Q6 PL19
17	双孔円板	2.5	2.5	0.3	0.15	(3.6)	90	片岩	北西壁付近覆土下層	Q7 PL19
18	白 玉	0.6	0.6	0.3	0.11	0.2	100	片岩	覆土中	Q8
19	白 玉	0.6	0.6	0.3	0.2	0.1	100	片岩	中央部覆土下層	Q9
20	白 玉	0.6	0.6	0.4	0.2	0.3	100	片岩	覆土中	Q11
21	白 玉	0.6	0.6	0.3	0.1	0.1	100	片岩	中央部覆土下層	Q12
22	白 玉	0.5	0.5	0.5	0.2	0.2	100	片岩	北西壁付近覆土下層	Q13
23	ガラス玉	0.7	0.6	0.5	0.1	0.3	100	—	北西壁付近覆土下層	Q10 PL19
24	砥 石	(6.6)	6.4	(2.5)	—	(171.3)	40	頁岩	覆土中	Q14
25	砥 石	(6.6)	5.8	(1.2)	—	(66.0)	40	頁岩	覆土中	Q15

第5号住居跡(第12図)

位置 調査区の西部やや南, W5a9区。

規模と平面形 長軸5.90m, 短軸5.70mの方形。

主軸方向 N-55°-E

壁 壁高は30~40cmで, 緩やかに外傾して立ち上がる。耕作による攪乱が進み, 南東壁の立ち上がりは取り分け不鮮明である。

床 耕作による攪乱を受け, 一部が残存する。床面は凹凸があり, 踏み締まりは弱い。

ピット 4か所(P1~P4)。P1~P4は長径27~37cm, 短径25~31cmの楕円形または不整楕円形で, 深さは26~68cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 中央から西壁寄りに付設され, 平面形は長径92cm, 短径52cmの楕円形で, 床面を20cm掘り窪めた地床炉である。炉床, 中央部が火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 褐色 焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物粒子・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 焼土小ブロック・炭化物粒子・ローム小ブロック少量
- 4 赤褐色 焼土小ブロック多量, 炭化物粒子・ローム粒子少量

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され, 平面形は長径81cm, 短径60cmの楕円形で, 深さは66cmである。断面はU字形で, 底面は平坦である。

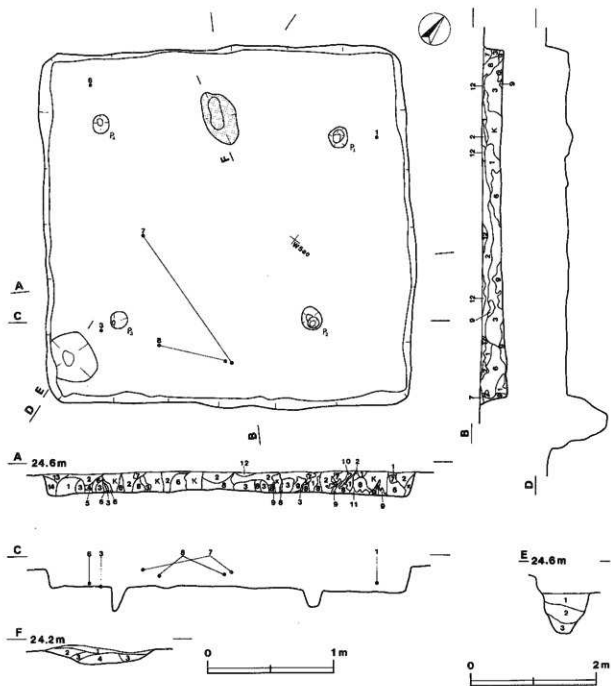
貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子微量

覆土 14層から成る。壁際下層部には流れ込みと思われる暗褐色土が堆積している。北東壁東側と南東壁南側の床面上には炭化材混じりの焼土が堆積し, 覆土下層から中層にはロームブロックを含む褐色土が厚く堆積している。中層から上層にかけて焼土粒子, 炭化粒子を含む黒褐色土が細かく入り組みながら複雑に堆積している。人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量, ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 結り強
- 6 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 9 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量



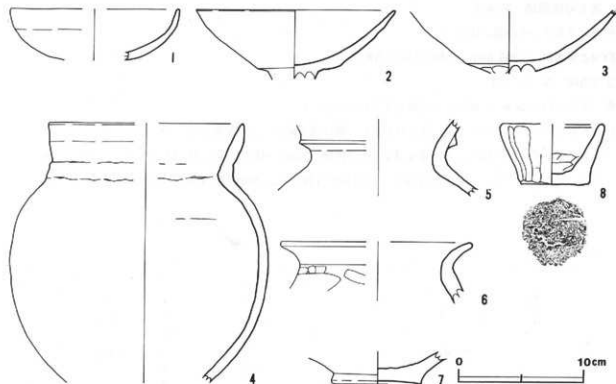
第12図 第5号住居跡実測図

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|-------|-----------------------|
| 10 暗褐色 | 炭化粒子中量, ローム粒子微量 | 13 褐色 | ローム中ブロック中量, ローム粒子極微量 |
| 11 褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック極微量 | 14 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 粘性強 |
| 12 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 粘り強, 粘性強 | | |

遺物 覆土層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第13図1の坏は北寄りの覆土下層から斜位の状態で、3の高坏は南コーナー付近の床面直上から出土している。6、7の壁は、6が西寄りの覆土下層から、7が南寄りの覆土上層から出土している。8の手捏土器は東寄りの覆土中層から出土している。土師器片が接合したものである。2、4、5は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。



第13図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	坏土器 器	A [13.6] B (4.0)	体部から口縁部の破片, 体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面へラ削り後ナデ, 内面ナデ。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P28 20% 北寄り覆土下層
2	高坏土器 器	A 15.9 B (5.5)	坏部の破片, 胴部との境に弱い稜を持ち, 外傾してラッパ状に開いて立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部外面へラ削り後ナデ, 内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にふい黄褐色 普通	P29 40% PL11 覆土中
3	高坏土器 器	B (4.8)	坏部の破片, 胴部との境に弱い稜を持ち, 外傾して開く。	坏部外面へラ削り後ナデ, 内面へラ磨き。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P30 20% 南コーナー付近 床面直上 内・外面煤付着
4	壺土器 器	A [15.6] B (20.7)	体部中位から口縁部の破片, 体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部に段を持ち, やや外反する。	口縁部内・外面横ナデ, 体部内・外面へラ削り後ナデ, 頸部に輪横み痕。	砂粒・長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P24 30% PL11 覆土中 二次焼成
5	壺土器 器	B (5.3)	体部上位から口縁部の破片, 頸部と口縁部との境に強い稜を持ち, 肩部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ, 体部内・外面へラナデ。	砂粒・長石・スコリア にふい黄褐色 普通	P25 5% 覆土中 内・外面割麗
6	壺土器 器	A [15.4] B (3.8)	体部上位から口縁部の破片, 体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面へラ磨き, 内面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・石英 にふい褐色 普通	P26 5% 西寄り覆土下層 外面煤付着
7	壺土器 器	B [2.0] C 7.0	底部から体部下位の破片, 突出した平底。	体部外面へラ削り後ナデ, 内面へラナデ, 底部外面へラ削り, 内面へラナデ。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P27 5% 南寄り覆土上層
8	手捏土器 土器器	A [8.4] B 4.9 C 5.4	底部から口縁部の破片, 平底, 体部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ, 底部及び体部外面へラ削り, 内面へラナデ。	砂粒・パミス にふい褐色 普通	P31 50% 東寄り覆土中層 体部外面指頭痕 外面煤付着

第6号住居跡 (第14図)

位置 調査区の南西部, W6区。

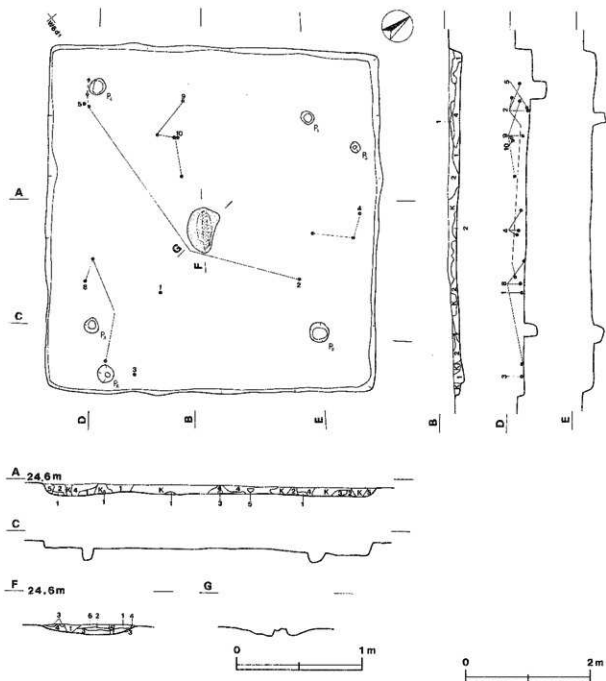
規模と平面形 長軸5.60m, 短軸5.32mの方形。

主軸方向 N-49°-W

壁 壁高は10~29cmで, 緩やかに外傾して立ち上がる。

床 凹凸があり, 中央付近にやや膨らみもち一部は踏み固めにより堅緻になっている。

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁, P₂, P₄, P₆は径18~33cmの円形で, P₃, P₅は楕円形または不整形円形で, 深さは15~58cmである。P₁~P₄は各コーナー付近に付設され, 規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅はP₁



第14図 第6号住居跡実測図

から北東壁寄りに、P₆はP₃から南東壁寄りに付設されている。位置や配置から補助柱穴と思われる。

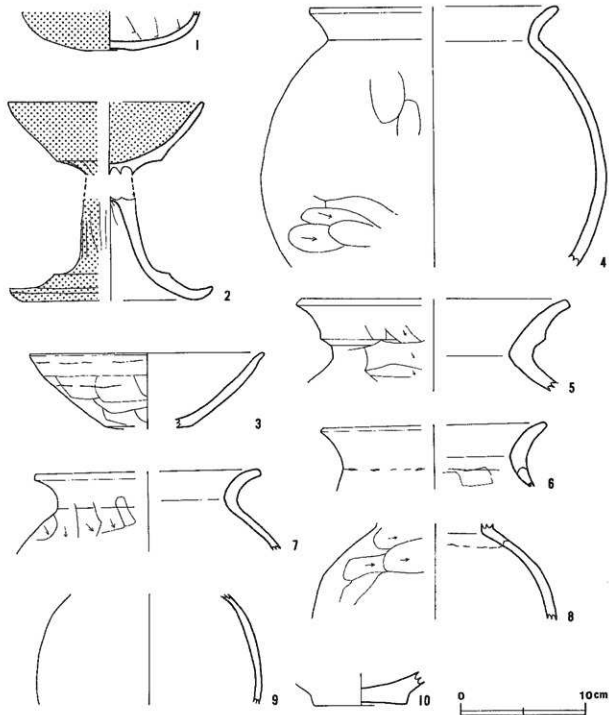
炉 中央寄りに付設され、平面形は長径75cm、短径23cmの長楕円形で、床面を8cm掘り窪めた地床炉である。

炉床は一部火熱を受け赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子極微量
 2 明赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子微量
 3 明赤褐色 焼土小ブロック少量、焼土粒子極微量

- 4 赤褐色 焼土小ブロック少量、炭化粒子微量
 5 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
 6 褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量



第15図 第6号住居跡出土遺物実測図

覆土 5層から成る。壁際にはロームブロックを含む明褐色土が堆積し、床面上から覆土中層まで褐色土が堆積している。南東壁寄りでは暗褐色土が褐色土と複雑に堆積し、中央部では暗褐色土と褐色土の層位を明確に分けることができる。人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 4 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 | 5 明褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量 | | |

遺物 北西寄りの覆土上層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第15図1の坏は床面直上から、2の高坏は西コーナー寄りの覆土上層から床面直上にかけて出土している坏部と、東寄りの覆土中層から出土している脚部が接合したもので、3の高坏は南寄りの床面直上から出土している。4～10の壺は、4が北東壁寄りの覆土上層から、5が西コーナー寄りの覆土下層から正位の状態、6、7は覆土中から、8は南寄りの覆土下層から床面直上に横位の状態、9、10は北西寄りの覆土上層から覆土下層に逆位の状態と正位の状態と出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	下法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	坏 土師器	B [3.2] C 3.6	底部から体部の破片。平底。体部は内湾しながら立ち上がる。	底部及び体部外面へラ削り後ナデ、内面ヘラナデ。外面赤彩。	砂粒・霏母 に多い橙色 普通	P39 20% 床面直上 外周保存者
2	高坏 土師器	A [15.7] B [15.8] D [8.2] E [15.1]	脚部及び体部一部欠損。脚部は円筒状で、胴部は段を有し、穏やかに広がって先端は外傾する。坏部は外傾して開く。	脚部外面へラ削り後ナデ、内面ヘラナデ。胴部内・外面横ナデ。坏部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア に多い黄褐色 普通	P40 60% P41 11 西コーナーより 覆土上層から床 面直上 内・外面保存者
3	高坏 土師器	A [18.8] B [6.0]	坏部の破片。脚部との境に横を持ち、外傾して開く。口縁部に極めて鋭い横を持つ。	坏部外面へラ削り後ナデ、内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P41 20% P41 11 南寄り床面直上 外面保存者
4	壺 土師器	A [20.0] B [20.8]	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 浅黄褐色 普通	P32 25% 北東壁寄り覆土 下層 二次焼成
5	壺 土師器	A [22.0] B [6.7]	体部上位から口縁部の破片。胴部は「く」の字状を呈し、口縁部との境に鋭い横を持つ。口縁部は外反する。	体部外面へラ削り後ナデ、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 に多い黄褐色 普通	P33 15% 西コーナーより 覆土下層
6	壺 土師器	A [18.2] B [5.1]	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面輪痕み痕。	砂粒・霏母 に多い橙色 普通	P34 10% 覆土中
7	壺 土師器	A [17.8] C [6.4]	体部上位から口縁部の破片。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・霏母 に多い橙色 普通	P35 10% 覆土中
8	壺 土師器	B [7.8]	体部中位から胴部の破片。体部は球形状を呈し、胴部に至る。	体部外面へラ削り後ヘラナデ、内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・スコリア 明赤褐色 普通	P36 15% 南寄り覆土下層 内周保存者
9	壺 土師器	B [9.0]	体部上位の破片。体部は球形状を呈する。	体部外面へラ削り後ヘラナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・スコリア に多い橙色 普通	P37 10% 北西寄り覆土上 層 外面保存者
10	壺 土師器	B [1.8] C 7.4	底部の破片。平底。体部は内湾しながら立つ上がる。	底部及び体部外面へラ削り後ナデ、内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・スコリア に多い橙色 普通	P38 10% 北西寄り壺土下層

第7号住居跡（第16図）

位置 調査区の西部中央寄り，V6n区。

規模と平面形 長軸8.22m，短軸8.02mの方形。

主軸方向 N-43°-W

壁 壁上部は耕作による攪乱を受けているが，底部から中間部にかけてほぼ残存している。壁高は28～42cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

壁溝 壁下を全周している。上幅5～15cm，深さ7～10cmで，断面形はU字形である。

間仕切り溝 幅12～26cm，深さ5～10cmで，北東壁から2条，南東壁から1条，南西壁から2条，北西壁から1条，それぞれ中央に向かって伸びている。北東壁北側の間仕切り溝は，北西壁へ逆L字状に回っている。

床 ほぼ平坦で，よく踏み固められている。南東壁東コーナー付近から中央付近に沿って焼土の広がりが見られる。

ピット 4か所（P₁～P₄）。P₁，P₂，P₄は長径25～30cm，短径23～26cmの楕円形で，P₃は径26cmの円形である。各コーナー付近に付設され，深さは70～75cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 2か所。炉1は中央部から北東寄りに付設されており，平面形は長径109cm，短径67cmの長楕円形で，床面を5cm掘り窪めた地床炉である。炉2は南西壁西側の間仕切り溝に寄ったところに付設されており，平面形は長径110～短径60cmの隅丸長方形で，床面を5cm掘り窪めた地床炉である。炉1・2の覆土には焼土ブロック，焼土ブロック塊が堆積し，炉床は赤変硬化している。

炉1土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・ローム粒子少量	3 暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子少量
2 褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量	4 褐色	焼土粒子・ローム粒子少量
		5 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

炉2土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	3 褐色	ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
2 赤褐色	ローム小ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量		

貯蔵穴 南東壁中央部から南コーナーに向かって壁沿いに付設され，平面形は長径110cm，短径73cmの楕円形で，深さ53cmの円筒状に掘り込まれている。底面はやや内側に緩く傾斜している。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム中ブロック微量，ローム粒子・焼土粒子極微量
3 褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子極微量

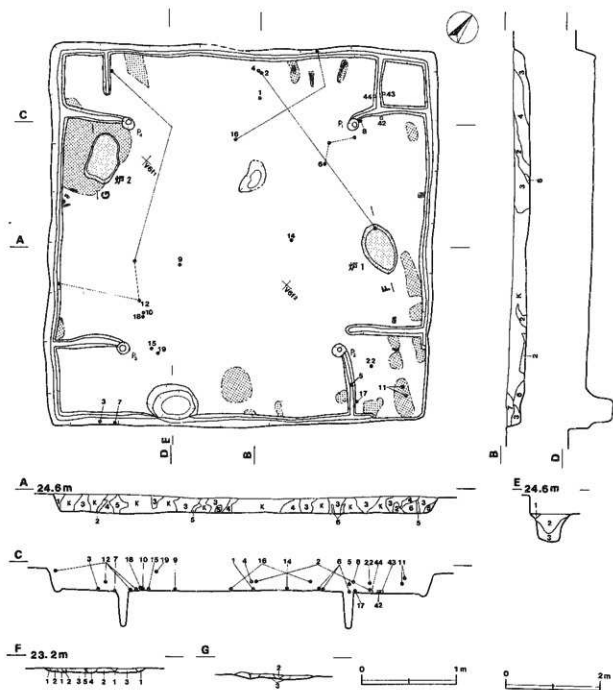
覆土 7層から成る。壁際には流れ込みと思われる褐色土が堆積している。床面上南東壁沿い中央付近に焼土の広がりが見られる。覆土下層から上層にかけて黒褐色土が帯状に厚く堆積している状況が見られる。自然堆積と考えられる。

土層解説

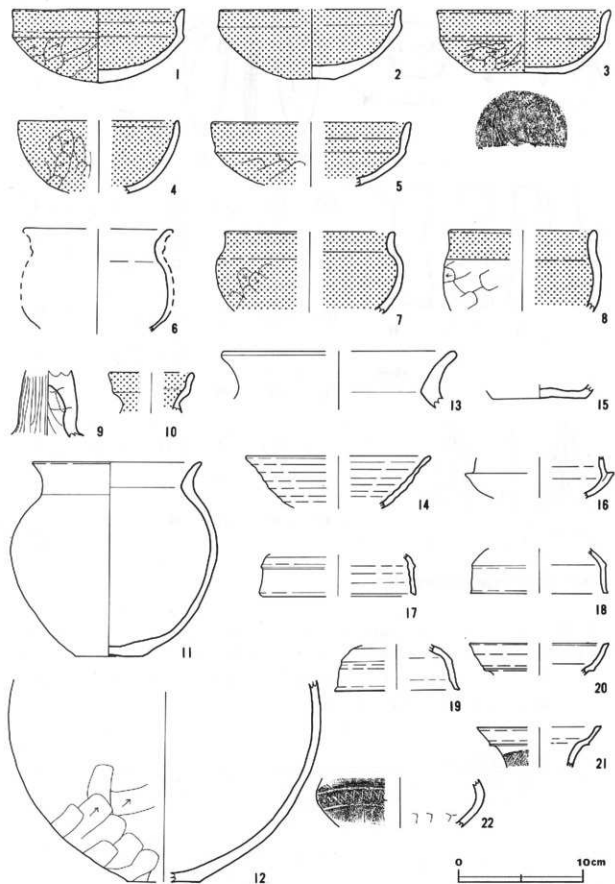
1 暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子微量	5 暗褐色	ローム小ブロック多量，ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量	6 暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
3 黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子微量	7 黒褐色	ローム小ブロック多量，ローム粒子極微量
4 黒褐色	ローム小ブロック微量，ローム粒子極微量		

遺物 各コーナー付近の覆土上層から床面直上にかけて遺物が多量に出土している。第17・18図1～5の坏は，1が北西寄りの床面直上から逆位に伏せた状態で，2は北寄りの覆土下層から，3は南東壁際の床面直上から，4は北西寄りの覆土中層から，5は東寄りの覆土下層から出土している。6～8の椀は，6が北東寄りの床面直上から出土している土師器片が接合したもので，7は覆土中から，8は北寄りの覆土中層から出土している。9の高杯は中央付近の床面直上から，10の壺は南寄りの床面直上から横位の状態で出土している。11～13の甕は，11が東コーナー付近の覆土中層から，12が西寄りの覆土中層から覆土下層にかけ出土してい

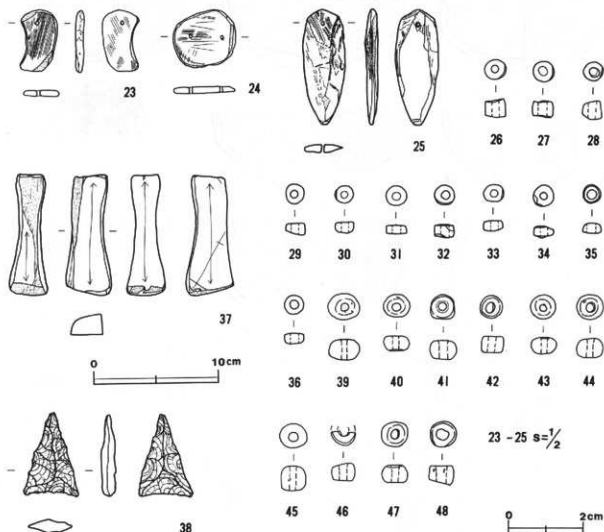
る土師器片が接合し、13は覆土中から出土している。14~22が須恵器で、14、15の坏は中央付近の床面直上と南寄りの床面直上から出土している。16の坏身は、北寄りの覆土中層と床面直上から出土している須恵器片が接合したもので、17の坏蓋は東コーナー付近の床面直上から、18の坏蓋は南寄りの床面直上から、19の坏蓋は南寄りの覆土中層から出土している。20、21の甕は覆土中から、22の甕は覆土中層から横位の状態で出土したものである。その他、23~48の勾玉、双孔円板、刺形石製模造品、白玉、磁石、ガラス玉が覆土中から出土しているが、このうち42、43、44は北寄りの床面直上から出土している。38の石鏃は混入したものとされる。



第16図 第7号住居跡実測図



第17图 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



第18図 第7号住居跡出土遺物実測図(2)

所見 本跡は、炉を2か所持つ大型の住居跡である。出土している遺物の中に赤彩される土師器が多く、剣形石製模造品、勾玉、白玉、双孔円板が確認され、ガラス玉の特殊遺物が多量に出土していることから、集落の中での特殊な地位を占める建物跡であった可能性が高く、また、祭祀行為との関係も考えられる住居跡である。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第17図 1	坏 土 器	A 11.8	口縁部一部欠損。丸部。体部は内 彎しながら立ち上がり、口縁部と の境に稜を持つ。口縁部は僅かに 外反する。	口縁部内・外面ナデ。底部及び体 部外面へラ削り後ナデ、内面雑な へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・ 雲母 褐色 普通	P46 95% P L11 北西寄り床面直上 内面摩耗
		B 5.9				
2	坏 土 器	A [15.7]	底部から口縁部の破片。平底。体 部は内彎しながら立ち上がり、口 縁部との境に強い稜を持つ。口縁 部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び 体部外面へラ削り後ナデ、内面ナ デ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P47 40% P L11 北寄り覆土下層 内面摩耗
		B 5.6				
		C 3.9				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第17回 3	坏 土 師 器	A [13.8] B 5.0 C 7.2	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい・橙色 普通	P48 40% P.L11 南東原塚東面直上 二次焼成
4	坏 土 師 器	A [12.8] B (5.9)	体部及び口縁部の破片。丸底。体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる。口縁部内面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P50 25% 北西寄り覆土中層
5	坏 土 師 器	A [16.0] B (5.2)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P52 20% 東寄り覆土下層
6	椀 土 師 器	A [12.0] B (8.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P49 25% 北東寄り床面直上 内・外面刺雑
7	椀 土 師 器	A [13.6] B (6.5)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P51 20% 覆土中
8	椀 土 師 器	A [12.0] B (6.6)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	P53 10% 北西寄り覆土中層
9	高 坏 土 師 器	B (5.2)	脚部の破片。円筒状を呈する。	外面へラ削り後ナデ。内面へラナデ。	砂粒・パミス 灰褐色 普通	P54 10% 中央付近床面直上
10	壺 土 師 器	A [6.8] B (3.2)	口縁部の破片。外傾して立ち上がり、中位に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	口縁部・雲母 にぶい・橙色 普通	P42 10% 南寄り床面直上
11	壺 土 師 器	A 13.6 B 15.7 C 5.5	体部及び口縁部一部欠損。平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラナデ。底部へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい・黄褐色 普通	P43 95% P.L12 東コーナー付近 覆土中層 二次焼成
12	壺 土 師 器	B [16.2] C [5.6]	底部から体部上位の破片。平底。体部は球形状を呈する。	体部外面へラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。底部へラ削り後ナデ。	砂粒・長石にぶい 橙色 普通	P44 15% 西寄りの覆土中層から下層 二次焼成
13	壺 土 師 器	A [19.0] B (3.8)	口縁部破片。「く」の字状に開き外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・パミス にぶい・橙色 普通	P45 10% 覆土中
14	坏 衝 器	A [14.8] B (4.2)	体部下位から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外傾し、端部に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部下位手持ちへラ削り。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	P55 10% P.L12 中央付近床面直上
15	坏 須 器	B (7.0) C [7.4]	底部の破片。平底。底部から体部にかけて外傾する。	底部外面へラ削り。内面横ナデ。	砂粒・石英・長石 褐色 良好	P61 5% P.L12 南寄り床面直上
16	坏 須 器	B (3.2)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、受部に至る。受部は長く外方に伸び、端部は丸味を帯びている。	巻き上げ、横ナデ整形。体部下位へラ削り。	砂粒・長石・石英 黄灰色 良好	P60 10% P.L12 北寄りの覆土中層から床面直上
17	坏 蓋 須 器	A [12.6] B (3.3)	天井部から口縁部の破片。天井部は内彎しながら口縁部に至り、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は外傾し、端部に稜を持つ。	巻き上げ、横ナデ整形。天井部外面回転へラ削り。天井部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 良好	P56 5% 東コーナー付近 床面直上
18	坏 蓋 須 器	A [11.0] B (3.6)	天井部から口縁部の破片。天井部は内彎しながら口縁部に至り、口縁部との境に弱い稜を持つ。端部は内傾する平面を成す。	巻き上げ、横ナデ整形。天井部外面回転へラ削り。天井部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 黄灰色 良好	P57 5% 南寄り床面直上
19	坏 蓋 須 器	A [10.0] B 3.6	天井部から口縁部の破片。天井部は内彎しながら口縁部に至り、口縁部との境に弱い稜を持つ。端部は外反する。	巻き上げ、横ナデ整形。天井部外面回転へラ削り。天井部内面及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 褐色 良好	P58 5% 南寄り覆土上層

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第17図 20	黒須石器	A [11.2] B (2.5)	頸部から口縁部の破片。頸部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に線を付す。肩部は水平で僅かに凹面を成す。	巻き上げ、横ナデ整形。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・骨母 赤灰色 良好	P59 5% 覆土中
21	黒須石器	A [10.0] B (3.3)	頸部から口縁部の破片。頸部は外反気味に立ち上がり、口縁部との境に強い線を付し、内響して外上方に開き、腹の下に8条の柳葉状状文を施す。肩部は水平で僅かに凹面を成す。	巻き上げ、横ナデ整形。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・骨母 灰褐色 良好	P62 5% PL12 覆土中
22	黒須石器	B (3.8)	体部中位の破片。体部は内響しながら立ち上がり、中央位に6条の柳葉状状文を施す。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石 褐灰色 良好	P63 10% PL19 覆土中層

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第18図23	勾 玉	3.3	1.8	0.4	0.2	4.9	100	片岩	覆土中	Q17 PL19
24	双 孔 円 板	3.3	3.1	0.4	0.15	7.3	100	片岩	覆土中	Q18 PL19
25	削形石製模造品	6.2	2.0	0.4	0.2	11.8	100	片岩	覆土中	Q19 PL19
26	白 玉	0.5	0.5	0.5	0.2	0.3	100	片岩	覆土中	Q20
27	白 玉	0.6	0.6	0.4	0.25	0.3	100	片岩	覆土中	Q21
28	白 玉	0.5	0.5	0.5	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q22
29	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q23
30	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q24
31	白 玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q25
32	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q26
33	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q27
34	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q28
35	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	覆土中	Q29
36	白 玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.4	100	片岩	覆土中	Q30
37	磁 石	(9.7)	3.7	1.6	—	(127.1)	95	頁岩	覆土中	Q31 PL19
38	石 鏝	2.2	1.5	0.3	—	0.6	100	チャート	覆土中	Q32 PL19
39	ガラス玉	0.7	0.8	0.5	0.2	0.4	100	—	覆土中	Q33 PL19
40	ガラス玉	0.6	0.6	0.4	0.2	0.4	100	—	覆土中	Q34 PL19
41	ガラス玉	0.7	0.7	0.5	0.3	0.3	100	—	覆土中	Q35 PL19
42	ガラス玉	0.6	0.6	0.4	0.2	0.2	100	—	北寄り床面直上	Q36 PL19
43	ガラス玉	0.7	0.7	0.4	0.2	0.2	100	—	北寄り床面直上	Q37 PL19
44	ガラス玉	0.7	0.7	0.5	0.2	0.3	100	—	北寄り床面直上	Q38 PL19
45	ガラス玉	0.7	0.7	0.7	0.2	0.3	100	—	覆土中	Q39 PL19
46	ガラス玉	0.6	(0.6)	0.5	(0.2)	(0.1)	50	—	覆土中	Q40 PL19
47	ガラス玉	0.7	0.7	0.5	0.2	0.4	100	—	覆土中	Q41 PL19
48	ガラス玉	0.7	0.7	0.5	0.3	0.3	100	—	覆土中	Q42 PL19

第8号住居跡 (第19図)

位置 調査区の西部、V6a区。

規模と平面形 長軸6.32m、短軸5.09mの長方形。

主軸方向 N-44°-E

壁 壁高は4~10cmで、緩やかに外傾している。掘り込みが浅いため南東壁の一部は殆ど残存せず、北西壁の一部分に壁を確認するのみである。

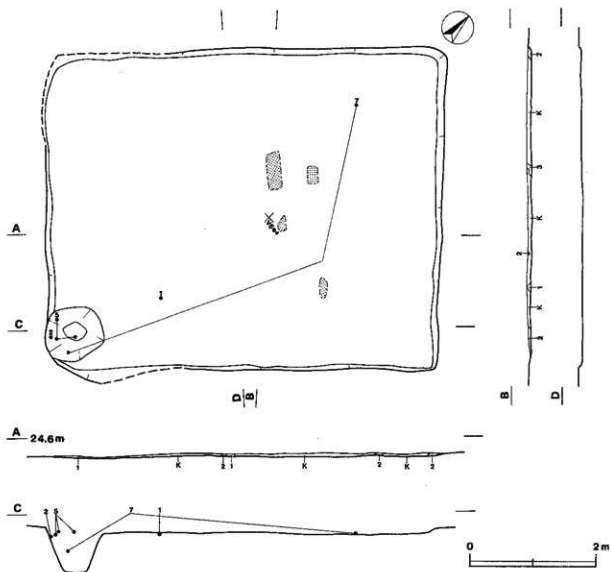
床 全体に耕作による攪乱を受け、褐色土中に床面と思われる硬質面の一部が確認できたが踏み締まりは弱い。
 貯蔵穴 南コーナーに付設され、平面形は長径95cm、短径85cmの楕円形である。深さは60cmで、底面は平坦であり、断面はU字形に近い。

覆土 3層から成る。耕作による攪乱のため、遺存している部分は中央部に厚さ6cm程残っている覆土の一部だけである。

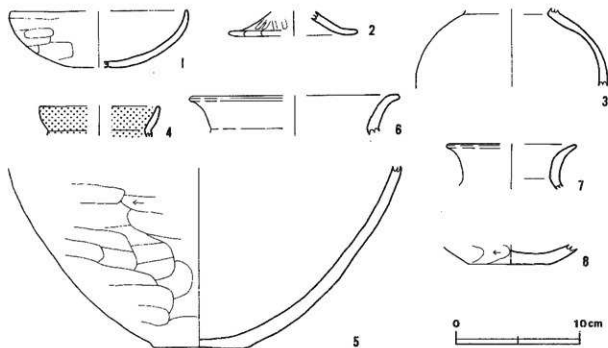
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 昏明褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 床面直上と炉内覆土中層から土師器片が少量出土している。第20図1の坏は南寄りの床面直上から、2の高坏は貯蔵穴内覆土上面から出土し、3の埴と4の小形壺は覆土中から出土している。5の甕は貯蔵穴内覆土上面から出土している土師器片が接合し、7の甕は北寄りの床面直上から出土している土師器片と貯蔵穴内覆土中層から出土している土師器片が接合したものである。



第19図 第8号住居跡実測図



第20図 第8号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡からは、炉、ピットが確認できなかったが、遺構の形態及び規模から住居跡とした。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	坏 土師器	A [14.2] B (4.5) C [4.0]	底部から口縁部の破片。底部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	体部外面へラ削り後へラナデ、内面へラ磨き。底部へラ削り。	砂粒・長石・バミス 灰白色 普通	P69 40% 南寄り床面直上
2	高坏 土師器	D [10.4] E (2.0)	脚部片。下位で大きく開く。	脚部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	砂粒・バミス にぶい褐色 普通	P71 5% 貯蔵穴内覆土上面
3	壇 土師器	B (6.3)	体部中位から頸部までの破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・スコリア 浅黄褐色 普通	P72 10% 覆土中 外面保付層
4	小形壺 土師器	A [9.8] B (2.5)	頸部から口縁部の破片。頸部は括れ、口縁部は内彎する。	口縁部内・外面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P70 5% 覆土中
5	壺 土師器	B (14.5) C 7.4	底部から体部中位の破片。平底でやや突出する。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後へラナデ、内面へラ磨き。底部へラ削り。	砂粒・石英・バミス にぶい褐色 普通	P65 25% P.L.12 貯蔵穴内覆土上面
6	壺 土師器	A [16.8] B (2.9)	口縁部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 明黄褐色 普通	P66 5% 覆土中 外面保付層
7	壺 土師器	A [10.4] B (3.3)	口縁部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P67 5% 北寄り床面直上
8	壺 土師器	B (1.3) C 6.9	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。該部扁平へラ削り。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	P68 5% 覆土中

第9号住居跡 (第21図)

位置 調査区の西部, V63区。

規模と平面形 長軸6.90m, 短軸6.60mの方形。

主軸方向 N-50°-E

壁 上部は耕作による攪乱を受けているが, 下部の残存状態は良好である。壁高は43~57cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが, 踏み固められた部分は確認されない。各コーナー付近に焼土の広がりが見られる。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は長径29~46cm, 短径23~40cmの楕円形で, 深さ54~77cmである。各コーナー付近に付設され, 規模や配列から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は北西壁沿いに付設され, 平面形は長径86cm, 短径70cmの不定形で, 深さ25cmである。断面は楕円状の緩い傾斜をもち, 底部には凹凸がある。貯蔵穴2は南東壁の南コーナー寄りに付設され, 長径75cm, 短径70cmの楕円形で, 深さ70cmである。断面はU字形である。

貯蔵穴1土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 2 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | | 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |

貯蔵穴2土層解説

- | | |
|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 |

覆土 14層から成る。壁際にはロームブロックを多量に含む褐色土が堆積し, 覆土下層から上層にかけてローム粒子を含む褐色土が複雑に堆積している。層位の大部分が広く攪乱を受けているため明確には把握できないが, 人為堆積の様相を呈する。

土層解説

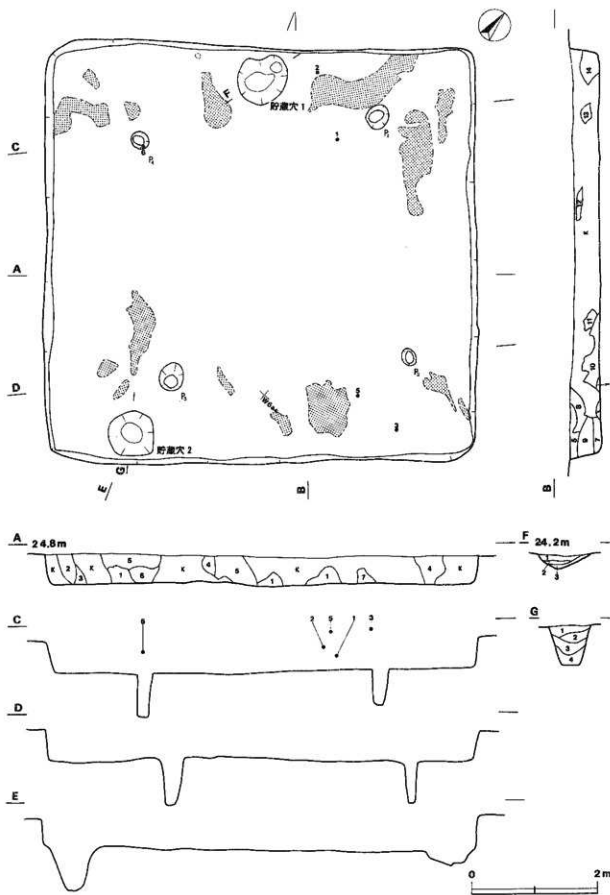
- | | | | |
|-------|------------------------------|--------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム小ブロック中量, ローム粒子極微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック微量, 炭化粒子極微量 | 9 褐色 | ローム小ブロック多量, ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 10 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック微量, ローム粒子極微量 | 11 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 | 12 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 焼土粒子極微量 | 13 暗褐色 | 炭化粒子中量, ローム粒子少量 |
| 7 黒褐色 | 炭化粒子中量, 焼土粒子・ローム小ブロック少量 | 14 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子極微量 |

遺物 覆土上面から覆土中層にかけて土師器片が少量出土している。第22図1~3の坏は, 1が北寄りの覆土中層から, 2は北寄りの覆土上層から, 3は東寄りの覆土上面から出土している。4~7の甕は, 4, 7が覆土中から出土し, 5, 6は東寄りの覆土上面と西寄りの覆土上層から出土している。その他, 8の剣形石製模造品, 9~13の白玉が覆土中から出土している。14の石鏝は混入したものと思われる。

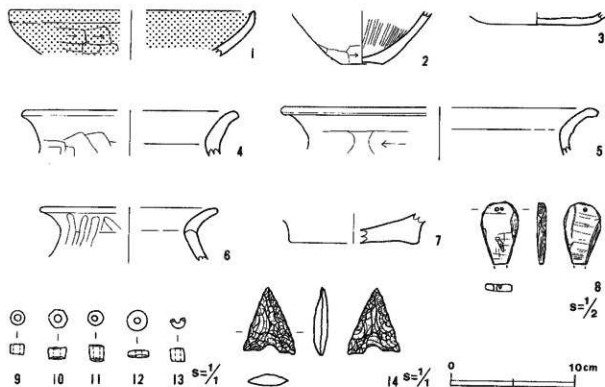
所見 本跡は, 出土遺物から祭祀行為との関係が考えられる建物跡である。時期は, 5世紀後半と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第22図 1	坏 土師器	A [19.4] B (3.6)	体部中位から口縁部の破片, 体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はほぼ直立する。	体部外面へう雨り幾ナデ, 内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・バミス 黄褐色 普通	P77 10% 北寄り覆土中層



第21图 第9号住居跡実測图



第22図 第9号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 2	坏 土部 器	B (4.0) C 3.4	底部から体部下位の破片。上げ式。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後ナデ、内面へラ磨き。	砂粒・長石・石英 にふい橙色 普通	P78 10% 北寄り覆土上層
3	坏 土部 器	H (0.7) C 9.4	底部の破片。平底。体部は僅かに外反する。	底部内・外面は不定方向の手持ちへラ削り。	砂粒・長石 暗灰黄色 普通	P79 5% P.L12 東寄り覆土上層
4	甕 土部 器	A [14.7] B (3.5)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・スコリア にふい橙色 普通	P73 5% 覆土中
5	甕 土部 器	A [25.5] B (3.3)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面へラナデ。	砂粒・長石・バミス にふい橙色 普通	P74 5% 東寄り覆土上層
6	甕 土部 器	A [14.2] B (4.1)	口縁部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	砂粒・バミス にふい褐色 普通	P75 5% 西寄り覆土上層
7	甕 土部 器	B (1.8) C [10.4]	底部の破片。突出した平底。	底部へラ削り。体部内面へラナデ。	砂粒・バミス にふい黄褐色 普通	P76 5% 覆土中

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第22図 8	角形石製横造品	(3.3)	1.9	0.4	0.15	(4.6)	80	片岩	覆土中	Q43 PL19
9	白 玉	0.4	0.4	0.3	0.2	0.1	100	片岩	覆土中	Q44
10	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	覆土中	Q45
11	白 玉	0.4	0.4	0.4	0.2	0.1	100	片岩	覆土中	Q46
12	白 玉	0.5	0.5	0.2	0.15	0.1	100	片岩	覆土中	Q47
13	白 玉	0.4	(0.4)	0.3	0.2	(0.05)	50	片岩	覆土中	Q48
14	石 鉄	1.8	1.4	0.3	—	0.6	100	チャート	覆土中	Q49 PL19

第10号住居跡 (第23図)

位置 調査区の南西部, W6区。

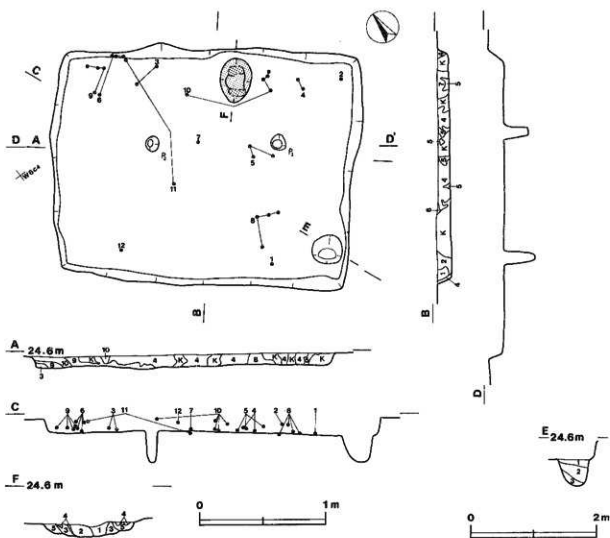
規模と平面形 長軸4.94m, 短軸3.72mの長方形。

主軸方向 N-52°-W

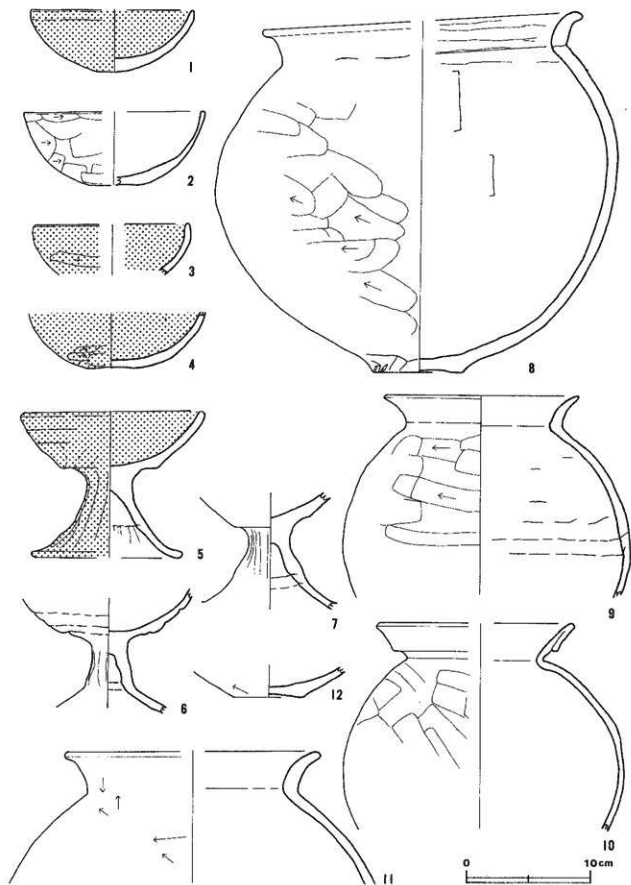
壁 耕作による攪乱を受け、北西壁の一部で僅かに残存部分が確認できるだけである。壁高は14~25cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。

床 攪乱を受け、残存するのは一部である。平坦で、よく踏み固められ堅緻であるが、床面上の一部には滲み状の黒色土の広がりが見られる。

ピット 2か所 (P₁・P₂)。径20~25cmの円形で、深さは47~50cmである。中央部分を挟んで両側に直線上に並ぶ配列から支柱穴と考えられる。



第23図 第10号住居跡実測図



第24图 第10号住居跡出土遺物実測図

炉 中央から北東寄りに付設され、長径70cm、短径50cmで、床面を10cm掘り窪めた隅丸長方形の地床炉である。

炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|--------------------|
| 1 黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量 | 4 暗褐色 | 焼土小ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子微量、炭化粒子極微量 | 5 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 3 赤褐色 | 焼土小ブロック中量、焼土粒子少量 | | |

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は径50cmの円形で、深さは40cmである。断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|-------|-------------------------|
| 1 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量、焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量 |

覆土 10層から成る。壁際には褐色土が堆積し、下層から上層にかけて広く攪乱を受けている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|--------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、焼土粒子極微量 | 5 褐色 | 焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、焼土粒子極微量 | 6 褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、焼土粒子極微量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、焼土粒子極微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| | | 9 暗褐色 | 炭化粒子・ローム小ブロック微量 |
| | | 10 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物 中央から東寄りの覆土上層から床面直上に向け、土師器片が中量出土している。第24図1～4の坏は、

1が南寄りの床面直上から正位の状態、2が東コーナー寄りの覆土中層から、3が北寄りの覆土下層から、4が東寄りの床面直上及び覆土下層から出土している。5～7の高坏は、5が中央よりの覆土下層から、6が北東壁際の覆土上層から逆位で出土している高坏に、床面直上から出土している土師器片が接合し、7が中央付近の床面直上から出土している。8～12の甕は、8が南寄りの床面直上から覆土中層にかけ横位の状態、9が北寄りの覆土下層から逆位、10が北東寄りの覆土上層及び覆土中層から、11が北東壁際の覆土上層から出土している口縁部片と中央寄りの床面直上から出土している体部片が接合したもので、12は西寄りの覆土中層から出土している。

所見 本跡は、当遺跡で確認した建物跡では、ただ一軒、2本柱を持つ住居跡として確認した。住居跡の形状及び柱穴の配列から、切り妻的な上屋構造物が推測される。時期は、出土物から5世紀後半と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	坏 土師器	A [13.1]	体部上位及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面ヘラ削り後ナゲ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P85 60% P L12 南寄り床面直上
		B 5.0				
2	坏 土師器	A [14.3]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面ヘラ削り後ナゲ、内面ナゲ。底部難なヘラ削り。	砂粒・長石・バミス にぶい赤褐色 普通	P86 40% P L12 東コーナーより 覆土中層 二次焼成
		B (5.9)				
		C (4.0)				
3	坏 土師器	A [12.2]	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は中や内彎する。	口縁部横ナゲ。体部内・外面ヘラナゲ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P87 5% P L12 東寄り床面直上 二次焼成
		B (4.0)				
4	坏 土師器	B (4.3)	底部から体部上位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤灰褐色 普通	P88 40% P L12 東寄り床面直上 及び覆土下層
		C 3.5				
5	高坏 土師器	A 14.8	脚部及び坏部一部欠損。脚部は短い柱状を呈し、下位で大きく開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち、内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナゲ。坏部外面ヘラ削り後ナゲ、内面ナゲ。脚部下位内・外面ナゲ。中位以上ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P89 60% P L12 北寄り覆土下層 中央寄り覆土下層
		B 11.8				
		D [12.1]				
		E 7.0				

図版番号	図種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24回 6	高坏 土器器	B (9.0)	底部及び口縁部一部欠損。脚部は 中位まで柱状を見し、下位で開く。 坏部は脚部との境に弱い稜を持 ち、内彎しながら立ち上がる。	坏部外面横積み後継ぎナダ、内面 ナダ。脚部外面へラ削り後ナダ、 下位へラナダ。	砂粒・長石・石英 にふい橙色 普通	P90 60% 北東壁階覆土上 層 坏部内面煤付着
7	高坏 土器器	B (8.4)	脚部から坏部下位の破片。脚部は ラッパ状に開く。坏部は脚部との 境に弱い稜を持ち、外屈して開く。	坏部外面へラ削り後へラナダ、内 面へラ磨き。脚部外面へラ削り後 ナダ、内面ナダ。	砂粒・長石・石英 にふい橙色 普通	P91 30% 中央付近床面直 上
8	壺 土器器	A [25.9] B 29.1 C 7.2	底部から口縁部の破片。やや尖出 した平底。体部は球形状を呈する。 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナダ。底部及び 体部外面へラ削り後ナダ、内面へ ラナダ。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P80 60% P L 12 南寄り床面直上 から覆土中層
9	壺 土器器	A 15.7 B (15.9)	体部中位から口縁部の破片。体部 は球形状を呈する。口縁部は外反 する。	口縁部内・外面横ナダ。体部外面 へラ削り後継ぎなへラ磨き、内面へ ラナダ。	砂粒・長石・パミス にふい黄橙色 普通	P81 40% 北東寄り覆土下 層
10	壺 土器器	A [16.0] B (16.7)	体部中位から口縁部の破片。複合 口縁。口縁部は稜を持ち外傾する。	口縁部内・外面横ナダ。体部外面 へラ削り後ナダ、内面横ナダ。	砂粒・長石・スコリア にふい橙色 普通	P82 30% P L 13 北寄り覆土中層 から上層
11	壺 土器器	A [20.6] B (10.6)	体部上位から口縁部の破片。体部 背は内彎しながら立ち上がる。口 縁部は頸部は'く'の字状に外反 する。	口縁部内・外面横ナダ。体部外面 へラナダ、内面ナダ。	砂粒・長石 にふい橙色 普通	P83 15% 北東壁階覆土上 層
12	壺 土器器	B (2.6) C 5.4	底部から体部下位の破片。上げ 底。体部は内彎しながら立ち上 がる。	底部及び体部外面へラ削り後ナ ダ、内面へラ磨き。	砂粒・長石 橙色 普通	P84 5% 西寄り覆土中層 内面煤付着

第11号住居跡 (第25図)

位置 調査区の中央部やや西側、V6区。

規模と平面形 長軸7.04m、短軸5.52mの長方形。

主軸方向 N-53'-E

壁 耕作による攪乱を格子目状に受け、壁の残存部分はほとんどなく、南東壁の一部に僅か確認できるだけである。壁高は16~28cmで、緩やかに外傾する。

床 攪乱を受けているため、帯状に残る残存部分には凹凸がみられ、ローム塊を含んだように硬く踏み固められている。

炉 2か所。炉1は中央から北西寄りに付設されている。長径68cm、短径63cmで、床面を10cm掘り窪めた方形の地床炉である。炉床の中央部分には赤変硬化している部分が見られる。炉2は中央から北東壁寄りに付設されている。長径52cm、短径43cmの楕円形で、床面を5cm掘り窪めた地床炉である。炉床はよく焼け赤変硬化している。

炉1土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子微量 3 赤褐色 焼土ブロック多量、焼土粒子中量、ローム粒子少量
2 明褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子微量

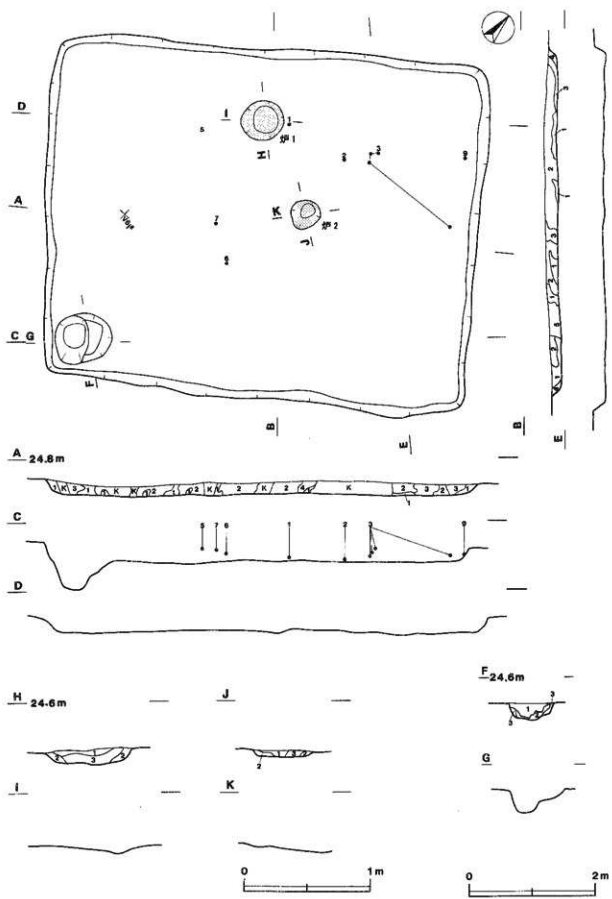
炉2土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量、焼土粒子極微量
2 明褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・ローム粒子微量

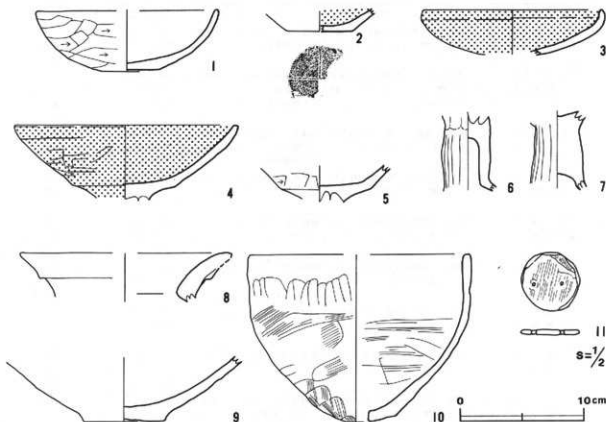
貯蔵穴 南東壁の南コーナー付近に付設され、長径95cm、短径75cmの楕円形で、深さ45cmである。断面はU字形で、深さ20cm位の部分で内側に10cm突き出る段を有し、底部は中央に向かい緩やかに傾斜している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量
2 明褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・ローム粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子微量、ロームブロック極微量



第25图 第11号住居跡実測図



第26図 第11号住居跡出土遺物実測図

覆土 4層から成る。壁際にはロームブロック、ローム粒子を含む黒褐色土が堆積し、下層から上層にかけて広く攪乱を受けている。人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒子少量、締まり強、粘性強
 2 黒褐色 ローム小ブロック微量、ローム粒子極微量、粘性強
 3 暗褐色 ローム中ブロック少量、ローム粒子極微量、締まり強
 4 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子少量、締まり強、粘性強

遺物 覆土上層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第26図1～3の坏は、1が北西寄りの覆土下層から正位の状態で、2が北寄りの床面直上から、3が北寄りの覆土上層及び覆土中層から出土している土師器片が接合したものである。4～7の高坏は、4が北東寄りの覆土下層から正位の状態で、5が北西寄りの覆土上層から、6、7が中央寄りの覆土上層及び覆土下層から出土している。8、9の甕と10の甔は、8と10が覆土中から、9が北東壁寄りの覆土中層から出土している。その他、11の双孔円板が覆土中から出土している。

所見 本跡からは、ピットが確認できなかったが、遺構の形態及び規模と、炉、貯蔵穴も確認されていることから住居跡として考える。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	坏 土師器	A [14.8] B 4.8 C 4.4	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内灣しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面へク削り後ナデ、内面へク磨き。	砂粒・長石・スコリア 褐色 普通	P94 75% PL13 北西寄り覆土下層 内面保存層

図版番号	種 別	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第26図 2	環 土 師 器	B (1.4) C [5.2]	底部から体部下位の破片。平底。 体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へうろ削り後ナダ、内面ナ ダ。内面赤彩。	砂粒・長石 褐色 普通	P96 5% 北寄り床直道上 底部「 σ 」の短痕
3	環 土 師 器	A 14.4 B (3.6) C [5.6]	体部下位から口縁部の破片。体部 は内彎しながら立ち上がり、口縁 部は内彎する。	口縁部内・外面横ナダ。体部外面 へうろ削り後ナダ、内面ヘラナダ。 内・外面赤彩。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P96 50% PL13 北寄り覆土上層 から覆土中層
4	高 土 師 器	A 18.0 B (6.0)	坏部片。脚部との境に弱い稜を持 ち、内彎しながら外縁して立ち上 がる。	口縁部内・外面横ナダ。坏部外面 へうろ削り後ナダ、内面ヘラ磨き。 内・外面赤彩。	砂粒・長石・スクリア にぶい褐色 普通	P97 50% PL13 北東寄り覆土下層
5	高 土 師 器	B (2.7)	坏部片。脚部との境に弱い稜を持 ち、内彎しながら立ち上がる。	坏部外面へうろ削り後ヘラナダ、内 面ヘラ磨き。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	P98 10% 北西寄り覆土上 層
6	高 土 師 器	B (5.7)	脚部片。脚部は柱状を呈し、中位 にやや膨らみを持つ。	脚部外面へうろ削り後ナダ、内面ヘ ラナダ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P99 10% 中央寄り覆土上層 脚部内面指頭痕
7	高 土 師 器	B (5.5)	脚部片。脚部は柱状を呈し、中位 にやや膨らみを持つ。	脚部外面へうろ削り後ナダ、内面ナ ダ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P100 10% 中央寄り覆土下層 脚部内面指頭痕
8	壺 土 師 器	A [17.0] B (3.5)	口縁部の破片。脚部に弱い稜を持 ち、口縁部は「く」の字状に外反 する。	口縁部内・外面横ナダ。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P92 5% 覆土中
9	壺 土 師 器	B (4.8) C [6.4]	底部から体部下位の破片。平底。 体部は内彎しながら立ち上がる。	底部外面へうろ削り、内面ヘラナダ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P93 5% 北東寄り覆土中層 内・外面鈎痕
10	甌 土 師 器	A [18.0] B 13.5 C 2.2	体部上位及び口縁部一部欠損。単 孔式。体部は内彎しながら立ち上 がり、口縁部でほぼ垂直に立ち上 がる。	口縁部内・外面横ナダ。体部外面 へうろ削り後短なヘラナダ、内面ナ ダ。口縁部外面輪痕。	砂粒・スクリア にぶい褐色 普通	P101 70% PL13 覆土中 底部外面採付着

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	残存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第26図11	双孔円板	3.2	3.1	0.3	0.15	6.2	100	凝灰岩	覆土中	Q50 PL19

第12号住居跡 (第27図)

位置 調査区の中央部、V7₄区。

規模と平面形 長軸8.68m、短軸8.48mの方形。

主軸方向 N-47°-E

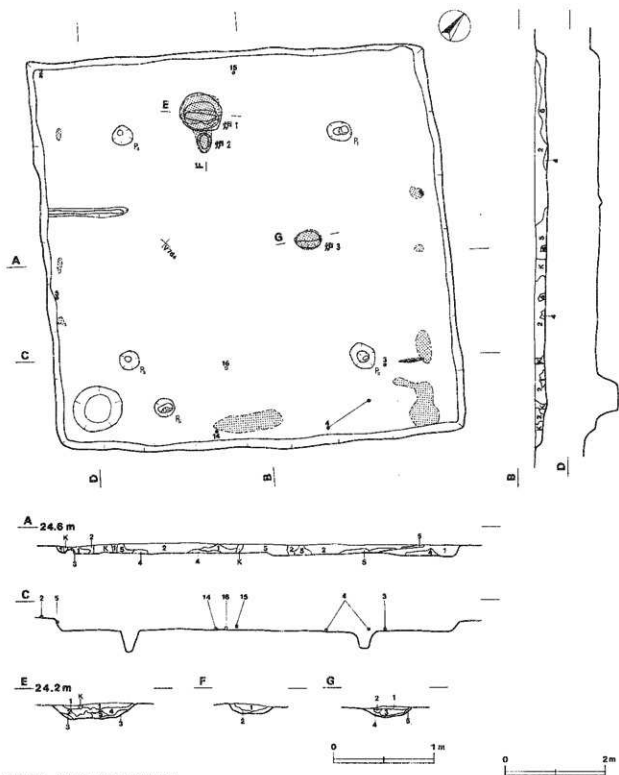
壁 壁高は14~25cmで、緩やかに外傾している。北西壁は格子目状に入る耕作による攪乱を受けほとんど残存しない。

床 ほぼ平坦で、中央から南側にやや傾斜している。中央部は踏み固められ堅緻である。

間仕切り溝 上幅15~17cm、深さ5~7cmで、南西壁から中央に向かって1条見られる。断面形はU字形である。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₅は長径48~60cm、短径35~40cmの楕円形または不整形楕円形ピットで、深さは33~48cmである。P₁~P₄は各コーナー付近に付設され、規模や位置から主柱穴と考えられる。P₅はP₃の東側に付設され、やや中央向きに傾斜して掘り込まれており、性格は不明である。

炉 2か所。炉1は北東壁の中央東寄りに付設されている。長径90cm、短径70cmで、床面を10cm掘り窪めた隅丸長方形の地床炉である。炉床は火熱を受け焼土ブロックが厚く堆積し、赤変硬化している。炉2は中央からやや北東方面に付設され、長径50cm、短径35cmの楕円形で、床面を10cm掘り窪めた地床炉である。炉床の西側半分は攪乱により残存しないが、残存する東側は火熱を受け赤変硬化している。



第27図 第12号住居跡実測図

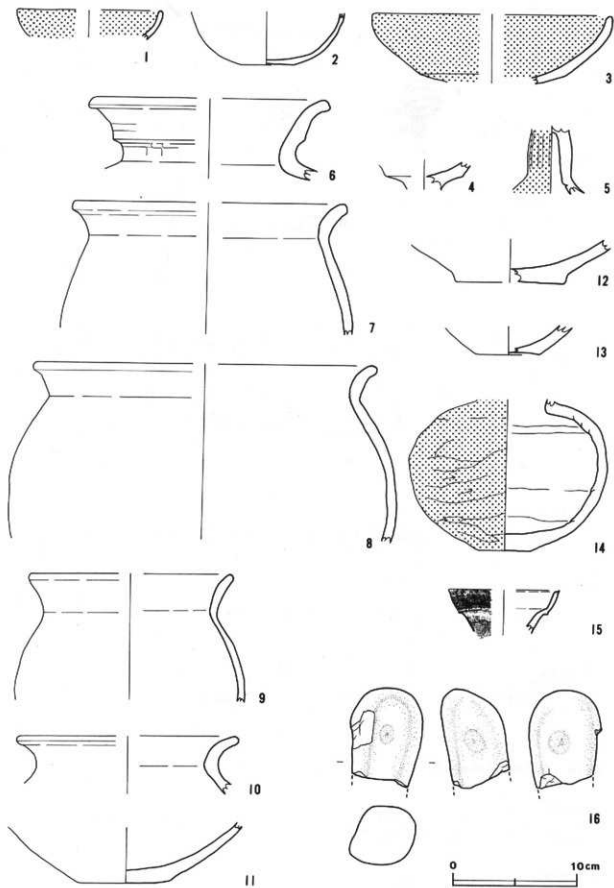
炉1土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子微量, 炭化粒子極微量
- 3 赤褐色 焼土小ブロック中量, 焼土粒子少量

- 4 暗褐色 焼土小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

炉2土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・ローム粒子・砂少量



第28图 第12号住居跡出土遺物実測図

覆土 6層から成る。壁際にはロームブロック、ローム粒子を含む暗褐色土が堆積し、下層から上層にかけて広く攪乱を受けている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、焼土粒子極微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、焼土粒子極微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子・炭化粒子極微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、焼土粒子極微量 | 6 褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |

遺物 覆土上層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第28図1の坏は覆土中から、2の坏は西コーナー付近の覆土上層から出土している。3～5の高坏は、3、4が東寄りの床面直上から、5が南西壁際の覆土中層から出土している。6～13の甕は、6が南東壁寄りの覆土下層から斜位の状態で出土している以外は全て覆土中から出土している。14の埴は南東壁際の床面直上から正位の状態、15の須恵器は北西寄りの覆土下層から出土している。その他、16の凹石は南東寄りの床面直上から出土したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	坏 土師器	A [11.6] B (2.3)	体部上位から口縁部の破片、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英赤褐色 普通	P111 5% 覆土中
2	坏 土師器	B (4.2) C 4.5	底部から体部下位までの破片。上げ底。体部は内湾しながら立ち上がる。	底部及び体部外面へラ削り後ナデ。内面へラ磨き。	砂粒・長石 褐色 普通	P112 25% 西コーナー付近 覆土上層 内・外面刺離
3	高 土師器	A [19.5] B (5.5)	坏部の破片。脚部との境に削い後を持ち、内湾しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P113 10% 東寄り床面直上
4	高 土師器	B (2.1)	坏部の破片。脚部との境に強い稜を持つ。	坏部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P114 5% 東寄り床面直上
5	高 土師器	B (5.0)	脚部の破片。脚部は柱状を呈し、中央部に膨らみを持ち、下位で開く。	脚部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。内面輪痕み成。外面赤彩。	砂粒・石英 赤褐色 普通	P115 5% 南西壁際覆土中層
6	甕 土師器	A [14.5] B (5.8)	口縁部の破片。頸部と口縁部との境に強い稜を持ち、口縁部は外反する。	口縁部内・外面へラナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P103 15% PL13 南東壁寄り覆土 下層 内面刺離 内・外面保付着
7	甕 土師器	A [21.6] B (10.4)	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラ磨き、内面へラナデ。	砂粒・雲母 淡黄褐色 普通	P104 5% 覆土中 二次焼成
8	甕 土師器	A [27.6] B (14.1)	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P105 5% 覆土中 口縁部内・外面 保付着
9	甕 土師器	A [16.0] B (10.3)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P106 5% 覆土中 外面保付着
10	甕 土師器	A [17.8] B (3.9)	口縁部の破片。頸部はく、の字状に屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P107 5% 覆土中 外面保付着
11	甕 土師器	B (4.6) C 7.3	底部から体部下位の破片。平底。体部は内湾しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。底部難なへラ削り。	砂粒・長石・ ミリス にぶい褐色 普通	P108 20% 覆土中 内面下位刺離 底部内面保付着

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第28回 12	壺 土師器	B (2.9) C [8.8]	底部から体部下位の破片。やや突出した平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	P109 5% 覆土中 底部外面腐付着
13	壺 土師器	B (2.1) C [5.0]	底部から体部下位の破片。やや上げ意気味。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。底部外面へラ削り。	砂粒・長石・石灰 にぶい橙色 普通	P110 5% 覆土中
14	埴 土師器	B (12.0) C 4.2	口縁部欠損。平底。体部は球形状を呈する。	底部及び火部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。内面輪痕み痕。外面赤影。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P116 80% PL13 南東壁端床面直上
15	風 須臾器	A [9.0] B (3.4)	口縁部の破片。頸部と口縁部の境に強い稜を持ち、稜の下に12条の螺旋波状文を施す。口縁部は僅かに内彎しながら、外縁する。	巻き上げ、横ナデ成形。	砂粒 褐灰色 良好	P117 5% PL13 北西寄り覆土下層 内面自然釉

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第28回16	凹 石	(8.0)	5.9	4.8	(341.7)	50	安山岩	南東寄り床面直上	Q61

第13号住居跡 (第29回)

位置 調査区の中央部、W7c5区。

規模と平面形 長軸7.80m、短軸7.60mの方形。

主軸方向 N-50°-W

壁 壁高は31~44cmで、外傾して立ち上がる。壁の中層位から上層位にかけては、耕作による攪乱を受けているため一部しか残存していない。

壁溝 壁下を全周しており、上幅14~18cm、深さ4~8cmで、断面形はU字形である。

床 平坦で、中央から南コーナー付近にかけて踏み固められ堅緻である。各コーナー付近の床面は、火熱をうけ赤変硬化している。

ピット 5か所 (P1~P5)。P1~P5は長径28~35cm、短径22~28cmの楕円形で、深さは46~95cmである。各コーナー付近に付設されている。P3、P5は南コーナー付近に並んで付設されているが、P5は南西壁方向にやや傾斜して掘り込まれている。規模や配列・位置等からP1~P4が支柱穴、P5が補助柱穴と考えられる。

炉 中央から北西壁寄りに付設されている。長径116cm、短径72cmの楕円形で、床面を10cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱をうけ赤変硬化している。

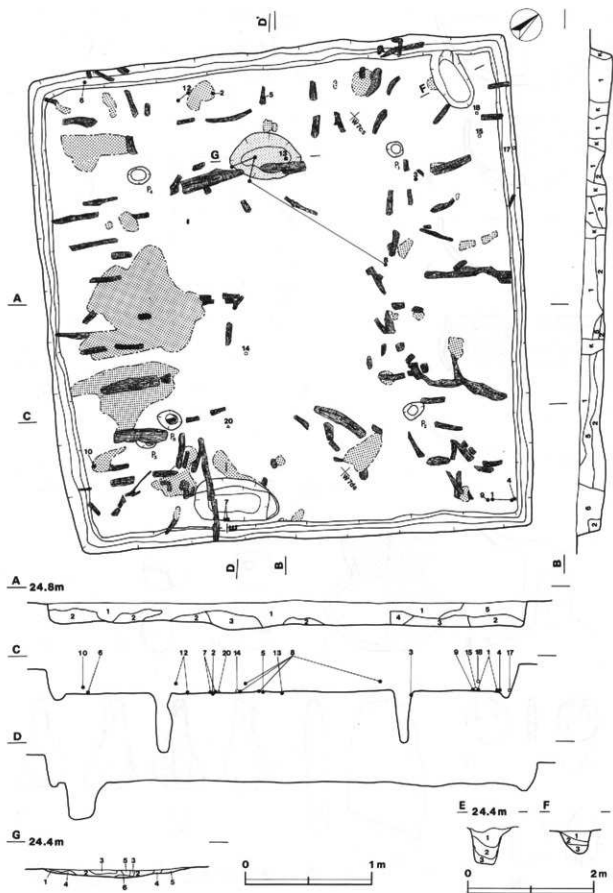
炉土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------|--------|------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土小ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | 焼土粒子微量、ローム粒子極微量 | 5 赤褐色 | 焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子・炭化物微量 | 6 暗褐色 | 焼土粒子多量、炭化物微量 |

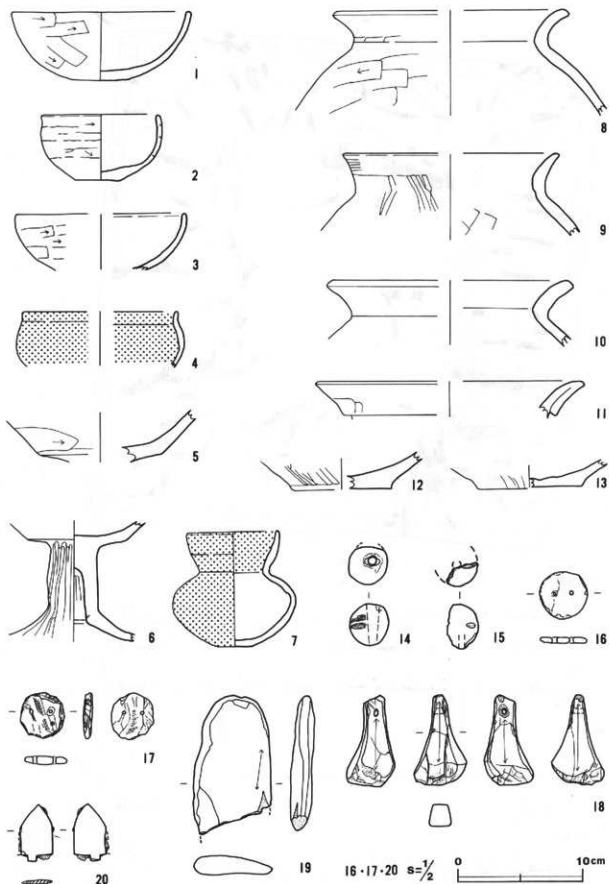
貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は中央から南コーナー寄りに付設されている。平面形は長径135cm、短径77cmの隅丸長方形で、深さは55cmあり、円筒状に掘り込まれ、底部は皿状である。貯蔵穴2は北西壁の北コーナー寄りに付設され、平面形は長径96cm、短径53cmの不整楕円形で、深さ57cmである。壁の一部を北西壁と共有するよう円筒状に掘り込まれ、底部は皿状である。

貯蔵穴1土層解説

- | | |
|-------|-----------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・炭化物粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子極微量 |



第29图 第13号住居跡実測图



第30图 第13号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴2土層解説

- 1 黒褐色 焼土大ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量、焼土粒子微量、締まり強
- 3 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子微量、粘性強

覆土 6層から成る。南西壁付近の床面一帯から焼土の広がりが見られ、南東壁寄り中央部からは5～6cmの粘土塊が出土している。人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子微量、炭化粒子微量、ローム中ブロック・ローム粒子少量、締まり強
- 3 黒褐色 焼土粒子微量、炭化粒子中量、ロームブロック微量、ローム粒子微量、締まり強
- 4 黒褐色 炭化材多量、炭化粒子中量、ローム粒子微量、締まり強
- 5 褐色 炭化粒子微量、ローム粒子中量、締まり強
- 6 灰褐色 炭化粒子・ローム小ブロック微量、ローム粒子少量、粘土粒子中量、粘性強

遺物 床面全体に広がる炭化材の下位から土師器片が中量出土している。第30図1～4の坏は、1が東コーナー付近の床面直上から、2が北西壁際の床面直上から横位の状態で出土し、3は北東寄りの床面直上から、4は東コーナー付近の床面直上から出土している。5、6の高坏は北西寄りの床面直上と西コーナーの床面直上から出土している。7の埴は南東寄りの床面直上から正位の状態で出土したものである。8～13の甕は、8が中央付近の覆土下層から床面直上へかけ出土し、9は東コーナー付近の床面直上から正位の状態で、10は南コーナー寄りの覆土下層から、11が覆土中から、12が北西壁寄りの覆土下層及び床面直上から、13が伊内覆土下層から出土している。その他、16の双孔円板が覆土中から、17の双孔円板が北コーナーの覆土下層から、18の磁石が北寄りの覆土下層から、19の磁石が覆土中から出土している。また、14、15の土玉が中央寄りと北寄りの床面直上から出土し、20の鉄鏝も南寄りの床面直上から出土している。

所見 本跡は、覆土の地積状況とみると床面上に焼土塊、炭化材が見られ、住居が廃棄された後に焼失し、その後埋め戻されたものと思われる。出土遺物等から、特殊な建物跡と考えられる部分もあり、また、祭祀行為とも関連づけて考えられる住居跡でもある。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第30図 1	坏 土 師 器	A 14.4	体部中位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面へラ削り後へラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にふい橙色 普通	P124 90% PL13 東コーナー付近 床面直上 体部内面刺離
		B 5.8				
		C 4.3				
2	坏 土 師 器	A 19.5	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内彎ぎ状に直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。体部外面輪轆み状。	砂粒・長石・石英 にふい貴褐色 普通	P125 95% PL13 北西壁際床面直上 内面下位刺離
		B 5.4				
		C 3.6				
3	坏 土 師 器	A [13.8]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石 灰黄褐色 普通	P126 10% 北東寄り床面直上 口縁部外面刺離
		B (4.5)				
4	坏 土 師 器	A [12.7]	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内彎に横を持ち内割ぎ状で、直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P127 10% 東コーナー付近 床面直上
		B (4.5)				
5	高 坏 土 師 器	B (3.8)	坏部の破片。坏部は胴部との境に横を持ち外反する。	坏部外面へラ削り後ナデ、内面へラ磨き。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P128 20% 北西寄り床面直上
		B (3.8)				
6	高 坏 土 師 器	B (9.5)	胴部から坏部下位の破片。胴部は柱状を呈し、下位で開く。坏部は胴部との境に弱い横を持ち、外傾して立ち上がる。	坏部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。胴部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・石英 にふい橙色 普通	P129 30% 西コーナー床面直上
		E (7.3)				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第30図 7	世 土師器	A 7.5	体部中位一部欠損。体部は扁平な 球形を見し、頸部は「く」の字状 に屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り後ナデ、内面ヘラナデ。 体部外面及び口縁部内面赤彩。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P130 80% PL13 南東寄り床面直上
		B 9.2				
		C 2.8				
8	斐 土師器	A [19.0]	体部上位から口縁部の破片。体部 は球形状を呈し、口縁部は外反す る。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面 ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナ デ、外面横ナデ。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P118 15% 中央付近覆土下 部
		B (8.0)				
9	斐 土師器	A [17.4]	体部上位から口縁部の破片。体部 は内彎しながら立ち上がり、口縁 部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面 ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナ デ、内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P119 5% 東コーナー付近 床面直上
		B (6.3)				
10	斐 土師器	A [19.9]	体部上位から口縁部の破片。体部 は内彎しながら立ち上がる。頸部 は「く」の字状に屈曲し、口縁部 は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面 ヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナ デ、内面ナデ。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P120 5% 南コーナー寄り 覆土下層 外部保付着
		B (4.8)				
11	斐 土師器	A [21.7]	口縁部の破片。口縁部は皿状に開 き、口縁端部で折り返し複合口縁 となる。	口縁部外面ヘラ削り後ナデ、内面 横ナデ。	砂粒・長石 にふい黄褐色 普通	P121 5% 覆土中
		B (2.9)				
12	斐 土師器	B (2.3)	底部から体部下位の破片。平底。 体部は内彎しながら立ち上がる。	底部及び体部外面種なヘラ削り、 内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にふい褐色 普通	P122 5% 北西壁寄り覆土 下層
		C [8.0]				
13	斐 土師器	B (1.8)	底部から体部下位の破片。体部は 内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内 面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 灰白色 普通	P123 5% 炉内覆土下層
		C [8.4]				

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径				
第30図14	土 玉	3.4	3.1	—	0.7	26.2	100	中央寄り床面直上	DP3
		15	土 玉	(3.5)	(2.4)	—	(0.6)	(11.4)	30

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第30図16	双孔円板	2.5	2.5	0.3	0.2	3.1	100	滑石	覆土中	Q52 PL19
17	双孔円板	2.4	2.3	0.4	0.15	4.2	100	片岩	北コーナー覆土下層	Q53 PL19
18	砥 石	(7.3)	3.9	1.8	0.35	(71.8)	50	頁岩	北寄り覆土下層	Q54 PL19
19	砥 石	(11.0)	6.3	1.6	—	(168.9)	60	片岩	覆土中	Q56

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)			重量(g)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚			
第30図20	鉄 鏃	(3.0)	(1.8)	0.3	(2.8)	南寄り床面直上	M1

第15号住居跡 (第31図)

位置 調査区の中央部やや東側、V8j1区。

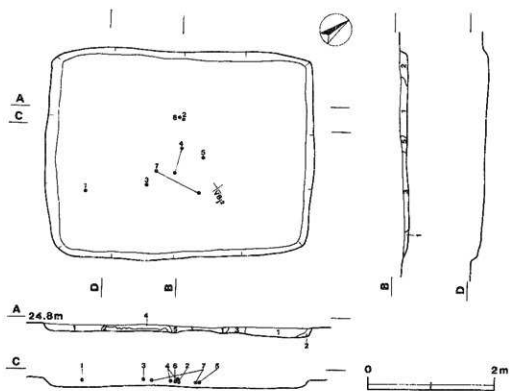
規模と平面形 長軸4.25m、短軸3.27mの長方形。

主軸方向 N-38°-E

壁 北西壁は耕作による擾乱によって殆ど残存せず、一部が遺存するのみである。壁高は5~12cmで、緩やかに外傾する。

床 平坦であるが、踏み固められた締まりはみられない。

覆土 5層から成る。覆土中層に焼土と炭化材がみられ、覆土下層から上層にかけて褐色土が厚く堆積している。

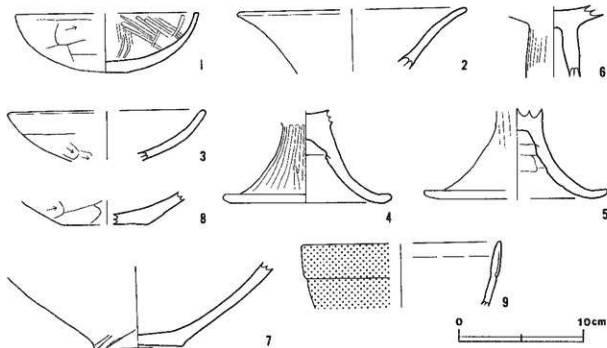


第31図 第15号住居跡実測図

土層解説

- 1 暗褐色 炭化材・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子 少量
 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
 3 暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量
 4 黒褐色 炭化材中量、炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 5 暗褐色 炭化材・炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物 中央付近の覆土中層から集中して出土している。第32図1の坏は南寄りの覆土中層から、2～6の高坏は、中央付近の覆土中層から集中して出土している。7の甕は中央付近の覆土中層から、8の甕と9の甌は



第32図 第15号住居跡出土遺物実測図

覆土中から出土したものである。

所見 本跡からは、内部施設が確認されず、床面の硬化面もみられないが、遺構の確認状況及び出土物から住居跡として捉えた。時期は、出土物から5世紀後半と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	坏土師器	A [14.4] B 4.8	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面へラ磨き。	砂粒・バミスにぶい橙色 普通	P134 50% 南寄り覆土中層 口縁部摩耗
2	高坏土師器	A [18.4] B (5.0)	坏部の破片。坏部は外傾して立ち上がる。	坏部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石にぶい橙色 普通	P135 15% PL14 中央付近覆土中層
3	高坏土師器	A [15.8] H (4.0)	坏部の破片。坏部は外傾して立ち上がる。	坏部外面へラ削り後ナデ、内面へラ磨き。	砂粒・長石にぶい橙色 普通	P136 15% PL14 中央付近覆土中層 内面剝離
4	高坏土師器	B 7.4 E 6.2	脚部の破片。脚部はラップ状に下方に開く。	脚部外面へラ削り後へラナデ、内面ナデ。脚部内面輪襷み痕。	砂粒・石英・雲母にぶい橙色 普通	P137 25% 中央付近覆土中層
5	高坏土師器	D [14.8] E (7.2)	脚部の破片。脚部上位は柱状を呈し、下位はラップ状に下方に開く。	脚部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	砂粒・バミスにぶい橙色 普通	P138 30% 中央付近覆土中層
6	高坏土師器	B (5.1) E (4.1)	脚部の破片。脚部は柱状を呈し、中位にやや内が見られる。	脚部外面へラ削り後ナデ。	砂粒・石英にぶい橙色 普通	P139 15% 中央付近覆土中層
7	壺土師器	B (6.0) C 7.1	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	砂粒・長石・バミスにぶい橙色 普通	P132 10% 中央付近覆土中層
8	壺土師器	B 2.0 C [6.6]	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・バミスにぶい橙色 普通	P133 10% 覆土中 底部内面煤付層
9	瓶土師器	A [15.8] B (5.2)	体部上位から口縁部の破片。口縁部は複合口縁で、僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ、内面へラ磨き。体部外面赤彩。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P140 5% 覆土中

第16号住居跡 (第33図)

位置 調査区の北東部北側、V8a区。

規模と平面形 長軸6.78m、短軸6.48mの方形。

主軸方向 N-42°-W

壁 極めて緩やかな北下がりの斜面部に位置し、耕作土が比較的厚く堆積しているため残存状況が良好である。

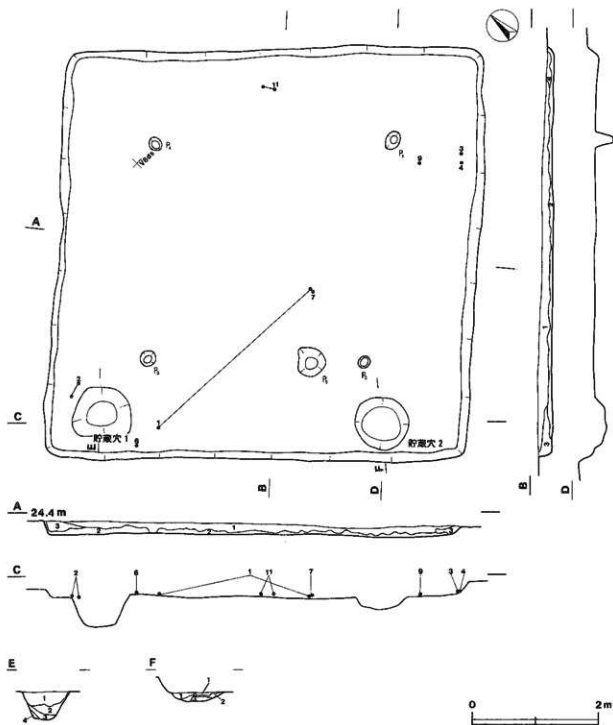
壁高は8~22cmで、緩やかに外傾している。

床 平坦であるが、踏み固められた硬化部分は確認できなかった。床面上は中央部から南部にかけ滲み状の黒色土が点在する。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₅は長径20~50cm、短径19~47cmの不整形円形で、深さは23~35cmである。

P₁~P₄は各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅はP₃の西側にあり、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は西コーナー付近に付設され、平面形は長径94cm、短径76cmの不整形円形で、深さ45cmである。覆土中層から炭化材が出土している。断面はU字形で、底部は皿状である。貯蔵穴2は南コーナーから南西壁沿い西寄りに付設され、径95cmの円形で、断面は楕円状である。



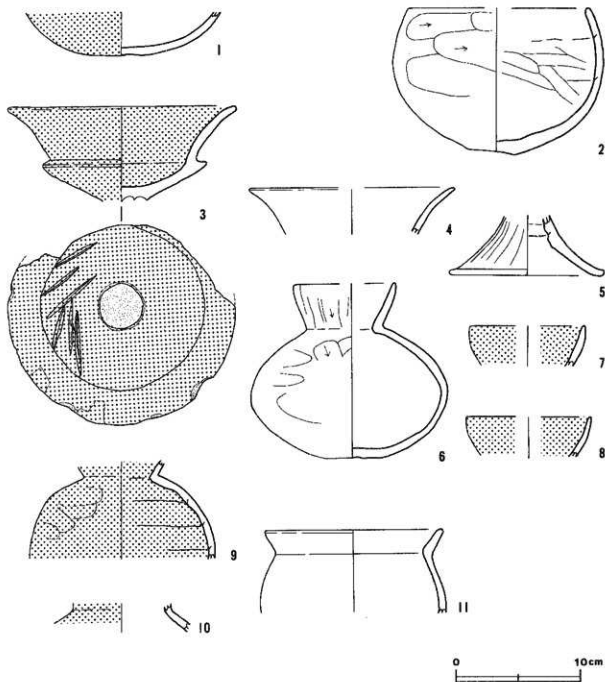
第33図 第18号住居跡実測図

貯蔵穴 1 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 炭化材少量, ローム小ブロック微量
- 4 褐色 炭化材中量, 炭化粒子・ローム粒子微量

貯蔵穴 2 土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 橙褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 ぶいれ褐色 ローム粒子微量, ローム小ブロック極微量



第34図 第16号住居跡出土遺物実測図

覆土 4層から成る。壁際には暗褐色土が堆積し、覆土下層には褐色土、中層から上層にかけて黒褐色土がレンズ状を呈している。自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量、焼土粒子極微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭土粒子・炭化粒子微量

遺物 覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第34図1の環は中央付近の覆土下層及び南寄りの床面直上から出土している坏片が接合したものである。2の鉢は南コーナー付近の床面直上から横位の状態出土している。3～5の高坏は、3が南東壁際の床面直上から正位の状態で4の高坏と接して、5

は覆土中から出土している。6～10の埴は、6が南西壁寄りの床面直上から逆位の状態で、7が中央付近から、9が東寄りの床面直上から、8、10は覆土中から出土している。11の甕は北東壁寄りの覆土下層から横位の状態で出土している。

所見 本跡は、炉を伴わないが、遺構の確認状況及び出土遺物から住居跡と考えられる。出土遺物の中に供獻土器が多量にみられることから、祭祀行為との関係が推測される。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	坏土師器	B (3.5)	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。底部へラ削り後ナデ。外面赤彩。	砂粒・バミス褐色 普通	P142 30% 中央付近覆土下層から床面直上
		C 4.2				
2	鉢土師器	A [14.6]	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	砂粒・長石にふい赤褐色 普通	P146 60% 南コーナー付近床面直上 二次焼成
		B 12.0				
		C 3.9				
3	高坏土師器	A 18.0	坏部の破片。坏部は皿状に開いた後段をつくり、その後外反する。	坏部外面へラ削り後へラ磨き、内面へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	P143 40% PL14 南東壁際床面直上 坏部下位研磨痕
		B (7.5)				
4	高坏土師器	A [16.2]	坏部の破片。坏部は外反する。	坏部外面へラ削り後へラ磨き、内面へラ磨き。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P144 5% 南東壁際床面直上 内・外面煤付着
		B (3.7)				
5	高坏土師器	D 12.5	脚部下位の破片。脚部は「ハ」の字状に下方に開く。	脚部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。脚部内面輪模み痕。	砂粒・長石・石英にふい褐色 普通	P145 25% 覆土中
		E (4.8)				
6	埴土師器	A 8.0	体部下位及び口縁部の破片。平底。体部は潰れた球形状を呈し、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部外面へラナデ、内面へラ磨き。体部外面へラ削り後ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	P147 75% 南西壁寄り床面直上 底部外面研磨痕
		B 14.1				
7	埴土師器	A [9.2]	口縁部の破片。口縁部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 褐色 普通	P148 5% 中央付近床面直上
		B (3.2)				
8	埴土師器	A [9.8]	口縁部の破片。口縁部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・バミスにふい褐色 普通	P149 5% 覆土中
		B (3.2)				
9	埴土師器	B (7.6)	体部中位から口縁部下位の破片。体部は球形状を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後丁寧なナデ。内・外面赤彩。体部内面輪模み痕。	砂粒・石英・雲母 赤褐色 普通	P150 20% 東寄り床面直上
10	埴土師器	B (1.7)	体部上位の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外彎する。	体部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。外面赤彩。	砂粒・長石にふい赤褐色 普通	P151 5% 覆土中
11	甕土師器	A 14.1	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラナデ。	砂粒・スコリア・石英・雲母 褐色 普通	P141 15% 北東壁寄り覆土下層
		B (6.6)				

第20号住居跡 (第35図)

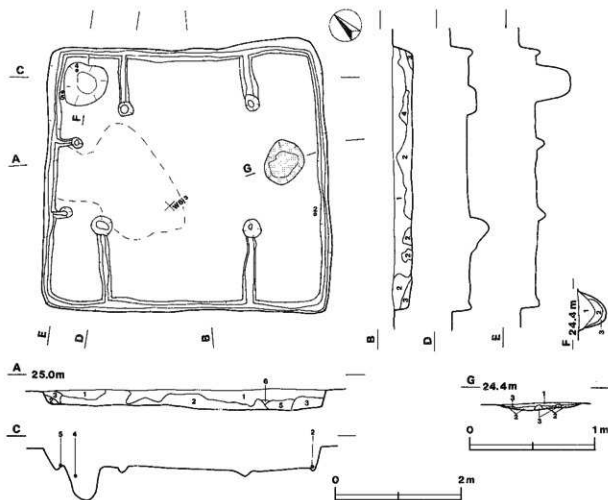
位置 調査区の東部中央付近、W8a区。

規模と平面形 長軸4.49m、短軸4.16mの方形。

主軸方向 N-45°-W

壁 北西壁の中央付近が耕作による擾乱を受けている以外は残存状況は良好である。壁高は19～40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 壁下を全周している。上幅10～15cm、深さ5～9cmで、断面形はU字形である。



第35図 第20号住居跡実測図

間仕切り溝 北東壁から2条、南西壁から2条、北西壁から2条それぞれ中央に向かって伸びている。南西壁からの2条については、入口ピットあるいはその施設に関係するものと思われる。

床 平坦であるが、全体に極めて緩く西側に傾いている。中央付近から北西壁付近にかけては踏み固められ堅緻である。

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁~P₄は長径24~35cm、短径20~32cmの楕円形または不整楕円形で、深さは5~10cmである。各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅、P₆は長径20cm、短径15~20cmで、規模や位置から出入口に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 北コーナー付近に付設され、平面形は長径77cm、短径64cmの不整楕円形で、深さは45cmである。断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説

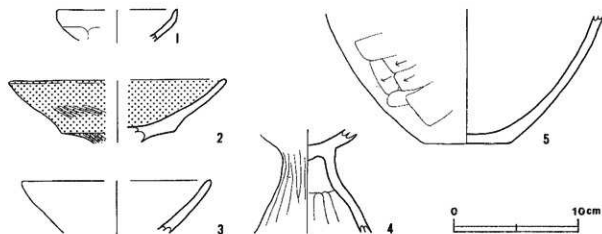
- | | | | |
|-------|--------------------|------|--------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 | 3 褐色 | 焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | | |

炉 南東壁の中央部壁際に付設され、長径72cm、短径58cmの楕円形で、床面を約10cm掘り窪めた地床炉である。

炉床は火熱を受けているが、やや赤変した程度である。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|------|------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子少量、焼土小ブロック微量 | 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化物微量 | | |



第36図 第20号住居跡出土遺物実測図

覆土 6層から成る。覆土下層から上層にかけて焼土粒子を含む黒褐色土が厚く堆積し、壁際には壁の崩れによるものと考えられるロームブロック、ローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム中ブロック少量、焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック少量、焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子極微量 |

遺物 覆土中及び床面直上から土器器片が少量出土している。第36図1, 3の環と高環は覆土中から、2の高環は南東壁の壁溝覆土上面から出土し、4の高環は貯蔵穴内覆土上層から、5の壺は北コーナー付近の床面直上から横位の状態で出土している。

所見 本跡は、西側へ入口ピットと考えられる施設を付設しており、他の住居跡とは方角的に大きく異なる。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	環 土器器	A [9.6] B 2.4	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・石英にふい褐色 普通	P157 5% 覆土中
2	高 土器器	A [17.5] B (5.0)	環部の破片。環部は脚部との境に強い稜を持ち、外傾して黒く。	環部外面へう削り後へう磨き、内面へう磨き。内・外面赤彩。	砂粒・雲母にふい褐色 普通	P158 25% PL14 南東壁溝覆土上面 外面僅付着
3	高 土器器	A [15.2] B (4.0)	環部の破片。環部は外傾して開く。	口縁部内・外面横ナデ。環部外面へう削り後へう磨き、内面へう磨き。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	P159 5% 覆土中
4	高 土器器	B (6.2) E (5.1)	脚部の破片。脚部は下方に開く。	脚部外面へう削り後ナデ、内面縦なへうナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P160 20% 貯蔵穴内覆土上層
5	壺 土器器	B (10.4) C 6.8	底部から体部中位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へう削り後ナデ、内面へうナデ。底部縦なへう削り後ナデ。	砂粒・長石・石英にふい褐色 普通	P156 20% PL14 北コーナー付近 床面直上

第21号住居跡（第37図）

位置 調査区の東部中央付近，W84区。

規模と平面形 長軸5.44m，短軸5.29mの方形。

主軸方向 N-36°-E

壁 壁高は25～40cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 壁下を全周している。上幅7～20cm，深さ8～12cmで，断面形はU字形である。

間仕切り溝 北東壁から2条，南東壁から1条，南西壁から2条それぞれ中央に向かって伸びている。

床 ほほ平坦で，よく踏み固められ，全体に火熱を受け赤変硬化している部分が広がりに堅緻である。中央付近から南東壁寄りに径115cmの円形状の覆乱を受けている。

ピット 6か所（P₁～P₆）。P₁～P₄は長径28～34cm，短径20～25cmの楕円形または不整形楕円で，深さは56～75cmである。それぞれ各コーナー付近に付設され，P₄は壁側にやや傾くように掘り込まれている。規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅，P₆は径24～27cmの円形で，深さ12cmで浅くU字状に掘りこまれている。規模や位置から，双方とも出入口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され，平面形は長径77cm，短径55cmの不整形楕円で，深さは68cmである。断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック多量，ローム粒子微量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック中量，焼土粒子少量

炉 2か所。炉1は中央から北西寄りに付設され，長径118cm，短径100cmで，床面を約6cm掘り窪めた不定形の地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉2は中央から北東寄りに付設され，長径80cm，短径20cmで，床面を約5cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉1土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック多量，焼土粒子少量

炉2土層解説

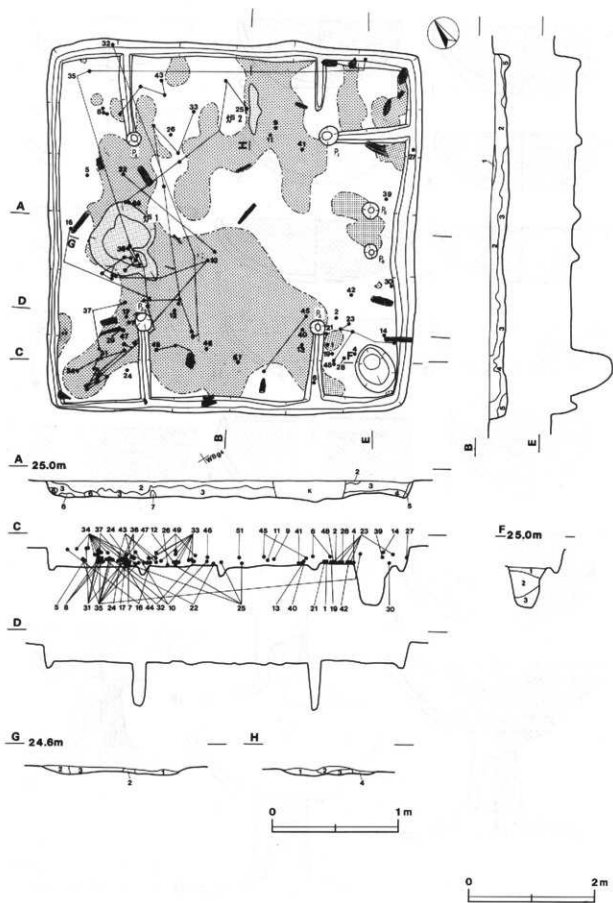
- | | | | |
|--------|--------------------------------|------|-----------------------------|
| 1 褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 3 褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土小ブロック多量，焼土粒子少量 | 4 褐色 | ローム小ブロック中量，焼土中ブロック少量，炭化粒子微量 |

覆土 7層から成る。床面上からは広い範囲で火熱を受けて赤変硬化した焼土塊が確認され，東コーナー付近からは炭化材が出土している。第6層は覆土下位から上位にかけて焼土粒子を含む黒褐色土が厚く堆積し，壁際には炭化物を中量含む暗赤褐色土が堆積している。中央部から西側の覆土中からは投棄された状態で多量の土師器が出土している。人為堆積と思われる。

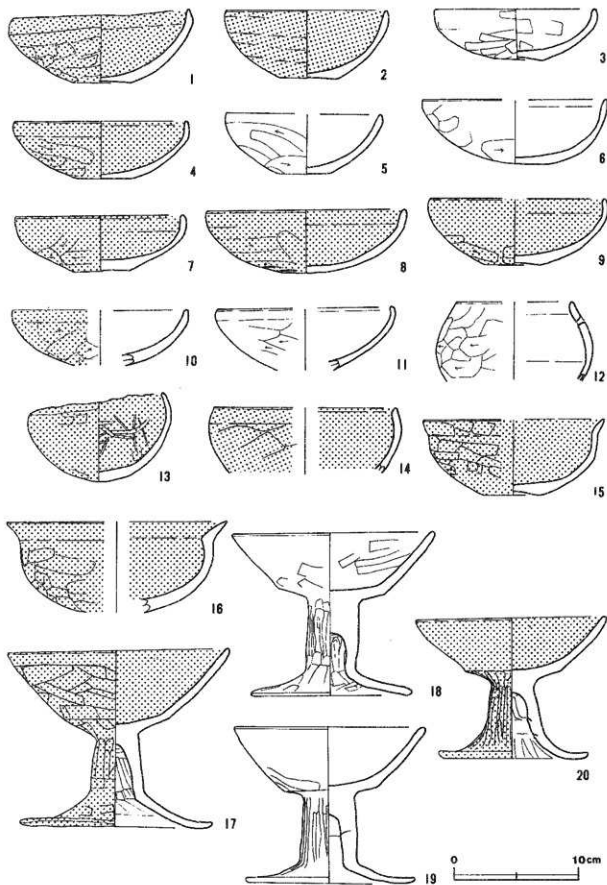
土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------------|--------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・ローム小ブロック微量 | 5 暗赤褐色 | 炭化物中量，ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量 | 6 黒褐色 | 炭化物中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック少量，焼土粒子微量 | 7 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 4 におい赤褐色 | ローム粒子・炭化物少量，ローム小ブロック微量 | | |

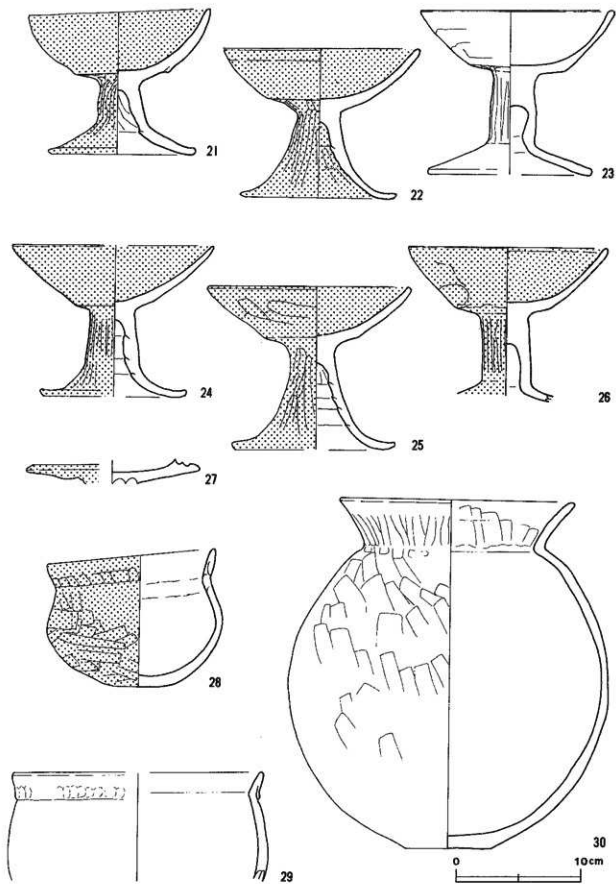
遺物 中央付近を除いた覆土上層から床面直上にかけて多量に土師器が出土している。第38・39・40・41・42図1～11の環は，1，2，4が南寄りの床面直上から逆位で，5が北西寄りの覆土中層から正位の状態，6が南寄りの覆土中層から，7と8は，西コーナー付近と北コーナー付近の床面直上から，9，11が東寄り



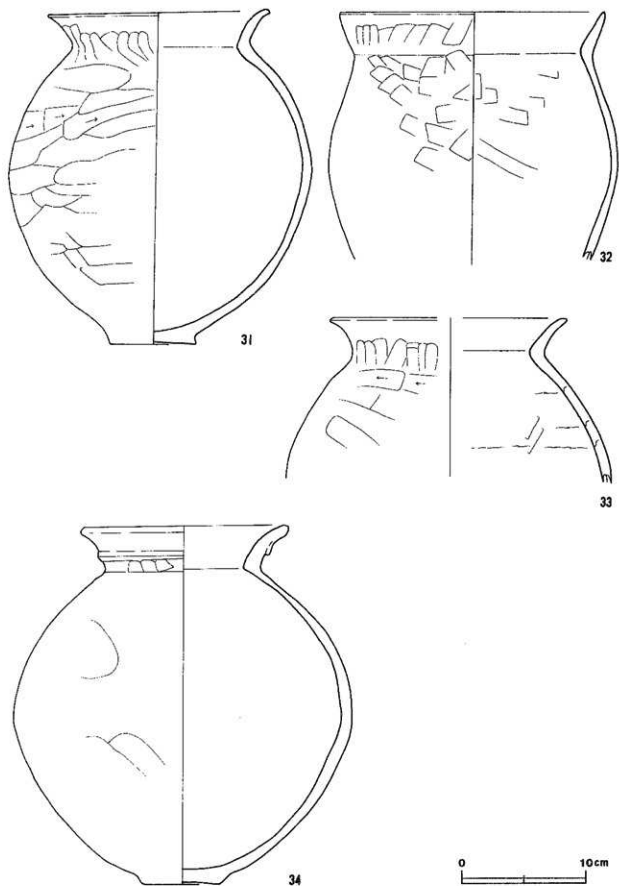
第37图 第21号住居跡実測图



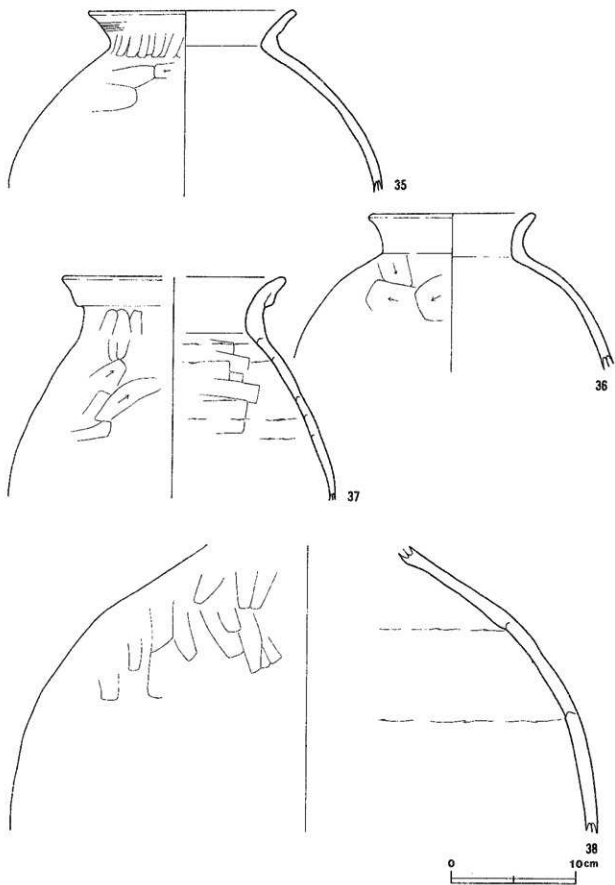
第38图 第21号住居跡出土遺物実測図(1)



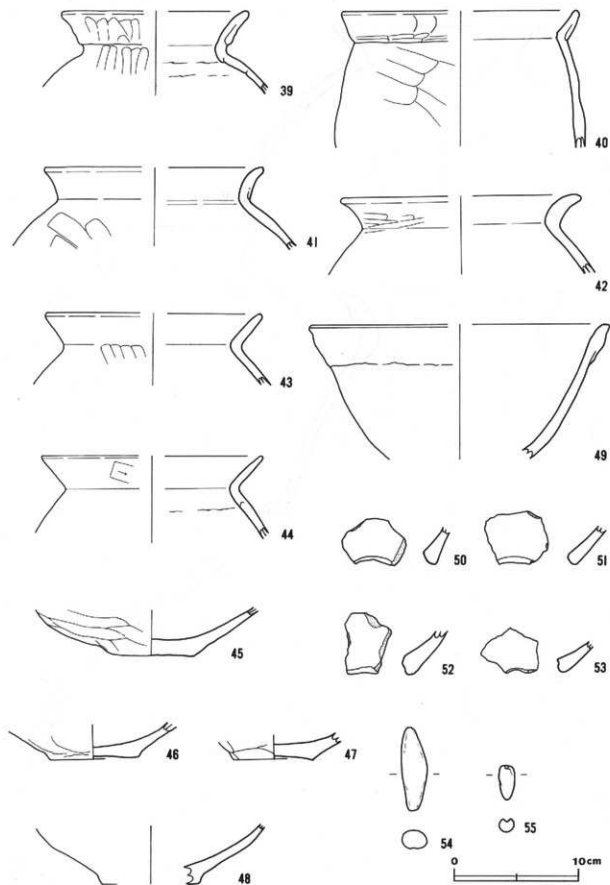
第39图 第21号住居跡出土遺物実測図(2)



第40図 第21号住居跡出土遺物実測図(3)



第41图 第21号住居跡出土遺物実測図(4)



第42图 第21号住居跡出土遺物実測図(5)

の覆土下層から、10が中央付近の覆土下層及び西寄りの覆土中層から出土している坏片と接合したものである。12~14の椀は、12が西寄りの覆土下層から、13、14が南寄りの覆土下層から逆位の状態では出土している。17~27の高坏は、17、24が西寄りの覆土下層から正位の状態では、19、21、23が南寄りの床面直上から、19が逆位、21が正位、23は脚部と坏部が接合し、27が南東壁際の覆土中層から出土している。28~48の甕は、39、41が東寄りの覆土下層及び床面直上から横位の状態では、31、34、37、46、47が西寄りの覆土下層及び床面直上から、28、30、40、45、48が南寄りの覆土下層及び床面直上から、32が北東壁際の覆土中層から逆位の状態では出土している。35は北寄りの覆土中層から出土している。35は北寄りの覆土中層から出土している。49~53の甕は、49、51が西寄りの覆土下層から出土している。3、15、16、18、20、22、25、26、29、33、38、50、52、53はいずれも覆土中より出土したもので、その他、54の土玉、55の不明土製品が覆土中から出土している。

所見 本跡は、覆土上層から床面直上にかけ、遺物が多量に重なり合って出土している住居跡である。床面が火熱を受け、赤変硬化し炭化材も出土している状況から考えると、住居焼失後、遺物を投棄したと思われる。また、出土遺物に占める供献土器の割合と、赤彩されている遺物の割合が高く、祭祀行為との関係が考えられる。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図	土師器	A 14.0 B 4.9	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に鋭い稜を持つ。口縁部は内削が状で直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P184 100% PL14 南寄り床面直上
2	土師器	A 12.8	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩。体部外面輪襷有り。	砂粒・長石・石英 黄褐色 普通	P185 100% PL14 南寄り床面直上 内面輪襷
		B 5.6				
		C 4.5				
3	土師器	A 13.2	上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ。内面ナデ。底部へラ削り後ナデ。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P186 100% PL14 覆土中
		B 4.3				
		C 4.0				
4	土師器	A 13.6	体部中位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。底部へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P187 70% PL14 南寄り床面直上 内面輪襷 二次焼成
		B 4.6				
		C 4.6				
5	土師器	A [12.0]	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面へラ磨き。底部へラ削り後ナデ。	砂粒 スコリア にぶい褐色 普通	P188 60% PL14 北西寄り覆土中層 二次焼成
		B 4.8				
		C 4.8				
6	土師器	A [14.7]	体部及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ヘラ磨き、内面へラ磨き。底部へラ削り。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P189 65% PL14 南寄り覆土中層
		B 5.2				
		C 5.7				
7	土師器	A 13.6	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ヘラナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P190 70% PL15 南寄り床面直上 二次焼成
		B 4.5				
		C 4.5				
8	土師器	A 16.1	体部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P192 50% PL14 コナテ付瓦葺土層 内面輪襷
		B 5.1				
9	土師器	A [14.3]	底部から口縁部の破片。上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P194 50% PL15 東寄り覆土下層 内面輪襷
		B 5.4				
		C 4.2				
10	土師器	A 14.2	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラナデ。外面赤彩。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	P195 40% 中央付近覆土下層 体部外面輪襷付
		B (4.5)				
11	土師器	A [14.2]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ。内面ナデ。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	P196 20% 東寄り覆土下層 二次焼成
		B (5.0)				

図版番号	器 種	計測例(cm)	型 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第38図 12	椀 土師器	A [9.1]	体部中位から口縁部の破片, 体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は肩部の内形ぎたにほぼ直立する。	口縁部内面横ナデ, 外面へう削り後ナデ, 体部外面へう削り後ナデ, 内面へうナデ。	砂粒・長石・石英・バミス 内面へう赤褐色 普通	P163 20% 西寄り覆土下層 内面直上穿孔
		B (6.4)				
13	椀 土師器	A 10.8	丸底, 体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面へう削り後ナデ, 内面へう磨き, 内・外面赤彩。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P183 100% PL14 南寄り覆土下層 内面割離 二次焼成
		B 7.1				
		C 1.4				
14	椀 土師器	A [14.8]	体部中位から口縁部の破片, 体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は強めに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面へう削り後ナデ, 内面へう磨き, 普通	砂粒 にぶい褐色 普通	P197 20% 南寄り覆土下層
		B (5.1)				
15	鉢 土師器	A 14.6	体部及び口縁部一部欠損, 上げ底, 体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 体部へう削り, 内・外面赤彩。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	P191 60% 覆土中
		B 6.1				
		C 4.6				
16	鉢 土師器	A [17.6]	体部下位から口縁部の破片, 体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面へう削り後ヘラナデ, 内面ナデ, 内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア ・雲母 褐色 普通	P193 40% PL14 覆土中 著しい内面割離
		B (7.3)				
17	高 坏 土師器	A 17.9	坏部一部欠損, 脚部はほぼ柱状を呈し, 肩部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち, 外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ, 坏部外面へう削り後ナデ, 内面丁車ナデ, 脚部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 脚部内面を除く内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア 褐色 普通	P198 95% PL14 西寄り覆土下層
		B 14.5				
		D 15.4				
		E 7.6				
18	高 坏 土師器	A 16.3	脚部一部欠損, 脚部は柱状を呈し, 下位で大きく開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち, 内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ, 坏部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 脚部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P199 95% PL15 覆土中 脚部外面指張成 二次焼成
		B 13.1				
		D 13.0				
		E 7.8				
19	高 坏 土師器	A 15.3	脚部は柱状を呈し, 下位で大きく開き, 肩部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち, 内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ, 坏部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 脚部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄褐色 普通	P200 100% PL15 南寄り床面直上 二次焼成
		B 12.6				
		D 13.6				
		E 7.0				
20	高 坏 土師器	A 13.1	脚部は下位で大きく開き, 肩部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち, 内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ, 坏部外面へう削り後ナデ, 脚部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 脚部内面輪襷のみ, 脚部内面を除く内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P201 100% PL15 覆土中 坏部内面著しい 割離
		B 11.5				
		D 11.2				
		E 6.3				
第39図 21	高 坏 土師器	A 14.6	脚部一部欠損, 脚部は下位で大きく開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち, 内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ, 坏部外面へう削り後ナデ, 脚部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 脚部内面を除いた内・外面赤彩。	砂粒・雲母 褐色 普通	P202 95% 南寄り床面直上 坏部内面著しい 割離
		B 11.7				
		D 11.8				
		E 5.5				
		F 5.5				
22	高 坏 土師器	A 15.8	脚部一部欠損, 脚部はラッパ状に開き, 肩部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち, 内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ, 坏部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 脚部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 脚部内面輪襷のみ, 内・外面赤彩。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P203 90% 覆土中 二次焼成
		B 12.1				
		D 12.5				
		E 6.9				
		F 6.9				
23	高 坏 土師器	A 15.4	脚部及び坏部一部欠損, 脚部はほぼ柱状を呈し, 中位にやや膨らみを持ち, 下位で大きく開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち, 内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ, 坏部外面へう削り後ナデ, 内面へう磨き, 脚部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	P204 85% PL15 南寄り床面直上 二次焼成
		B 13.3				
		D [13.0]				
		E 8.0				
24	高 坏 土師器	A [16.1]	脚部及び坏部一部欠損, 脚部はほぼ柱状を呈し, 下位で大きく開き, 肩部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち, 内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ, 坏部外面へう削り後ヘラナデ, 内面へう磨き, 脚部外面へう削り後ヘラナデ, 内面ナデ, 脚部内面輪襷のみ, 脚部内面を除く赤彩。	砂粒 褐色 普通	P205 60% 西寄り覆土下層
		B 12.3				
		D [11.8]				
		E 7.3				
25	高 坏 土師器	A 16.3	脚部及び坏部一部欠損, 脚部はラッパ状に開き, 肩部は反る。坏部は脚部との境に強い稜を持ち, 内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ, 坏部外面へう削り後ヘラナデ, 内面ナデ, 脚部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 脚部内面輪襷のみ, 脚部内面を除く赤彩。	砂粒・バミス にぶい黄褐色 普通	P206 60% 覆土中
		B 13.1				
		D [13.0]				
		E 8.1				
26	高 坏 土師器	A 15.8	脚部一部欠損, 脚部は柱状を呈し, 下位で開く。坏部は脚部との境に強い稜を持ち, 内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ, 坏部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 脚部外面へう削り後ナデ, 内面ナデ, 脚部内面を除く赤彩。	砂粒・長石・バミス・雲母 にぶい褐色 普通	P207 60% 覆土中 坏部内面割離
		B [12.0]				

図版番号	窯 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第39図	高 坏 土 師 器	B (1.9)	坏部の破片。坏部は下半で段を持ち、外反する。	坏部外面ヘラナデ。外面赤彩。	砂粒・石灰・バミス にふいじ色 普通	P208 10% 奈良東路遺土中層 坏部内面削磨
	壺 土 師 器	A 13.6 B 11.7 C 4.0	口縁部及び体部一部欠損。平底。体は内彎しながら立ち上がり、頸部は折れ、口縁部は端部で折り返し、複合口縁となり、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。底部はヘラ削り。外面赤彩。	砂粒・長石 褐色 普通	P161 95% PL15 群峰山遺土中層 内面削磨 体部外面保存着
28	壺 土 師 器	A [10.0] B 8.8	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部の端部で折り返し、複合口縁となり、体部内面に強い稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にふいじ色 普通	P162 10% 覆土中 口縁部外面指痕 痕
	壺 土 師 器	A 18.5 B 28.3 C 6.8	平底。体部は球形状を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面ヘラ削り後横ナデ。頸部内・外面ヘラ削り後ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。武器様なヘラ削り。	砂粒・長石・石英・ スコリア にふいじ色 普通	P164 100% PL15 群峰山遺土中層 体部外面保存着 著しい内面削磨
第40図	壺 土 師 器	A 17.9 B 27.0 C 7.0	底部から口縁部の破片。突出した平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・バミス・雲母 にふいじ色 普通	P165 50% PL15 群峰山遺土中層 二次焼成
	壺 土 師 器	A 21.4 B (20.1)	体部中位から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石 灰赤褐色 普通	P166 50% PL16 北東路遺土中層 二次焼成
33	壺 土 師 器	A [19.1] B (13.2)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にふいじ色 普通	P167 30% 覆土中
	壺 土 師 器	A 16.2 B [32.8] C 6.0	底部から口縁部の破片。丸底。体部は球形状を呈し、頸部に強い稜を持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。頸部外面削磨痕。	砂粒・長石・石英・ バミス にふいじ色 普通	P168 45% PL16 群峰山遺土中層 体部外面保存着
第41図	壺 土 師 器	A 16.6 B (14.4)	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面斜位のヘラナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にふいじ色 普通	P169 20% 北東路遺土中層
	壺 土 師 器	A 13.5 B (12.0)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にふいじ色 普通	P170 15% PL16 覆土中 体部外面保存着
37	壺 土 師 器	A [18.0] B (17.8)	体部中位から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部は折り返しのある複合口縁となり、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面斜位のヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア にふいじ色 普通	P171 20% 西寄り覆土下層 及び床面直上 内面削磨
	壺 土 師 器	B (23.2)	体部中位から頸部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面端なヘラナデ。内面輪痕のみ。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	P172 10% 覆土中 内面削磨
第42図	壺 土 師 器	A [15.0] B (6.2)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は端部で折り返し、複合口縁となり、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り後ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・バミス 灰褐色 普通	P173 5% 東寄り覆土下層 及び床面直上 口縁部外面保存着
	壺 土 師 器	A [19.2] B (11.0)	体部中位から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部は端部で折り返し、複合口縁となり、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り後ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・バミス 灰褐色 普通	P174 5% 覆土下層 及び床面直上
40	壺 土 師 器	A [17.4] B (6.3)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にふいじ色 普通	P175 5% PL16 群峰山遺土中層 普通
	壺 土 師 器	A [19.4] B 6.3	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒 にふいじ色 普通	P176 5% 覆土中 二次焼成
41	壺 土 師 器	A [17.0] B (5.8)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・バミス にふいじ色 普通	P177 5% 覆土中 二次焼成

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第42図 44	甕 土師器	A [17.7] B (6.3)	体部上位から口縁部の破片、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面へう削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P178 5% 覆土中 二次焼成
45	甕 土師器	B (3.7) C 7.0	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面横なへう削り後ナデ、内面ヘラナデ。底部横なへう削り。	砂粒・長石・石英 雲母 褐色 普通	P179 5% 南寄り覆土下層 及び床面直上 内面斜離 二次 焼成
46	甕 土師器	B (2.4) C 7.1	底部から体部下位の破片。やや突出した平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へう削り後ナデ、内面ヘラナデ。底部へう削り後ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P180 10% 西寄り覆土下層 及び床面直上 内面灰付着
47	甕 土師器	B (1.4) C 6.3	底部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へう削り後ナデ、内面ヘラナデ。底部へう削り。	砂粒・長石 褐色 普通	P181 5% 西寄り覆土下層 及び床面直上 二次焼成
48	甕 土師器	B (4.5) C [7.8]	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へう削り後ナデ、内面ナデ。底部へう削り。	砂粒 褐色 普通	P182 5% 南寄り覆土下層 及び床面直上 二次焼成
49	甕 土師器	A [24.0] B (10.8)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内面横ナデ、外面横なへうナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・パミス にふい褐色 普通	P209 30% PL16 西寄り覆土下層
50	甕 土師器	—	孔部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒・石英・雲母・ スコリア にふい褐色 普通	P210 5% 覆土中
51	甕 土師器	—	孔部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へう削り後ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 黒褐色 普通	P211 5% 西寄り覆土下層 二次焼成
52	甕 土師器	—	孔部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒・雲母・ スコリア にふい褐色 普通	P212 5% 覆土中
53	甕 土師器	—	孔部から体部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒・パミス にふい褐色 普通	P213 5% 覆土中

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径				
第42図54	土 玉	(2.8)	(3.2)	—	(0.8)	(11.3)	30	覆土中	DP 7
55	不明土製品	7.7	2.0	1.5	—	18.0	100	覆土中	DP 8

第23号住居跡 (第43図)

位置 調査区の東部農道隣接部，V8g6区。

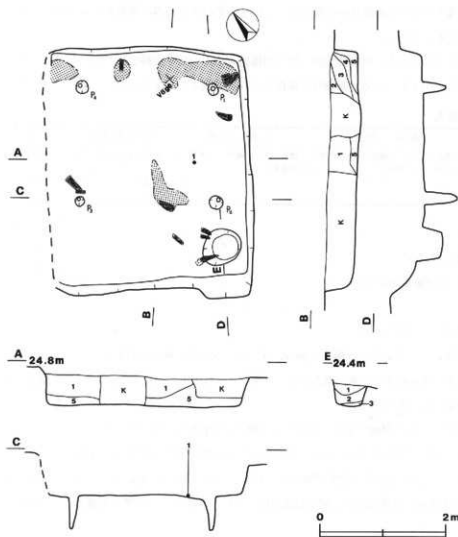
規模と平面形 長軸3.93m，短軸 [3.26] mの長方形。

主軸方向 N-38°-E

壁 北西壁は農道に接するため，明確に確認することはできなかった。南コーナーから西側の一部は耕作による攪乱で殆ど残存しない。壁高は34～62cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほほ平坦で，よく踏み固められ堅緻である。北西壁中央から南東壁に向かって幅70cmの馬背上の高まりが伸びている。南コーナー付近には攪乱がみられる。

ピット 4か所 (P₁～P₄)。P₁～P₄は長径16～22cm，短径15～20cmの楕円形で，深さは37～48cmである。P₁は北コーナー，P₂は東コーナー付近に付設され，P₃は南コーナーから南東壁に沿って，また，P₄は西コーナーから南西壁に沿って，それぞれ北東に寄った所に付設されている。規模や配列から主柱穴と考えられる。



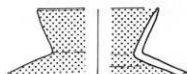
第43図 第23号住居跡実測図

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径67cm、短径57cmの楕円形で、円筒状に34cm程掘り込まれ、覆土上層からは炭化材が出土している。

貯蔵穴土層解説

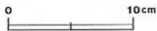
- 1 暗褐色 炭化物・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量

覆土 5層から成る。中央付近から南側は攪乱を広く受けているが、自然堆積と思われる。



土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量



第44図 第23号住居跡出土遺物実測図

遺物 出土遺物が少なく、覆土中より土師器片が少量出土している。第44図1の壇は南東寄りの床面直上から斜位の状態出土しているものである。

所見 本跡は、炉が確認されなかったが、堅緻な床面と柱穴が確認できるので住居跡として取り扱った。時期を判断する遺物は少ないが、出土している土師器片の様相から5世紀後半と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表

図番	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図1	壇 土師器	A [9.4] B (5.2)	体面上位から口縁部の破片。体面は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体面内・外面赤彩。	砂粒・灰石・石英・スコリア 浅黄褐色 普通	P215 10% PL16 南東寄り床面直上

第27号住居跡 (第45図)

位置 調査区の中央部南側、W549区。

規模と平面形 長軸6.92m, 短軸6.62mの方形。

主軸方向 N-50°-W

壁 壁高は45~66cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南東壁と南西壁の一部に巡っている。上幅5~10cm, 深さ6~8cmで、断面形はU字形である。

間仕切り溝 北東壁から2条, 南東壁から1条, 南西壁から3条それぞれ中央に向かって伸びている。幅20~28cm, 深さ5~12cmで、断面はU字形である。

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められて堅緻である。床面からは焼土, 炭化材が出土している。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は長径21~25cm, 短径19~22cmの楕円形で、深さは59~77cmである。P₁~P₄は各コーナー付近に付設されており、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は南コーナーから南東壁沿い北側に付設され、長径25cm, 短径20cmで、深さ12cmの楕円形ピットである。規模や配置から出入口に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径85cm, 短径75cmのほぼ長方形で、深さ56cmである。断面はU字形で、底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|---------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック少量 |
| | ローム粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化材・炭化粒子少量, ローム小 |
| | 少量, 焼土粒子・ローム小ブロック微量 | | ブロック微量 |

炉 北西壁中央寄りに付設され、長径170cm, 短径83cmで、床面を約5cm掘り窪めた長方形の地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

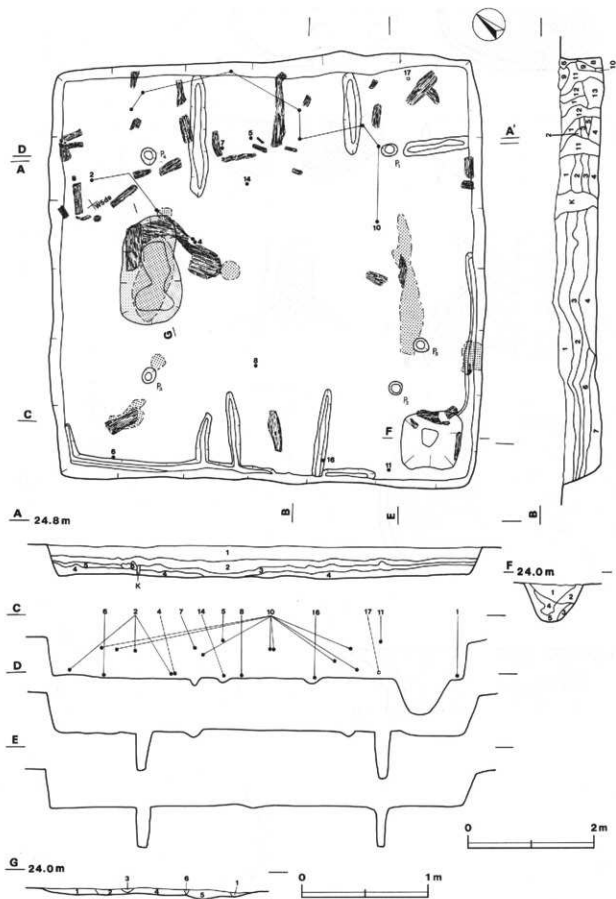
炉土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------------|-------|--------------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子多量, 炭化粒子中量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子多量, 焼土小ブロック中量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |

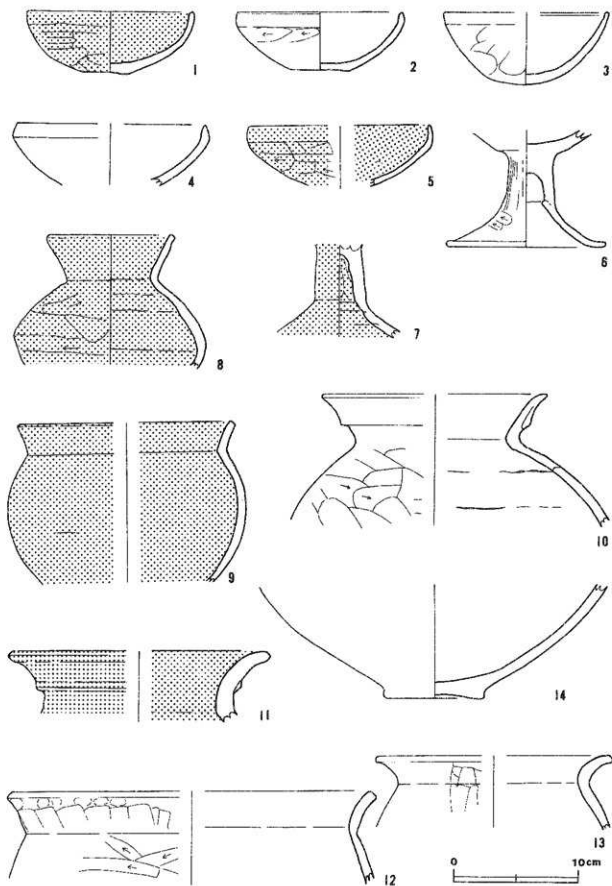
覆土 13層から成る。覆土は下層から上層にかけて焼土粒子, 炭化粒子を含む暗褐色土がレンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。中央付近から南東壁にかけては帯状の攪乱をうけている。

土層解説

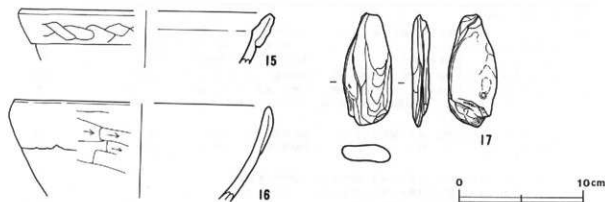
- | | | | |
|-------|--------------------------------------|-------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子・炭化材 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・炭化材微量, 炭化粒子・ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 | 4 褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化材・炭化粒子微量 |



第45图 第27号住居跡実測图



第46图 第27号住居跡出土遺物実測図(1)



第47図 第27号住居跡出土遺物実測図(2)

- | | | | | | |
|---|-----|----------------------------------|----|-----|--------------------------------|
| 5 | 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック少量 | 9 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土粒子少量 |
| 6 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 10 | 赤褐色 | 焼土小ブロック多量、焼土粒子少量 |
| 7 | 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 11 | 明褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 8 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化材・炭化粒子少量 | 12 | 褐色 | ローム小ブロック中量、ローム粒子少量 |
| | | | 13 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量 |

遺物 覆土層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第46・47図1～5の坏は、1が北東壁際の覆土下層から斜位の状態、2が北寄りの覆土層及び覆土下層から正位の状態で出土している坏片が接合し、4が中央付近の覆土下層から、5は北東寄りの覆土層から、3は覆土中から出土している。6、7の高坏は、西コーナー覆土下層と北東寄りの覆土層から共に逆位の状態出土し、8の罎は中央寄りの覆土下層から横位の状態出土し、体部内から炭化米が出土している。9～14の甕は、9が覆土中から、10は北東から東寄りの覆土中層から出土している甕片が接合し、11は南寄りの覆土層から、12、13は覆土中から、14は北東寄りの覆土下層から出土している。15、16の甗は、15が覆土中から、16が南西壁際の間仕切り溝内覆土上面から横位の状態出土している。

所見 本跡は、床面にみられる炭化材から焼失家屋と思われる。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	土師器	A 13.4	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 薄い橙色 普通	P225 95% PL16 北東壁際覆土下層 内面斜離 二次焼成
		B 5.0				
		C 3.4				
2	坏 土師器	A 13.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面へラ磨き。底部へラ削り後ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P226 80% 北寄り覆土層 及び下層 二次焼成
		B 4.6				
		C 4.4				
3	坏 土師器	A [13.4]	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラ磨き、内面ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P227 30% 覆土中 二次焼成
		B 5.8				
4	坏 土師器	A [15.2]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 明褐色 普通	P228 30% 中央付近覆土下層 二次焼成
		B (5.0)				

図版番号	種 別	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第46図 5	坏 土 胎 器	A [14.5]	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラ磨き。体部へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石 褐色 普通	P229 30% 北条寄り覆土上層 二次焼成
		B (4.8)				
6	高 坏 土 胎 器	D (9.1)	胴部から口部下位の破片。胴部は柱状を呈し、下位で開き、底部は反る。外部は胴部との境に弱い稜を持つ。	外部外面へラ削り後ナデ。内面へラ磨き。胴部はへラ削り後ナデ。内面ナデ。内面輪襷も僅有り。	砂粒・長石 ぶい・褐色 普通	P230 40% 五コーテ覆土下層 二次焼成
		E 12.8				
		E 7.5				
7	空 坏 土 胎 器	E (7.2)	胴部の破片。胴部は柱状を呈し、下位で開く。	胴部外面へラナデ。内面ナデ。内面輪襷も僅。内・外面赤彩。	砂粒・パミス 浅黄褐色 普通	P231 20% 北条寄り覆土上層 普通
		A 9.6 B (10.9)	体部下位及び口縁部一部欠損。体部中位は潰れた球形状を呈し、胴部は括弧、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア ぶい・褐色 普通	P232 70% PL16 中央寄り覆土下層 著しい内面割離
9	焚 土 胎 器	A [17.4] B (12.9)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラ磨き。体部内・外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア ぶい・褐色 普通	中央寄り覆土中層 覆土中
		A [18.0] B (10.1)	体部上位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し、胴部に強い稜を持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・パミス ぶい・褐色 普通	P219 20% 北条寄り覆土中層 体部内面割離 二次焼成
11	壊 土 胎 器	A [20.0] B (5.1)	口縁部の破片。口縁部は胴部との境に弱い稜を持ち、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・パミス ぶい・黄褐色 普通	P220 5% 南条寄り覆土上層 普通
		A [29.8] B (7.0)	口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面斜位のへラ削り。体部外面へラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒 ぶい・黄褐色 普通	P221 5% 覆土中 胴部外面割離痕
13	焚 土 胎 器	A [18.6] B (5.7)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 ぶい・褐色 普通	P222 5% 覆土中
		A [20.0] B (4.1)	口縁部の破片。口縁部は折り返しの様な口縁で、行ち雨笠状にやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面斜位のへラ削り後ナデ。	砂粒・長石 ぶい・褐色 普通	P218 5% 覆土中
16	瓶 土 胎 器	A [20.7] B (7.8)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石 ぶい・褐色 普通	P224 10% 南西壁隙間状切り 溝内覆土上面 体部外面保付層

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第47図17	不明石製品	(9.1)	(3.9)	1.4	-	(58.4)	70	片岩	覆土中	Q58

第28号住居跡 (第48図)

位置 調査区の南西部南側、W6e1区。

規模と平面形 本跡は、調査区に隣接する農道の真下にあり、調査区外で発掘が出来なかったため規模は不明であるが、平面形は一辺が4.31mの隅丸方形と考えられる。

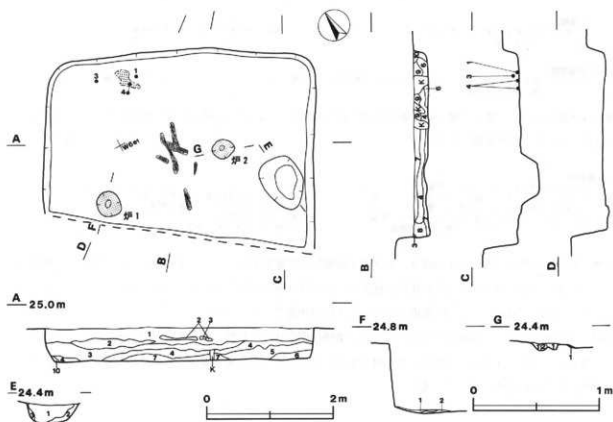
主軸方向 N-63°-W

壁 壁高は21~30cmで、外傾して立ちあがる。南西壁は調査区外のため確認できなかった。

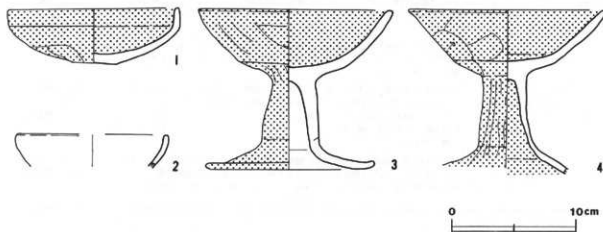
床 平坦で、よく踏み固められている。床面直上から焼土、炭化材が出土している。

貯蔵穴 南東壁の中央付近から南寄り付設され、平面形は長径86cm、短径60cmの楕円形で、深さ61cmである。

断面は円筒状で、底部は平坦である。



第48図 第28号住居跡実測図



第49図 第28号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

炉 2か所。炉1は中央から北西寄りに付設され、径40cmの円形で、床面を約5cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉2は東コーナーから中央寄りに付設され、径35cmの円形で、床面を約10cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化し、焼土ブロックが堆積している。

炉1土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量

炉2土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

覆土 10層から成る。覆土下層から上層にかけてロームブロック、ローム粒子を含む褐色土がレンズ状に厚く堆積している。自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
3 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
4 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
5 褐色 ローム小ブロック少量、炭化物微量
6 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
7 暗褐色 炭化材中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量
8 暗褐色 炭化物・ローム粒子微量
9 褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
10 明褐色 ローム粒多量

遺物 北寄りの覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第49図1の坏は北寄りの床面直上から焼土の中に埋もれるように正位の状態、2の坏は覆土中から出土している。3、4の高坏は、3が北寄りの覆土下層から、4が床面直上から共に正位の状態出土している。

所見 本跡からはピットが確認されなかったが、遺構の確認状況や形態、貯蔵穴及び炉の確認状況から住居跡と考える。また、床面からは焼土、炭化材が出土していることから焼失家屋の可能性もある。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	坏 土師器	A 13.8	平底、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩後、内面塗盛り。	砂粒・雲母・バミスにふい橙色普通	P233 100% PL16 北寄り床面直上
		B 4.5				
		C 3.0				
2	坏 土師器	A [12.2] B (2.6)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P234 5% 覆土中
		高坏 土師器	A 15.7 B 12.8 D 13.5 E 7.2	坏部一部欠損。脚部は柱状を呈し、中位にやや膨らみを持ち、下位で大きく開き、端部は反る。坏部は脚部との境に弱い線をもち、内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。脚部外面へラナデ、内面ナデ。脚部内面を除いて赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 淡黄褐色 普通
4	高坏 土師器	A 16.1 B (12.7) E (7.4)	脚部一部欠損。脚部は柱状を呈し、下位で開く。坏部は脚部との境に強い線を持ち、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。脚部外面へラナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・スコリア 褐色 普通	P236 80% 北寄り床面直上

第29号住居跡 (第50図)

位置 調査区の東部中央付近、W6a区。

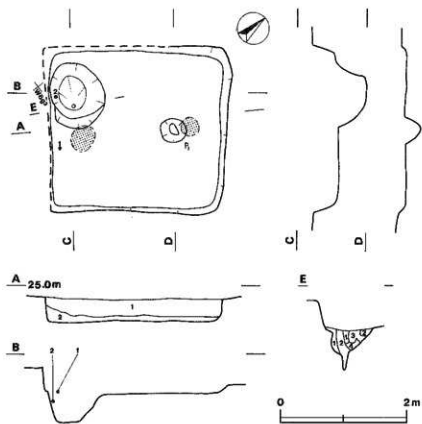
規模と平面形 南西方向は調査区外のため発掘ができず南東方向の長さ及び北西方向の長さは不明であるが、一辺2.88mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-38°-E

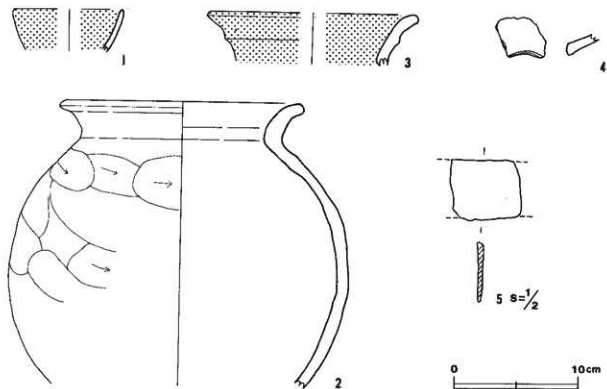
壁 壁高は9～32cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。南東壁と北西壁の一部は確認できなかった。

床 平坦であるが、踏み固められた硬化面はみられない。

ピット P1は径40cmの円形で、北東壁中央から内側にはいったところに付設され、深さは25cmで、断面は鉢形である。性格は不明である。



第50图 第29号住居跡実測図



第51图 第29号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴 西コーナー付近に付設され、平面形は長径105cm、短径90cmの不整楕円形で、深さ45cmである。南東壁から貯蔵穴内側に張り出しがみられる。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土 2層から成る。2層とも覆土は北側に向かって傾斜して堆積する。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物 南寄りの覆土中層及び貯蔵穴内から土師器片が出土している。第51図1の埴は貯蔵穴内覆土上面から出土し、2の壺は貯蔵穴の覆土中層から底部の上に体部が二段状態で重なるように出土している。3、4、5の壺、甔、不明鉄製品は覆土中から出土したものである。

所見 本跡からは、主柱穴及び炉が確認できなかったが、遺構の確認状況、形態及び貯蔵穴と思われる施設を付設していることから住居跡として取り扱ったが、倉庫的な建物跡の可能性もある。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図1	埴 土師器	A [8.5] B (3.5)	口縁部の破片。口縁部は緩やかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 褐色 普通	P239 5% 貯蔵穴内覆土上面
2	壺 土師器	A 18.5 B (22.8)	体部下位一部欠損。体部は球形状を呈し、頸部は折れ、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい棕色 普通	P237 60% PL17 貯蔵穴内覆土中層 二次焼成
3	壺 土師器	A [17.0] B (4.0)	口縁部の破片。頸部との境に弱い稜を持ち、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P238 5% 覆土中
4	甔 土師器	—	底部下位の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	P240 5% 覆土中

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚			
第51図5	不明鉄製品	(4.1)	(3.3)	0.4	(14.8)	覆土中	M2 PL19

第30号住居跡 (第52図)

位置 調査区の中央部南側、X6a8区。

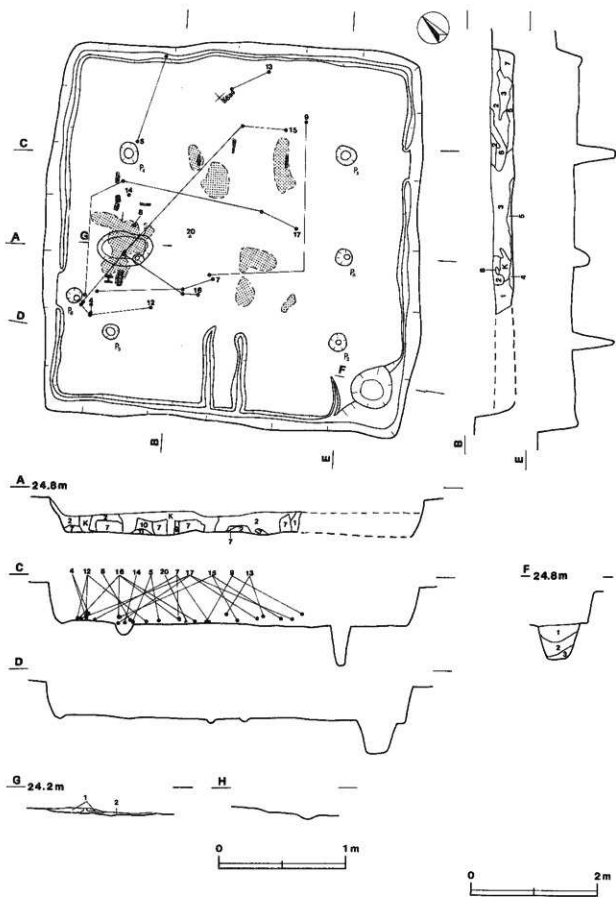
規模と平面形 長軸6.10m、短軸5.92mの方形。

主軸方向 N-47-E

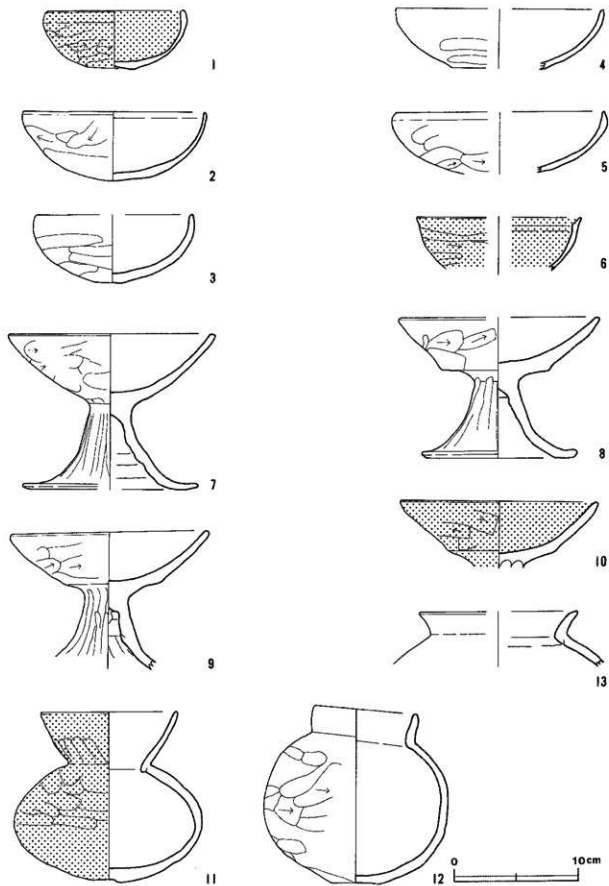
壁 壁高は38~65cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 貯蔵穴の回り、南東壁と北西壁の一部を除いては全周している。上幅5~15cm、深さ3~5cmで、断面はU字形である。

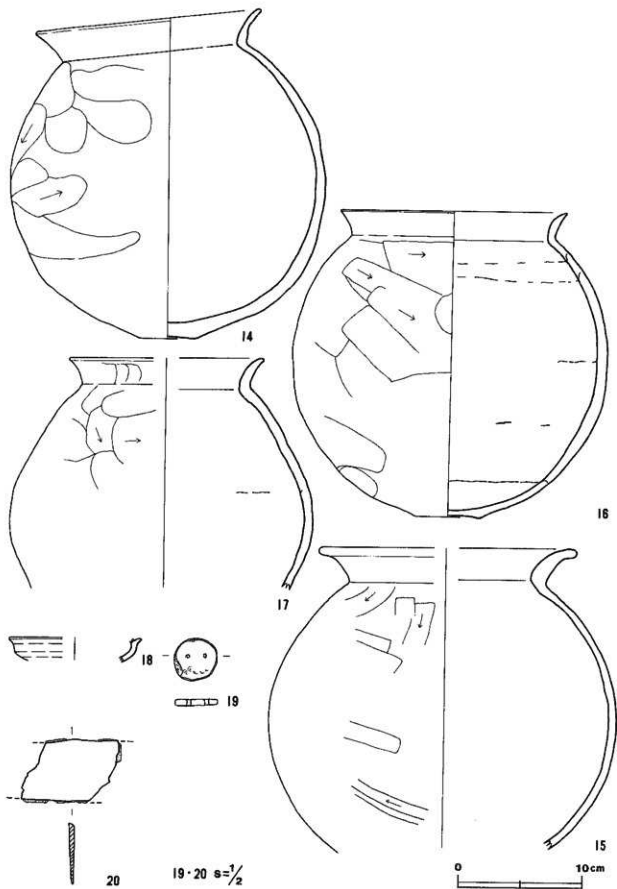
間仕切り溝 南西壁から中央に向かって2条みられ、幅14~22cm、深さ6cm、断面形はU字形である。



第52图 第30号住居跡実測图



第53图 第30号住居跡出土遺物実測図(1)



第54图 第30号住居跡出土遺物実測図(2)

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められ堅緻である。

ピット 6か所(P₁~P₆)。P₁~P₆は長径25~35cm、短径23~27cmの楕円形で、深さは46~61cmである。P₁~P₅は、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₆の性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径70cm、短径64cmの楕円形で、深さ50cmである。断面はU字形で、底部は平坦である。覆土は3層で、暗褐色土が堆積している。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子微量、ロームブロック極微量、締まり強
- 3 褐色 ロームブロック少量、ローム粒子微量、締まり強

炉 北西壁寄りに付設され、長径90cm、短径55cmの楕円形で、床面を約4cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化物微量
- 2 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化物少量

覆土 11層から成る。耕作による攪乱がみられるが、覆土下層から中層にかけて焼土粒子とローム粒子を含む褐色土が堆積している。人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック中量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック微量、焼土粒子極微量
- 4 褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒子微量、締まり強
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、締まり強
- 7 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 8 褐色 ローム小ブロック多量、焼土粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック少量、ローム小ブロック微量、炭化粒子極微量
- 10 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量、炭化材極微量
- 11 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量

遺物 南西寄りの覆土下層から床面直上にかけて土師器片が多量に出土している。第53・54図1~6の坏は、1~3、6が覆土中から、4、5が北西寄りや北寄りの覆土下層から共に正位の状態出土している。7~10の高坏は、7が中央と北西壁寄りの覆土下層から出土している脚部と坏部が接合し、8は北西寄りの覆土下層から、9が中央寄りの覆土中層と床面直上から出土し、10は覆土中から出土している。12の壺は北西寄りの床面直上から正位の状態、11は覆土中から出土している。13~17の壺は、13が北東壁寄りの覆土下層から、14が北西寄りの床面直上から、15が北東寄りの覆土下層から出土している壺片と、北西寄りの床面直上から出土している壺片が接合し、16は北西寄りの覆土下層及び床面直上から、17は中央付近の覆土下層から出土している壺片に、北西寄りの床面直上から出土している壺片と接合したものである。その他、18の須恵器片と、19の双孔円板が覆土中から、20の不明鉄製品が中央付近の床面直上から出土している。

所見 本跡の床面からは焼土と、僅かながら炭化材が出土していることから焼失家屋の可能性が有る。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第53図 1	坏 土師器	A 10.8 B 4.7 C 3.8	体部及び口縁部一部欠損。上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内縮する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P247 75% PL17 覆土中

図版番号	器 種	計測値 (cm)		器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
		最大長	最大幅				
第53図 2	坏 土 胎 器	A 14.4	B 5.6	体部及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・バミス に ぶい 褐色 普通	P248 75% PL17 覆土中 二次焼成
		B 5.6					
3	坏 土 胎 器	A 12.4	B 6.0 C 2.3	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石・石長 に ぶい 褐色 普通	P249 65% PL17 覆土中
		B 6.0					
		C 2.3					
4	坏 土 胎 器	A [16.6]	B (4.8) C (7.6)	肩部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石 に ぶい 褐色 普通	P250 40% 北西寄り覆土下層 内面割製 二次焼成
		B (4.8)					
		C (7.6)					
5	坏 土 胎 器	A [16.8]	B (4.9)	肩部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 灰白色 普通	P251 30% 北西寄り覆土下層 内面割製
		B (4.9)					
6	坏 土 胎 器	A [13.4]	B (4.2)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。頸部に強い稜を持ち、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 に ぶい 褐色 普通	P252 10% 覆土中
		B (4.2)					
7	高 土 胎 器	A 12.5	B 16.0 D [14.0] E 6.9	肩部及び口縁部一部欠損。肩部はラップ状に下方に開く。坏部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。肩部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。肩部内面輪縁有。	砂粒・雲母・スコリア に ぶい 褐色 普通	P253 80 % PL17 中央及び北西寄り 覆土下層
		B 16.0					
		D [14.0]					
		E 6.9					
8	高 土 胎 器	A [15.8]	B 11.2 D 11.6 E 6.1	坏部一部欠損。肩部はラップ状に下方に開く。頸部は足を反る。坏部は肩部との境に強い稜を持ち、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。肩部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・石灰・雲母・ スコリア に ぶい 褐色 普通	P254 60% PL17 北西寄り覆土下層 肩部外面係付着
		B 11.2					
		D 11.6					
		E 6.1					
9	高 土 胎 器	A 15.8	B 10.5 E (4.9)	肩部及び坏部一部欠損。肩部はラップ状に下方に開く。坏部は肩部との境に強い稜を持ち、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。肩部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア に ぶい 褐色 普通	P255 70% 中央寄り覆土中層 から床面直上 肩部内面係付着
		B 10.5					
		E (4.9)					
		E (4.9)					
10	高 土 胎 器	A 15.9	B (5.3)	肩部一部欠損。坏部は肩部との境に強い稜を持ち、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア に ぶい 褐色 普通	P256 50% PL17 覆土中
		B (5.3)					
11	埴 土 胎 器	A 11.0	B 13.7 C 2.5	体部中位一部欠損。平底。体部は潰れた球形状を呈し、口縁部はやや内彎しながら立ち上がり、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラ磨き。内面ナデ。底部へラ削り。外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア に ぶい 褐色 普通	P257 85% PL17 覆土中
		B 13.7					
		C 2.5					
12	壺 土 胎 器	A 8.2	B 14.3	体部一部欠損。平底。体部は球形状を呈し、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラ磨き。内面へラナデ。底部へラ削り。	砂粒・石灰・雲母・ スコリア に ぶい 褐色 普通	P241 80% PL17 北西寄り床面直上 二次焼成
		B 14.3					
13	壺 土 胎 器	A [12.8]	B (4.2)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面横ナデ。	砂粒・雲母・バミス 灰褐色 普通	P242 10% 北東寄り覆土下層
		B (4.2)					
第54図 14	壺 土 胎 器	A 18.0	B 27.6 C 4.3	体部一部欠損。平底。体部は球形状を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ、内面へラナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石・雲母 に ぶい 褐色 普通	P243 80% PL17 北西寄り床面直上
		B 27.6					
		C 4.3					
15	壺 土 胎 器	A [20.9]	B (23.8)	底部及び口縁部一部欠損。体部は球形状を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 に ぶい 褐色 普通	P244 75% PL18 北東寄り覆土下層 北西寄り床面直上 口縁部外面係付着
		B (23.8)					
16	壺 土 胎 器	A [18.2]	B 24.5 C [5.4]	肩部から口縁部の破片。平底。体部は球形状を呈し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り後ナデ。	砂粒・長石 に ぶい 褐色 普通	P245 35% 北西寄り覆土下層 及び床面直上 二次焼成
		B 24.5					
		C [5.4]					
17	壺 土 胎 器	A [15.6]	B (18.3)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面へラ削り。体部外面へラ削り後へラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・バミス に ぶい 褐色 普通	P246 40% 中央付近覆土下層 北西寄り床面直上 内面割製
		B (18.3)					
18	坏 身 須 意 器	B (1.9)		体部中位から頸部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、受部に至る。受部はやや反る。	巻き上げ、横ナデ成形。体部外面回転へラ削り。	長石・砂粒 灰黄色 良好	P258 5% 覆土中

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	石 質	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第54図19	双孔円板	2.3	2.3	1.4	0.15	3.8	100	覆土中	滑石	Q59 PL19

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量 (g)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚			
第54図20	不明鉄製品	(5.4)	(3.3)	0.5	(17.0)	中央付近床直上	M 3

第31号住居跡 (第55図)

位置 調査区の西部, V5a区。

規模と平面形 本跡の南西方向の大部分は調査区外のため完掘ができず, 南西壁の一部と北西壁の規模は不明であるが, 平面形は一边が4.41mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-40°-E

壁 壁高は34~44cmで, 外傾して立ち上がる。

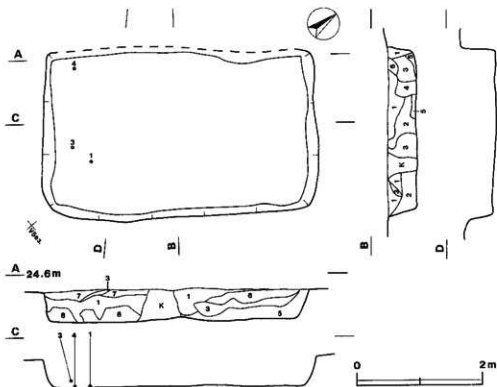
床 ほぼ平坦で, よく踏み固められている。北西部に多少高まりがみられる。

覆土 8層から成る。北西部は調査区外のため全容をつかむことは不可能であるが, 壁際や床面上にかけて褐色土が堆積し, 下層及び中層にかけ焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。各層とも炭化粒子とロームブロックを少量含む。中央部の一部は耕作により円筒状の攪乱を受けている。

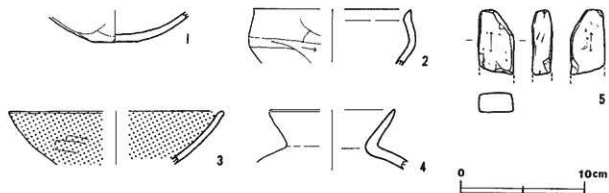
土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色	炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量	5 褐色	ローム中ブロック少量, 炭化粒子少量, 砂まり強
3 褐色	ローム粒子多量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子・ローム小ブロック微量
		7 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
		8 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 南寄りの覆土下層及び床面直上から少量の土師器片が出土している。第56図1の坏と3の高坏は, 南寄りの床面直上と覆土下層から, 4の埴は西寄りの床面直上から出土したもので, 2の碗は覆土中から出土したものである。その他, 5の磁石が覆土中から出土している。



第55図 第31号住居跡実測図



第56図 第31号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡からは、住居跡及び建築物として付設される施設を確認することができなかったが、遺構の確認状況と遺物の出土状態から住居跡として取り扱った。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	坏土器	B (2.0) C 3.8	底部から体部下位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P260 10% 南寄り床面直上 体部内面割離
2	椀土器	A [12.6] B (4.4)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は内附牙状に尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P259 15% 覆土中
3	高坏土器	A [17.2] B (4.3)	坏部の破片。坏部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	坏部外面へラ削り後へラナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 にぶい橙褐色 普通	P261 25% 南寄り覆土下層
4	埴土器	A [10.0] B (4.2)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・石英 微色 普通	P262 10% 西寄り床面直上

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第56図5	砥石	(5.2)	2.8	1.6	(36.3)	50	砂岩	覆土中	Q60

第32号住居跡 (第57図)

位置 調査区の西部、U5as区。

規模と平面形 長軸5.65m、短軸5.61mの方形。

主軸方向 N-46°-W

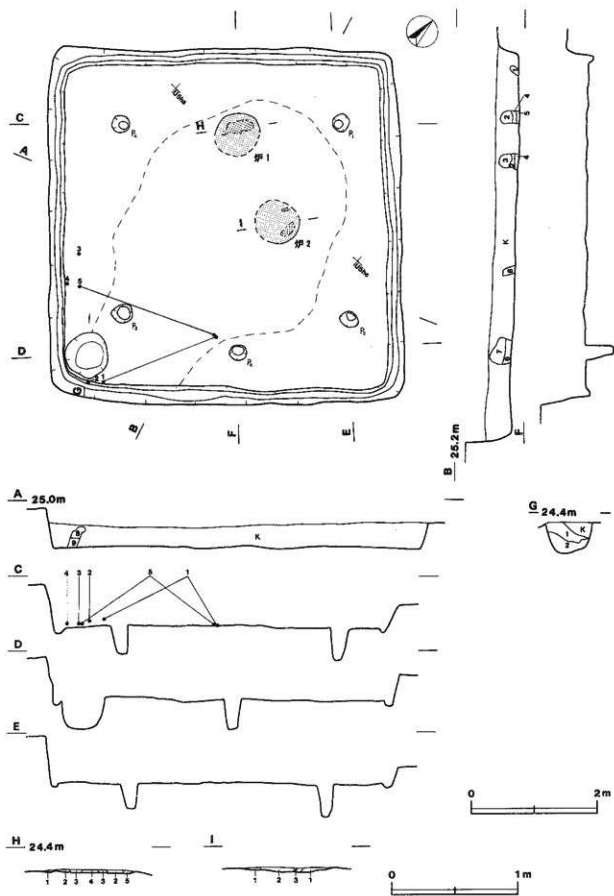
壁 壁高は26~44cmで、外傾して立ち上がる。全面に耕作による攪乱を受けている。

壁溝 壁下を周回する。上幅10~15cm、深さ6~9cmで、断面形はU字形である。

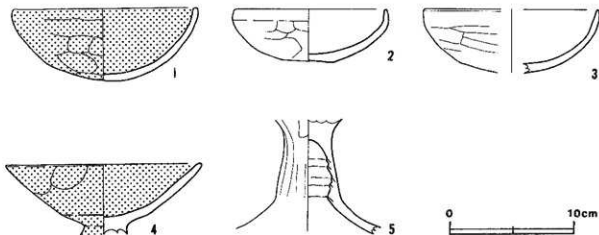
床 ほぼ平坦で、踏み固められている。攪乱を受けている。

ピット 5か所 (P1~P5)。P1~P4は長径33~35cm、短径24~28cmの楕円形または不整楕円形で、深さは35~50cmである。各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。P5は径25cmの円形で、南東壁寄りの中央部に付設され、規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径70cm、短径65cmの楕円形である。深さは50cm、断面はU字



第57图 第32号住居跡実測図



第58図 第32号住居跡出土遺物実測図

形で底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極微量

炉 2か所。炉1は遺構中央部から北西壁寄りに付設され、平面形は長径75cm、短径65cmの楕円形で、床面を5cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロック、焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。炉床はトレンチャーによる攪乱を受けているが、残存部分は赤変硬化している。炉2は中央部からやや北東に寄った位置に付設され、平面形は径70cmの円形で、床面を6cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土には焼土ブロックが残存し、炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉1土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量
2 暗褐色 焼土大ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
3 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量
4 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量
5 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量

炉2土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色 焼土大ブロック・焼土小ブロック中量、焼土中ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量
3 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量

覆土 9層から成る。攪乱を受けて、全体の堆積状況の把握はできない。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量
2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
3 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量
4 極暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
5 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック微量
6 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
7 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック極微量
8 暗褐色 炭化物・ローム粒子微量
9 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物 南寄りの覆土下層及び床面直上から土師器片が少量出土している。第58図1の環は、南コーナー付近の覆土下層から出土している体部に、南東寄りの床面直上から出土している坏片が接合したもので、2の坏は南コーナーの覆土下層から斜位の状態、3の坏は南西寄りの覆土下層から逆位の状態で出土している。4の高坏は南西寄りの覆土下層から正位の状態、5の高坏は南西寄りの覆土下層から横位の状態で出土している脚部に、南東寄りの床面直上から出土している裾部片が接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 1	坏土器 土師器	A 14.7 B 5.8	体部及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに内彎する。口縁部外面に鋭い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 明褐色 普通	P277 85% PL18 南コーナートンネル土層 体部内・外面横ナデ
2	坏土器 土師器	A 12.1 B 4.3 C 4.0	体部中位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外面に鋭い稜を持ち、僅かに内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P278 60% PL18 南コーナートンネル土層 体部内・外面横ナデ
3	坏土器 土師器	A [14.1] B (5.1)	体部中位及び口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・ハミス 褐色 普通	P279 20% 南西寄り覆土下層 体部外面横ナデ
4	高坏土器 土師器	A 15.6 B (5.6)	坏部片。坏部下位に鋭い稜を持ち、外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面へラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石・ スコリア にぶい橙色 普通	P280 40% 南西寄り覆土下層 内面割離
5	高坏土器 土師器	E (8.7)	脚部から器部の破片。脚部は柱状を呈し、下位に膨らみを持ち、器部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面縦位のへラ削り。器部外面ナデ。脚部内面輪横のみ。	砂粒・長石 明褐色 普通	P281 30% 南西寄り覆土下層 脚部外面横ナデ

第33号住居跡 (第59図)

位置 調査区の西部，U5₄区。

規模と平面形 長軸6.46m，短軸6.36mの方形。

主軸方向 N-29°-W

壁 壁高は17~46cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、踏み固められている。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は長径25~29cm，短径20~28cmの楕円形または不整形円形で、深さは17~46cmである。各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は長径25cm，短径20cmの楕円形で、P₃からやや北東に付設され、出入口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径95cm，短径73cmの不整形円形である。深さ80cmで、断面は深鉢状を呈し、中位に段を持つ。底部は内側に向かってやや駆け上がる。

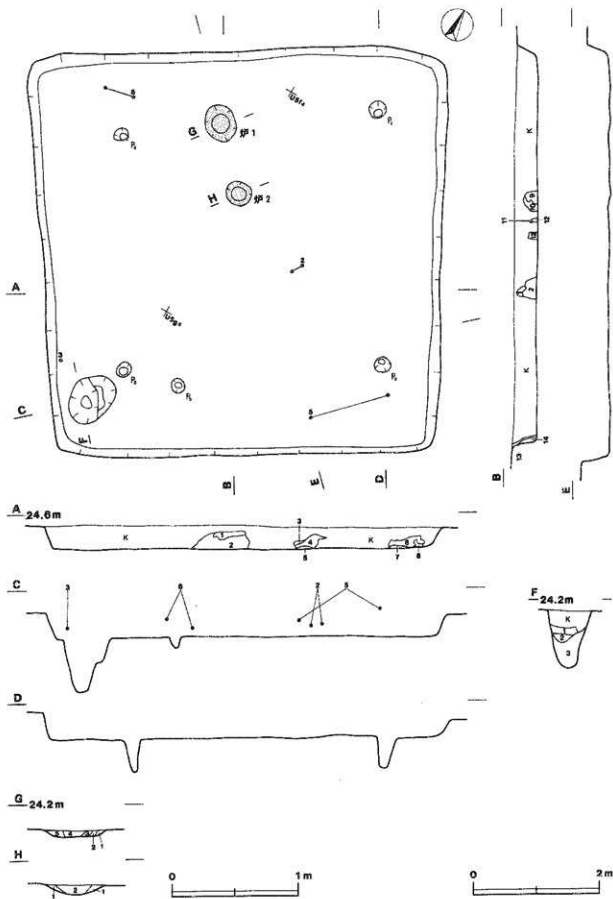
貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、粘性強

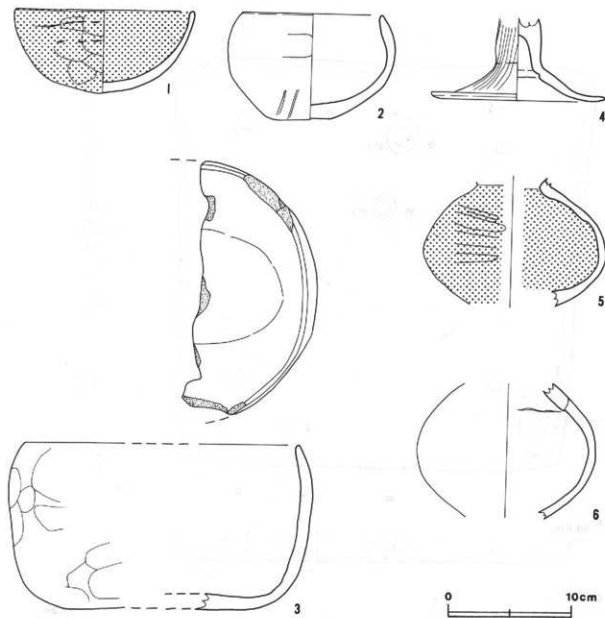
炉 2か所。炉1は、中央付近から北西方向に付設され、平面形は長径62cm，短径50cmの長楕円形で、床面を5cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロック、焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。炉床は耕作による攪乱を受けている。残存部分に火熱を受け硬化している部分はみられない。炉2は、炉1の北東方向に付設され、平面形は径40cmの円形で、床面を8cm掘り窪めた皿状の地床炉である。炉内覆土はいずれも焼土ブロック、焼土粒子を含む赤褐色土が堆積している。炉床は柔らかく硬化していない。

炉1土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 焼土大ブロック多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子少量、焼土中ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量、炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量



第58图 第33号住居跡実測图



第60図 第33号住居跡出土遺物実測図

伊2土層解説

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
 2 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量・ローム粒子少量・炭化粒子少量

覆土 14層から成る。耕作作用レンチャーによる擾乱を受けて、全体の堆積状況の把握はできないが、覆土下層から中層にかけ褐色土、暗褐色土、黒褐色土が複雑に堆積している様子がみられ、人為堆積の様相を呈する。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量 | 8 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、綿まり強 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 9 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 10 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 11 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 12 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、綿まり強 | 13 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量 |
| 7 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、綿まり強 | 14 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量 |

遺物 覆土中層から土師器片が少量出土している。第60図1の坏は覆土中から、2の碗は中央寄りの覆土中層

から出土し、3の鉢形土器は南西壁際の覆土下層から正位の状態でも出土している。4の高坏は覆土中から、5の埴は東寄りの覆土上面から出土している埴の破片と覆土中層から出土している破片が接合し、6の埴は西寄りの覆土中層から出土している埴の破片と覆土下層の破片が接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第60図 1	坏 土 器 器	A 14.3 B 6.7	底部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩やかに立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。体部外面輪襖み痕。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P282 90% PL18 覆土中
2	陶 土 器 器	A 11.2 B 8.5 C 4.4	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部中位に膨らみを持ち、内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内削ぎ状に僅かに反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母・バミス にぶい橙褐色 普通	中央寄り覆土中層。 二次焼成
3	鉢形土器 土 器 器	B 13.3	底部から口縁部の破片。平底気味の丸底。体部は舟形状を呈す。底部から口縁部にかけ、ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・ バミス・スコリア にぶい橙褐色 普通	P284 40% PL18 南西壁際覆土下層 体部外面保付着
4	高 坏 土 器 器	A 14.0 E (6.6)	坏部から裾部は柱状を呈し、裾部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面履位のヘラナデ。裾部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石・バミス にぶい黄褐色 普通	P285 50% 覆土中
5	埴 土 器 器	B (9.5)	体部の破片。体部は潰れた球形形状を呈し、体部中位に最大径を持つ。	体部外面丁寧なヘラナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・バミス 赤褐色 普通	P286 40% 東寄り覆土中面 及び覆土中層
6	埴 土 器 器	B (10.8)	体部の破片。体部は潰れた球形形状を呈する。	体部内面ナデ。体部上位輪襖み痕。	砂粒・石英・長石 橙褐色 普通	P287 20% 西寄り覆土中層 88.8%に近い砂粒 8.8%の空留着

第34号住居跡 (第61図)

位置 調査区の中央付近、U5a3区。

規模と平面形 長軸7.58m、短軸7.30mの方形。

主軸方向 N-30°-W

壁 壁高は13~25cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、踏み固められ硬化している部分はみられない。

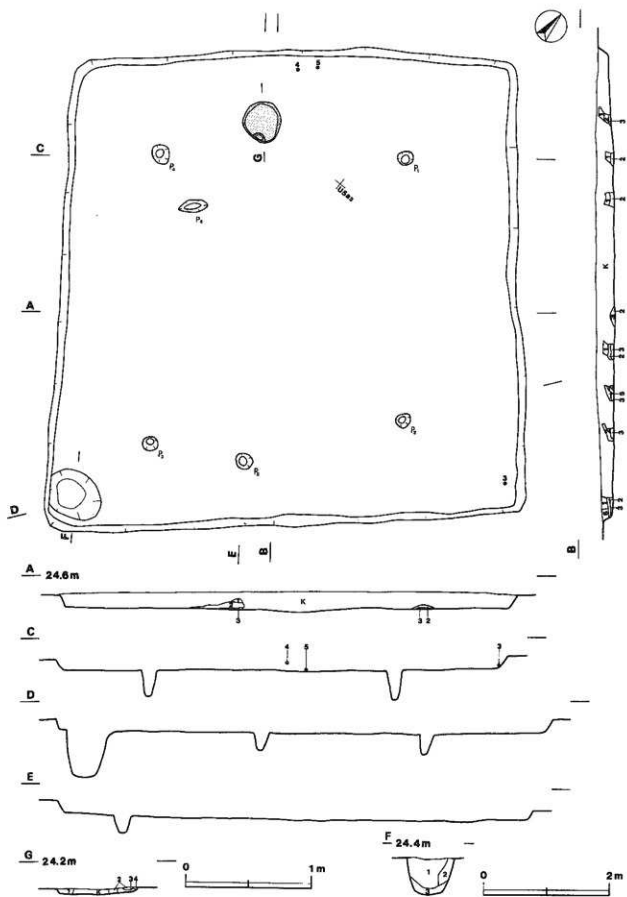
ピット 6か所 (P1~P6)。P1~P4は長径25~33cm、短径20~25cmの楕円形または不整形円形で、深さは25~38cmである。各コーナー付近に付設され、規模や配列から支柱穴と考えられる。P5は径25cmの円形で、P3から北東方向に付設され、梯子ピットと考えられる。P6はP4の東方向に付設され、長径45cm、短径20cmの長楕円形で、深さは20cmである。ピットの形状から補助柱穴とするには疑問が残る、性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径85cm、短径75cmの不整形円形である。深さ70cmで、円筒状に掘り込まれている。底部は皿状である。

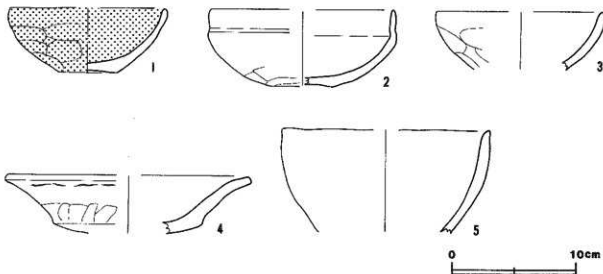
貯蔵穴土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 黄 色 ローム大ブロック少量

炉 中央付近から北西方向に付設され、平面形は長径60cm、短径55cmの楕円形で、床面を4cm掘り窪めた地床炉である。炉の中央部は耕作による攪乱を受けている。



第61图 第34号住居跡実測图



第62図 第34号住居跡出土遺物実測図

炉土層解説

- 1 濃い赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、焼土小ブロック微量、ローム小ブロック極微量
 2 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量、ローム小ブロック極微量
 3 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
 4 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量、ローム小ブロック極微量

覆土 6層から成る。攪乱を受けて、全体の堆積状況の把握はできない。

土層解説

- 1 極暗褐色 焼土粒子・ローム少ブロック・ローム粒子少量
 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量
 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム少ブロック微量
 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック微量
 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 覆土中層から覆土下層にかけて土師器片が少量出土している。第62図1, 2の坏は覆土中から出土し、3の坏は東コーナー寄りの覆土下層から斜位の状態、4, 5の高坏と甗は、北東寄りの覆土中層と床面直上から出土したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第62図 1	坏 土 師 器	A [12.4] B 5.2	体部中位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩。	焼土系部・バミス に濃い黄褐色 普通	F288 50% PL18 覆土中
2	坏 土 師 器	A [14.6] B 6.2 B (4.4)	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に明瞭な線をもち、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面へラ磨き。底部へラ削り。	砂粒・長石・スコリア 淡褐色 普通	F289 35% 覆土中
3	坏 土 師 器	A [13.4] B (4.6)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面丁寧なへラナデ。	砂粒・石英・雲母・ バミス・スコリア に濃い褐色 普通	F290 15% 東コーナー寄り 覆土下層
4	高 坏 土 師 器	A [19.8] B (4.7)	坏部の破片。坏部下位に明瞭な線をもち、外上方に立ち上がり、口縁部は反る。	口縁部内面・外面及び中位横ナデ、下位縦位のへラナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・長石・ バミス に濃い褐色 普通	F291 15% 北寄り覆土中層
5	甗 土 師 器	A [16.6] R (8.3)	体部中位及び口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラナデ。	砂粒・石英・長石 に濃い赤褐色 普通	F292 25% 北寄り床面直上 内・外面斜縁

第35号住居跡（第63図）

位置 調査区の西部，T5₆区。

規模と平面形 長軸6.64m，短軸6.58mの方形。

主軸方向 N-36°-W

壁 壁高は18～33cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，踏み固められ硬化している。南コーナーから南東壁一帯には馬蹄形の高まりがみられ，出入口施設に關係のあるものと考えられる。

ピット 5か所（P₁～P₅）。P₁～P₄は長径25～30cm，短径23～26cmの楕円形または不整形円形で，深さは55～74cmと深い。各コーナー付近に付設され，規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は長径20cm，短径15cmの楕円形で，P₃からやや北東に付設され，規模や位置から梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され，平面形は径70cmの円形で，深さは90cmである。深鉢状に掘り込まれ，底部は平坦である。底部及び壁面から粘土が多量に出土していることから，粘土貼りの貯蔵穴とも推測される。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック極微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，ローム中ブロック極微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック極微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック微量 |

炉 中央付近から北西方向に付設され，平面形は長径65cm，短径50cmの楕円形で，床面を3cm程掘り窪めた地床炉である。炉床の掘り込みは浅く，火熱を受けた硬化部分はみられない。炉内覆土には少量の焼土ブロックと焼土粒子の堆積がみられる程度である。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|---------|------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，種まり強 | 3 極暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | 炭化粒子・ローム粒子少量 |
| | | 5 暗赤褐色 | ローム粒子少量 |

覆土 5層から成る。耕作による攪乱を受けて全体の把握は難しいが，レンズ状に堆積している部分がみられるが，覆土下層から上層にかけ焼土粒子が，北西壁沿いには，覆土下層から上層にかけ炭化粒子を含む褐色土，暗褐色土の堆積状況がみられるところから，部分的ではあるが人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

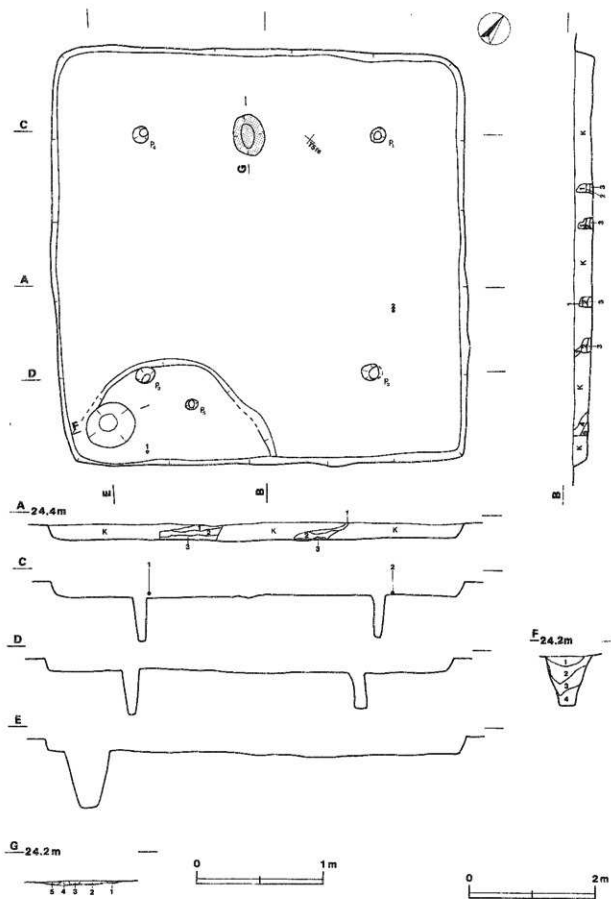
- | | | | |
|--------|--------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック極微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック極微量 | | |

遺物 覆土中層から床面直上にかけて少量の土師器片が出土している。第64図1の坏は南東壁際の床面直上から斜位の状態出土し，2の埴は北東寄りの床面直上から出土している。その他，3の凹石，4の磨石が覆土中から出土している。

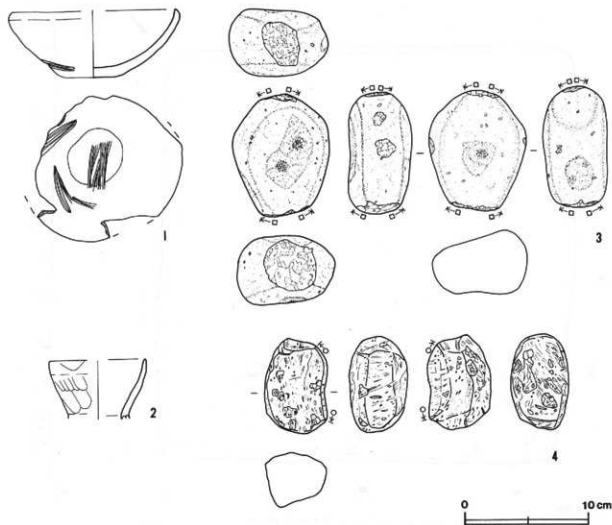
所見 本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第35号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64回 1	坏 土師器	A [13.2] B 5.3 C 4.4	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部外面上位に稜を持ち，内傾する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ，内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・石英・パミス 褐色 普通	P293 50% PL18 東南壁際床面直上 内部刻線 底部稜付着 底部及び体部外面 研磨痕



第03图 第35号住居跡実測図



第64図 第35号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 2	埴土師器	A [7.9] B (4.7)	頸部及び口縁部の破片、頸部中に倒い線を持ち、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナダ。頸部外面縦位のヘラナダ、内面ナダ。	砂粒・石英・長石 明褐色 普通	P294 10% 北東寄り床面直上

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第64図3	凹石	9.8	7.9	5.5	632.4	100	砂岩	覆土中	Q119
4	磨石	7.6	4.8	4.3	41.2	100	礫石	覆土中	Q120

(2) 竪穴遺構

当遺跡では、竪穴住居跡として調査した第4・14・18・19・22・24号住居跡は、床面に踏み締まりが見られないこと、柱穴と考えられるピットがないこと、埴が確認されていないことなどから、住居を目的とした竪穴住居跡と区別できるため、ここでは、これらを竪穴遺構とし、第1号～第6号竪穴遺構と改称して記載する。

第1号竪穴遺構 (第65図)

位置 調査区の西部, V5is区。

規模と平面形 長軸7.26m, 短軸3.95mの長方形。

長軸方向 N-31°-E

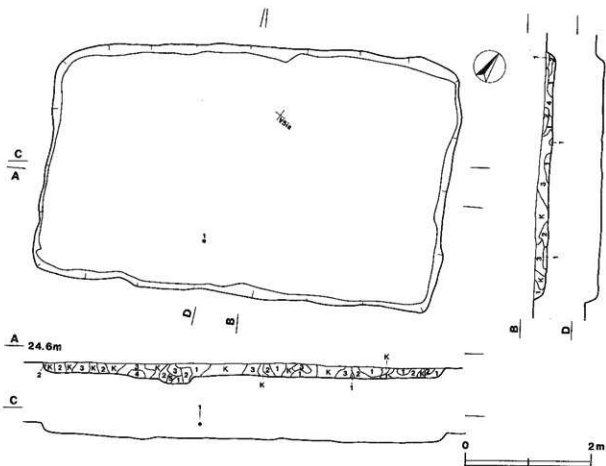
壁 掘り込みが浅く, 南東壁から南西壁にかけては耕作による攪乱を受けて残存部分が少ない。壁高は12~20cmで, 緩やかに外傾して立ち上がる。

床 平坦であるが, 踏み固まった部分は確認されない。攪乱によりローム塊混じりの褐色土がみられる。

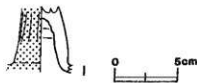
覆土 5層から成る。壁際からの流れ込みと思われる褐色土の堆積がみられる。下層から上層にかけ攪乱を受けている。人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 | 4 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 | 5 褐色 | ローム小ブロック中量, ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 | | |



第65図 第1号竪穴遺構実測図



第66図 第1号竪穴遺構出土遺物実測図

遺物 覆土中から土師器破片134点、坏片47点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物が少なく、しかも覆土中から出土している遺物も攪乱を受けている可能性もあり特定はできないが、覆土中から出土している土師器片から5世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

第1号竪穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 I	高坏 土師器	B (4.7)	脚部の破片。脚部は円柱状を呈する。	脚部外面へラ削り。外面赤彩。	砂粒・石英・蛭母 橙色 普通	P23 15% 覆土中 内面摩耗

第2号竪穴遺構 (第67図)

位置 調査区の北部、W7区。

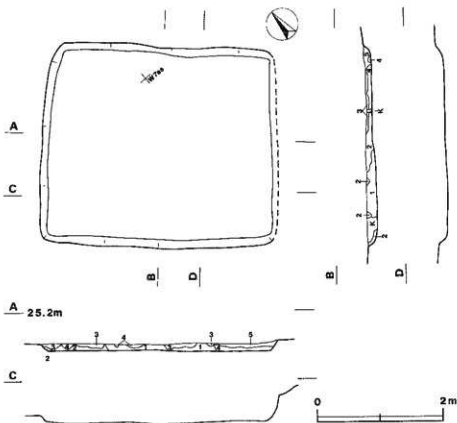
規模と平面形 長軸3.80m、短軸3.18mの長方形。

長軸方向 N-48°-W

壁 壁高は12~20cmで、緩やかに外傾している。

床 平坦で、床面はあまり踏み固められておらず全体的に散らかい。中央から北側に滲み状の黒色土の広がりみられる。

覆土 5層から成る。壁際には流れ込みと思われる暗褐色土の堆積、中層から上層にかけては砂を含む明褐色土の層が薄く堆積している。人為堆積と考えられる。



第67図 第2号竪穴遺構実測図

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|----------------------|
| 1 橙 色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、結まり強 | 4 暗 褐色 | ローム小ブロック・砂少量、ローム粒子微量 |
| 2 明 褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子微量 | 5 黒 褐色 | ローム小ブロック中量、ローム粒子微量 |
| 3 明赤褐色 | ローム粒子・砂少量 | | |

遺物 覆土中から土師器片壺72点、坏11点、鉄片3点が出土しているが、本跡に伴う明確な出土遺物はなかった。

所見 本跡の時期は、出土遺物が少なく、また、覆土中から出土している土師器片も攪乱を受けている可能性があり特定できないが、覆土中から出土している土師器片から5世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

第3号竪穴遺構 (第68図)

位置 調査区の北部、U76区。

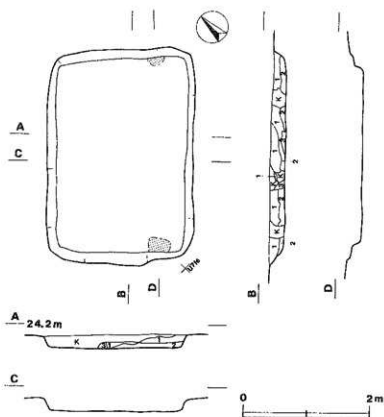
規模と平面形 長軸3.41m、短軸2.29mの長方形。

長軸方向 N-47°-E

壁 北東壁と南西壁の上部は、耕作による攪乱を受け残存状況が悪い。壁高は15~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、踏み締まった硬化部分は確認されず、全体的に柔らかい。

覆土 3層から成る。中層から上層にかけて攪乱を受けているが、南と東の両コーナー付近の床面上には粘土粒子混じりの褐色土と焼土ブロックを含む明赤褐色のローム土の堆積がみられる。部分的にレンズ状の堆積状況がみられるが、人為堆積と考えられる。



第68図 第3号竪穴遺構実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 明褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 覆土中から出土している土師器片1点と、土師質須恵器1点が出土しているだけである。

所見 本跡の時期は、遺構に伴う明確な出土遺物がないことから特定することはできないが、土師器片の様相から5世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

第4号竪穴遺構(第69図)

位置 調査区の北側、U7_{er}区。

規模と平面形 長軸3.73m、短軸2.93mの長方形。

長軸方向 N-47°-W

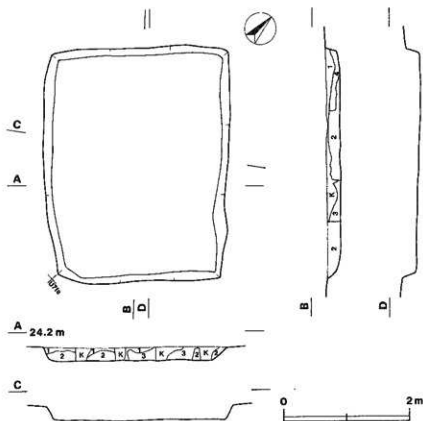
壁 壁高は18~23cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、踏み締まりのある硬化した部分もなく、全体的に軟らかい。

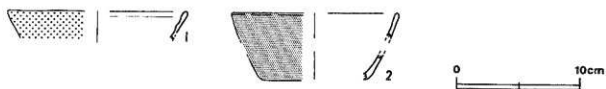
覆土 4層から成る。壁際にはローム粒子を含む明褐色土が堆積する。覆土下層から上層にかけて部分的に耕作による攪乱を受けている。人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、粘性強
- 2 明褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量、炭化粒子極微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量



第69図 第4号竪穴遺構実測図



第70図 第4号竪穴遺構出土遺物実測図

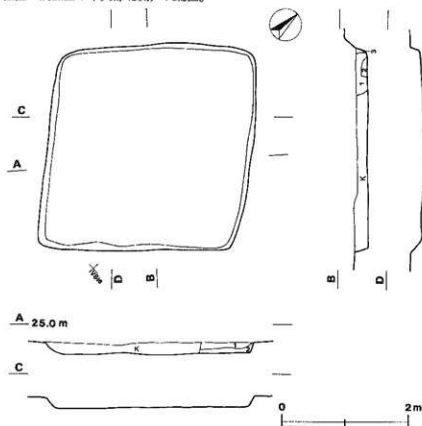
遺物 覆土中から土師器甕片56点、坏片4点が出土しているだけで、遺構に伴う明確な出土遺物がみられない。
所見 本跡は、出土遺物がいずれも覆土中であり、しかも攪乱を受けている可能性があるため、時期を特定することはできないが、覆土中から出土している土師器の様相から、5世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

第4号竪穴遺構出土遺物観察表

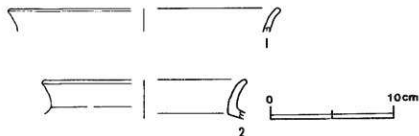
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 1	高土師器	A [14.2] B (2.4)	坏部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。外面赤彩。	砂粒・石英にふい褐色普通	P152 5% 覆土中 内・外面刺刺痕
2	坏土師質須恵器	A [13.4] B (2.0) C [8.2]	体部及び口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面回転ヘラ削り。外面黒色処理。	砂粒・雲母灰白色不良	P153 5% 覆土中

第5号竪穴遺構 (第71図)

位置 調査区の中央部北側、V8ha区。



第71図 第5号竪穴遺構実測図



第72図 第5号竪穴遺構出土遺物実測図

規模と平面形 長軸3.30m, 短軸3.22mの方形。

長軸方向 N-40°-W

壁 壁高は15~16cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 踏み固まった部分も確認されず, 全体的に軟らかい。中央付近と南東壁付近にかけて耕作による攪乱を受けている。

覆土 3層から成る。部分的にローム粒子を含む暗褐色土の厚い堆積状況がみられる。人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
 2 褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量
 3 褐色 ローム粒子微量, 炭化粒子極微量

遺物 覆土中から土師器破片50点が出土しているが, 遺構に伴う明確な出土遺物はみられない。

所見 本跡の時期は, 遺構に伴う出土遺物がないことから特定はできないが, 覆土中から出土している土師器片の様相から5世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

第5号竪穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 1	壺 土師器	A [21.8] B (1.8)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英 にふい橙色 普通	P154 5% 覆土中 外面横ナデ付
2	壺 土師器	A [16.4] B (2.7)	口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・霏母 にふい橙色 普通	P155 5% 覆土中

第6号竪穴遺構 (第73図)

位置 調査区の中央部北側, V8a区。

規模と平面形 長軸5.10m, 短軸3.58mの長方形。

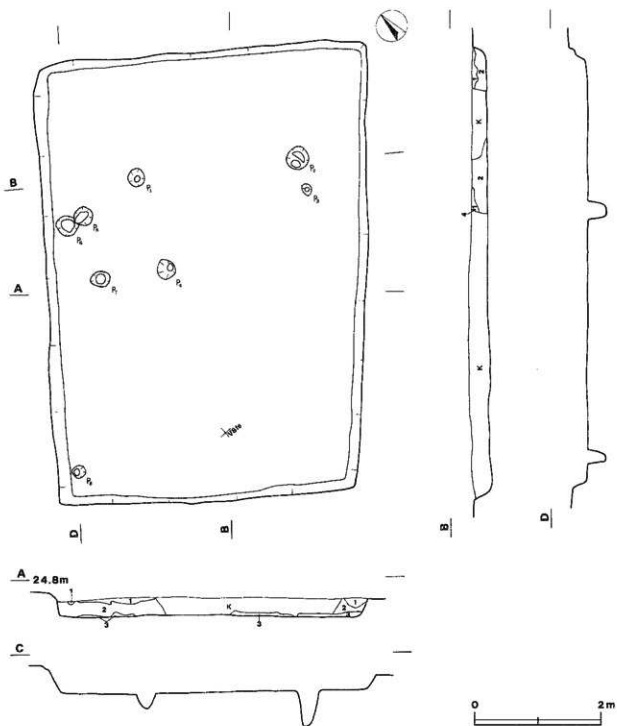
長軸方向 N-40°-E

壁 壁高は16~18cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 踏み固まった部分も確認されず, 全体的に軟らかい。

ビット 8か所 (P₁~P₈)。P₁~P₈は長径20~39cm, 短径19~35cmの楕円形ビットで, 深さは20~35cmである。P₂は中央位途中に張り出しがみられる。P₃はP₈を削平するように付設されている。何れもビットの性格は不明である。

覆土 3層から成る。耕作による攪乱を受けている。一部にローム粒子を含む褐色土の堆積がみられる。

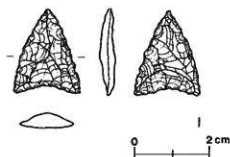


第73図 第6号竪穴遺構実測図

土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子微量、結まり強 |
| 3 | 褐色 | ローム小ブロック中量、ローム粒子微量、粘性強 |
| 4 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |

遺物 遺構に伴う出土遺物がほとんどなく、覆土中から土師器の甕片1点、甕片1点が出土しているだけである。石鏃1点が出土しているが混入したものとおわれる。



第74図 第6号竪穴遺構出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、遺構に伴う出土遺物がないことから特定はできないが、土師器片の様相から5世紀後半頃のものではないかと推測される。性格は不明である。

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第74図1	石 鏃	2.3	1.8	0.5	1.3	100	チャート	中央部覆土下層	Q57 P L19

(3) 土坑

第220号土坑 (第75図)

位置 調査区の東部、W7区。

規模と平面形 長径1.50m、短径1.35mの楕円形で、深さ0.35mである。

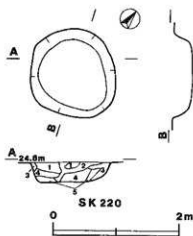
長径方向 N-45°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

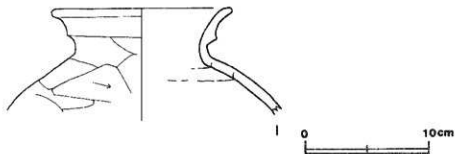
覆土 5層から成る。人為地積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、炭化粒子
粒微量 | 4 黒褐色 | 炭化粒子・ローム粒子少量 |
| | | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |



第75図 第220号土坑実測図



第76図 第220号土坑出土遺物実測図

遺物 覆土の中層付近から土器器片が出土している。第76図1の壺は土坑中央の覆土中層から正位の状態出土したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半頃のものと考えられるが、性格は不明である。

第220号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第76図 1	壺 土 器	A 14.3 B (8.1)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は頸部との境に強い稜を持ち、口縁部は外反する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部外面へツ刷り後ナデ、内面磨ナヘラナデ。	砂粒・長石 によい褐色 普通	P264 30% 中央寄り覆土中層 体部外面曝付着

3 平安時代の遺構と遺物

当遺跡からは、調査区の西部南側と中央部の2か所で平安時代の竪穴住居を2軒確認した。第2号住居跡の竈は北東向きに付設されているが、袖部が削平され残存せず、中央部が耕作に伴う攪乱を受け残存状況は良くなかった。第25号住居跡の竈の残存状況は比較的良好だが竈を付設する方向が南向きと、両住居跡では対照的な住居の構築となっている。

以下、遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第2号住居跡(第77図)

位置 調査区の西部、V6a2区。

規模と平面形 長軸3.40m、短軸3.23mの方形。

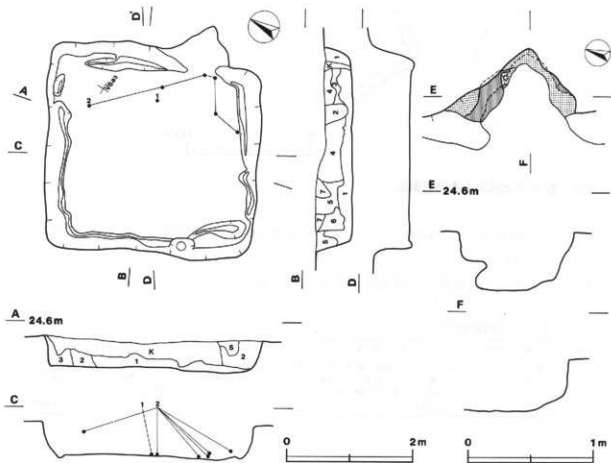
主軸方向 N-65°-E

壁 壁高は45~63cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

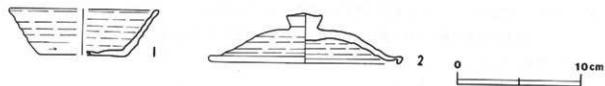
壁溝 北コーナー付近を除き周回している。上幅5~28cm、深さ約4cmで、断面形は皿状をしている。

床 ほぼ平坦で、踏み締まった堅い部分は確認されない。北西部に多少高まりがある。

竈 北東壁中央から東寄りの壁面を約80cm壁外に掘り込み、ロームを掘り残して袖基部とし、砂混じりの粘土で構築されている。規模は、長さ85cm、幅65cmである。天井部は崩落し、両袖部も残存してない。燃焼部には、焼土ブロック、焼土粒子、炭化粒子がみられる。火床部はほとんど掘り覆められていないが、熱を受けて赤変硬化し、内壁も焼土化している。攪乱を受け覆土中には黒土が混入し、確認できたのは2層のみである。煙道は火床から緩やかに外傾しているが、立ち上がりの部分は攪乱で確認されない。



第77図 第2号住居跡実測図



第78図 第2号住居跡出土遺物実測図

覆土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化
粒子微量
2 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子極微
量、締まり強

覆土 7層から成る。下層から上層にかけてロームブロックを含む暗褐色土が厚く地積し、各層にわたって粘土粒子と砂が混じる。中層から上層付近は広く攪乱されている。人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、粘土粒子・砂微量
2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、粘土粒子・砂
微量
3 黒褐色 ローム小ブロック・砂少量、ローム粒子・粘土粒子
微量
4 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂少量
5 黒褐色 ローム小ブロック・粘土粒子・砂少量、ローム粒子
微量
6 黒褐色 粘土粒子・砂少量、ローム小ブロック・ローム粒子
微量
7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂少量

遺物 覆土中から土師器壺片231点、坏片12点、須恵器坏片2点が出土している。遺構に伴う遺物は覆土下層から少量出土しているだけである。第78図1と2の坏、坏蓋は東寄りの竈と周辺の覆土下層から出土し、1の坏は北東寄りの床面直上から逆位の状態で出土し、2の坏蓋は、電焚き口付近の覆土下層及び床直上から出

土しているつまみ部に、北寄りの覆土中層から出土している坏片が接合したものである。

所見 本跡から出土している灰蓋の接合関係をみると、須恵器片を意図的に投げ込んでいるようにも思われ、祭祀行為との関係も推測される。時期は、出土遺物から8世紀後半と考えられる。

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第78図 1	坏 酒 壺 器	A 12.0 B 3.7 C [7.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部下位部軽へラけずり、底部一方向のへら削り。	砂粒・灰石・曹母 灰白色 良好	P 8 40% P L18 北東寄り灰蓋遺土
2	坏 須 恵 器	A 15.6 B 4.0 F 2.9 G 1.1	天井部及び口縁部一部欠損。つまみは上部に突起があり、外周部が接合部よりも大きい。天井部から口縁部へなだらかに下降する。底部は屈曲し、強く压下する。	天井部向転へら削り。	砂粒・灰石・石英 赤灰色 良好	P 9 45% P L18 電焚き口付近辺 土下層

第25号住居跡 (第79図)

位置 調査区の西部、V5a区。

規模と平面形 長軸3.24m、短軸2.99mの長方形。

主軸方向 N-28°E

壁 南西壁は調査区外で確認できず、さらに木根による攪乱と耕作による攪乱を複雑に受けている。壁高は22~53cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが、中央部から南側にかけてやや南下がりに傾斜している。踏み固まった部分は確認できなかった。

竈 南コーナーの壁面を約108cm壁外に掘り込み、ロームを掘り残して袖基部とし、砂混じりの粘土で構築されている。規模は、長さ150cm、幅100cmである。天井部は崩落しているが、南西の袖部は一部残存している。燃焼部には、焼土ブロック、焼土粒子、炭化粒子がみられる。火床部は約5cm掘り窪められ、熱を受けて赤変硬化しており、内壁はやや焼土化している程度である。火床部底部からは壺が逆位に置かれた状態で出土している。煙道は、約30度の傾きを持って直線的に立ち上がる。類例の少ない南向きの竈であり、造り替えも考えられたが、その痕跡は確認されなかった。

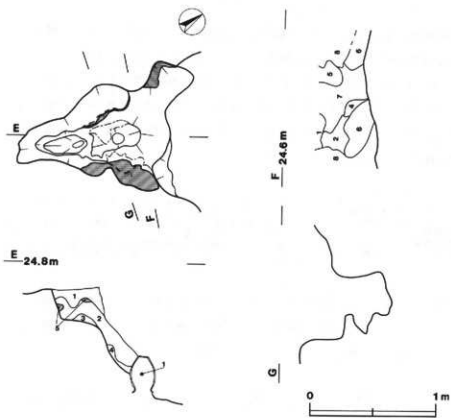
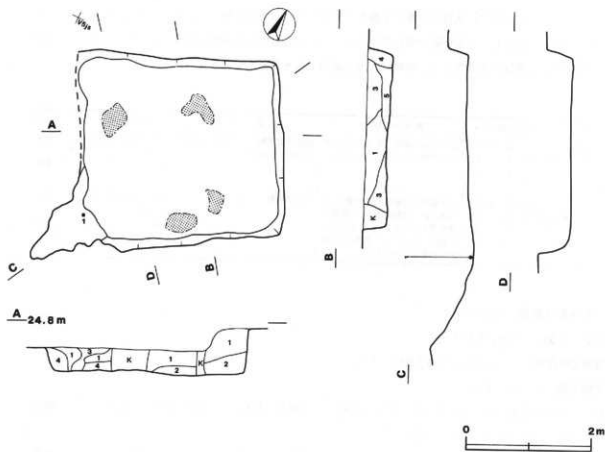
覆土層解説

1 暗褐色	炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子微量	5	にぶい黄褐色	粘土粒子多量、砂少量、焼土粒子・炭化物微量、粘性・締まり強
2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量、炭化物微量	6	明赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子多量、炭化物・粘土粒子少量
3 褐色	炭化物・粘土粒子微量	7	褐色	焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
4 にぶい赤褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化物・粘土粒子少量	8	褐色	ローム小ブロック少量、炭化物微量、粘性・締まり強

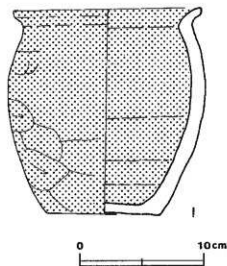
覆土 5層から成る。覆土下層から上層にかけて、壁際からの流れ込みと思われる褐色土と暗褐色土の厚い堆積がみられる。各層にはロームブロック、ローム粒子が混入し、中央部から竈付近の下層部にかけて焼土粒子と粘土粒子の堆積がみられる。中層から上層にかけて耕作による攪乱を受けている。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、締まり強
2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、締まり強	5	暗褐色	ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム小ブロック少量、ローム粒子微量			



第79图 第25号住居跡实测图



第80図 第25号住居跡出土遺物実測図

遺物 覆土中から土師器破片141点が出土している。第80図1の常総型甕は甕焚き口付近の底部から、意図的に逆位に伏せた状態で出土し、内部は半空洞状を呈していた。

所見 本跡は南コーナーに甕を付設する住居跡である。甕の位置関係から造り替えも考えられ、その痕跡を調査したがそうした痕跡はみられなかった。時期は、出土遺物から9世紀前半と考えられる。

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 1	甕 土師器	A 15.0 B 16.6 C 9.0	口縁部一部欠損。平底。体部は上位に最大径を持ち、内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部内・外縁及び頸部横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・骨母 に多い黄褐色 普通	P216 98% PL18 甕焚き口付近底部 内面割離

(2) 土坑

第67号土坑 (第81図)

位置 調査区の西部、V5a区。

規模と平面形 長径2.20m、短径1.75mの不整形で、深さ0.25mである。

長径方向 N-46°-E

壁面 北東壁は削平され殆ど残存しないが、南西壁は緩やかに外傾している。

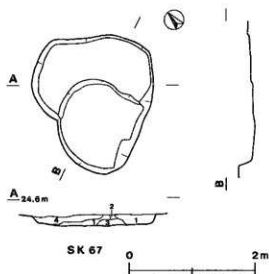
底面 平坦である。

覆土 4層から成る。人為堆積と考えられる。

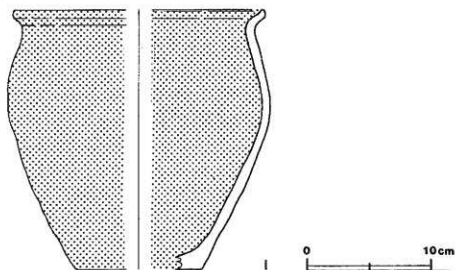
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 4 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量

遺物 覆土の中層から下層にかけて、土師器片が出土している。第82図1の常総型甕は中央付近の覆土下層から出土したものである。



第81図 第67号土坑実測図



第82図 第67号土坑出土遺物実測図

所見 本跡は、土坑として取り扱ったが、形状が不明確であるため、堅穴遺構の可能性もある。遺構の確認状況と出土遺物から8世紀後半から9世紀前半のものと考えられる。性格は不明である。

第67号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第82図 1	壺 土 師 器	A [20.0] B 20.8 C [10.0]	底形から口縁部の破片。平底。体部上位に最大径を持ち、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部を僅か上方に據まり上げている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨き、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・霞母 橙色 普通	P263 58% PL18 中央付近遺土下層 体部内面横ナデ

4 その他の遺構と遺物

(1) 土 坑

調査区のはほぼ全域から土坑158基を確認した。形状や規模には各々差異が認められ、遺物も殆どなく、時期や性格について不明の部分が多い。ここでは、調査した土坑について一覧表(表2)に記載した。

表2 中下根遺跡土坑一覽表

土坑 番号	位 置	長短方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
1	T6 _{0a}	N-35°-E	不整楕円形	0.89×0.68	64	緩斜	凹凸	人為	
3	T6 _{0b}	N-39°-E	長方形	0.98×0.85	47	外傾	皿状	人為	
5	T6 _{0c}	N-47°-E	楕円形	0.48×0.36	28	外傾	平坦	自然	
7	T6 _{0d}	N-48°-E	不整楕円形	0.88×0.47	30	緩斜	皿状	人為	
8	T6 _{0e}	N-40°-W	不整形	0.62×0.52	46	垂直	皿状	自然	
9	T7 _{1a}	N-61°-W	不整形	1.61×1.03	57	緩斜	皿状	人為	
11	T6 _{0a}	N-41°-W	楕円形	0.94×0.58	36	外傾	皿状	自然	
13	T6 _{0a}	N-32°-E	不整円形	0.48×0.47	44	外傾	皿状	人為	
15	T6 _{0a}	N-6°-E	不整形	0.81×0.36	54	外傾	凹凸	人為	
18	U7 _{0a}	N-45°-E	楕円形	0.49×0.38	22	外傾	皿状	自然	
19	U7 _{0a}	N-64°-W	円形	0.58×0.57	27	緩斜	皿状	人為	
20	U7 _{0a}	N-49°-W	長楕円形	2.36×0.78	40	外傾	平坦	人為	
21	U7 _{0a}	N-60°-W	楕円形	2.00×1.18	95	緩斜	平坦	人為	
25	U7 _{0a}	N-58°-E	楕円形	1.05×0.69	28	緩斜	皿状	自然	
26	U7 _{0a}	N-45°-W	不整長方形	1.45×0.36	32	外傾	皿状	自然	
27	U7 _{0a}	N-40°-W	不整楕円形	1.02×0.41	46	緩斜	皿状	人為	
30	U6 _{0a}	N-52°-E	不整楕円形	0.88×0.71	18	外傾	皿状	人為	
31	U6 _{0a}	N-56°-E	不整楕円形	0.74×0.54	34	外傾	皿状	人為	
32	U6 _{0a}	N-36°-E	不整長楕円形	1.82×0.87	53	外傾	平坦	自然	
35	U6 _{0a}	N-43°-E	不整形	1.95×0.94	65	外傾	平坦	人為	
37	U6 _{0a}	N-53°-W	不整長方形	2.74×1.11	72	外傾	平坦	自然	
38	U6 _{0a}	N-35°-E	不整長方形	1.50×0.82	70	外傾	平坦	人為	
39	U6 _{0a}	N-57°-W	不整形	1.20×0.71	54	外傾	皿状	人為	
44	U6 _{0a}	N-49°-W	不整円形	1.12×0.94	23	垂直	平坦	人為	
45	U6 _{0a}	N-72°-W	不整楕円形	1.19×0.79	35	外傾	皿状	人為	
49	U5 _{0a}	N-43°-E	楕円形	0.89×0.73	36	外傾	皿状	自然	
50	U6 _{0a}	N-20°-E	不整円形	0.50×0.48	56	外傾	平坦	自然	
51	U6 _{0a}	N-47°-E	不整円形	0.38×0.37	28	外傾	皿状	人為	
53	U6 _{0a}	N-87°-E	不整楕円形	1.79×0.95	58	外傾	皿状	人為	
56	U6 _{0a}	N-51°-W	不整楕円形	1.26×0.56	30	緩斜	皿状	自然	
57	U6 _{0a}	N-50°-E	不整楕円形	0.46×0.32	32	外傾	皿状	自然	
59	U6 _{0a}	N-47°-W	不整長方形	1.42×0.62	35	外傾	平坦	自然	
60	U6 _{0a}	N-6°-W	不整形	1.16×0.53	35	緩斜	平坦	人為	
63	U5 _{0a}	N-53°-E	円形	0.75×0.74	18	外傾	平坦	自然	
64	U5 _{0a}	N-46°-W	楕円形	1.06×0.74	20	外傾	平坦	人為	
67	V5 _{0a}	N-46°-E	不整形	2.20×1.75	25	緩斜	平坦	人為	土師器片25(坏6, 壺19), 常盤型壺1点
70	U5 _{0a}	N-51°-W	円形	0.93×0.93	37	外傾	平坦	自然	
72	W5 _{0a}	N-57°-W	楕円形	0.80×0.66	25	緩斜	皿状	人為	
73	V5 _{0a}	N-51°-W	楕円形	1.32×0.86	45	外傾	平坦	人為	土師器片39(坏6, 壺33)
74	V6 _{0a}	N-48°-W	不整形	0.85×0.63	45	外傾	皿状	自然	
75	W6 _{0a}	N-51°-W	不整形	1.00×0.69	41	外傾	凹凸	自然	
79	V6 _{0a}	N-57°-W	不整楕円形	0.78×0.70	25	緩斜	平坦	自然	
81	V6 _{0a}	N-42°-E	楕円形	1.53×1.13	24	緩斜	平坦	人為	
87	V6 _{0a}	N-41°-W	圓丸長方形	1.87×1.20	88	外傾	平坦	人為	
89	V6 _{0a}	N-40°-E	圓丸方形	2.70×2.62	96	緩斜	平坦	人為	

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)				
90	U6 ₀	N-50°-E	不整形円形	1.32×0.95	24	緩斜	凹状	人為	
92	U7 ₂₅	N-70°-W	不整形円形	2.80×1.80	71	緩斜	凹状	自然	
93	U7 ₃	N-22°-E	不整形	1.25×0.85	85	緩斜	平坦	人為	
97	U7 ₁	N-85°-W	楕円形	0.90×0.65	24	緩斜	凹状	自然	
103	U7 ₁₇	N-38°-E	楕円形	0.94×0.74	35	緩斜	平坦	自然	
104	U7 ₁₇	N-37°-E	円形	0.60×0.56	24	緩斜	凹凸	人為	
105	U7 ₁₀	N-7°-E	楕円形	1.20×0.80	33	緩斜	平坦	人為	
106	U7 ₁	N-63°-E	不整形楕円形	2.15×0.86	51	垂直	平坦	人為	
107	U7 ₁₀	N-37°-W	不整形楕円形	1.73×0.85	49	外傾	平坦	人為	
108	U7 ₂₅	N-43°-W	楕丸長方形	1.75×0.93	40	外傾	平坦	自然	
109	U6 ₁	N-73°-W	不整形楕円形	2.14×0.66	34	緩斜	平坦	自然	
110	U7 ₂₅	N-37°-E	不整形円形	1.16×0.81	23	緩斜	凹状	人為	
111	U8 ₁	N-31°-W	楕円形	0.88×0.72	25	緩斜	凹状	人為	
112	U7 ₁₀	N 12°-E	不整形	2.75×1.10	25	緩斜	凹凸	自然	
113	U7 ₁₀	N-20°-W	不整形円形	1.66×1.10	30	緩斜	凹状	自然	
114	U7 ₁₀	N-37°-E	楕丸長方形	1.76×0.68	36	外傾	平坦	自然	
115	U7 ₁	N 0°	不整形	1.55×0.74	50	外傾	平坦	人為	
116	U7 ₁₀	N-45°-E	不整形	3.30×2.03	75	緩斜	凹凸	自然	
118	V7 ₂₅	N 40°-E	楕円形	1.05×0.76	20	緩斜	平坦	自然	
121	V7 ₁₀	N-38°-E	円形	1.10×1.00	38	緩斜	凹状	自然	
122	U7 ₁₀	N-40°-E	楕円形	1.13×0.94	29	緩斜	平坦	自然	
123	U7 ₁₀	N-36°-E	円形	0.93×0.92	28	緩斜	凹状	人為	
124	U7 ₁₀	N-42°-W	楕円形	0.88×0.75	38	緩斜	平坦	人為	
125	U7 ₁₀	N 4°-W	不整形	3.00×1.05	45	緩斜	平坦	自然	
126	U7 ₁₀	N-42°-E	不整形	6.00×1.20	23	外傾	平坦	人為	
127	U7 ₁₀	N-40°-E	円形	1.00×0.96	24	緩斜	平坦	自然	
130	U8 ₁	N-27°-E	長楕円形	3.00×1.10	29	外傾	平坦	人為	
131	U8 ₁	N-33°-E	楕丸長方形	2.51×1.20	34	緩斜	平坦	自然	
132	U8 ₂	N-45°-E	楕円形	0.92×0.80	23	外傾	凹状	自然	
133	U8 ₂₅	N-38°-W	楕円形	1.30×1.06	28	緩斜	平坦	自然	
136	V8 ₂	N-40°-E	楕円形	2.26×1.75	25	緩斜	平坦	人為	
137	V8 ₂	N-47°-W	円形	0.74×0.72	31	緩斜	平坦	自然	
139	V8 ₂	N-58°-E	不整形	7.85×2.13	25	緩斜	平坦	自然	
140	V7 ₂	N-27°-E	楕円形	1.42×0.92	30	緩斜	平坦	自然	
141	V7 ₁₀	N-45°-W	不整形円形	1.28×1.05	20	緩斜	平坦	人為	
143	V8 ₁₀	N 32°-E	不整形円形	1.77×0.95	23	緩斜	平坦	自然	
144	V8 ₁₀	N 24°-W	楕円形	1.05×0.90	30	緩斜	凹状	自然	
146	V8 ₁₀	N-54°-E	不整形	4.40×2.23	51	緩斜	凹凸	自然	
147	V8 ₁₀	N-53°-E	不整形	1.05×1.40	35	緩斜	凹凸	自然	
149	V8 ₁₀	N-42°-E	不整形	2.90×1.54	42	緩斜	凹状	自然	
151	V8 ₂	N-21°-E	不整形円形	1.29×1.22	27	緩斜	平坦	自然	
152	V8 ₁₀	N-71°-E	不整形	1.59×1.42	47	外傾	平坦	人為	
156	V7 ₁₀	N-76°-E	不整形	1.91×0.92	23	外傾	平坦	人為	
157	V8 ₁₀	N-45°-W	不整形円形	1.34×0.94	32	外傾	平坦	人為	
161	V7 ₁₀	N-48°-W	不整形円形	1.04×0.80	27	外傾	平坦	人為	
162	V7 ₁₀	N-38°-E	不整形円形	1.07×0.94	33	外傾	凹凸	自然	

土坑 番号	位 置	方位方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	備 考
				長さ×幅(m)	深さ(m)				
163	V7 ₁₃	N-40°-W	不整形長方形	1.77×0.84	23	外傾	平坦	人為	
164	V7 ₁₄	N-21°-W	楕円形	1.03×0.77	28	外傾	凹状	人為	
166	V7 ₁₆	N-12°-W	不整形円形	0.72×0.58	21	外傾	平坦	自然	
167	V7 ₁₇	N-48°-W	不 整 形	1.35×0.69	25	外傾	平坦	人為	
168	V7 ₁₈	N-53°-W	不整形円形	1.05×0.61	20	外傾	平坦	人為	
169	V7 ₁₉	N-44°-E	不整形円形	0.97×0.82	22	外傾	凹凸	自然	
170	V7 ₂₀	N-68°-E	不整形円形	1.25×1.05	22	外傾	平坦	人為	
171	V7 ₂₁	N-46°-E	不 整 形	0.66×0.58	30	外傾	凹凸	自然	
172	V7 ₂₂	N-33°-E	不整形円形	0.94×0.68	29	外傾	凹凸	自然	
173	V7 ₂₃	N-40°-E	不 整 形	0.83×0.56	23	外傾	凹状	人為	
176	V7 ₂₆	N-44°-E	楕円形	0.90×0.60	24	外傾	平坦	自然	
178	V7 ₂₈	N-90°	楕円形	1.22×0.86	32	緩斜	凹状	人為	
179	V7 ₂₉	N-72°-E	楕円形	1.04×0.58	42	緩斜	凹状	自然	
180	V7 ₃₀	N-8°-E	楕円形	0.56×0.46	21	緩斜	平坦	自然	
182	V8 ₁₁	N-25°-E	隅丸長方形	2.18×0.60	22	緩斜	凹状	人為	
184	V8 ₁₃	N-63°-E	楕円形	1.70×1.03	41	外傾	平坦	人為	
185	V8 ₁₄	N-57°-E	不整形円形	1.31×0.76	35	外傾	平坦	自然	
189	V8 ₁₉	N-57°-W	円 形	1.20×1.12	24	外傾	平坦	人為	
190	V8 ₂₀	N-57°-W	不 整 形	1.17×0.96	26	外傾	凹状	自然	
191	V8 ₂₁	N-42°-W	楕円形	1.95×1.10	50	外傾	平坦	自然	
193	V7 ₃₁	N-45°-E	楕円形	1.73×0.92	20	緩斜	平坦	自然	
194	V7 ₃₂	N-25°-E	不整形円形	1.30×0.85	25	緩斜	凹凸	自然	
202	W7 ₁₀	N-77°-E	不 整 形	2.06×1.33	28	外傾	平坦	自然	土師器片42点(F9, 壺33)
209	W6 ₁₁	N-52°-W	不 整 形	1.75×0.88	33	垂直	平坦	人為	
211	V8 ₂₃	N-63°-E	不 整 形	3.28×2.71	24	緩斜	平坦	人為	
212	V8 ₂₄	N-85°-E	不整形円形	1.92×1.62	49	緩斜	凹状	人為	
213	V8 ₂₅	N-70°-E	不整形円形	0.95×0.66	23	外傾	平坦	人為	
218	V8 ₃₀	N-53°-E	不整形長方形	1.97×1.70	22	緩斜	凹凸	人為	
219	V8 ₃₁	N-22°-W	不整形長方形	4.06×1.59	20	外傾	平坦	人為	
220	W7 ₁₂	N-45°-W	楕円形	1.50×1.35	35	緩斜	平坦	人為	土師器片45点(F12, 壺33)
221	W8 ₁₁	N-84°-E	不整形円形	2.64×1.52	22	外傾	凹凸	自然	
223	W8 ₁₃	N-51°-W	不 整 形	1.22×0.90	25	緩斜	平坦	人為	
225	U6 ₁₁	N-77°-W	不 整 形	0.80×0.61	28	緩斜	凹状	人為	SI3を盛り込んでいる。
226	W9 ₁₁	N-23°-W	不 整 形	3.64×1.03	22	外傾	平坦	自然	
229	W9 ₁₃	N-75°-E	不 整 形	1.48×1.11	68	外傾	凹状	人為	
234	W9 ₁₅	N-20°-E	不整形円形	0.62×0.57	23	外傾	平坦	人為	
235	W9 ₁₆	N-62°-E	円 形	0.55×0.50	25	外傾	平坦	人為	
237	X8 ₁₁	N-20°-W	楕円形	0.75×0.60	25	緩斜	平坦	自然	
239	V8 ₃₃	N-41°-E	不整形長方形	1.95×1.23	27	緩斜	平坦	自然	
240	W8 ₁₅	N-22°-E	円 形	0.68×0.67	34	緩斜	凹状	自然	
243	W8 ₁₇	N-59°-W	不整形長方形	2.00×0.95	20	緩斜	平坦	人為	
244	U5 ₁₁	N-44°-E	楕円形	1.44×0.59	50	垂直	平坦	自然	
245	U5 ₁₃	N-14°-W	楕円形	0.94×0.78	22	外傾	凹状	自然	
246	U5 ₁₅	N-24°-E	楕円形	0.73×0.60	55	外傾	平坦	自然	
247	T5 ₁₁	N 38°-E	楕円形	0.93×0.63	40	外傾	平坦	自然	
248	T5 ₁₃	N-53°-W	楕円形	1.80×0.68	40	緩斜	凹状	自然	

上坑 番号	位置	方位方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	備 考
				長さ×幅径 (m)	深さ (cm)				
249	U4a	N-17°-E	楕円形	1.88×0.71	50	垂直	凹状	自然	
250	T4a	N-81°-E	不整形	1.30×0.90	45	緩斜	凹状	自然	
251	T4a	N-48°-E	不整形	1.97×0.85	35	外傾	凹状	自然	
252	T6a	N-3°-E	不整形	1.36×1.36	34	緩斜	凹状	自然	
253	T6a	N-75°-W	不整形	1.50×0.74	39	外傾	凹状	自然	
254	T5a	N 44°-E	楕円形	1.72×1.05	58	外傾	平坦	自然	
255	T5a	N-36°-E	楕円形	1.87×1.27	69	外傾	平坦	自然	
256	T6a	N-82°-W	不整形	1.80×1.45	75	外傾	凹状	自然	
257	T6a	N-38°-W	楕円形	1.55×1.20	39	緩斜	凹状	自然	
258	T6a	N-54°-W	不整形	2.05×1.36	85	外傾	平坦	自然	
259	T5a	N-16°-E	楕円形	2.73×1.14	41	外傾	凹状	自然	
260	T4a	N-12°-E	円形	0.46×0.41	36	外傾	凹状	自然	
261	T4a	N-60°-E	不整形	0.57×0.54	29	外傾	凹状	自然	
262	T4a	N-67°-W	不整形	0.67×0.59	22	緩斜	凹状	自然	
263	T4a	N-64°-W	不整形	0.70×0.62	23	緩斜	凹状	自然	
264	T4a	N-44°-W	不整形	0.86×0.75	62	外傾	凹状	自然	
265	S4a	N-68°-E	不整形	1.20×1.03	29	外傾	平坦	自然	
266	T5a	N-24°-W	長楕円形	2.86×1.23	100	外傾	凹状	自然	
267	T5a	N-34°-E	不整形	1.30×1.21	86	外傾	凹状	自然	
268	T5a	N-45°-W	楕円形	1.64×1.35	72	外傾	平坦	自然	
270	T5a	N-30°-W	楕円形	1.80×1.06	61	外傾	平坦	自然	

(2) 溝

今回の調査では、時期不明の溝1条を確認した。以下、確認した遺構について記載する。

第1号溝 (付図1)

位置 調査区の南西部から北東部中央付近, V5a~U7a区。

確認状況 本跡は、遺構確認調査時から黒色土混じりの堆積状況がみられた。

規模と形状 全長120mで、端部はそれぞれ調査区外に延びている。最大幅は2.5mで、最小幅は1.6mである。

断面形は「V」字状をし、深さは最大で0.7mである。底部は菓研掘りの様相を呈する。

方向 N-57°-E

壁面 中位付近には凹凸がある。中位から上位にかけて耕作による攪乱を受けている。

覆土 8層から成る。一部攪乱を受けているが自然堆積と考えられる。

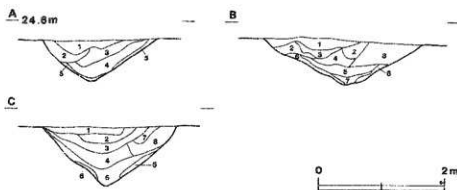
土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子少量 | 7 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極微量 |

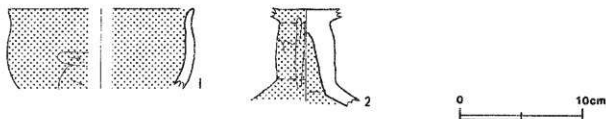
遺物 覆土中層から底部にかけての出土遺物は殆どみられず、僅かに土師器片が出土しているだけである。第84図1の碗は覆土下層から横位の状態で、2の高杯は覆土下層から斜位の状態で出土したものである。底部

からの出土遺物はみられない。

所見 本跡に伴う出土遺物が殆どないため、時期及び性格は不明である。



第83図 第1号溝断面図



第84図 第1号溝出土遺物実測図

第1号溝出土遺物観察表

図地番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	助土・色調・焼成	備 考
表84図 1	碗 土 器 器	A [14.8] B (6.3)	体部中位から口縁部の破片。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母褐色 普通	P265 10% 覆土下層
2	高 坏 土 器 器	B (8.4)	脚部の破片。脚部は柱状を呈し、中位に僅かな膨らみを持ち、下位で狭く。	脚部外面へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・スコリア 赤褐色 普通	P266 10% 覆土下層

5 遺構外出土遺物

当遺跡からは、表探及び遺構確認の際に出土したのも含めた遺構に伴わない旧石器時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち、縄文時代の土器片、弥生時代の土器片及び古墳時代の須恵器片の特徴的なものについて解説をし、その他の出土遺物については一覧表で記載する。

縄文時代 (第85図)

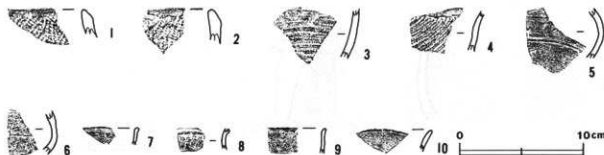
1と2は後期前葉の土器である。共に深鉢の波状口縁部の破片で、単節縄文RLを縦位回転で粗く施文している。壺之内1式土器である。

弥生時代 (第85図)

3と4は後期後半の土器である。3は頸部中位から頸部下位の破片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。4は頸部から口縁部下半にかけての破片で、口縁部下半を無文とし、頸部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

古墳時代 (第85図)

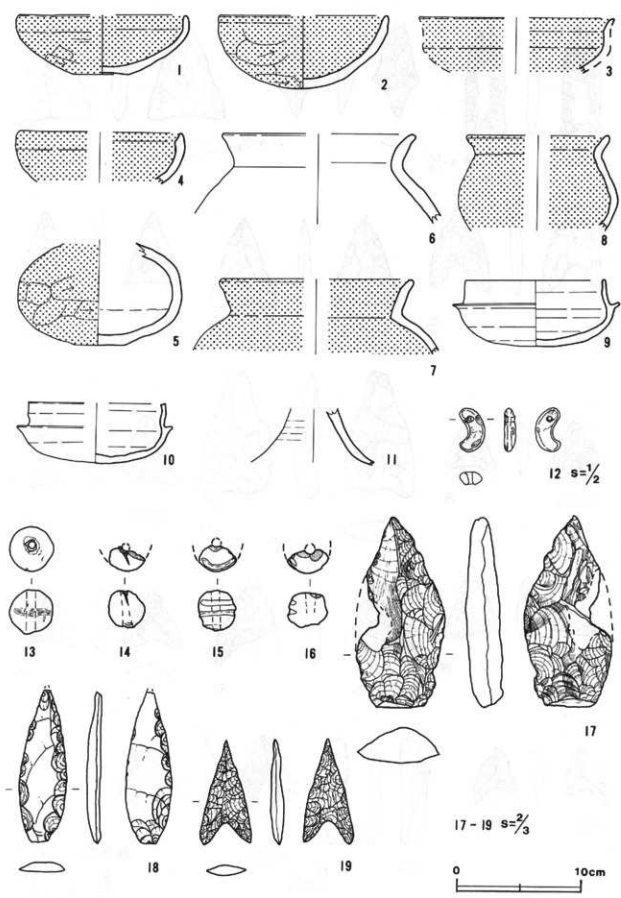
5から10は中期の須恵器である。いずれも冠の体部及び口縁部片である。5は体部の破片で、体部上位に6条の櫛描波状文を施し、それを挟んで上方と下方に2条の弱い沈線が施されている。6も体部の破片で、中位に6条の櫛描波状文を施し、その上方には横ナデ沈線がみられ、外面には自然釉が付着している。7・8・9・10は口縁部の破片で、7には5条、8・9には6条、10には7条の櫛描波状文が施され、8の体部内・外面には自然釉が付着している。



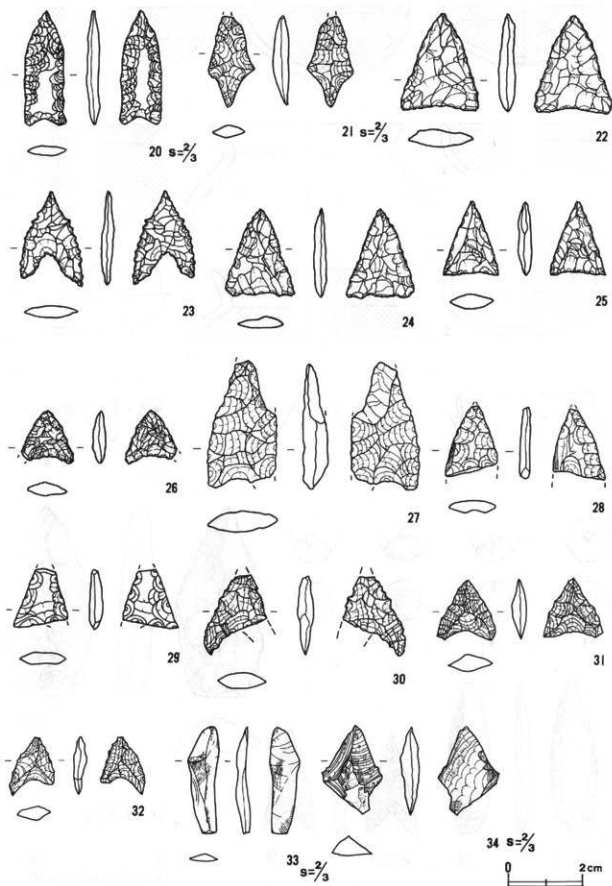
第85図 遺構外出土遺物拓影図

遺構外出土遺物観察表

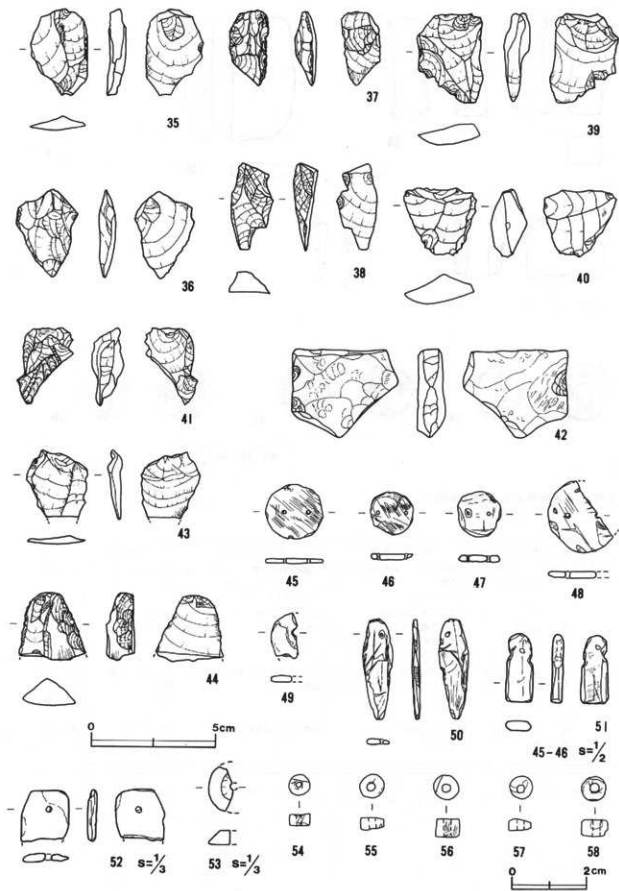
図版番号	器種	測定値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 1	坏 土師器	A [13.6]	体部及び口縁部一部欠損。上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラ磨き。底部へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色	P270 80% PL19 覆土 二次焼成
		B 4.8				
2	坏 土師器	A [13.2]	体部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英・雲母 ぶい橙色 普通	P271 50% 覆土 二次焼成
		B 5.9				
3	坏 土師器	A [15.6]	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、頸部で直上し後反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 普通	P272 15% 覆土 外面剥離
		B (4.3)				
4	坏 土師器	A [13.4]	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部内側に弱い隆を持ち、口縁部は内折ぎ状に内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P273 10% 覆土
		B (4.1)				
5	用 土師器	B (8.2)	口縁部破損。平底。体部中位はソロバン玉状を呈する。	体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。底部へラ削り。体部外面赤彩。	砂粒・長石 黄褐色 普通	P274 70% PL19 覆土 体部外面保付着
		C 4.0				
6	糜 土師器	A [15.5]	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラナデ。	砂粒・長石 ぶい橙色 普通	P267 5% 覆土
		B (6.5)				
7	糜 土師器	A [15.5]	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 ぶい橙色 普通	P268 5% 覆土
		B (5.7)				



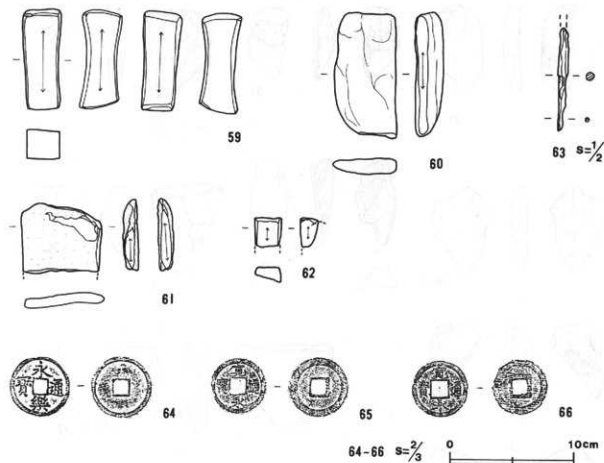
第86图 遺構外出土遺物実測図(1)



第87图 遺構外出土遺物実測図(2)



第88图 遼構外出土遺物実測图(3)



第89図 遺構外出土遺物実測図(4)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 8	甕 土師器	A [11.4] B (7.6)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナダ。体部外面へラ削り後ナダ、内面へラナダ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・霏母 褐色 普通	P269 30% PL19 覆土
9	环 須惠器	A 11.5 B 5.3	口縁部一部欠損。底部から体部にかけて内彎しながら立ち上がり、受部に至る。受け部は上方に伸び、口縁部は内彎して立ち上がる。	巻き上げ、水挽き成形。体部下半回転へラ削り。	砂粒・長石・霏母 灰黄色 良好	P275 95% PL19 SI3 付近覆土上層
10	环 須惠器	A 10.8 B 4.8	受部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、受け部に至る。	巻き上げ、水挽き成形。体部下半回転へラ削り。	砂粒・長石・霏母 褐灰色 良好	P276 75% PL19 SI3 付近覆土上層
11	高 环 須惠器	E [4.2]	脚部下位は割部へ向かって「ハ」の字状に開く。	脚部内・外面水挽き成形。	砂粒・石英・長石 灰色 良好	P296 5% SI3 付近覆土上層

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径				
第86図12	勾玉	2.3	1.3	0.6	0.4	2.0	100	W6 ₁₁ 区	DP1
13	球状土師	3.5	3.5	—	0.8	37.2	100	W7 ₁₃ 区	DP2
14	球状土師	3.0	(2.8)	—	(0.6)	(9.1)	30	W7 ₁₃ 区	DP4
15	球状土師	3.2	(3.0)	—	(0.7)	(12.5)	30	W7 ₁₃ 区	DP5
16	不明土製品	2.7	1.3	1.2	—	3.7	100	V5 ₁₄ 区	DP9

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量 (g)	現存率 (%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第86図17	尖頭鏃	7.6	(3.5)	1.5	—	(30.9)	90	黒曜石	表採	Q61 PL19
	尖頭鏃	(6.1)	1.8	0.4	—	(6.0)	98	安山岩	表採	Q62 PL19
	石鏃	4.2	1.6	0.4	—	2.9	100	チャート	表採	Q63 PL19
第87図20	石鏃	4.6	1.6	0.4	—	3.7	100	チャート	X8 _h 区	Q64 PL19
	石鏃	(3.6)	1.3	0.6	—	(2.8)	70	頁岩	X7 _h 区	Q65 PL19
	石鏃	2.6	2.1	0.4	—	1.7	100	チャート	V6 _h 区	Q66 PL19
	石鏃	2.5	1.7	0.3	—	0.9	100	チャート	表採	Q67 PL19
	石鏃	2.4	1.8	0.3	—	1.2	100	チャート	U6 _h 区	Q68 PL19
	石鏃	1.9	1.5	0.4	—	0.8	100	チャート	表採	Q69 PL19
	石鏃	(1.4)	1.0	0.3	—	(0.5)	95	黒曜石	表採	Q70 PL19
	石鏃	(3.4)	1.9	0.5	—	(3.0)	80	頁岩	表採	Q71 PL19
	石鏃	(1.9)	1.4	(0.3)	—	(0.7)	60	チャート	V6 _h 区	Q72 PL19
	石鏃	(1.6)	(1.4)	(0.4)	—	(0.7)	70	チャート	表採	Q73 PL19
第88図35	石鏃	(2.1)	(1.6)	0.4	—	(0.9)	70	頁岩	表採	Q74 PL19
	石鏃	1.6	1.6	0.5	—	0.7	100	頁岩	表採	Q121 PL19
	石鏃	1.6	1.2	0.3	—	0.4	100	チャート	表採	Q122 PL19
	石刃	(4.3)	1.1	(0.3)	—	(1.5)	90	頁岩	表採	Q75
	刺片	3.5	2.4	0.8	—	3.7	100	頁岩	表採	Q76
	刺片	3.5	2.2	0.6	—	4.7	100	頁岩	表採	Q77
	刺片	3.5	2.4	0.7	—	4.1	100	頁岩	表採	Q78
	刺片	2.9	1.6	0.9	—	2.8	100	頁岩	表採	Q79
	刺片	3.5	1.6	0.8	—	4.0	100	頁岩	表採	Q88
	刺片	3.8	3.0	0.6	—	7.6	100	メノウ	表採	Q89
第89図59	刺片	3.1	2.7	1.1	—	7.5	100	メノウ	V4 _h 区	Q92
	刺片	3.2	2.0	1.2	—	4.9	100	メノウ	V4 _h 区	Q93
	刺片	(4.2)	3.5	1.1	—	(19.4)	60	メノウ	U7 _h 区	Q94
	刺片	2.7	2.3	0.3	—	1.7	100	頁岩	表採	Q85
	縦長刺片	(2.7)	(2.6)	1.1	—	(6.6)	50	頁岩	表採	Q86
	双孔円板	(3.1)	2.9	0.2	0.15	(4.6)	99	片岩	U4 _h 区	Q100 PL19
	双孔円板	(2.3)	2.2	0.3	0.15	(2.8)	95	片岩	U4 _h 区	Q101 PL19
	双孔円板	(2.4)	(2.3)	0.3	0.1	(3.6)	80	片岩	U4 _h 区	Q102 PL19
	双孔円板	(3.9)	(3.5)	0.3	0.2	(6.7)	55	片岩	表採	Q103 PL19
	有孔円板	(2.4)	(1.3)	0.3	0.25	(2.0)	30	片岩	表採	Q104 PL19
第90図58	磨砂石製構造物	(5.3)	1.6	0.4	0.2	(5.2)	95	片岩	表採	Q105 PL19
	磨砂石製構造物	5.5	2.1	0.9	—	19.5	100	頁岩	表採	Q106未製品 PL19
	磨銅具	(4.1)	(3.9)	0.6	0.4	(15.4)	50	片岩	U6 _h 区	Q107 PL19
	磨銅車	(3.5)	(2.0)	1.2	(0.5)	(9.5)	40	蛇紋岩	V5 _h 区	Q108
	白玉	0.6	0.6	0.3	0.1	0.2	100	片岩	U6 _h 区	Q109
	白玉	0.6	0.6	0.3	0.2	0.2	100	片岩	U6 _h 区	Q110
	白玉	0.7	0.7	0.3	0.2	0.3	100	片岩	U6 _h 区	Q111
	白玉	0.6	0.6	0.3	0.2	0.2	100	滑石	U6 _h 区	Q112
	白玉	0.7	0.7	0.4	0.2	0.2	100	滑石	表採	Q113
	砥石	8.0	2.3	2.3	—	128.5	100	片岩	表採	Q114
第91図60	砥石	(10.2)	5.1	1.3	—	(117.1)	95	片岩	U5 _h 区	Q115
	砥石	(6.5)	(5.7)	(1.2)	—	(60.3)	20	頁岩	表採	Q116
	砥石	(2.4)	(2.2)	(1.2)	—	(9.0)	20	頁岩	W5 _h 区	Q117

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量 (g)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚			
第89図63	鏃	(5.5)	0.5	—	(3.0)	X 5 ₁ 区	M4

図版番号	種別	初 踏 年		出土地点	備考
		時代	年号		
第89図64	永 菜 通 貫	明 (中国銭)	1408年	V 5 ₁ 区	M5
65	寛 永 通 貫	江戸初期~明治中頃	1636年	V 5 ₁ 区	M6背面
66	寛 永 通 貫	江戸初期~明治中頃	1636年	V 5 ₁ 区	M7表

表 3 中下根遺跡住居跡一覽表

住居番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設					伊・瀬	埋土	出土遺物	特 考 (古→新)		
							壁溝	間仕切溝	土柱穴	礎石	ピット					入口	
1	V5 ₁	N-31°-W	方 形	6.13×5.73	18-20	平坦	—	—	4	2	4	—	伊1	人為	土師器(伊・瀬) 石製品(白玉、磁石)、石製模造品(双孔円板)		
2	V6 ₁	N-65°-E	方 形	3.40×3.23	6-6	2段半	—	—	—	—	—	—	伊1	人為	磁器(伊・瀬)		
3	U6 ₁	N 39° W	方 形	8.94×8.66	9-18	2段半	—	—	4	—	4	—	伊1	人為	土師器(伊・瀬) 磁器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製品(白玉、磁石、石製模造品(双孔円板)、その他(ガラス))	SK25C-2の6、7	
5	W5 ₁	N 55° E	方 形	5.90×5.70	30-40	凹凸	—	—	4	1	4	—	伊1	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬)		
6	W6 ₁	N-49°-W	方 形	3.60×3.32	10-19	凹凸	—	—	4	—	6	—	伊1	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬)		
7	V6 ₁	N 43° W	方 形	8.22×8.02	28-42	3段半	全周	—	4	1	4	—	伊2	自然	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製品(石鏡、白玉、磁石)、石製模造品(双孔円板、射形石製模造品)、その他(ガラス)		
8	V6 ₁	N 44° E	長 方 形	6.32×5.09	4-10	2段半	—	—	1	—	—	—	不明	—	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬)		
9	V6 ₁	N-50°-E	方 形	6.90×6.50	43-52	2段半	—	—	4	2	4	—	—	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製品(石鏡、白玉、磁石)、石製模造品(射形石製模造品)		
10	W6 ₁	N-52°-W	長 方 形	4.94×3.72	14-25	平坦	—	—	2	1	2	—	伊1	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬)		
11	V6 ₁	N-55°-E	長 方 形	7.04×5.52	16-28	凹凸	—	—	—	1	—	—	伊2	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製模造品(双孔円板)		
12	V7 ₁	N-47°-E	方 形	8.68×8.48	14-25	2段半	—	—	1	4	1	5	—	伊2	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製品(石鏡、白玉、磁石)、石製模造品(双孔円板)	
13	W7 ₁	N 50° W	方 形	7.80×7.60	31-44	平坦	全周	—	4	2	5	—	伊1	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製品(石鏡、白玉、磁石)、石製模造品(射形石製模造品)	表3表	
15	V8 ₁	N 38° E	長 方 形	4.25×3.27	5-12	平坦	—	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬)		
16	V8 ₁	N-42°-W	方 形	6.78×6.48	8-22	平坦	—	—	4	2	5	—	—	自然	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬)		
20	W8 ₁	N-45°-W	方 形	4.49×4.16	19-40	平坦	全周	—	6	4	1	6	2	伊1	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬)	
21	W8 ₁	N-36°-E	方 形	3.44×5.29	25-40	2段半	全周	—	5	4	1	6	2	伊2	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製品(石鏡、白玉、磁石)、石製模造品(射形石製模造品)	表3表
23	V8 ₁	(N-38°-E)	長方形	3.93× [3.26]	34-62	2段半	—	—	4	1	4	—	—	自然	土師器(伊・瀬)		
25	V5 ₁	(N-28°-E)	長方形	3.24×2.99	22-53	2段半	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
27	W5 ₁	N 50° W	方 形	6.92×6.82	45-66	2段半	一部	—	6	4	1	5	1	伊1	自然	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製品(石鏡、白玉、磁石)、石製模造品(射形石製模造品)	表3表
28	W6 ₁	(N-63°-W)	圓丸方形	4.31× [2.86]	21-30	平坦	—	—	—	1	—	—	伊2	自然	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬)	表3表	
29	W6 ₁	(N-38°-E)	圓丸方形	2.88× [2.61]	9-32	平坦	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	
30	X6 ₁	N-47° E	方 形	6.10×5.92	38-65	2段半	2段半	—	2	5	1	6	—	伊1	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製品(石鏡、白玉、磁石)、石製模造品(射形石製模造品)	
31	V5 ₁	(N 40° E)	圓丸方形	4.43× [2.71]	34-44	2段半	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
32	U5 ₁	N-46°-W	方 形	5.65×6.36	26-44	2段半	全周	—	4	1	5	1	伊2	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬)		
33	U5 ₁	N 29° W	方 形	6.46×6.36	17-46	平坦	—	—	4	1	5	1	伊2	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製品(石鏡、白玉、磁石)		
34	U5 ₁	N 30° W	方 形	7.58×7.30	13-25	平坦	—	—	—	4	1	6	1	伊1	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬)	
35	T6 ₁	N-36°-W	方 形	6.64×6.38	18-33	平坦	—	—	4	1	5	1	伊1	人為	土師器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 漆器(伊・瀬) 石製品(石鏡、白玉、磁石)		

第4節 まとめ

当遺跡で確認した遺構は、竪穴住居跡27軒、竪穴遺構6基、土坑158基、陥し穴9基及び溝1条である。

ここでは、時期別に各時代の主な遺構と遺物についての概要を述べ、まとめとする。

旧石器時代

当遺跡からは、黒曜石を石材とする槌状剥離のみられる有槌尖頭器、安山岩を石材とする槍先形尖頭器及び頁岩を石材とする石刃が表面採集されている。その他、二次加工のみられる剥片が表土中や後世の遺構の覆土中から出土している。出土石器の石材は、黒曜石、安山岩、頁岩及びメノウで、いずれも本県の主要な石器石材で、在地石材の使用が推測されるところであるが、一方で、遠隔地石材の使用も少なからず考えられ、具体的分析に基づく石材の特定産地の検討が求められる。表面採集されている旧石器時代の遺物は、今回の調査区が平坦地でローム層の流失が考えられないことから、耕作等による旧石器時代文化層の攪乱等で表面採集されたものと考えられるが、生活面をもつ文化層は確認されていない。剥片の一部は縄文時代以降の所産である可能性もある。

縄文時代

後期前葉の縄文土器の深鉢口縁部片が僅かに2点表面採集されている。遺構としては、9基の陥し穴が、調査区の北東部を中心に東西に散在して構築されている。これらは、小野川から深く入り込む谷津の低地及び湿地等に集まる動物の捕殺及び捕獲等を目的としたものと考えられる。石器では、石鏃が縄文時代に属する可能性が高い。

弥生時代

後期後半の弥生土器片2点が表探で出土している。遺構は確認していない。

古墳時代

当遺跡の中心となる時期で、竪穴住居跡、竪穴遺構及び土坑を確認した。当該期に属する竪穴住居跡25軒の時期は、5世紀中葉、後葉の2期に分けることができる。

第1期（5世紀中葉）

第1、5、6、8、9～11、15、16、20、21、23、27～29、31～35号住居跡の時期で、当遺跡内における主たる住居跡群である。当遺跡におけるこの時期の住居跡は、付設されている施設に類似するものがみられるが、規模と形態には企画性がみられない。土器の組成は、土器器の坏、碗、高坏、埴、甕及び甗である。このうち、坏と碗には平底と丸底がみられ、坏の体部外面及び内面にヘラナデあるいはヘラ削り後ヘラ磨きが施され、体部と口縁部の境に弱い稜がみられる。坏、碗の赤彩されている個体数は3分の1以上を数える。第30号住居跡出土の坏は平底と丸底である。高坏の脚部はラッパ状あるいは下方に大きく開くか、柱状を呈するがややエンタシス状の膨らみを持っている。坏部外面下位に稜がみられ、整形はヘラナデかヘラ磨きが施され、赤彩率が高い。第28号住居跡出土の高坏は脚部が柱状を呈し、その中位にエンタシス状の膨らみを持ち、下方に大きく開き、端部が反り、坏部下位に弱い稜がみられる。埴は体部が潰れた球形状のものと同ロパン玉状のものがみ

られる。整形は内・外面にヘラナデが施され、出土する個体数は少ないが赤彩率は高い。甕は体部が球形状を呈し、口縁部は「く」の字状に外反するものが多く、口縁部の中位に段を有するものもみられる。整形は内・外面ヘラナデである。甕は底部が単孔式で、口縁部がほぼ垂直に立ち上がるものと折り返しのある複合口縁のものがある。整形はヘラナデである。第20、21号住居跡は、他の住居跡より時期的に先行する可能性がある。当該期は、陶器編年のTK216に併行する時期である。

第2期（5世紀後半）

第3、7、12、13、30号住居跡の時期である。当遺跡におけるこの時期の住居跡は、一辺が6～8mの大規模のものが多い。付設されている施設には、壁溝や間仕切り溝を付設するものと付設しないものなどのばらつきがみられる。土器の組成は、土師器の坏、椀、高坏、埴及び甕、須恵器の坏、坏蓋及び甕である。坏には須恵器坏蓋を模倣したものがみられるようになり、椀と同様に赤彩率が高い。埴は丁寧なヘラ磨きが施され、赤彩されている。甕は体部の球形が顕著で、底部突出のものが減り平底となる。この時期になると須恵器を伴う住居跡が多くなり、第3号住居跡出土の第10図11の須恵器坏身は、陶器編年のTK208からTK23に併行する時期のものである。第7号住居跡から出土している須恵器甕の時期も同時期の範囲で考えられる。22の須恵器蓋は混入したもので、横ナデ後体部に磨り消しが施され陶器編年のTK216からTK73に併行する時期である。

平安時代

第2、25号住居跡及び第67号土坑の時期で、2期に分けることができる。

第1期（8世紀後半）

第2号住居跡の時期である。本跡の竈は北東壁に掘り込まれ、竈焚き口付近から須恵器の坏と坏蓋が出土している。

第2期（9世紀前半）

第25号住居跡、第67号土坑の時期である。第25号住居跡の南コーナー部に竈が確認され、その焚き口部から常総型甕が意図的な意味を持たせるように逆位の状態で出土している。これは、竈の規模と出土地点等から支脚への転用遺物の可能性もある一方、南竈を付設する特異な住居跡であることから、住居跡自体が火の神に深く関連していたとも考えられる。第67号土坑からも同時期の常総型甕が出土している。この土坑は掘り込みが浅く、2段掘りの様相を呈していることから小竈穴遺構として取り扱うことも可能である。

参考文献

- 櫻村宣行・浅井哲也 「常陸地域の鬼高式土器」 『考古学ジャーナルNo.342』 1992年
- 櫻村宣行 「茨城県南部における鬼高式土器について」 『研究ノート2号』 茨城県教育財団 1993年7月
- 浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（II）」 『研究ノート2号』 茨城県教育財団 1993年7月
- 茨城県教育財団 「牛久市北部特定区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（I）ヤツノ上遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第81集』 1993年3月
- 茨城県教育財団 「牛久市北部特定区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（II）中久喜遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第86集』 1993年9月

第4章 西ノ原遺跡

第1節 遺跡の概要

西ノ原遺跡は、牛久市の北北東部、小野川支流の乙戸川右岸から南西に入り込む谷津頭に面し、標高24~25mの洪積台地である稲敷台地上に立地する、旧石器時代から古墳時代にわたる複合遺跡である。調査前の現況は、山林及び畑地で、今回の調査区域は南西に約121m、南東に約112m、面積13,227m²である。

今回の調査によって確認した遺構は、旧石器時代の石器集中地点5か所、縄文時代の陥し穴4基、古墳時代の竪穴住居跡21軒、古墳時代の竪穴遺構1基、その他に土坑41基、溝1条である。

旧石器時代の石器集中地点は、調査区の中央部よりやや北側に散在しており、石材は黒曜石を主として、他に頁岩、安山岩が使用されている。

縄文時代の遺構としては、4基の陥し穴を確認した。

古墳時代の遺構は、調査区中央から南東にかけて多くみられる。住居跡の形状はおおよそ、方形ないしは長方形のものである。古墳時代中期の竪穴住居跡は、調査区中央部付近から16軒を散在して確認した。後期の竪穴住居跡は、調査区から5軒確認し、一部が調査エリア外に延びているため完掘できなかった第1号住居跡を除いて、第2・4・6・9号竪穴住居跡は、いずれも北西壁に竈を付設したものである。竪穴住居跡以外では、古墳時代中期のものと思われる竪穴遺構1基を調査区中央部から確認した。住居跡とは異なるスロープ状の出入口施設とピットを持ち、床面の造り等から片流れ屋根の掘立小屋の上屋構造が推測される。その他、遺跡の中央を東西に走る溝1条を確認した。溝は、第17号、第18号竪穴住居跡との切り合いから古墳時代中期以降のものと思われるが、具体的な時期や性格については不明である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に46箱ほど出土している。旧石器時代の遺物は、石器集中地点からナイフ形石器、スクレイパー、縦長剣片が出土している。縄文時代の遺物は、早・中期の縄文土器や、有舌尖頭器、石鏡が遺構確認面や覆土中から出土している。古墳時代の遺物は、土師器の坏、高坏、壺、甕等が出土し、その中には赤彩されたものも多くみられる。その他、竈内からの支脚、土製品の土玉、石製品の紡錘車、砥石、白玉、石製模造品の剣、有孔円板、勾玉も出土している。また、第16号住居跡の覆土中からはガラス玉も出土している。

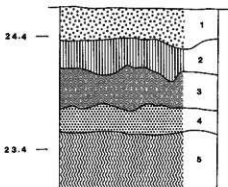
第2節 基本層序

西ノ原遺跡においては、調査区北東部V47区にテストピットを設定し、表土除去後、第90図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、褐色のロームブロックを少量含み、厚さは25~35cmである。第2層は、褐色のハードローム層で、厚さは19~30cmである。第3層から第5層は、褐色のハードローム層で、厚さは10~40cmあり、いずれもロームブロックを中量含む。

土壌鉱物分析をおこなった結果、第2層の中心でハ

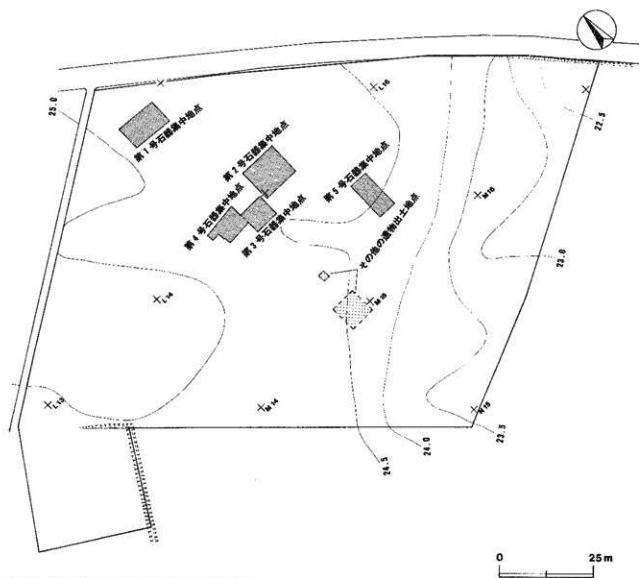
25.0m—



第90図 西ノ原遺跡基本土層図

ブル型火山ガラスの含有量が極大値を示し、上位では含有量を減じ、第1層では、更に減じている。第2層の
 中位から下位にかけては殆ど含有量が認められず、このことから、層位とバブル型火山ガラスの特徴で第2層
 上位から第1層にかけてが始良Tn火山灰の降灰層準に相当するものと考えられる。このことは、第1、2層が
 武蔵野台地の立川ローム層黒色帯に比定されるものと言える。なお、今回の分析結果では、ローム層上位の指
 標テフラである立川ローム最上部ガラス質火山灰UGが確認されず、第1層の上位にあるものと考えられるが、
 削刺により確認されていない。

第3節 遺構と遺物



第91図 西ノ原遺跡旧石器集中地点配置図

1 旧石器時代の遺構と遺物

当遺跡における旧石器時代の調査は、乙戸川の谷津頭に面する傾斜地を除く調査区のほぼ全面に12.5%の試掘を実施し、遺物が出土した地点を中心に約373.5㎡について本調査を実施し、本調査区域については第4層まで発掘した。遺物を確認した地点に隣接する平坦地に遺物出土層位を確認するため、ローム層上面から灰白色の粘土層上面まで試掘坑を設定した。確認した土層堆積状況は前節で述べたとおりである。なお、詳細については、付章西ノ原遺跡土壌の自然科学分析を参照されたい。

調査の結果、文化層中から石器等の遺物が374点出土している。これらの遺物は、ほとんどが5か所（第1～5号集中地点）から集中して出土しており、いずれも調査区の北側中央寄りの標高24m程の平坦な台地上と緩斜面に位置する。

(1) 石器集中地点

第1号石器集中地点

位置 調査区の北部、K14b8区。出土遺物の平面分布については第92図で示したとおりである。その中で、特に出土遺物の集中する地点は中央部である。

規模 平面形約東西11m、南北7mと広範囲で確認したが、中には疎密の差がみられ、出土遺物はK14b8区を中心に確認している。

確認土層 土層1から4の範囲で確認した。土層1のローム上層から土層3のハードローム下層にかけ遺物出土を確認した。土層2の褐色土上層及び下層で石器が集中的に確認している。文化層の層準は、この前後の範囲に求めることができる。なお、土層1、2からは極めて微量ながら粘土ブロックの混入が確認されているが、調査前の立ち木の根の痕による混入物と考えられる。

遺物 本石器集中地点からの出土遺物総数は109点である。内訳はナイフ形石器2点、ナイフ状の石器1点、ピエス・エスキュー2点、石核2点、剥片41点、碎片60点、礫1点の計109点である。

1と2はナイフ形石器である。1はK14a9区から出土したもので完璧品と思われ、安山岩の石刃を素材として、側面部には急角度の剥離面がみられ、バルブは確認できないが、リングの様子から中央部にあったものと考えられる。石器の最大厚、最大幅共に中央部よりやや上位にみられる。

2はK14b8区から出土したもので完形品である。ホルンフェルス素材としており、一側面に急角度の剥離面と、その片側には縦方向の稜が認められる。末端部には基部調整の剥離痕がみられ、最大厚は末端部やや上位に、最大幅は中央部よりやや下位にみられる。

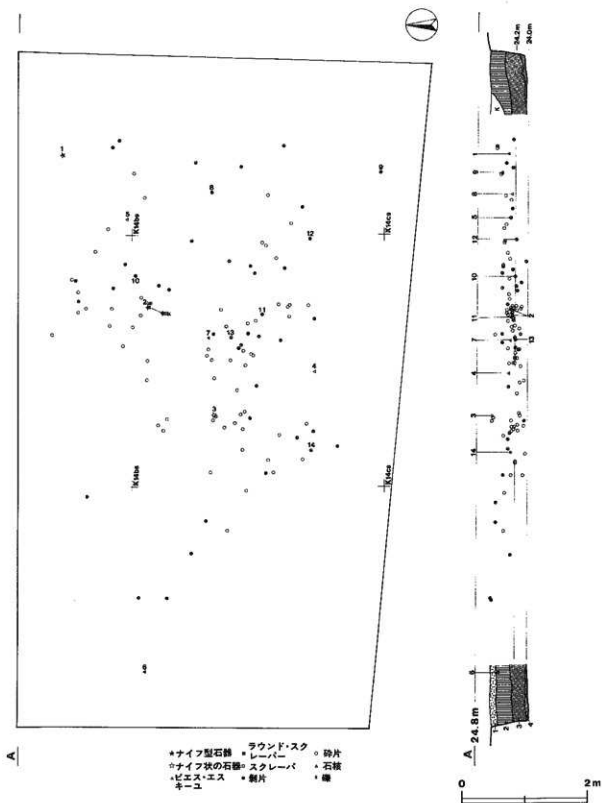
3はナイフ状の石器で、K14a8区から出土したものである。黒曜石の石刃を素材としている。中央部から先端部は欠損している。一側面は急角度の剥離面が残り、片側側面部中央には縦長の稜が走る。基部の裏面には剥離調整痕が残る。

4はピエス・エスキューである。K14b8区から出土したもので、石材は黒曜石である。全体が上下両端からの剥離面によって覆われている。

5のピエス・エスキューはK14a9区から出土したもので、黒曜石の剥片を素材としている。全体が上下両端からの剥離面によって覆われ、上端の一部に刃濱し加工が観察される。

6は石核である。K14a7区から出土したもので、石材は安山岩である。立方体のような面を持ち、上下両端及び両側面には多方向からの剥離面がみられ、上面の一部には自然面が残る。

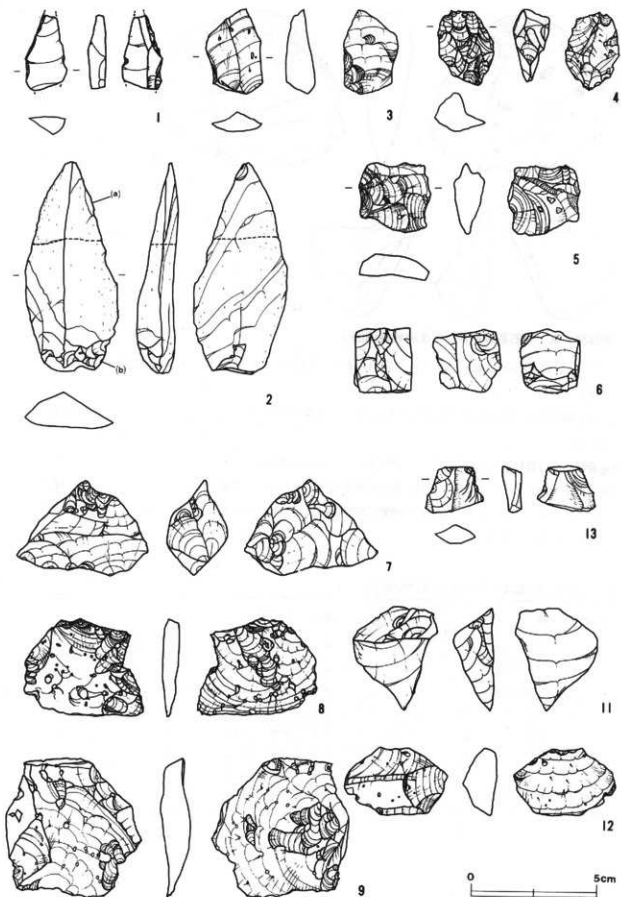
7の石核はK14a8区から出土したもので、石材は黒曜石である。上下両端及び両側に大きな打点が残る、細



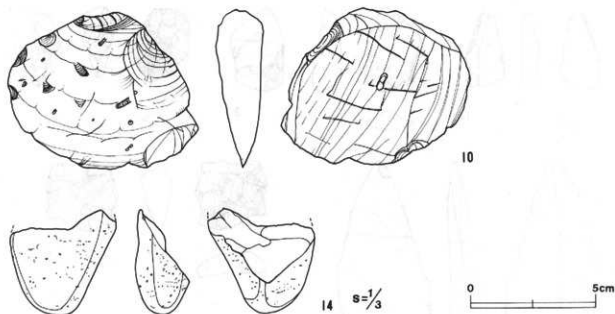
第92図 第1号石器集中地点遺物出土状況図

かな貝殻状剥片を剥離した際の剥離面が認められる。

8～13は剥片である。13の石材がチャートである以外は、いずれも石材は黒曜石で、複数の方向に加撃し、剥片生産をしている。10はK14a区から出土したもので、当遺跡内の集中地点から出土した剥片としては最大



第93图 第1号石器集中地点出土物实测图(1)



第94図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(2)

のもので、長さ8.5cm、幅6.5cm、重さは71.4gある。最初の打点で剥離した後、側縁部に細かな調整を4か所施している。

14は礫である。K14s区から出土したものである。本集中地点でただ1点出土したもので、熱を受け赤化している。

接合資料 接合資料は1例存在する。平面分布図の2(a)と、2(b)の縦長剥片どうしの接合例にみられる。
所見 本集中地点は、出土遺物の石材の殆どが黒曜石で占められる。黒曜石の出土点数に占める製品の割合の低さと、出土している剥片にみられる頻繁な剥離面からは、剥片生産後、剥片を素材とした利器等の製作が行われていたことが窺われる。

表4 第1号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ				
第93図1	ナイフ形石器	3.0	1.6	0.7	41.3	安山岩	K14s区	Q76 PL29
2	ナイフ形石器	8.2	3.6	1.4	31.1	ホルンフェルス	K14s区	Q77 PL29
3	ナイフ状の石器	3.3	2.2	1.0	6.0	黒曜石	K14s区	Q78 PL29
4	ピース・エスキュー	3.1	2.1	1.5	1.4	黒曜石	K14s区	Q79
5	ピース・エスキュー	2.7	2.7	0.9	6.4	黒曜石	K14s区	Q80
6	石 核	2.3	2.2	2.2	21.2	安山岩	K14s区	Q81
7	石 核	5.2	3.7	2.4	33.9	黒曜石	K14s区	Q82
8	剥 片	4.7	3.8	0.8	11.1	黒曜石	K14s区	Q83

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	石質	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ				
第93図 9	剥片	5.5	5.3	1.2	26.5	黒曜石	K14a区	Q84
第94図 10	剥片	8.5	6.5	1.6	71.4	黒曜石	K14a区	Q85
第93図 11	剥片	4.1	2.1	1.1	10.1	黒曜石	K14a区	Q86
12	剥片	4.5	3.5	1.6	13.0	黒曜石	K14a区	Q87
13	剥片	2.3	1.7	0.8	2.6	チャート	K14a区	Q88
第94図 14	鏃	8.6	8.4	3.8	211.9	安山岩	K14a区	Q89

表5 第1号石器集中地点石器組成表

種別	黒曜石	安山岩	頁岩	凝灰岩	チャート	ホルンフェルス	計
ナイフ形石器	—	1	—	—	—	1	2
ナイフ状の石器	1	—	—	—	—	—	1
尖頭鏃	—	—	—	—	—	—	0
ピエス・エスキュー	2	—	—	—	—	—	2
二次加工のある剥片	—	—	—	—	—	—	0
剥片	40	—	—	—	1	—	41
石核	1	1	—	—	—	—	2
砕片	60	—	—	—	—	—	60
鏃	—	—	—	—	—	—	0
鏃	—	1	—	—	—	—	1
破砕鏃	—	—	—	—	—	—	0
計	104	3	0	0	1	1	109

表6 第1号石器集中地点接合資料一覧表

図版番号	石材	内訳	内訳	数量
第93図2	ホルンフェルス	ナイフ形石器 2	2 (a) ナイフ形石器→2 (b) ナイフ形石器	2

第2号石器集中地点 (第95図)

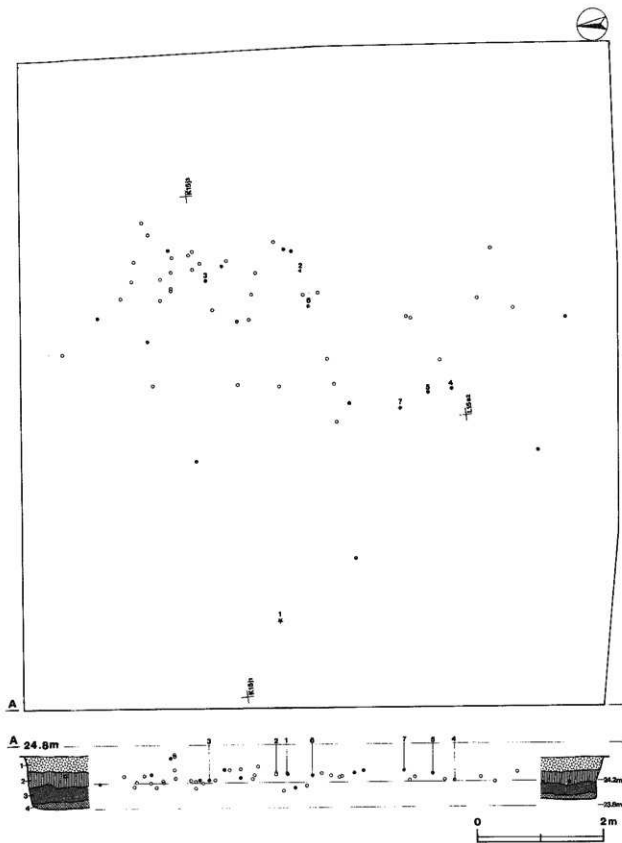
位置 調査区の北部，K15₁区。出土遺物の平面分布については第95図で示したとおりである。その中で，特に，出土遺物が集中する地点は北部である。

規模 平面形約東西10.5m，南北9mと広範囲で確認したが，分布密度の差はあまりみられない。

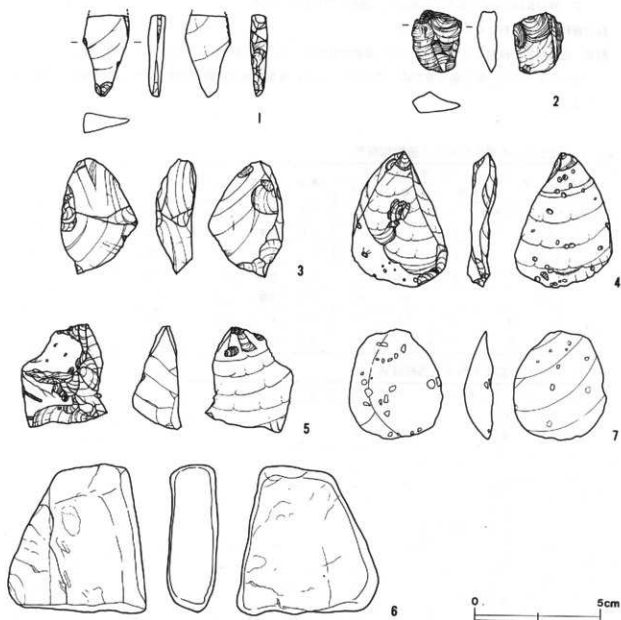
確認土層 土層1から4の範囲で確認した。土層1のローム上層から土層4のハードローム上層にかけて出土遺物を確認した。特に，土層2の上面からは石器が集中的に出土していることから，文化層の層準は，この前後に求めることができる。土層1，2からは極微量ながら砂の混入が確認されている。また，調査区中央の土層3には極微量ながら焼土粒子の混入がみられたが出土量が少なく，旧石器時代の文化層との関係は把握できなかった。

遺物 本石器集中地点からの出土遺物総数は56点である。内訳はナイフ形石器1点，ピエス・エスキュー1点，剥片16点，砕片36点，鏃2点の計56点である。

1はナイフ形石器である。K15₁区から出土したもので完成品と思われ，石材は安山岩である。中央部から先端部の欠損部分は出土していない。石刃を素材とし，山形の打面を持ち下端には石核時の平坦な部分が残



第95図 第2号石器集中地点遺物出土状況図



第96図 第2号石器集集中地点出土遺物実測図

るが、バルブは確認できない。石器の最大厚、最大幅ともに中央部付近にあるものと考えられる。

2はビエス・エスキューである。K15₂区から出土したもので、黒曜石の剥片を素材としている。

3～5は剥片である。3はK15₂区から出土したもので、石材は頁岩である。側縁部中央上面に最初の打点が見られ、急角度で剥離し、その後、最初の打点とは反対側の側縁部で剥片を取り出したもので、自然面を僅かに残している。

4はK15₂区から出土したもので、石材は黒曜石である。側縁部中央上面に最初の打点が残り、縦方向の両側には稜線が認められる。中央部には2度にわたる剥片取り出しの大きな剥離痕がみられる。

5はK15₂区から出土したもので、石材は黒曜石である。片側には剥離面が残り、反対側には剥片剥離痕がみられる。自然面の一部残る。

6～7は礫である。6はK15₂区から出土したもので、剥片を剥離し、不要になった礫片の一部が他の目的に転用され、熱を受け赤化したものと考えられる。

7の礫はK15a区から出土したもので、端部に打点のみられる。

接合資料 接合資料はみられない。

所見 出土遺物の疎密という点では、やや貧弱な様相をしている。利器としては、ナイフ形石器、ピエス・エスキューの2点で、他は剥片及び砕片であることから、本集中地は、剥片生産を基本とした性格の様相が窺える。

表7 第2号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	石質	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ				
第96図 1	ナイフ形石器	3.2	1.8	0.7	3.1	安山岩	K15a区	Q90 L29
2	ピエス・エスキュー	2.4	1.9	0.6	2.8	黒曜石	K15a区	Q91
3	剥片	4.6	3.0	1.4	31.1	頁岩	K15a区	Q92
4	剥片	5.3	3.8	1.1	17.7	黒曜石	K15a区	Q93
5	剥片	5.2	3.7	2.4	33.9	黒曜石	K15a区	Q94
6	礫	5.8	5.4	1.9	76.8	砂岩	K15a区	Q95
7	礫	4.3	3.8	1.1	20.2	安山岩	K15a区	Q96

表8 第2号石器集中地点石器組成表

種別	黒曜石	安山岩	頁岩	流紋岩	砂岩	ホルンフェルス	計
ナイフ形石器	—	1	—	—	—	—	1
尖頭器	—	—	—	—	—	—	0
ピエス・エスキュー	1	—	—	—	—	—	1
二次加工のある剥片	—	—	—	—	—	—	0
剥片	16	—	—	—	—	—	16
石核	—	—	—	—	—	—	0
砕片	36	—	—	—	—	—	36
礫	—	—	—	—	—	—	0
礫	—	1	—	—	1	—	2
破砕礫	—	—	—	—	—	—	0
計	53	2	0	0	1	0	56

第3号石器集中地点 (第97図)

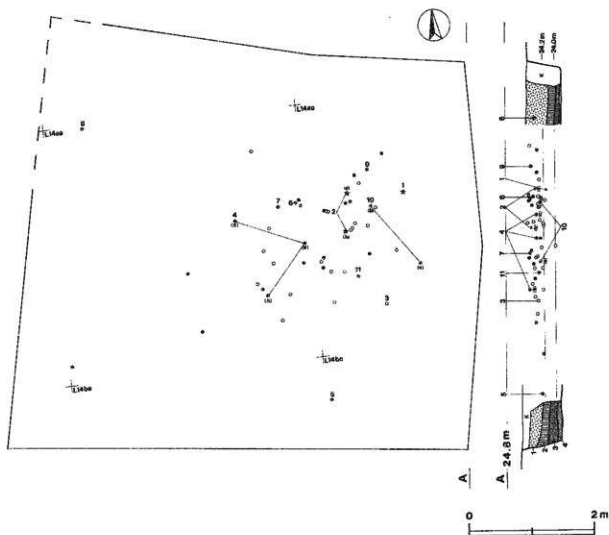
位置 調査区の北東部からやや中央寄り、L14a区。第4集中地点に接しているが、遺物の分布状況から第3集中地とする。出土遺物の平面分布については第97図で示したとおりである。その中で、特に出土遺物が集中している地点は、中央部からやや東側である。

規模 平面形約東西7m、南北6mの範囲で確認した。

確認土層 土層1から4層の範囲で確認した。土層1のローム上層から土層3のハードローム下層にかけて出土遺物を確認した。本石器類集積地では、土層2の褐色土上面及び下位から定型的な石器が出土している。

遺物 本石器集中地点からの出土遺物総数は48点である。内訳はナイフ形石器2点、礫器1点、縦長剥片1点、二次加工のある剥片1点、剥片19点、砕片22点、礫2点の計48点である。

1と2はナイフ形石器である。1のナイフ形石器はL14a区から出土したもので完成品である。ホルンフェルスの石刃を素材としており、一側刃に最初の剝離痕が残り、背部整形及び基部の整形に刃潰し加工を施して



第97図 第3号石器集中地点遺物出土状況図

いる。最大厚、最大幅とも中央部にみられる。

2のナイフ形石器はL14a9区から出土したもので完成品であるが、先端部は欠損している。頁岩の石刃を素材としている。背部整形及び基部端の整形を行い、一端のみに鋭い切出し状の剥離面を利用した刃を持っている。また、一側面に2度にわたる剥離調整痕が残る。最大厚を中央部に、最大幅は中央部やや下位にみられる。

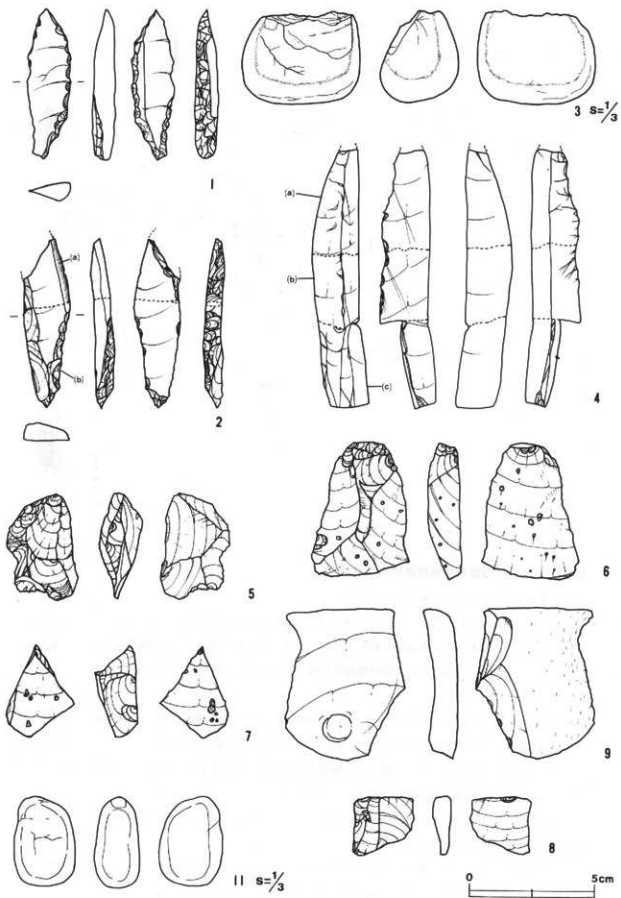
3は礫器である。L14a9区から出土したもので、砂岩礫の上端部に剥離面が残り、作業線となっている。

4は縦長裂片である。L14a9区から出土したもので、原石から剥離した縦長裂片を（さらに2か所に打撃を加えて）3等分した裂片の一つに、縦方向片側側面から小形の縦長裂片を取り出した剥離痕を残しているところから、相対的な剥離工程の順位を窺うことができる。

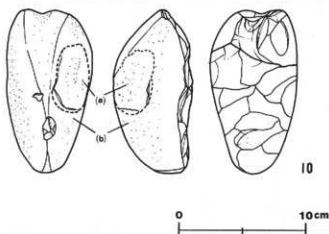
5は二次加工のある裂片である。L14a9区から出土したもので、片側上面に打撃が加えられ、その後、表裏両面から剥離調整が施されたものと考えられる。

6～9は裂片である。6の裂片はL14a9区から出土したもので、石材は黒曜石である。下端部に調整痕と考えられる剥離面がみられることからナイフ形石器と捉えられる可能性もある。

7と8は黒曜石の裂片で、L14a9区から出土したもので、単純な剥離面がみられる。



第98图 第3号石器集中地点出土遗物实测图(1)



第99図 第3号石器集中地点出土遺物実測図(2)

9の剥片は砂岩の剥片である。L14a0区から出土したもので、片側には滑らかな自然面がみられる。

10と11は礫である。10の礫はL14a0区から出土した安山岩で、2度の加撃による剥離面がみられる。

11の礫はL14a0区から出土した安山岩の円礫である。使途は不明である。

接合資料 接合資料は3例存在する。内訳は、平面分布図の2 (a)と2 (b)のナイフ形石器、3 (a)と3 (b)及び3 (c)の縦長剥片、9 (a)と9 (b)の礫にみられる。

所見 本石器集中地点で確認した利器は、ナイフ形石器2点であるが、いずれも他の場所で製作されたものを搬入したものである。安山岩の礫が出土しているが、黒曜石以外の剥片生産の様子を窺うことができず、黒曜石の剥片生産を基本とする集中地点であることが考えられる。

表9 第3号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	石質	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ				
第98図 1	ナイフ形石器	5.9	1.7	1.0	7.5	ホルンフェルス	L14a0区	Q97 PL29
2	ナイフ形石器	6.6	1.8	0.9	21.1	頁岩	L14a0区	Q98 PL29
3	礫	9.3	7.4	6.2	575.6	砂岩	L14a0区	Q99
4	縦長剥片	10.1	1.9	2.0	33.4	砂岩	L14a0区	Q100 PL29
5	二次加工のある剥片	4.2	2.7	1.7	12.4	黒曜石	L14a0区	Q101 PL29
6	剥片	5.3	3.9	1.3	20.6	黒曜石	L14a0区	Q102
7	剥片	3.6	2.6	1.7	10.1	黒曜石	L14a0区	Q103
8	剥片	2.4	2.2	0.7	2.9	黒曜石	L14a0区	Q104
9	剥片	6.0	4.7	1.1	37.0	砂岩	L14a0区	Q105
第99図 10	礫	12.9	6.9	6.4	648.4	安山岩	L14a0区	Q106
第99図 11	礫	7.0	4.9	3.5	164.7	安山岩	L14a0区	Q107

表10 第3号石器集中地点石器組成表

種別	黒曜石	安山岩	頁岩	流紋岩	砂岩	ホルンフェルス	計
ナイフ形石器	—	—	1	—	—	1	2
尖頭器	—	—	—	—	—	—	0

種別	黒曜石	安山岩	頁岩	流紋岩	砂岩	ホルンフェルス	計
ビエス・エスキューユ	—	—	—	—	—	—	0
縦長剥片	—	—	—	—	1	—	1
二次加工のある剥片	1	—	—	—	—	—	1
剥片	19	—	—	—	—	—	19
石核	—	—	—	—	—	—	0
砕片	22	—	—	—	—	—	22
礫	—	—	—	—	1	—	1
礫	—	2	—	—	—	—	2
破砕礫	—	—	—	—	—	—	0
計	42	2	1	0	2	1	48

表11 第3号石器集中地点接合資料一覧表

図号番号	石材	内訳	内容	数量
第98図2	頁岩	ナイフ形石器2	2(a) ナイフ形石器→2(b) ナイフ形石器	2
4	砂岩	石刃3	4(a) 石刃→4(b) 石刃→4(c) 石刃	3
第99図10	安山岩	礫2	10(a) 礫→10(b) 礫	2

第4号石器集中地点

位置 調査区の北東部からやや中央寄り、L14a区。第3集中地点に接する。出土遺物の平面分布については第100図で示したとおりである。その中で、特に出土遺物の集中する地点は、中央部である。

規模 平面形東西約7～10m、南北6mの範囲で確認したが、疎密はほぼ一定である。

確認土層 土層1から4層の範囲で確認した。土層1のローム上層から土層3のハードローム上層にかけて出土遺物を確認したが、特に土層2付近での分布密度が高い。

遺物 本石器集中地点からの出土遺物総数は57点である。内訳はビエス・エスキューユ1点、二次加工のある剥片1点、剥片24点、砕片27点、礫4点の計57点である。

1はビエス・エスキューユである。K14j区から出土したもので、石材は黒曜石である。比較的大形の剥片を素材とし、上下両端に微細な調整が観察される。

2は二次加工のある剥片である。K14j区から出土したもので、石材は黒曜石である。主要剥離面に二次加工が観察される。

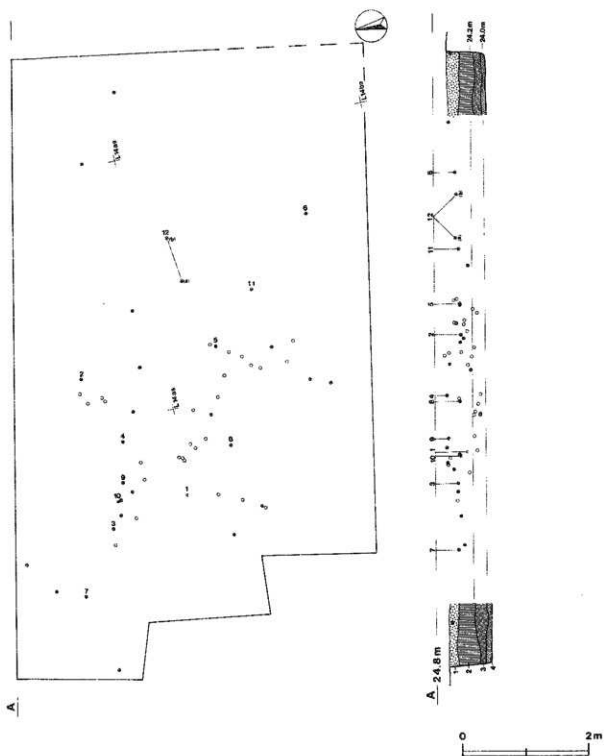
3～9は剥片である。3と4はK14j区から出土したもので、石材はいずれも砂岩である。原石に最初の打撃が加えられ、その後、小形の剥片が剥離したと思われる。それぞれ片側に滑らかな自然面を残し、上下両面に剥離痕が認められる。

5と6の剥片は、L14aa区から出土したもので、石材は黒曜石である。5の剥片には微細な使用痕が観察され、6の剥片では単純な剥離面がみられ、5の剥片については使用された可能性も否めない。

7と8の剥片は、K14j区、L14a区から出土したもので、石材は頁岩である。特に7の剥片は、バルブが明確に確認でき、中央部には縦に2本の稜線が入る。

9の剥片は、K14j区から出土したもので、石材はメノウである。最初の打点の残る両側には左右からの細かな剥離調整痕が残る。

10～12は礫である。10と11の礫は安山岩で、特に10の礫は、被熱のため中央部が大きく裂け縦横の割れ目が入っている。

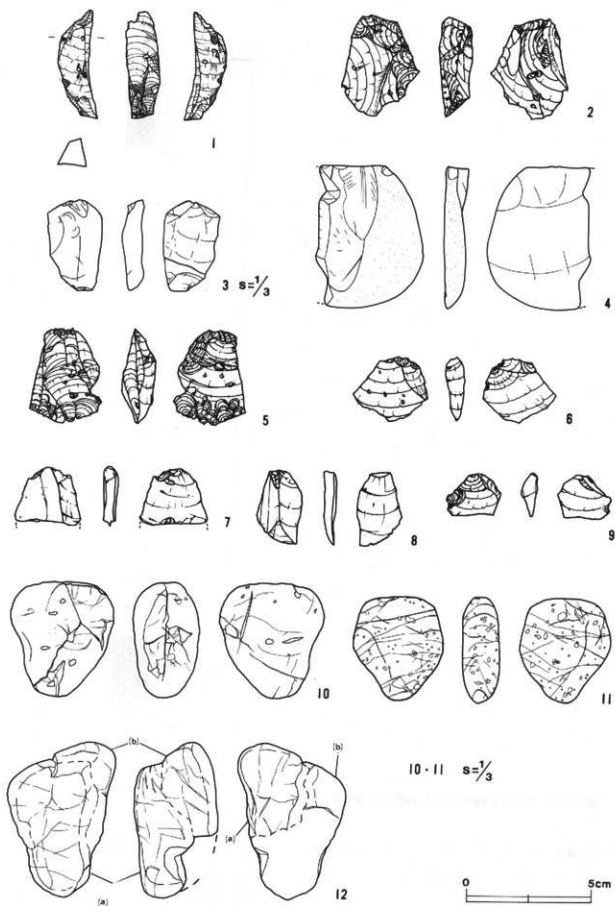


第100図 第4号石器集中地点遺物出土状況図

12の礫はチャートである。

接合資料 接合資料は1例存在する。平面分布図の12(a)と、12(b)の礫どうしの接合例にみられる。

所見 本石器集中地点出土の利器は、ピエス・エスキューの1点で、利器の製作を反映する資料が乏しく、また、剥片の石材が複数に及んでいるが、それに見合う碎片の出土がみられないことから、剥片製作を基本とする石器集中地点と考えられる。



第101图 第4号石器集中地点出土遗物实测图

表12 第4号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	石質	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ				
第101図1	ビース・エスキュー	4.3	1.3	1.2	6.6	黒曜石 K14 ₀₇ 区	Q108	
2	二次加工のある剥片	3.9	3.1	1.3	11.5	黒曜石 K14 ₀₅ 区	Q109 PL29	
3	剥片	7.2	4.4	1.7	51.2	砂岩 K14 ₀₇ 区	Q110	
4	剥片	5.6	4.1	0.8	24.2	砂岩 K14 ₀₇ 区	Q111	
5	剥片	3.7	2.8	1.3	9.8	黒曜石 L14 ₀₅ 区	Q112	
6	剥片	2.9	2.5	0.7	3.2	黒曜石 L14 ₀₅ 区	Q113	
7	剥片	2.7	2.3	0.6	3.2	頁岩 K14 ₀₇ 区	Q114	
8	剥片	2.9	1.7	0.4	1.7	頁岩 L14 ₀₇ 区	Q115	
9	剥片	2.1	1.7	0.6	1.6	メノウ K14 ₀₇ 区	Q116	
10	鏢	9.0	8.2	5.2	417.7	安山岩 K14 ₀₇ 区	Q117	
11	鏢	8.2	7.2	2.9	229.9	安山岩 L14 ₀₅ 区	Q118	
12	鏢	6.1	3.0	3.0	63.2	チャート L14 ₀₅ 区	Q119	

表13 第4号石器集中地点石器組成表

種別	黒曜石	安山岩	頁岩	メノウ	砂岩	チャート	計
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	0
尖頭器	—	—	—	—	—	—	0
ビース・エスキュー	1	—	—	—	—	—	1
二次加工のある剥片	1	—	—	—	—	—	1
剥片	19	—	2	1	2	—	24
石核	—	—	—	—	—	—	0
砕片	27	—	—	—	—	—	27
鏢	—	—	—	—	—	—	0
鏢	—	2	—	—	—	2	4
破砕鏢	—	—	—	—	—	—	0
計	48	2	2	1	2	2	57

表14 第4号石器集中地点接合資料一覧表

図版番号	石材	内訳	内容	数量
第101図12	チャート	鏢2	12(a) 鏢→12(b) 鏢	2

第5号石器集中地点

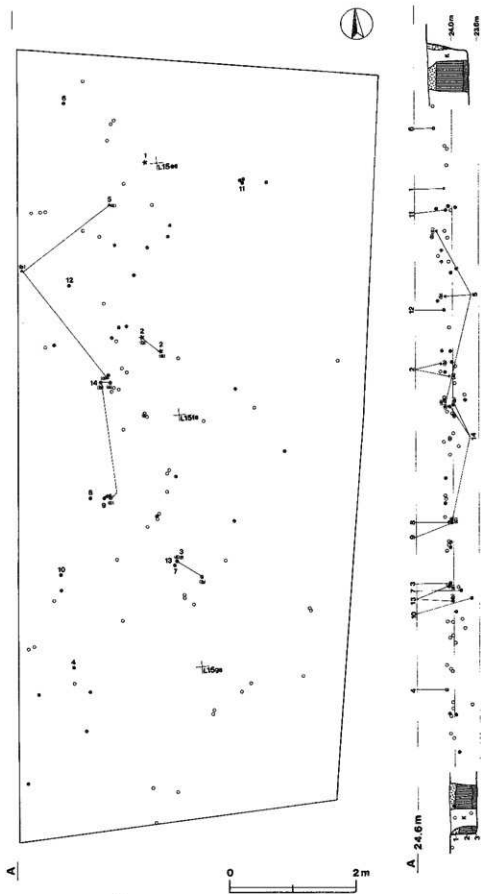
位置 調査区の南東中央部寄り、やや傾斜地のL15₀₆区。出土遺物の平面分布については第102図で示したとおりであり、特に出土遺物が集中する地点は西側である。

規模 平面形東西約5m、南北11mの広範囲で確認した。

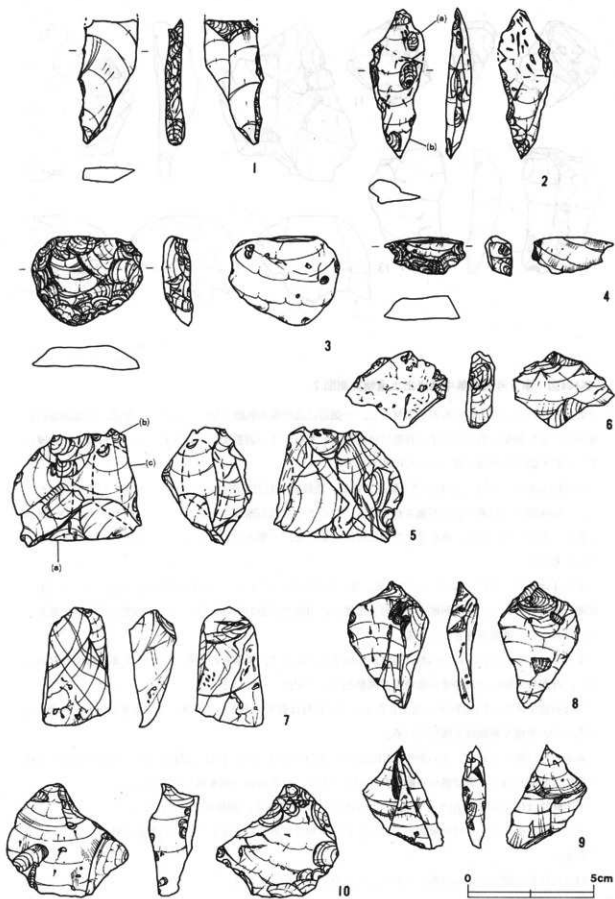
確認土層 土層1から3層の範囲で確認した。その中で、出土遺物の分布密度の濃い層位は土層2の上層から中層である。定型的な石器は土層1の褐色土下層から土層3の褐色土上面と垂直分布に開きがある。

遺物 本石器類集積地からの出土遺物総数は104点で、ナイフ形石器2点、ラウンド・スクレイパー2点が出土している。その他の出土遺物では、石核1点、剥片29点、砕片57点、鏢13点の計100点である。

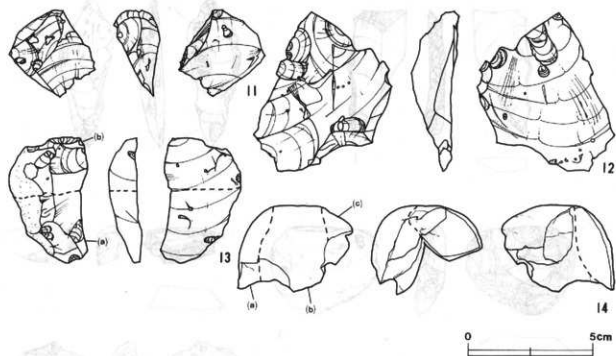
1と2はナイフ形石器である。1はL15₀₅区から出土したもので完整品と思われる。中央部から先端部にか



第102图 第5号石器集中地点遺物出土状況图



第103图 第5号石器集中地点出土遗物实测图(1)



第104図 第5号石器集中地点出土遺物実測図(2)

け欠損している。安山岩の石刃を素材とし、一側面に急角度の剝離を加えたもので、基部には微調整の剝離痕がのこるが調整は殆どされず、背部には両側とも左右からの調整加工が施されている。石器の最大厚は基部に、最大幅は中央部に持つものと推測される。

2はL15es区から出土したもので完璧品である。流紋岩の石刃を素材としている。基部には調整剝離が施され、一側縁部には刃潰し加工が施されている。このナイフ形石器は中央部から二つに折れ直線で40cm離れた位置から出土しているが、熱を受けた後に折れたもので、一部赤化している。二つに折れた後で放棄されたものと考えられる。

3と4はラウンド・スクレイパーである。3のラウンド・スクレイパーはL15ns区から出土したものである。黒曜石を石材として、主要剝離面をそのまま残し、刃部を背面の末端に持ち、ほぼ40度の角度で剝離面が並列になるように調整が施されている。

4のラウンド・スクレイパーはL15ns区から出土したもので、黒曜石の剝片として、主要剝離面をそのまま残し、背面の末端にほぼ60度の急角度で調整加工して刃部としている。

5は石核である。L15es区から出土したもので、石材は頁岩である。立方体のような多面体で、各面には他方向からの多様な剝離痕を残している。

6から13は剝片である。6の剝片はL15ns区から出土したもので、石材は頁岩である。原石を荒割した後、上面に自然面が残る状態で横から縦方向に叩いており、自然面の一部を残している。

7の剝片はL15ns区から出土したもので、石材はメノウである。調整痕はみられない。

8から13の剝片は、石材が黒曜石で、いずれも平坦な打面を有する剝片で、自然面を残存させるものもみられる。

14は流紋岩の礫で、細かに割れており、その全てが赤化している。

接合資料 接合資料は4例存在する。内訳は、平面分布図の2 (a)と2 (b)のナイフ形石器、5 (a)と(b)及び(c)の石核と剝片、13 (a)と13 (b)の剝片、14 (a)と14 (b)の礫どうしの接合例にみられる。

所見 本石器集中地点は、5つの集中地点の中では出土遺物が最も多く出土している。利器の出土も複数みられるが、ナイフ形石器は他の場所から製品の形で搬入したものと考えられ、本石器集中地点は基本的に、切片生産を反映するものと考えられる。接合資料5の(a)、(b)の石核と(c)の切片との接合関係からは切片生産技術が窺え、興味深いものがある。

表15 第5号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	石質	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ				
第103図1	ナイフ形石器	5.1	2.1	0.7	8.9	安山岩	L15a区	Q120 PL29
	ナイフ形石器	5.9	2.0	1.1	8.2	流紋岩	L15a区	Q121 PL29
	ラウンド・スタンパー	4.4	3.5	1.2	16.5	黒曜石	L15a区	Q122
	ラウンド・スタンパー	3.2	1.5	1.1	4.2	黒曜石	L15a区	Q123 PL29
	石核	5.0	4.6	3.6	59.0	頁岩	L15a区	Q124
	切片	4.0	3.0	1.0	10.6	頁岩	L15a区	Q125
	切片	4.7	2.1	1.8	20.6	メノウ	L15a区	Q126
	切片	5.0	3.1	1.2	10.0	黒曜石	L15a区	Q127
	切片	4.1	3.1	1.0	6.2	黒曜石	L15a区	Q128
	二次加工のある切片	4.7	4.5	2.0	25.8	黒曜石	L15a区	Q129
第104図11	切片	3.4	3.4	1.8	11.7	黒曜石	L14a区	Q130
	切片	6.3	5.5	1.9	35.5	黒曜石	L15a区	Q131
	切片	4.9	3.2	1.2	13.3	黒曜石	L15a区	Q132
	礫	4.5	4.5	3.3	48.2	流紋岩	L15a区	Q133

表16 第5号石器集中地点石器組成表

種別	黒曜石	安山岩	頁岩	流紋岩	砂岩	ホルンフェルス	メノウ	計
ナイフ形石器	—	—	1	1	—	—	—	2
尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	0
ラウンド・スタンパー	2	—	—	—	—	—	—	2
ピエス・エスキュー	—	—	—	—	—	—	—	0
二次加工のある切片	1	—	—	—	—	—	—	1
切片	27	—	—	—	—	—	1	28
石核	—	—	1	—	—	—	—	1
砂片	57	—	—	—	—	—	—	57
礫器	—	—	—	—	—	—	—	0
礫	2	—	—	1	1	—	—	4
破砕礫	—	—	—	9	—	—	—	9
計	89	0	2	11	1	0	1	104

表17 第5号石器集中地点接合資料一覧表

図版番号	石材	内訳	内容	数量
第103図2	流紋岩	ナイフ形石器2	2(a) ナイフ形石器→2(b) ナイフ形石器	2
5	頁岩	石核1 石核1 切片1	5(a) 石核→5(b) 石核→5(c) 切片	3

図版番号	石 材	内 訳	内 容	数 量
第104図13	黒曜石	剥片2	13(a) 剥片→13(b) 剥片	2
14	流紋岩	標2	14(a) 標→14(b) 標	2

その他の遺物出土地点

旧石器時代の調査では、少数ながら石器集中地点以外からも出土遺物を確認した。しかし、その後の出土遺物は確認できず、石器類の数量が乏しく、内容的な評価もできない。このため、ここでは石器集中地点とは区別し、出土遺物一覧表及び石器組成表の記載に留める。

表18 その他の出土遺物観察表

種 別	計 測 値 (cm)			重量(g)	石 質	出土地点	備 考
	長さ	幅	厚さ				
剥 片	2.0	1.8	0.5	3.1	黒曜石	M14a区	
剥 片	1.9	0.9	0.4	2.7	黒曜石	M14a区	
剥 片	2.2	1.7	0.3	3.9	黒曜石	M14a区	
剥 片	2.0	1.1	0.5	2.8	黒曜石	M14a区	
剥 片	1.1	0.8	0.4	2.1	黒曜石	L14a区	

表19 その他の出土遺物組成表

種 別	黒曜石	安山岩	頁 岩	流紋岩	砂 岩	ホルンフェルス	計
剥 片	5	—	—	—	—	—	5
石 核	—	—	—	—	—	—	0
碎 片	3	—	—	—	—	—	3
標	—	—	—	—	—	—	0
標	—	—	—	—	—	—	0
破 砕 標	—	—	—	—	—	—	0
計	8	0	0	0	0	0	8

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 陥し穴

当遺跡で確認した45基の土坑の内、形状や規模から陥し穴と考えられる4基の遺構について記載する。

第1号陥し穴 (第105図)

位置 調査区の北部、J14p区。

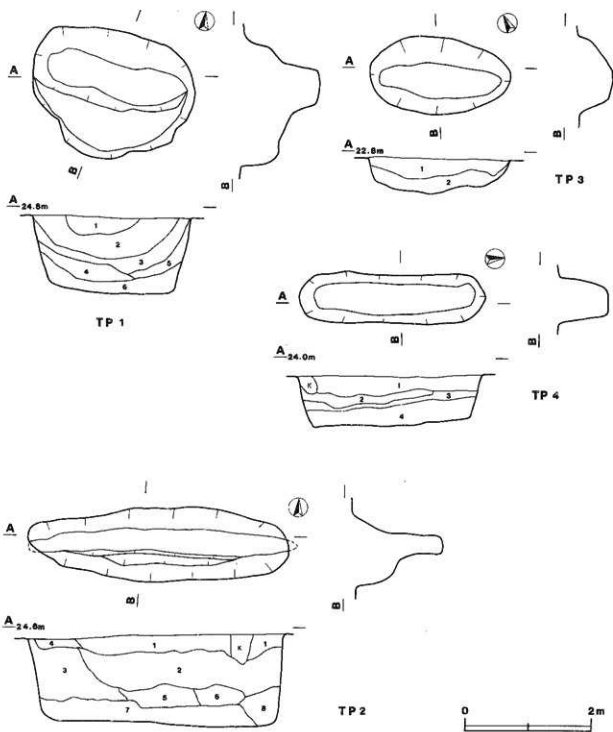
規模と平面形 長径2.62m、短径2.03mの不整形円形で、深さは1.19mである。

長径方向 N-79°-W

壁面 外傾して立ち上がり、中位で段を成している。

底面 皿状である。

覆土 6層から成る。自然堆積である。



第105図 第1・2・3・4号陥し穴実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------------|-------|--|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量、埴まり強 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物・ローム大ブロック・ローム中ブロック微量 |

所見 本跡は、井戸状遺構の様相を呈し、その可能性もあるが、遺構の形態から陥し穴と考える。遺物は出土していないが、時期は、縄文時代のものと思われる。

第2号陥し穴(第105図)

位置 調査区の南部、L13a区。

規模と平面形 長径4.27m、短径1.17mの長楕円形で、深さは1.39mである。

長径方向 N-88°-W

壁面 北壁は垂直に立ち上がり、南壁は中位に段を成している。

底面 皿状である。

覆土 8層から成る。自然堆積と考えられる。

土層解説

1	褐色	ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量	6	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量
2	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、餅まり強	7	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
3	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量	8	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム大ブロック微量
4	褐色	ローム粒子多量、炭化物微量			
5	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量			

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物は出土していないが、時期は縄文時代のものと思われる。

第3号陥し穴(第105図)

位置 調査区の東部、M15a区。

規模と平面形 長径2.23m、短径1.22mの楕円形で、深さは0.52mである。

長径方向 N-58°-W

壁面 外側に緩傾する。

底面 皿状である。

覆土 2層から成る。自然堆積と思われる。

土層解説

1	黄褐色	粘土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子微量

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物は出土していないが、時期は縄文時代のものと思われる。

第4号陥し穴(第105図)

位置 調査区の南部、M14a区。

規模と平面形 長径2.95m、短径0.76mの楕円形で、深さは0.79mである。

長径方向 N-5°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層から成る。自然堆積と思われる。

土層解説

1	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物微量	3	黒色	ローム粒子・焼土粒子極微量
2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量	4	黒色	ローム粒子・焼土粒子極微量

所見 本跡は、谷津に面する傾斜地にあり、遺構の上部が削平されて、深い落ち込みはみられないが遺構の形態から陥し穴と考えられる。遺物は出土していないが、時期は縄文時代のものと思われる。

3 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡21軒、竪穴遺構1基、土坑4基を確認した。これら住居跡の中には、小型のもので、住居以外の目的と用途を持った建物跡と考えられるものと、内部施設の有無等がみられるが、ここではそれらの建物跡も住居跡として取り上げた。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、当調査区の中央部を中心に散在して21軒を確認した。重複し合っているのは2か所、共に溝と重複しているものである。調査区の中央部で確認した住居跡は遺存状態の良いものが多い。竪穴住居跡の第1号、第13号及び第14号は調査区外へ延びているため完掘ができず、その規模については推定することにする。

以下、確認した住居跡の特徴や遺物について記載する。

第1号住居跡 (第106図)

位置 調査区の北西部、K13e6区。

規模と平面形 本跡の北西側は調査区外に延びるため、長さは不明であるが、平面形は一辺6.00mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-55'-E

壁 壁高20～32cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 調査区内の部分は、南西壁の一部を除いて周回しており、上幅は3～12cm、深さ12cm程で、断面形はU字形である。

床 平坦で、全体的に踏み固められ硬く締まっている。

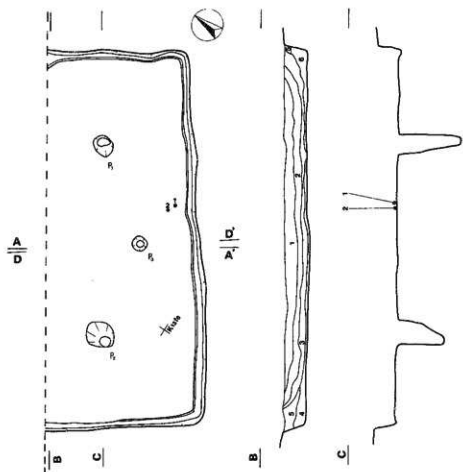
ピット 3か所(P1～P3)。P1、P2は長径35～50cm、短径30～43cmの不整楕円形で、深さは72～98cmである。各コーナー近くにあり、規模や配列から主柱穴と考えられる。P3は径25cmの円形で、深さは25cm程である。P1、P2の中間から少し南東壁寄りに付設され、規模や配置から出入口ピットと考えられる。

覆土 6層から成る。覆土下層から上層にかけて焼土粒子と炭化粒子を含む暗褐色土がレンズ状に堆積する。自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量、ローム粒子中量	4	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
2	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量、ローム粒子多量	5	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量、ローム小ブロック少量	6	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 南東壁際の床面直上から少量の遺物が出土している。第107図1、2の環は共に南東壁際の覆土下層と床面直上から出土し、3の環は覆土中から出土したものである。



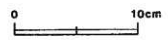
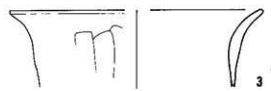
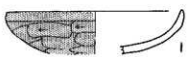
A 25.2m



D



第106图 第1号住居跡実測图



第107图 第1号住居跡出土遺物実測图

所見 本跡の時期は、出土遺物から6世紀後半と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第107図 1	坏 土 器	A 14.1	底部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。口唇部は突る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面横ナデ。外面黒色処理。	砂粒・長石・石英 浅黄褐色 普通	P1 60% PL30 南東壁部直上層
		B (3.5)				
2	坏 土 器	B (4.0)	底部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は体部との境に線をもち、直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面横ナデ。外面黒色処理。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P2 60% 南東壁部直上層
		A [20.4] B (16.6)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のへラ削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P3 5% 覆土中

第2号住居跡 (第108・109図)

位置 調査区の西部, L13co区。

規模と平面形 長軸7.40m, 短軸6.97mの方形。

主軸方向 N-37-W

壁 壁高は48~59cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分を除き全周する。上幅10~22cm, 深さ4~12cmで、断面形はU字形である。

床 平坦で、よく踏み締まっている。

ピット 5か所 (P1~P5)。P1~P4は径70~90cmの不整形円形または不整形円形ピットで、深さは66~90cmである。各コーナー付近に付設され、規模や配列から支柱穴と考えられる。P5は径50cmの円形で、深さは25cmである。南東壁際中央にあり、規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴 北コーナーから竈寄り北西壁に接して付設され、平面形は長径100cm, 短径90cmの不整形円形で、深さは40cmである。底面は皿状で、壁の一部は延長して住居の北西壁の一部となっている。

貯蔵穴土層解説

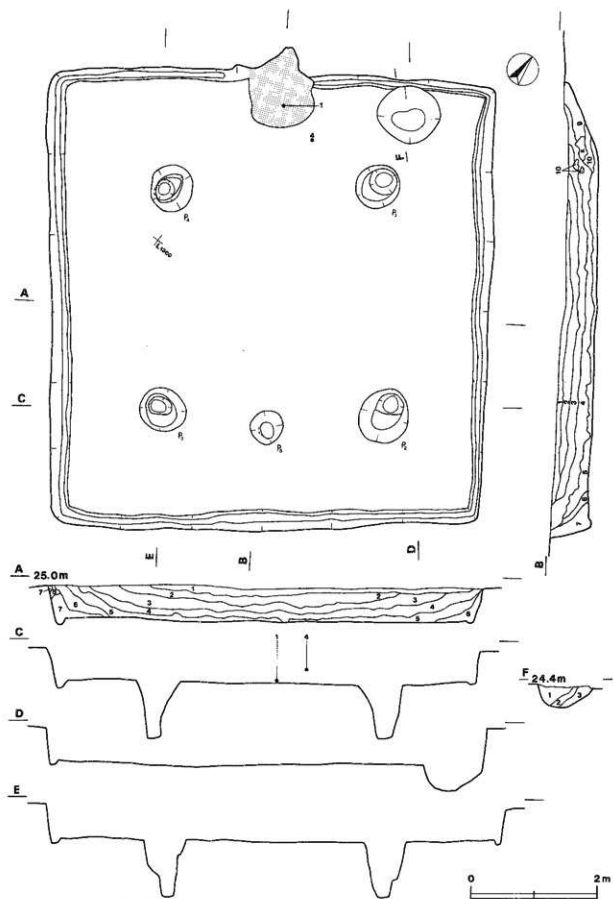
- 1 褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 3 明褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子多量

竈 北西壁中央部の壁面を約40cm壁外に掘り込み、砂混じりの粘土を使用して構築している。規模は、長さ120cm, 幅100cm程で、弧状に掘り込んでいる。天井部は崩落し、袖部は、片袖の一部を除いて遺存している。燃焼部には、僅かに焼土ブロック、焼土粒子、炭化粒子がみられる。火床部は約10cm掘り窪められ、中央部や手前の袖部内側に熱を受けて赤変硬化している部分がみられる。内壁はやや焼土化している程度である。煙道の立ち上がりは約45度と急である。

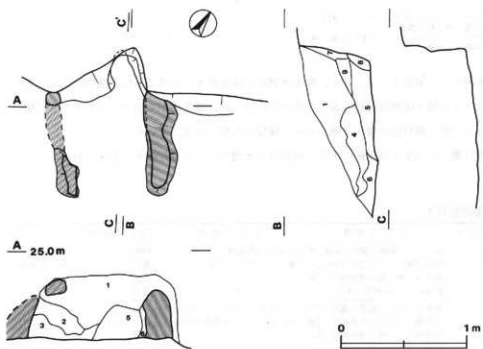
覆土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|---|---|--------|--|
| 1 | にぶい黄褐色 | ローム粒子・粘土粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化物・炭化粒子微量 | 5 | にぶい黄褐色 | 焼土粒子・粘土粒子多量, 焼土小ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子・粘土粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量 | 6 | 赤褐色 | 焼土粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 7 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |
| 4 | にぶい黄褐色 | 焼土粒子・粘土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化物少量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 8 | 褐色 | ローム小ブロック多量, ローム粒子中量 |
| | | | 9 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量 |

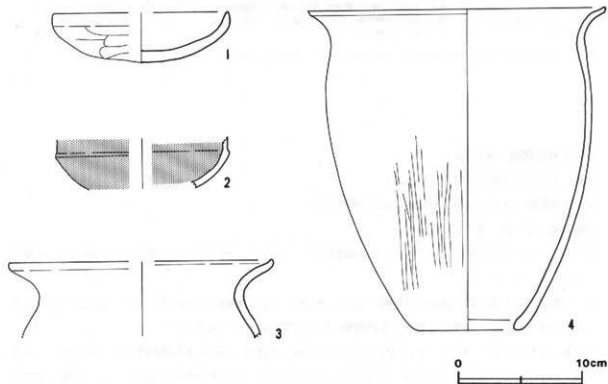
覆土 10層から成る。壁際と下層には褐色土が堆積し、中層から上層にかけては黒褐色土がレンズ状に堆積する。自然堆積と考えられる。



第108图 第2号住居跡突测图(1)



第109図 第2号住居跡竪実測図(2)



第110図 第2号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|--------|---|---------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・砂微量 | 5 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中ブロック・砂微量 | 6 にぶい褐色 | 炭化物中量、ローム粒子・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量 |
| 4 極黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック少量、焼土粒子微量、炭化物微量 | 8 明褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化物微量 |

- 9 灰 褐色 焼土小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子・
砂・灰少量、焼土粒子微量
10 ぶい褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼
土粒子・砂・灰微量

遺物 覆土中から土師器片が少量出土しているが、覆土下層から床面直上にかけては出土遺物は少量である。

第110図1・2の環は、1が竈火床部付近から逆位で出土し、2の環は覆土中から出土している。3の竈は竈付近の覆土中から、4の竈は竈付近の覆土下層から共に横位の状態で出土している。

所見 本跡は、北西壁に竈を付設する住居跡である。時期は出土遺物から6世紀後半と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第110図 1	環 土師器	A [14.0] B 3.5	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内側に弱い稜を持つ。口縁部は直立し、口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラナデ。内面ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 ぶい褐色 普通	P4 30% 竈内火床部付近 覆土中
2	坏 土師器	B (4.1)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は体部との境に稜を持ち、直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア ぶい褐色 普通	P5 20% 覆土中
3	鉢 土師器	A [21.0] B (6.0)	頸部から口縁部の破片。頸部はやや丸味を持って口縁部に至る。口縁部は外反し、口唇部は外上方につまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 褐色 普通	P6 5% 竈付近覆土中 内・外面割離
4	瓶 土師器	A 23.9 B 25.8 C 8.0	底部下位及び口縁部一部欠損。無定式。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・ バミス・雲母 ぶい褐色 普通	P7 80% PL29 竈付近覆土下層

第3号住居跡 (第111図)

位置 調査区の西部中央付近、K14a区。

規模と平面形 長軸7.58m、短軸6.52mの不整形長方形。

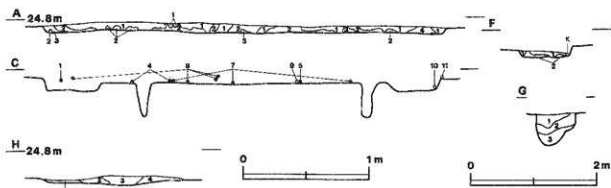
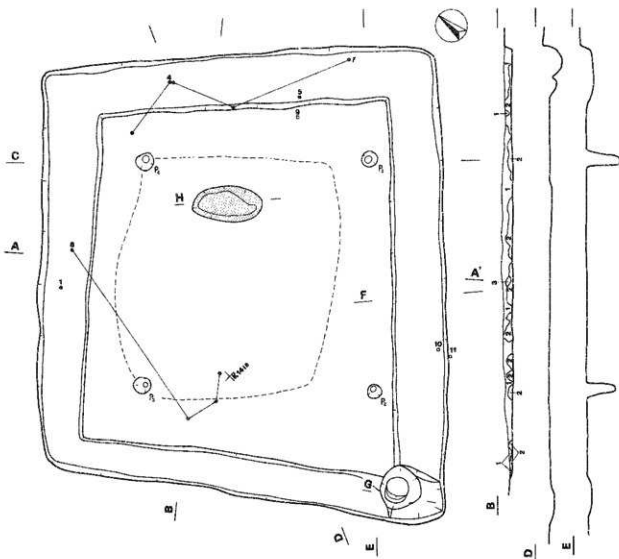
主軸方向 N-47°E

壁 南コーナー付近が削平され立ち上がりが確認できなかったが、他の部分は、壁高が5~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部は踏み固められ堅硬である。壁に沿って、上幅65~87cm、深さ5~8cm、断面形が皿状の溝が全周している。規模と位置から本跡構築に伴う初期の造り方と考えられる。

ピット 4か所(P1~P4)。P1~P4は長径23~35cm、短径22~30cmの不整形円形または楕円形で、深さは40~55cmである。各コーナー付近に付設され、それぞれ掘り込みが若干内側に傾いている。規模や配列から支柱穴と考えられる。

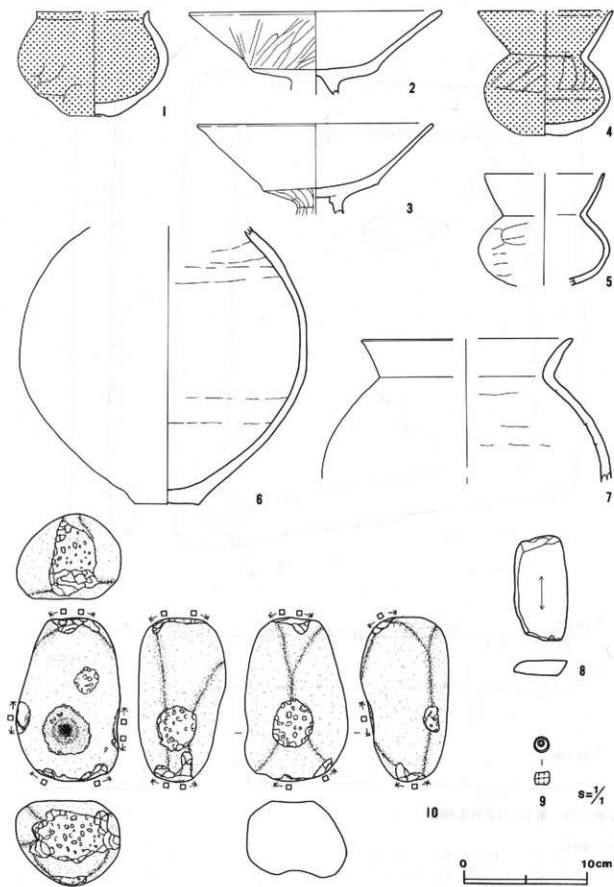
炉 中央から北東寄りに付設され、長径110cm、短径55cmで、床面を8cm程皿状に掘り窪めた不整形円形の地床炉である。炉床には火熱を受けている部分がみられない。



第111図 第3号住居跡実測図

炉上層解形

- | | | |
|---|--------|------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム小ブロック微量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック少量 |
| 3 | にぶい褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック中量 |
| 4 | にぶい赤褐色 | 焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化物微量 |



第112图 第3号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は径70cmの不整形円で、円筒状に深さ62cm掘掘り込まれており、木根跡と思われる窪みが底部に見られる。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量
 2 明褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物微量
 3 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、焼土粒子極微量

覆土 4層から成る。掘り込みが極めて浅く、全体的な堆積状況の把握は難しいが、僅かにみられる覆土下層から上層にかけてのロームブロックを含む褐色土の堆積状況から、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック少量、ローム 3 において褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック中量
 2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物微量 4 において赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化物微量
 3 褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・ローム中ブロック少量

遺物 覆土中層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第112図1の椀は北西寄りの覆土上層から底部を斜位の状態にして出土し、2・3の高坏は、2が覆土中から、3が北寄りの床面直上から出土している。4・5の埴は、4が東寄りの床面直上から斜位の状態で、5は覆土中から出土している。6・7の甕は、6が北東壁付近の床面直上から出土している甕片が接合したもので、7は東寄りの覆土下層から床面直上にかけて出土している甕片が接合したものである。その他、8の砥石が東寄りの床面直上から横位の状態で、9の白玉が南東壁際の覆土下層から、10の凹石が南東壁面の上から横位の状態で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第112図 1	土師器	A [9.1]	体部下位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内側が直にやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ヘラナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石 褐色 普通	P10 50% 北西寄り覆土上層 体部外面下位付着
		B 8.4				
		C 4.0				
2	高土師器	A 20.2	坏部の破片。脚部との境に強い稜を持ち、外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面斜位のヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	P8 40% PL30 覆土中
		B (6.5)				
3	高土師器	A 18.9	坏部の破片。下位に強い稜を持ち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。接合部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・雲母・バミス にぶい褐色 普通	P9 30% 北西寄り床面直上
		B (7.2)				
4	埴土師器	A [11.0]	体部下位及び口縁部一部欠損。平底。体部はソロバン玉状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のナデ、内面ナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P11 60% PL30 東寄り床面直上 体部内面刺刺
		B 10.4				
		C 3.0				
5	埴土師器	A [9.7]	体部下位から口縁部の破片。体部はソロバン玉状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	P12 30% 覆土中 口縁部外面付着
		B (8.8)				
6	甕土師器	B (22.3)	底部から体部上位の破片。平底。底部は小さく、体部は長胴を呈し、上位に最大径を持つ。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面ヘラナデ。底部へラ削り。	砂粒・石英・雲母 褐色 普通	P13 40% 北東壁寄り床面直上 体部内・外面刺刺
		C 5.2				
7	甕土師器	A [17.2]	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に反転する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	P14 10% 東寄り覆土下層
		B (11.3)				

図版番号	類別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	材質	出土地点	備考	
		最大長	最大幅	最大厚	孔径						
第112図 8	砥石	(8.5)	(4.3)	(1.2)	-	(2.1)	不明	砂岩	東寄り床面直上	Q2	
9	白	玉	0.4	0.4	0.4	0.2	0.1	100	滑石	南東壁際の覆土下層	Q3 PL34
10	凹	石	13.1	8.4	6.8	-	1201.4	100	礫岩	南東壁面の上	Q4 PL34

第4号住居跡（第113図）

位置 調査区の北部、K15n区。

規模と平面形 長軸6.16m，短軸5.98mの方形。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は35～49cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁部分を除き全周する。上幅9～17cm，深さ4～7cmで，断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で，踏み締まっている。中央部付近に極めて緩い皿状の窪みがみられる。

ピット 5か所（P₁～P₅）。P₁は径62cmの円形で，深さは70cmである。P₂～P₄は長径47～75cm，短径35～60cmの不整形円形で，深さ27～80cmである。それぞれ各コーナー付近に付設され，深さには多少差異があるが規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は長径25cm，短径18cmの不整形円形で，深さ23cmである。南東壁際中央寄りに付設され，規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴 北コーナーから竈寄り北西壁沿いに付設され，平面形は長径79cm，短径58cmの不整形円形で，深さ52cmの円筒状に掘られ，底面は平坦である。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|------|---------------------------------|------|-------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物・粘土ブロック微量 | 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量，粘性強 |
| 2 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量，締まり強 | 4 褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，締まり強 |

竈 北西壁中央部の壁面を約40cm壁外に掘り込み，砂混じりの粘土を使用して構築している。規模は，長さ128cm，幅95cm程で，弧状に掘り込んでいる。天井部は崩落しているが，両袖部とも遺存している。燃焼部には，焼土ブロック，焼土粒子，炭化粒子がみられる。火床部は約10cm掘り窪められ，中心部や袖部内側は火熱を受けて赤変硬化している部分がみられる。煙道の立ち上がりは約45度と急である。

覆土層解説

- | | | | |
|---------|--|----------|-----------------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量 | 7 ぶい赤褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 2 灰褐色 | 粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 | 8 暗赤褐色 | 焼土中ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子微量 |
| 3 ぶい黄褐色 | 炭化粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量 | 9 ぶい赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 4 ぶい赤褐色 | 炭化粒子・粘土粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量 | 10 褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子微量 |
| 5 ぶい赤褐色 | 焼土粒子・粘土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化物微量 | 11 褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | 粘土粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量 | 12 ぶい赤褐色 | 焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子中量，ローム粒子少量 |
| | | 13 ぶい赤褐色 | 炭化物・炭化粒子少量，ローム粒子微量 |
| | | 14 明褐色 | ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量 |

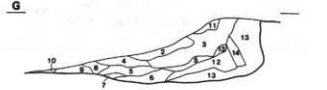
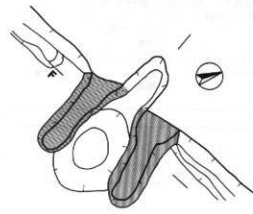
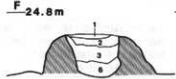
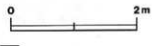
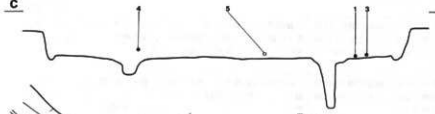
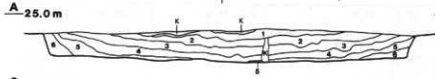
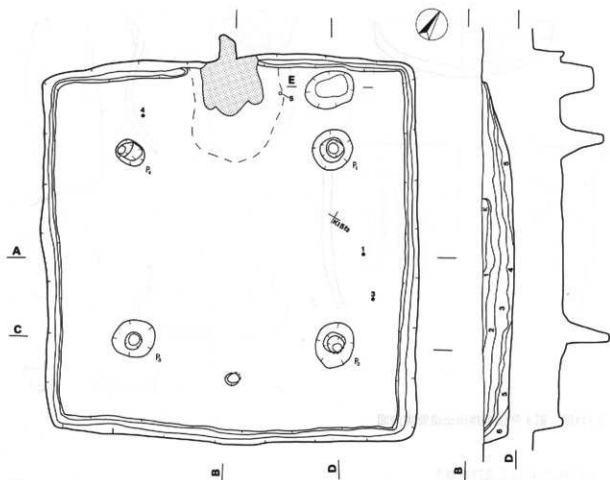
覆土 6層から成る。壁際と下層には褐色土が堆積し，中層から上層にかけて焼土混じりの黒褐色土がレンズ状に堆積する。下層から中層にかけては一部耕作による攪乱を受けている。自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------------|------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック微量 | 4 褐色 | ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土中ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量 | 6 褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック少量 |

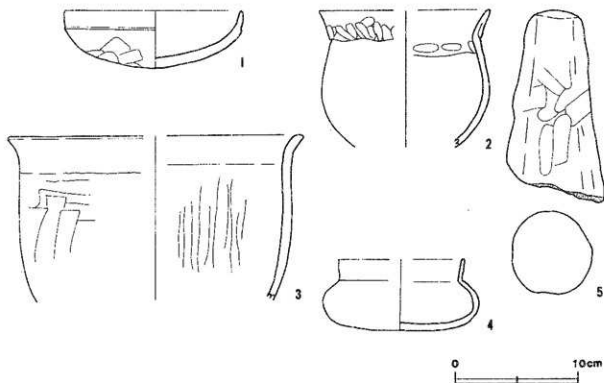
遺物 北寄りの覆土下層から床面直上かけ土師器片が少量出土している。第114図1の環は北東寄りの床面直上から逆位の状態で出土し，2の小形甕は覆土中から，3の甕は北東寄りの床面直上から出土している。4の短頸壺は竈の西寄りの覆土中層から正位の状態で出土し，5の支脚は竈北側の覆土下層から竈の向きに沿って出土している。

所見 本跡は，北西壁に竈を付設する住居跡で，その遺存状態は良好である。時期は，出土遺物から6世紀後半と考えられる。



9/

第113图 第4号住居跡・竪実測図



第114図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	杯 土師器	A 14.2 B 4.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に明瞭な線をもち、口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面横ナデ。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P15 90% PL30 北東寄り床面直上 体部外面及び口 縁部輝付着
2	小形壺 土師器	A [13.8] B (10.9)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は折り返しのある複合口縁で外反する。	口縁部内面、外面上位横ナデ、外面下位縦位のヘラ削り。頸部外面横位のヘラ削り。体部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石 にふい橙色 普通	P16 15% 覆土中
3	瓶 土師器	A [23.4] B (13.2)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り、内面縦位のヘラ磨き。	砂粒・石英・管母・ スコリア にふい黄褐色 普通	P17 5% 北東寄り床面直上
4	短頸壺 濃赤器	A [10.1] B 5.7 C 5.5	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。頸部は短く、やや外傾気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P134 60% 北東寄り覆土中層

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第114図5	支脚	(15.3)	(8.0)	—	(659.5)	80	電北側覆土下層	D P1

第5号住居跡 (第115図)

位置 調査区の中央部北東端, K15g区。

規模と平面形 長軸5.69m, 短軸4.24mの長方形。

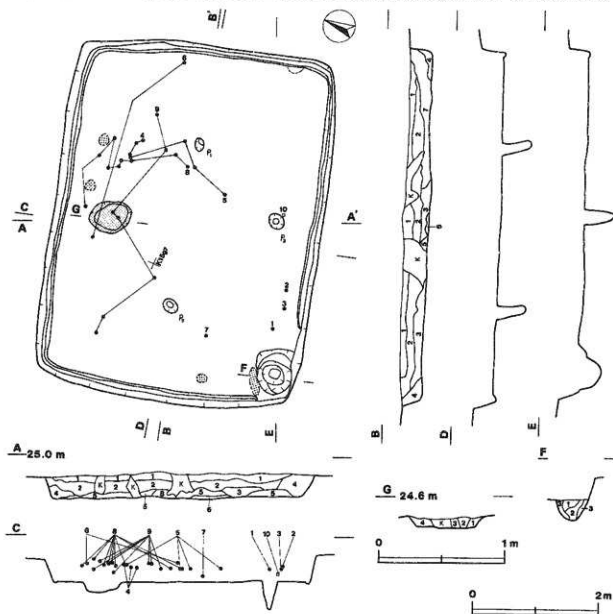
主軸方向 N-74°-E

壁 壁高は30~41cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

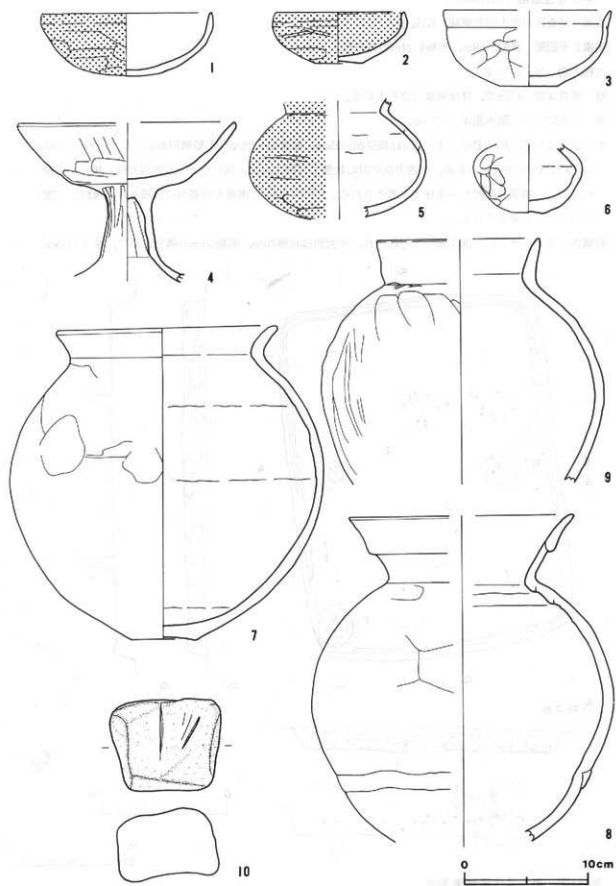
床 平坦で, よく踏み固まっている。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は長径20~25cm, 短径15~22cmの不整形円形ピットで, 深さは47cmである。P₁, P₂は中央から北東, 南西方向に対の状態で付設されて, 両ピットとも南西方向に傾斜して掘り込まれている。規模や配列から支柱穴と考えられる。P₃は中央から南東方向寄りに付設され, 規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴 南コーナーに一部を接して付設され, 平面形は長軸70cm, 短軸50cmの隅丸台形で, 深さ約35cmで, 断



第115図 第5号住居跡実測図



第116图 第5号住居跡出土遺物実測図

面形はU字形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、餅まり強

炉 中央部から北西壁寄りに付設され、長径65cm、短径50cmで、床面を7cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉内覆土には焼土粒子を含む褐色土が堆積しているが、炉床は火熱を受けやや赤変している程度である。

炉土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、炭化粒子極微量
- 2 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 3 褐色 焼土粒子多量、ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

覆土 8層から成る。各壁際には焼土粒子、ローム粒子を含む褐色土が堆積している。覆土下層から上層にかけては帯状に耕作による攪乱を受けている。覆土下層ほど堆積状況に乱れがみられ、覆土下層から東側は人為的に埋め戻しが行われ、その後、自然堆積したものと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------------|-------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブ
ロック微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブ
ロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子少量、炭化粒子少量、炭
灰物微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム
小ブロック微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量 | 8 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |

遺物 中央から北寄りの覆土中層付近から大量に土師器片が出土している。第116図1～3の坏は、共に南寄りの覆土中層から斜位の状態出土している。4の高坏、5・6の埴は北寄りの覆土中層から出土し、5は中央寄りの覆土中層から出土している破片と接合し、6は西寄りの覆土中層から出土している破片と接合したものである。7～9の埴は、7が南西寄りの床面直上から斜位の状態、8・9が北西寄りの覆土中層から点状に出土している破片が接合したものである。その他、10の砥石が東寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡から出土している遺物は、ほぼ中層位から出土していることから住居の廃棄に伴い、遺物を投棄したものと考えられる。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図	坏	A 13.7	体部上位及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに内傾し、口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面横ナデ。外面赤彩。	砂粒・石英・スコリア におい黄色 普通	P18 70% PL30 南寄り覆土中層
2	坏土師器	A 10.3	体部上位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P19 70% PL30 南寄り覆土中層
		B 4.1				
		C 3.8				
3	坏土師器	A [13.3]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は折り返しのある複合口縁で、内面に襷を持ち、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。底部へラ削り後ナデ。	砂粒・石英・スコリア・雲母 におい黄褐色 普通	P21 30% 南寄り覆土中層 体部及び底部僅存 内面剥離
		B 6.1				
		C 4.4				
4	高坏土師器	A [17.6]	頸部から坏部の破片。胴部はほぼ柱状を呈し、裾部は下方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。外部外面へラナデ、内面ナデ。胴部外面縦位のへラナデ。	砂粒・スコリア・雲母 におい黄褐色 普通	P20 50% 北寄り覆土中層 坏部外面僅存
		B (12.7)	頸部は胴部との境に強い襷を持ち、外傾し、外上方に立ち上がる。			
5	埴土師器	B (9.2)	体部下位から口縁部の破片。体部は潰れた球形状を呈し、最大径を体部中位に持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 におい黄色 普通	P22 30% 北寄り覆土中層 体部外周位僅存

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第116図 6	甕 土 師 器	B (5.5) C 2.8	底部から体部上位の破片。平底。体部は潰れた球形形状を呈し、最大径を体部上位に持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英・スコリア にふい黄褐色 普通	P23 30% 北寄り覆土中層 内面割離
7	壺 土 師 器	A 17.4 B 25.0 C 5.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、球形形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア 洗黄褐色 普通	P24 100% PL30 南寄り床直上 体部外面割離 体部外面煤付着
8	壺 土 師 器	A [18.2] B (26.1)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は折り返しのある複合口縁で、「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ。体部外面粘土紐補強痕。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P25 40% 北西寄り覆土中層
9	壺 土 師 器	A [13.2] B (19.5)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面横ナデ。	砂粒・スコリア・黒母 にふい褐色 普通	P26 30% 北西寄り覆土中層

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第116図10	砥 石	(7.4)	(10.5)	(6.0)	—	(605.6)	不明	砂岩	東寄り覆土下層	Q5 PL34

第 6 号住居跡 (第117・118図)

位置 調査区の中央からやや北側、K15s区。

規模と平面形 長軸7.38m、短軸7.26mの方形。

主軸方向 N-46°-W

壁 壁高は40～53cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分と南コーナー付近の一部にはみられない。また、南東壁付近は根切り溝により削平されて確認できなかった。残存する壁溝は上幅7～15cm、深さ3～5cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、踏み締まっている。東コーナーから南コーナーのやや西側に向かって、根切り溝による削平がみられる。

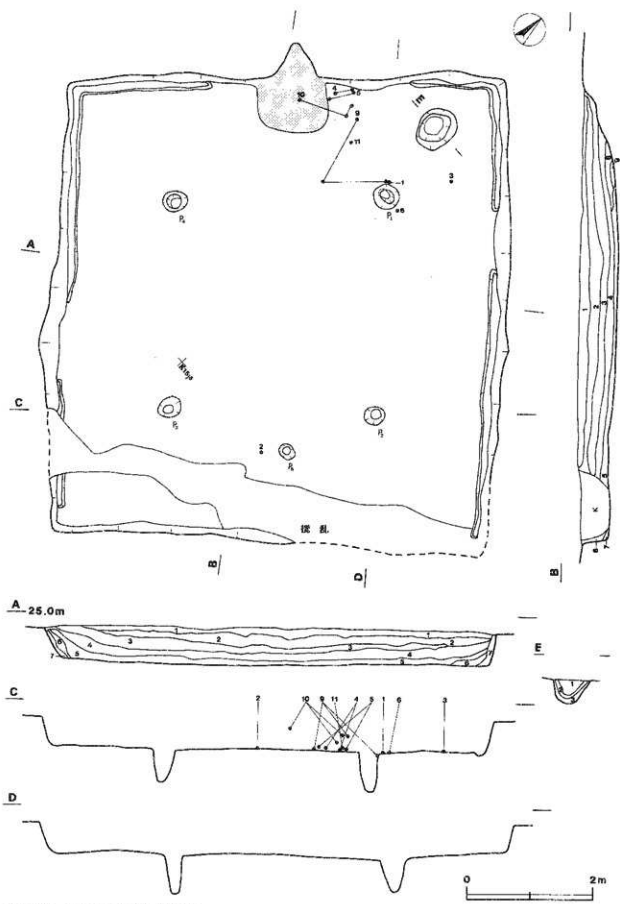
ピット 5か所 (P₁～P₅)。P₁は径43cmの円形で、深さは52cmである。P₂～P₄は長径33～39cm、短径30～33cm、深さ52～64cmの楕円形である。いずれも各コーナー付近に付設され、規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は長径33cm、短径22cmの不整楕円形で、深さ19cmである。南東壁際中央寄りに付設され、規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴 北コーナー付近に付設され、平面形は長径73cm、短径60cmの不整楕円形で、深さ40cmに掘り込まれ、断面はU字形で、底面は中央に向かって緩く傾斜している。

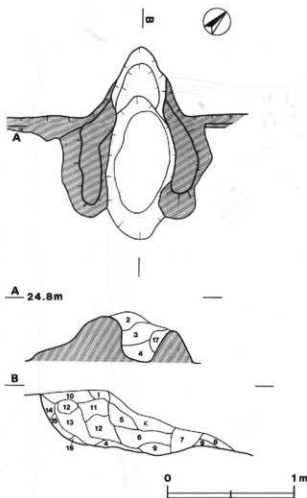
貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微 3 褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
 2 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、焼土粒子微

竈 北西壁中央部の壁面を約63cm壁外に掘り込み、砂混じりの粘土を使用して構築している。規模は、長さ140cm、幅112cm程で、平面は三角形形状をしている。天井部は崩落しているが、両袖部とも遺存している。燃焼部には、焼土ブロック、焼土粒子が厚く堆積し、炭化粒子もみられる。火床部は約13cm程掘り窪められ、中心部や袖部内側は焼けて赤変硬化している。煙道の立ち上がりは約25度で緩やかである。



第117图 第6号住居跡实测图(1)



第118図 第6号住居跡実測図(2)

竪土層解説

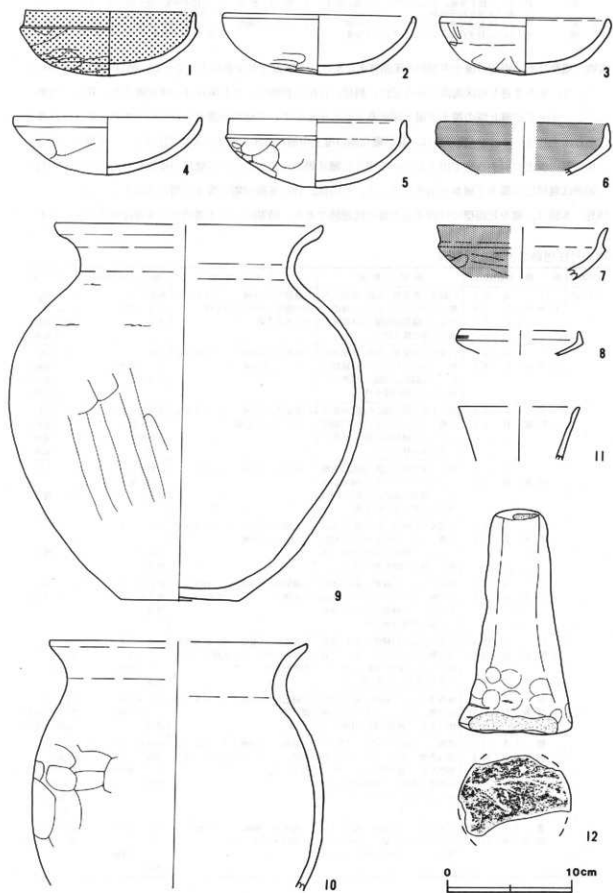
- | | | | |
|---------|--|----------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、灰微量、焼土中ブロック・炭化物極微量 | 9 におい褐色 | 焼土小ブロック中量、焼土粒子・炭化物・粘土粒子・砂少量 |
| 2 暗褐色 | 灰少量、焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子極微量 | 10 褐色 | 焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子・灰・砂少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 におい褐色 | 炭化物・ローム粒子・灰少量、焼土小ブロック・砂極微量 | 11 におい褐色 | 粘土粒子多量、焼土粒子・ローム粒子少量、粘性・締まり極強 |
| 4 におい褐色 | 炭化物・ローム小ブロック・砂・灰少量、焼土粒子・粘土粒子極微量 | 12 におい褐色 | 粘土粒子多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量、粘性・締まり極強 |
| 5 黒褐色 | ローム小ブロック少量、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子極微量 | 13 赤褐色 | 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量、炭化粒子・ローム粒子微量、粘性・締まり強 |
| 6 極暗褐色 | 焼土小ブロック・ローム粒子・砂少量、焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック極微量 | 14 明赤褐色 | 焼土粒子多量、粘土粒子少量 |
| 7 におい褐色 | 焼土小ブロック・灰少量、焼土粒子・炭化物・ローム粒子・粘土粒子極微量 | 15 暗赤褐色 | 炭化粒子多量、焼土粒子中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 8 褐色 | 焼土小ブロック・ローム粒子・砂少量、焼土粒子・炭化物・粘土粒子極微量 | 16 明赤褐色 | 焼土粒子・粘土粒子多量 |
| | | 17 におい褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量、粘性・締まり極強 |

竪土 9層から成る。北西壁を除く壁際には褐色土が堆積し、床面には焼土粒子を含む褐色土が堆積している。

下層から上層にかけて焼土粒子混じりの黒褐色土がレンズ状に堆積しており、自然堆積と思われる。南東壁沿いは根切り溝による攪乱を受けている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子・ローム中ブロック・ローム粒子・砂微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・砂微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子微量 |



第119图 第6号住居跡出土遺物実測図

5	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土・粒子・炭化粒子少量	8	暗赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック・砂・灰少量
6	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	9	ぶい赤褐色	ローム粒子・砂・灰中量、焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
7	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量			

遺物 竈及びその周辺の覆土中層から床面直上にかけて、土師器片が少量出土している。第119図1～8の坏は、1, 3, 6が北寄りの床面直上から正位、斜位、正位の状態で、2が東寄りの床面直上から正位の状態で出土し、4・5が竈北側の覆土下層と床面直上から出土している坏片が接合したものである。7・8は覆土中から出土している。9・10の壺は、9が竈北側の覆土中層から床面直上にかけて出土している甕片が接合し、10は竈内覆土中層から逆で出土している甕片に竈北側から出土している甕片が接合したものである。11の長頸壺は竈付近の覆土下層から出土している。その他、12の支脚が竈内覆土下層から出土している。

所見 本跡は、竈を北西壁に付設する大型の住居跡である。時期は、出土遺物から6世紀後半と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第119図 1	坏 土師器	A 13.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内傾し、体部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面及び底部へつ削り、内面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア ぶい褐色 普通	P27 95% PL30 北寄り床面直上 内・外面保存者
		B 5.0				
		C 2.0				
2	坏 土師器	A 15.2	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内傾し、体部との境に極めて弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつナデ、内面横ナデ。	砂粒 ぶい黄褐色 普通	P28 95% 東寄り床面直上 体部外面直上及び 口縁部保存者
		B 4.7				
3	坏 土師器	A 13.4	体部中位一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内傾し、体部との境に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつナデ、内面横ナデ。	砂粒・石英・スコリア・雲母 浅黄褐色 普通	P29 95% 北寄り床面直上 体部外面直上及び 口縁部内面保存者
		B 4.5				
4	坏 土師器	A 15.6	体部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は垂直に立ち上がり、体部との境に弱い稜を持つ。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 ぶい褐色 普通	P30 80% PL30 竈北側覆土下層
		B 4.5				
5	坏 土師器	A 14.0	体部及び口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はやや内傾し、体部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつナデ、内面横ナデ。	砂粒・石英・パミス 灰褐色 普通	P31 80% PL30 竈北側覆土下層
		B 5.4				
6	坏 土師器	A [13.4]	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内傾し、体部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P32 20% 北寄り床面直上
		B (4.1)				
7	坏 土師器	A [13.6]	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は僅かに外反して閉き、体部との境に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ、内面横ナデ。外面黒色処理。	砂粒・石英・スコリア・雲母 ぶい褐色 普通	P33 10% 覆土中
		B (4.1)				
8	坏 土師器	A [9.4]	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は鋭く内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面横ナデ。	砂粒・雲母 ぶい赤褐色 普通	P34 5% 覆土中 外周割離 口縁部外強保存者
		B (1.9)				
9	甕 土師器	A [21.5]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は胴部から丸味を持って外反し、口縁部はやや外方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のへつナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 ぶい黄褐色 普通	P35 40% PL30 竈北側覆土中層 及び床面直上 体部外面下位保存者
		B 30.1				
		C 9.5				
10	甕 土師器	A [20.4]	体部中位から口縁部の破片。体部中位に最大径を持ち、頸部から口縁部にかけて丸味を持って外反する。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部内・外面へつナデ。	砂粒・石英・スコリア・パミス ぶい黄褐色 普通	P36 50% 竈内覆土中層
		B (19.7)				

図取番号	型 類	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第119図 11	長須壺 須壺	A (9.8) B (4.4)	口縁部の破片。口縁部は僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P135 5% 甕付近覆土下層 二次焼成

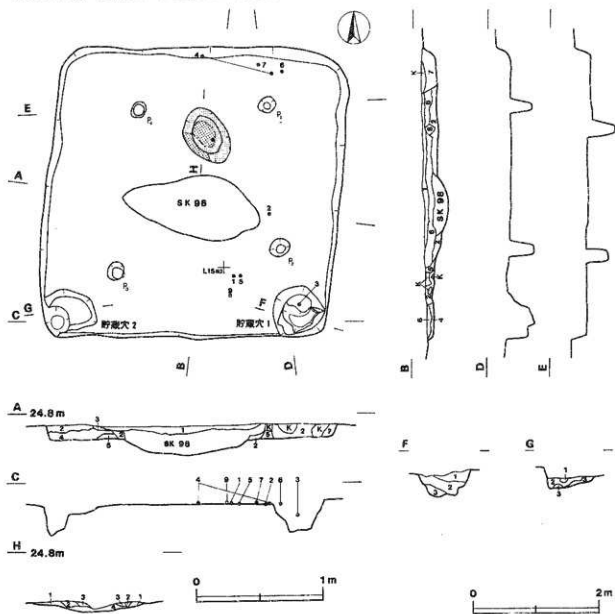
図取番号	種 別	計 測 値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
第119図12	支 脚	18.0	(9.0)	—	(699.6)	95	甕内覆土下層	DP2 高部木蓋板 PL34

第7号住居跡(第120図)

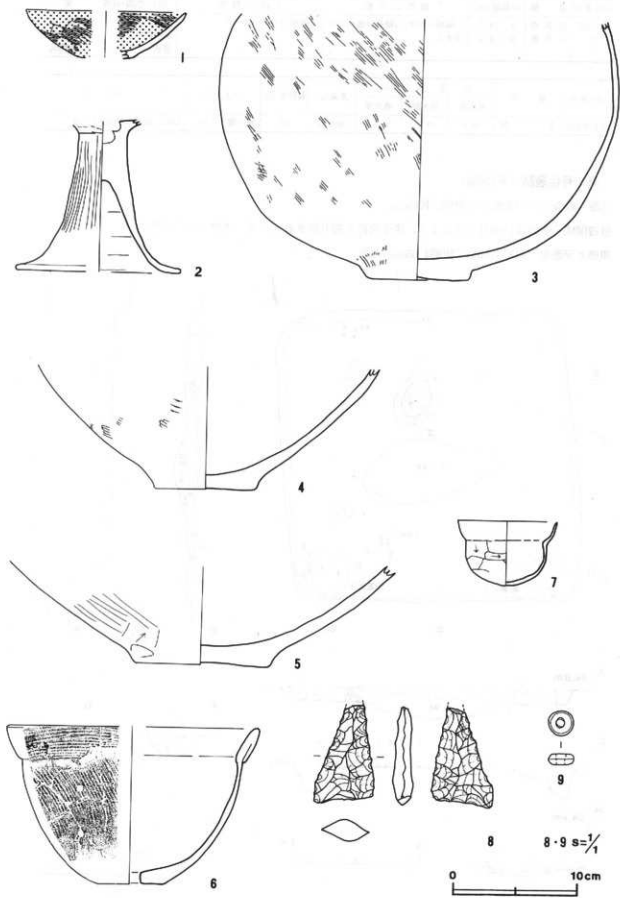
位置 調査区の中央部やや東側, K15₂区。

重複関係 本跡は第98号土坑により, 床中央部を掘り込まれている。本跡のほうが古い。

規模と平面形 長軸4.66m, 短軸4.65mの方形。



第120図 第7号住居跡実測図



第121图 第7号住居跡出土物実測图

主軸方向 N-50°-E

壁 壁高は10~25cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、踏み締まっている。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は長径26~33cm、短径22~28cmの不整形円形で、深さは34~40cmである。

それぞれ各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南東コーナーに一部を接して付設され、平面形は長軸88cm、短軸80cmの隅丸台形で、播鉢状に掘られ、深さは約46cmである。底面には木根跡による落ち込みがみられる。貯蔵穴2は南西コーナーに接して付設され、平面形は長径80cm、短径66cmの楕円形である。深さ40cm程の袋状に掘り込まれ、底面は凸状を呈している。

貯蔵穴1土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量 | 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子極微量 |
| 3 明褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | | |

貯蔵穴2土層解説

- | | |
|-------|---------------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック極微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック極微量、締まり強 |
| 3 明褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、締まり強 |

炉 中央から北寄りに付設され、長径95cm、短径65cmで、床面を15cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉内覆土には焼土ブロックを含む明赤褐色土が厚く堆積し、炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|--------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、炭化粒子極微量 |
| 2 褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 3 明褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量 |
| 4 明赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土粒子多量、炭化物中量 |

覆土 8層から成る。各壁際には褐色土が堆積している。北壁と東壁際は耕作による攪乱をうけ、中央部分は第98号土坑に掘り込まれている。人為的に埋め戻されたものと思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 | 7 褐色 | 焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物 中央付近から南西寄りの床面直上から土師器片が中量出土している。第121図1・2の高坏は、1が南寄りの床面直上から、2が東寄りの床面直上から出土している。3の壺は貯蔵穴1の覆土上層から逆位の状態で出土したものである。4・5の甕は、北壁際と南寄りで共に床面直上から出土している。6・7の甕、ミニチュア土器は、共に東寄りの床面直上から出土したものである。その他、9の白玉が南寄りの床面直上から出土しているが、覆土中から出土している8の石鉄は混入したものと思われる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 1	高坏 土師器	A [12.8]	坏部の破片。坏部は下位に横を持ち、内側しながら立ち上がり、外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面刷毛目整形後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・頁石・雲母 明赤褐色	P37 10% 南寄り床面直上
		B (3.7)				
2	高坏 土師器	B (11.9)	袖部から脚部の破片。脚部は柱状に下方に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・雲母 ぶい褐色	P38 30% 東寄り床面直上 体部外面保付層
		D [13.2]				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第121図 3	壺 土師器	B (21.0) C 8.4	底部から体部上位の破片、やや突出した平底。体部は球形を呈する。	体部外面刷毛目整形後ヘラ磨き、内面ナデ。底部ナデ。	砂粒・雲母 にふい・黄褐色 普通	P40 70% 行北1の質土層 内面刷毛 体部外面灰付着
4	壺 土師器	B (9.8) C 8.0	底部から体部中位の破片、突出した平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面刷毛目整形後ナデ、内面ナデ。底部丁寧なナデ。	砂粒・長石 にふい・褐色 普通	P41 30% PL31 北壁際床面直上 二次焼成 内面刷毛
5	壺 土師器	B (7.9) C 10.7	底部から体部下位の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面丁寧なヘラナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・スコ リア・雲母 褐色 普通	P42 30% 南寄り床面直上
6	瓶 土師器	A [20.0] B 12.4 C 5.0	体部及び口縁部一部欠損。体部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は折り返しのある複合口縁となる。底部は単孔を穿つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面刷毛目整形。体部外面刷毛目整形後ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・スコリア・ パミス 褐色 普通	P43 50% PL31 東寄り床面直上
7	ミニチュア 土師器	A 8.0 B 5.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は外上方に開き、立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面横ナデ、外週上位縦位のヘラナデ、中位よりナデ。	砂粒・スコリア・ パミス・雲母 にふい・褐色 普通	P39 60% PL31 東寄り床面直上

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第121図	8 石 鉢	(2.7)	(1.6)	1.2	—	(1.7)	80	頁岩	覆土中層	Q6 PL34
9	白 玉	0.65	0.65	0.3	0.2	0.1	100	滑石	南寄り床面直上	Q7 PL34

第8号住居跡 (第122図)

位置 調査区のはほぼ中央、L14es区。

規模と平面形 長軸5.56m、短軸5.31mの方形。

主軸方向 N-47°-W

壁 壁高は22~36cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 各壁下の一部分にみられる。上幅7~14cm、深さ3~6cmで、断面形はU字形である。

床 平坦で、踏み締まっている。

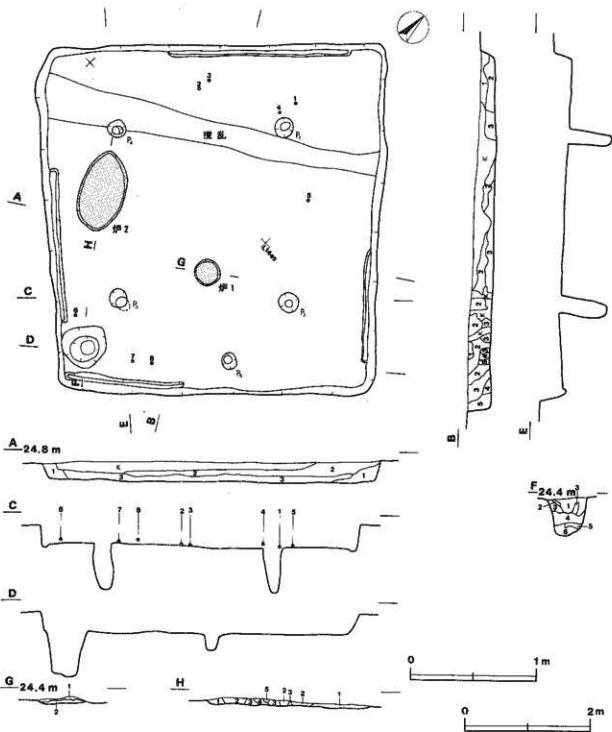
ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁、P₄は長径30cm、短径25~27cmで、深さ67~74cmの不整楕円形で、P₂、P₃は径30cm、深さ70~75cmの円形である。いずれも各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は長径27cm、短径22cmで、深さ25cmの不整楕円形で、南東壁際中央寄りにあり、規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径72cm、短径63cmの隅丸台形である。深さは約60cmで、円筒状に掘り込まれ、底面は皿状である。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化物少量、炭化物微量	4 褐色	ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量、炭土粒子微量
2 明褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量	5 明褐色	ローム粒子中量、炭土小ブロック・炭土粒子・ローム小ブロック少量
3 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭土粒子・炭化物微量	6 暗褐色	炭土小ブロック・炭化物・ローム粒子中量、炭土粒子・ローム小ブロック少量

炉 2か所。炉1は中央からやや南東寄りに付設されている。径40cmの円形で、床面を7cm掘り窪めた地床炉である。炉床の一部は削平され残存しないが、残存部分は火熱を受け赤変している。炉2は南西壁寄り中央部に付設されている。長径127cm、短径72cmで、床面を8cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉内覆土には粘土ブロックを含む赤褐色土、粘土粒子を含む明褐色土が堆積している。炉床は火熱を受け赤変酸化している。



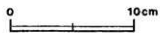
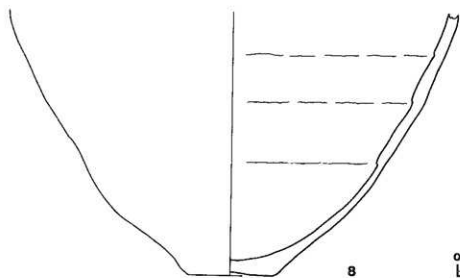
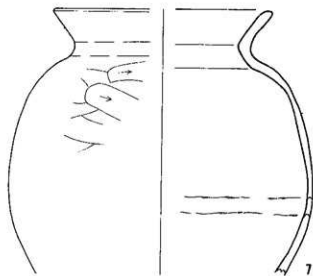
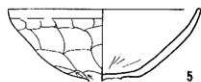
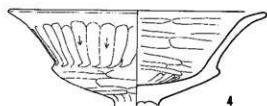
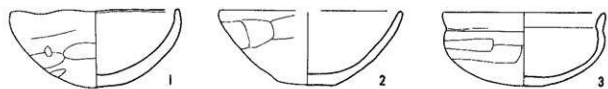
第122図 第8号住居跡実測図

炉1土層解説

- 1 明褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物極微量
 2 明褐色 ローム粒子中量、焼土中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土粒子極微量

炉2土層解説

- 1 明褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子少量、炭化物・ローム小ブロック極微量
 2 赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量、粘土ブロック極微量
 3 明褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック極微量
 4 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量、炭化物・ローム小ブロック極微量
 5 褐色 焼土小ブロック・ローム粒子微量



第123图 第8号住居跡出土遺物実測図

覆土 5層から成る。北東壁から中央付近にかけて褐色土、暗褐色土が複雑に堆積し、壁際には黒褐色土が堆積している。床面上から中層にかけては焼土粒子を含む褐色土が厚く堆積しているが、中層から上層にかけて耕作による攪乱を受け残存状態は悪い。人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
子・炭化物微量
2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子 4 暗褐色 焼土粒子・炭化物微量、ローム小ブロック微量
5 黒褐色 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック微量

遺物 南寄りの覆土下層及び床面直上と、北寄りの床面直上から土師器が出土している。第123図1、4の環、高環は北寄りの床面直上から逆位の状態で、2・3の環は、北西の床面直上から逆位の状態でそれぞれ並んで出土している。5・6の高環は、5が北東寄りの床面直上から、6が南コーナー付近の覆土中層から正位の状態で出土している。7・8の甕は、共に南東寄りの床面直上と覆土下層から出土している。

所見 本跡から出土している環の出土状況は、意図的に逆位に伏せた状態で出土するものが大部分で、祭祀行為との関連も考えられる。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第123図 1	環 土師器	A 13.4	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 スコリア による褐色 普通	P44 98% PL31 北寄り床面直上 体部外面保付着
		B 6.2				
		C 2.0				
2	環 土師器	A [14.6]	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア による褐色 普通	P45 60% 北西床面直上 体部外面中位保付着
		B 6.0				
		C 4.0				
3	環 土師器	A 13.1	体部及び口縁部一部欠損。小さな平底。体部は内彎しながら立ち上がり、やや器厚を増して口縁部に至る。口縁部内面に稜を持ち、やや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・スコリア・パミス による褐色 普通	P46 60% 北西床面直上
		B 5.9				
		C 3.0				
4	高環 土師器	A 20.6	高環。下部下に段を有し、上位は外傾しながら外上方に開き、口縁部は反る。	口縁部内・外面中位縦位の強いナデ。内面下位及び外面下位ナデ。	砂粒・長石・スコリア による褐色 普通	P47 50% PL31 北寄り床面直上 口縁部保付着
		B (7.5)				
5	高環 土師器	A 15.4	高環。下位に弱い稜を持ち、内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。高環内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石 による黄褐色 普通	P48 50% 北東寄り床面直上 外面保付着
		B (5.7)				
6	高環 土師器	A 15.2	高環。下位に稜を持ち、内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面斜位のヘラナデ。高環内・外面ナデ。	砂粒・長石 による黄褐色 普通	P49 40% 南東寄り床面直上 内・外面保付着
		B (5.5)				
7	甕 土師器	A [17.6]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「 Σ 」の字状に外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ。頸部内面ヘラ整形痕。	砂粒・長石 による黄褐色 普通	P50 40% 南東寄り床面直上 二次焼成
		B (21.2)				
8	甕 土師器	A (21.2)	底部から体部中位の破片。小さな平底。体部は長割を呈し、上位に最大径を持つと推測される。	体部外面ヘラ削り後横位のナデ。内面ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面輪痕み痕。	砂粒・石英・長石・スコリア による褐色 普通	P51 50% 南東寄り覆土下層 内・外面保付着
		C 6.9				

第9号住居跡 (第124図)

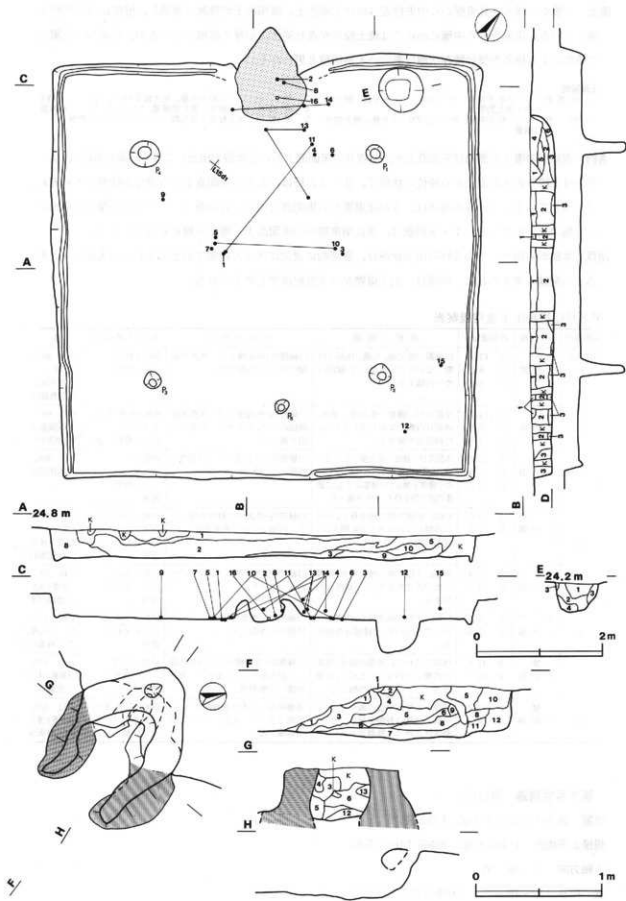
位置 調査区のほぼ中央部、L15a区。

規模と平面形 長軸6.82m、短軸6.54mの方形。

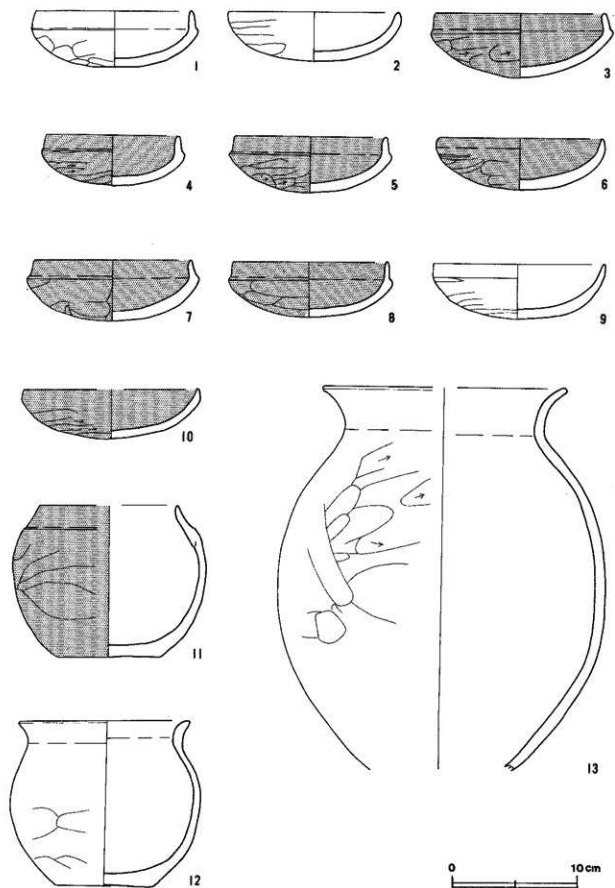
主軸方向 N-38°-W

壁 壁高は22~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

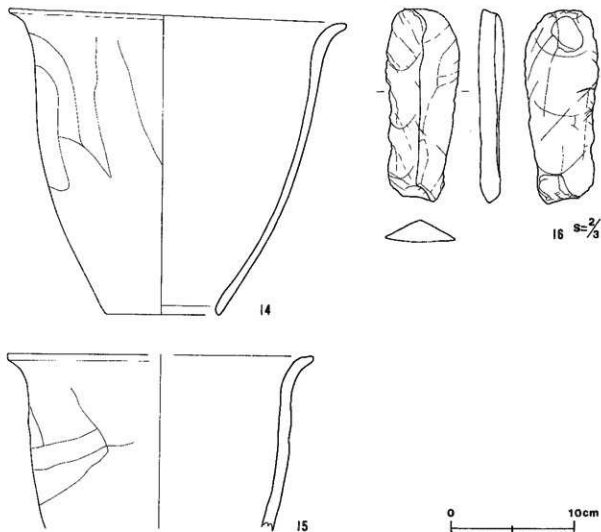
壁溝 竈部分と南東壁中央から南コーナーにかけて、耕作による攪乱を受け、確認できないが、ほぼ全周して



第124图 第9号住居跡・竈突測図



第125图 第9号住居跡出土遺物実測図(1)



第126図 第9号住居跡出土遺物実測図(2)

いる。上幅8~14cm、深さ5~8cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、踏み締まっている。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は長径26~48cm、短径26~40cmで、深さ66~81cmの楕円形または不整形円形である。各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は長径25cm、短径20cm、深さ45cmの不整形円形で、南東壁際中央寄りに付設され、規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴 北コーナーと竈との中間、北西壁際付近に付設され、平面形は径68cmのほぼ円形で、円筒状に45cm程掘られ、底面は北東側から中央に向かってやや傾斜している。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|-----------------------|
| 1 明褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量、粘性強 | 3 褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極微量 | 4 明褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、締まり強 |

竈 北西壁中央部の壁面を約55cm壁外に掘り込み、砂混じりの粘土を使用して構築している。規模は長さ140cm、幅98cm程で、平面はやや馬蹄形をしている。天井部は崩落しているが、両袖部と煙道部は遺存している。燃焼部には、焼土ブロック、焼土粒子が厚く堆積し、炭化物や炭化粒子も含まれている。火床部は約10cm程掘り窪められ、中心部や袖部内側は焼けて赤変硬化している。煙道の立ち上がりは約45度で急である。

覆土層解説

1	暗赤褐色	炭化物少量, 焼土粒子・砂微量, 焼土小ブロック微量	7	褐色	ローム粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
2	ぶい赤褐色	炭・ローム粒子少量, ローム小ブロック・砂微量, 焼土小ブロック・焼土粒子極微量	8	赤褐色	ローム粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子・砂・焼土粒子少量
3	褐色	ローム粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・砂少量, 焼土粒子極微量	9	明赤褐色	焼土粒子・ローム粒子中量, 炭化物少量, 焼土粒子・ローム小ブロック・砂極微量
4	暗赤褐色	焼土粒子・炭化物中量, 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・砂・焼土粒子少量	10	暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子極微量
5	ぶい黄褐色	砂・焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量	11	明赤褐色	焼土粒子・ローム粒子少量, ローム小ブロック極微量
6	ぶい赤褐色	焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化物・焼土粒子少量	12	暗褐色	焼土粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 炭化物極微量, 織まり極強
			13	暗褐色	焼土粒子・ローム粒子少量, ローム小ブロック極微量

覆土 10層から成る。北東壁際下層から南西壁際上層にかけて、焼土粒子、炭化粒子を含む黒褐色土が厚く堆積している。北東部床面上から上層にかけて黒褐色土、暗褐色土、褐色土が複雑に重なり合いながら堆積しており、人為的に埋め戻されたものと思われる。耕作による攪乱を受けている。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	6	褐色	焼土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
2	黒褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・ローム小ブロック微量	8	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量	9	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
5	暗褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量	10	褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 中央付近から、竈及び竈周辺にかけて土師器が大量に出土している。第125・126図1～10の環は、1・5・7の環が中央付近の床面直上から正位の状態で纏まって出土し、2・8が竈内覆土中層から共に斜位の状態でも出土している。3・10は北東寄りの床面直上から正位の状態でも出土し、10は中央付近の床面直上から出土している坏片と接合する。4・6は竈付近の床面直上から正位の状態でも並ぶように出土している。11の鉢は竈付近の床面直上から出土し、中央付近の床面直上から出土している鉢片と接合し、12の小形甕は東寄りの床面直上から横位の状態でも出土している。13の甕は、竈付近の覆土下層から出土している甕片が接合したもので、14・15の甕は、14が竈周辺の床面直上から、15が東寄りの覆土中層から逆位の状態でも出土している。16の縦長剥片は混入したものである。なお、竈内からは支脚が出土している。

所見 本跡から出土している環は意図的に、正位の状態でも床面直上に置いたように出土することから、何らかの祭祀行為との関連も考えられる。時期は、出土遺物から6世紀後半と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第125図 1	坏 土師器	A 12.5	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに内傾し、体部との境に明瞭な線を有し、肩部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 明褐色 普通	P52 100% PL32 中央付近床面直上 口縁部及び体部 外面焼付着
		B 4.4				
2	坏 土師器	A 13.6	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部で僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のへラ削り、内面横ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア 浅黄褐色 普通	P53 90% 竈内覆土中層
		B 3.9				
3	坏 土師器	A 13.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部と体部との境には明瞭な線を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ、内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア・雲母 灰褐色 普通	P54 90% 北東寄り床面直上
		B 5.1				
4	坏 土師器	A 10.4	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。体部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のへラナデ、内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 ぶい黄褐色 普通	P55 90% PL31 竈付近床面直上
		B 4.0				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色頭・焼成	備 考
第125図 5	坏 土 師 器	A 12.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内 彎しながら立ち上がり、口縁部は ほぼ直立する。体部と口縁部との 境に明確な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 上位へラ削り後横位のナデ、内面 ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・石英・長石・ スコリア 黒褐色 普通	P56 90% 中央付近床面直上
		B 4.5				
6	坏 土 師 器	A 13.3	口縁部一部欠損。丸底。体部は内 彎しながら立ち上がり、口縁部は 僅かに内傾する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 上位へラ削り後横ナデ、下位ナデ、 内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 黒褐色 普通	P57 90% 電付近床面直上
		B 4.1				
7	坏 土 師 器	A 12.4	口縁部一部欠損。丸底。体部は内 彎しながら立ち上がり、口縁部は 僅かに内傾する。口縁部と体部と の境に明確な稜を持つ。端部は尖 る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラ削り後ナデ、内面横ナデ。内・ 外面黒色処理。	砂粒・長石・スコ リア ぶい・橙色 普通	P58 90% 中央付近床面直上
		B 4.9				
8	坏 土 師 器	A 12.3	口縁部一部欠損。体部は外上方に 立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に 立ち上がる。体部と口縁部との境 に明確な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラナデ、内面横ナデ。内・外面 黒色処理。	砂粒・石英・長石・ スコリア 黒褐色 普通	P59 85% PL32 電内覆土中層
		B 4.5				
9	坏 土 師 器	A 13.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内 彎しながら立ち上がり、口縁部は 垂直に立ち上がる。口唇部は尖り、 口縁部と体部との境に弱い稜を持 つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 横位のへラ磨き、内面放射状のへ ラ磨き。	砂粒 ぶい・橙色 普通	P60 85% 覆土中 内面刺離
		B 4.5				
10	坏 土 師 器	A [14.0]	体部及び口縁部一部欠損。体部は 内彎しながら外上方に立ち上 がり、口縁部は垂直に立ち上がる。 口唇部は尖り、口縁部と体部との 境に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 横位のへラ削り、内面ナデ。内・ 外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	P61 60% 北寄り床面直上
		B 3.9				
11	鉢 土 師 器	A [11.0]	体部一部欠損。平底。体部は内彎 しながら立ち上がり、中位で壁厚 を減じ、上位で厚みを増す。口縁 部は内傾し、やや内ち削ぎ状に反 り、口唇部は尖る。口縁部と体部 との境に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラ削り、内面ナデ。底部へラ削 り。体部内面輪溝のみ。外面黒色 処理。	砂粒・スコリア・ パミス・雲母 灰褐色 普通	P62 80% 電付近床面直上
		B 12.2				
		C 4.0				
12	小形 土 師 器	A 13.8	体部及び口縁部一部欠損。平底。 体部は内彎しながら立ち上がる。 頸部は柄丸、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部 へラ削り。	砂粒・長石・スコ リア ぶい・橙色 普通	P63 70% PL32 東寄り床面直上 内面刺離
		B 13.3				
		C 7.3				
13	壺 土 師 器	A [19.6]	底部及び口縁部一部欠損。体部は 緩やかに内彎しながら立ち上がる。 最大径を体部中に持ち、口縁部 は外反し、口唇部に丸味がある。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・スコ リア ぶい・橙色 普通	P64 50% 電付近覆土中層 内面刺離
		B (30.7)				
第126図 14	飯 土 師 器	A 27.0	体部及び口縁部一部欠損。無定 式。体部は僅かに内彎しながら立 ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 縦位のへラナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・長石・ スコリア 浅黄褐色 普通	P65 90% PL31 電内近床面直上
		B 24.5				
		C 9.0				
15	飯 土 師 器	A [24.4]	体部中位から口縁部の破片。体部 は僅かに内彎しながら立ち上 がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。	砂粒・石英・長石・ スコリア ぶい・橙色	P66 30% 東寄り覆土中層 体部外面付着 内面刺離
		B (14.0)				

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第126図16	飯 長 刺 片	7.7	3.0	0.9	—	24.0	100	砂岩	覆土中	Q8

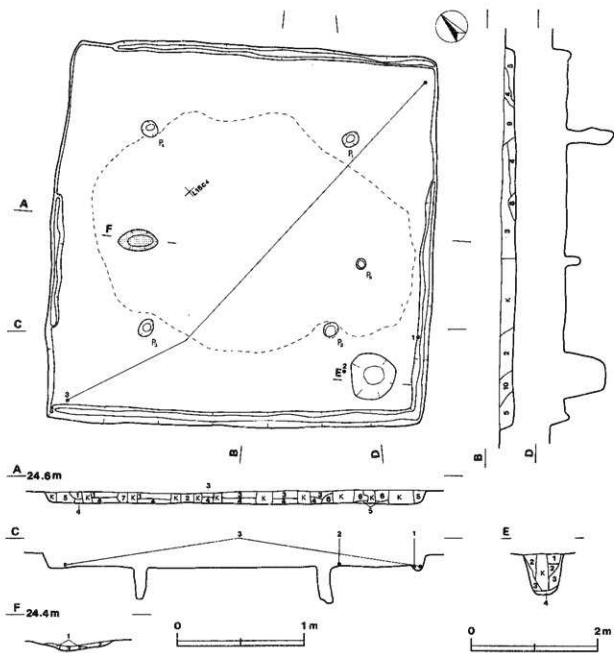
第10号住居跡 (第127図)

位置 調査区の中央部、L15c区。

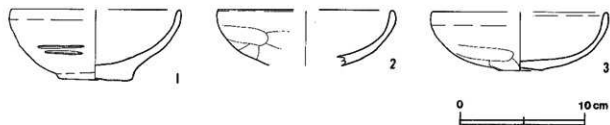
規模と平面形 長軸6.12m、短軸6.10mの方形。

主軸方向 N-47°-E

壁 壁高は16~26cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。



第127図 第10号住居跡実測図



第128図 第10号住居跡出土遺物実測図

床 平坦で、中央部は広い範囲が踏み固められており堅緻である。南西壁沿い床面上には焼土の広がりが見られる。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は長径25~32cm、短径22~25cmで、深さ47~75cmの不整形円形で、各コーナー付近に付設され、位置や配列から支柱穴と考えられる。P₅は径20cm、深さ23cmの円形で中央から南東壁寄りに付設され、位置や配列から出入口ピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長軸75cm、短軸70cmの隅丸台形で、深さは約35cmで、円筒状に掘り込まれ、底面は平坦である。覆土下層から上層にかけて帯状の耕作による攪乱を受けている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック微量、粘性強
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量、ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量

炉 中央から北西寄りに付設されている。長径63cm、短径33cmで、床面を5cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。炉内覆土には焼土粒子を多量含む赤褐色土が堆積している。炉の中央部が北東から南西方向に攪乱を受けているが、残存する炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 褐色 焼土粒子・ローム粒子微量

覆土 10層から成る。壁際には褐色土が堆積し、覆土下層から上層にかけては焼土粒子、炭化粒子を含む暗褐色土が堆積している。帯状の攪乱を全面に受けているが、残存する土層から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------------|--------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量、ローム小ブロック極微量 | 6 極暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、炭化物・ローム小ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子極微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量 | 10 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量 |

遺物 出土遺物が少なく、僅かに床面直上のみられる。第128図1~3の坯は、1が南東壁溝の覆土上面から斜位の状態で出土し、2が南寄りの床面直上から、3は東西両コーナー付近から出土した坯片が接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第128図 1	土師器	A [13.4]	体部及び口縁部一部欠損。やや突出した平底。体部はやや扁平で内彎しながら立ち上がり、口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・石英・長石・バミス に濃い褐色	P67 60% 南東壁溝覆土上面体部外面中位研磨痕 底部外面煤付着	
		B 5.6					
		C 5.8					
2	土師器	A [14.0]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 黒褐色 普通	P68 30% 南寄り床面直上二次焼成	
		B (4.4)					
3	土師器	A [13.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾ぎ状に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石 黒褐色 普通	P69 40% 東西両コーナー付近覆土中体部外面煤付着	
		B 4.6					
		C 3.4					

第11号住居跡 (第129図)

位置 調査区の中央部やや北東, L15₆₄区。

規模と平面形 長軸2.40m, 短軸2.24mの方形。

主軸方向 N-57°-W

壁 壁高は6~7cmで, 緩く外傾しスロープ状である。

床 やや凹凸があり, 踏み固められた部分は認められない。北東から南西方向に耕作による攪乱を受けているが残存状況はよい。

覆土 2層から成る。掘り込みが極めて浅く, 帯状の攪乱を全面に受けているため, 覆土の全体的な堆積状況の把握は難しいが, 部分的に褐色土と暗褐色土がレンズ状に堆積している状況がみられる。自然堆積と考えられる。

土層解説

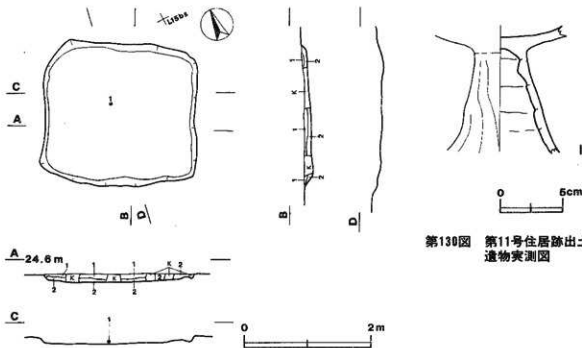
- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色 ローム粒子多量, 炭化物・炭化粒子微量

遺物 覆土中から僅かに土師器片が出土している。第130図1の高坏は, 中央付近の床面直上から横位の状態で出土したものである。

所見 本跡は, 柱穴及び炉等を伴わず, 竪穴住居跡として考えるには疑問ものころが, 遺構の残存状況から本跡に隣接する第10号住居跡及びその他の遺構の関連施設とも考えられる。時期は, 出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 1	高 上 脚 懸	B (10.1)	脚部片。脚部は柱状に下方に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ, 内面ナデ。	砂粒・石英・長石・スコリア 褐色 普通	P70 40% 中央付近床面直上



第130図 第11号住居跡出土遺物実測図

第129図 第11号住居跡実測図

第12号住居跡 (第131図)

位置 調査区の中央部やや東寄り, L15a7区。

規模と平面形 長軸6.00m, 短軸4.35mの長方形。

主軸方向 N-48°-E

壁 壁高は4~8cmで, 緩く外傾して立ち上がる。掘り込みが浅く, また, 谷津に向かう緩い傾斜地でもあるため東コーナー付近は削平されて殆ど残存しない。

床 やや凹凸があり, 踏み固められた部分は認められない。

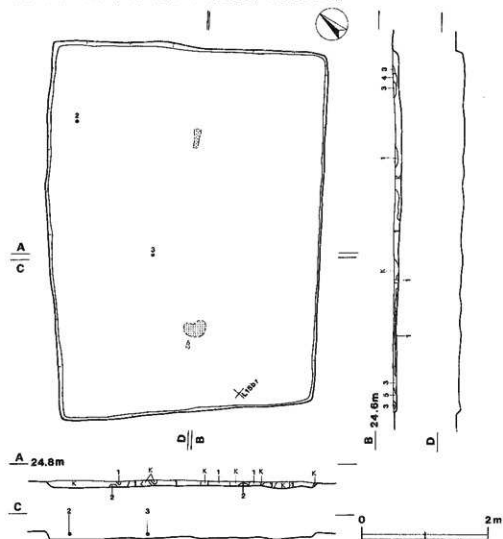
覆土 5層から成る。壁際には褐色土が堆積しているが, 耕作による攪乱を受けているため, 堆積状況は不明である。

土層解説

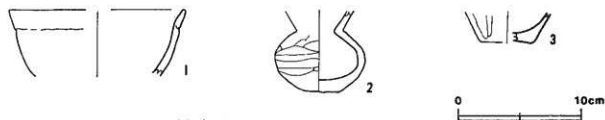
1 褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・ローム小ブロック 物微量, 埴まり強	3 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量, ローム小ブ ロック極微量
2 褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック極微量, 埴 まり強	4 にぶい赤褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量
		5 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量

遺物 覆土中層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第132図1の坏は南寄りの床面直上から, 2の埴は北寄りの覆土中層から, 3の手捏土器は中央寄りの覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から5世紀後半と考えられる。



第131図 第12号住居跡実測図



第132図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 1	坏 土器器	A [14.1] B (5.4)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は折り返しのある複合口縁で、やや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	P71 5% 南寄り床面直上
2	埴 土器器	B (6.5) C 3.1	口縁部一部欠損。平底。体部は潰れた球形を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のへら削り後、内面ナデ。底部へら削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P72 80% 北寄り覆土中層 体部外部中位煤 付着
3	手置土器 土器器	B (2.5) C [4.0]	底部から体部中位の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のへら削り、内面ナデ。底部へら削り。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P73 30% 中央寄り覆土中層

第13号住居跡 (第133図)

位置 調査区の東端、K15a区。

規模と平面形 本跡の北東側は調査区外のため発掘ができず規模は不明であるが、平面形は一辺5.47mの方形と推定される。

主軸方向 N-50°-W

壁 壁高は28~50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、踏み締まっている。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。各ピットは径30~35cm、深さ20~36cmの円形で、P₁・P₄は中央付近に付設され、P₂・P₃は南コーナー貯蔵穴付近に付設されている。P₁・P₂は南側に約10度の傾斜をもって掘り込まれている。各ピットの性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径105cm、短径70cmの不整楕円形である。深さは80cmで、ほぼ円筒状に掘り込まれている。

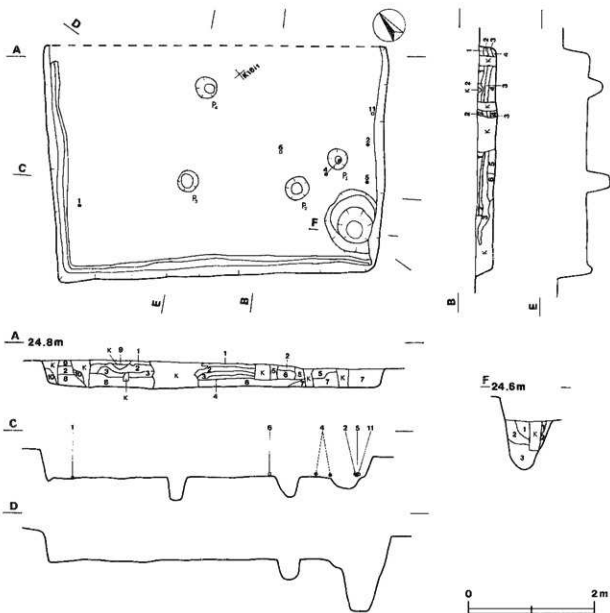
貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック極微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 褐色 炭化粒子・ローム粒子微量

覆土 10層から成る。北東の壁際から床面にかけてロームブロック、ローム粒子を含む流れ込みと思われる暗褐色土が中央付近まで堆積し、床面上には焼土粒子、炭化粒子を含む暗褐色土が厚く堆積している。中層から上層にかけ暗褐色土がレンズ状に堆積する。耕作による帯状の攪乱を受け、堆積状況は明確に確認することはできないが、残存部分の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

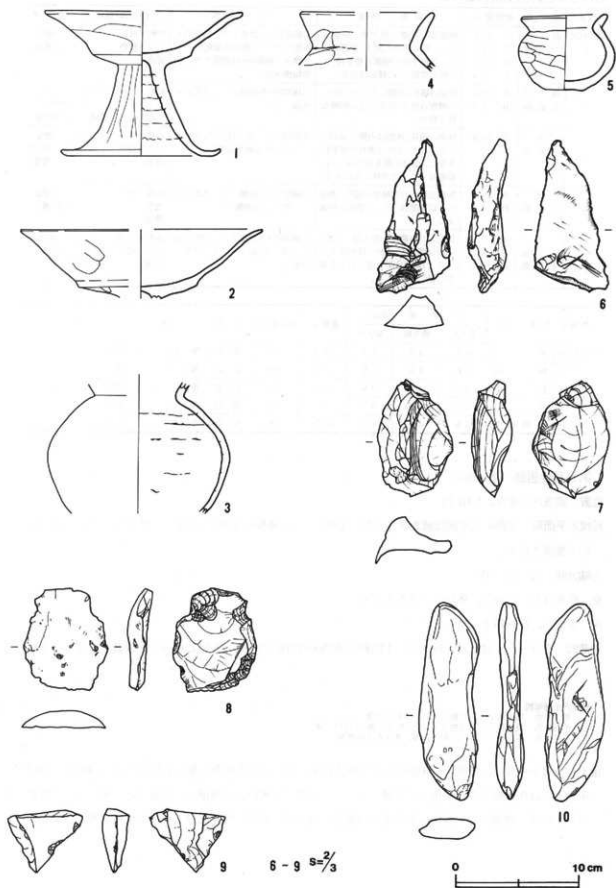


第133図 第13号住居跡実測図

- | | | | |
|-------|----------------------------------|-------|------------------------------------|
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子多量，炭化粒子・炭化粒子微量，締まり強 | 9 褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 褐色 | 炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量，粘性強 | | |
| 7 暗褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，粘性強 | | |

遺物 南寄りの覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第134図1・2の高坏は，1が西寄りの床面直上から横位の状態，2が南東壁寄りの床面直上から斜位の状態で出土している。3の罫は北寄りの覆土中から，4の甕と5のミニチュア土器は，南東寄りの覆土下層から出土し，4は覆土下層から出土している破片が接合し，5は横位の状態で出土している。その他，6～9の剥片と10の不明石器が出土しているが，剥片は混入したものと考えられるが，不明石器が住居跡に伴うものなのかは把握できない。

所見 本跡は，床面上に多量の炭化材・焼土が堆積している状況から，焼失家屋と考えられる。時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。



第134图 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種 別	計測値(cm)	形状の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第134図 1	高 坏 土 師 器	A [15.8]	脚部及び坏部一部欠損。脚部は ラッパ状に下方に開き、底部は反 る。坏部下位に明確な線をもち、 外傾して開き、口縁部は反る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・ 外面ヘラナデ。脚部外面段位のヘ ラ磨き。胎部内・外面横ナデ。内 面輪積み痕。	砂粒・長石 にふい橙色 普通	P74 60% 西寄り床面直上
		B 11.8				
		D 12.8				
		E 7.3				
2	高 坏 土 師 器	A [19.4]	坏部の破片。外傾して立ち上がり、 口縁部は反る。坏部下位に明確な 線を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・ 外面ヘラナデ。	砂粒・スコリア にふい橙色 普通	P75 30% 南東寄り床面直上 外面積み層
		B (5.5)				
3	増 土 師 器	B (10.3)	体部の破片。体部は内彎しながら 立ち上がり、上位は潰れた球形状 を呈し、上位に最大径を持つ。口 縁部は「く」の字状に外反する。	体部外面へラ削り後ナデ、内面ナ デ。内・外面輪積み痕。	砂粒・長石 にふい橙色 普通	P78 50% 北寄り覆土中 内・外面積み層
4	墨 土 師 器	A [10.8]	体部上位から口縁部の破片。体部 から口縁部は「く」の字状に外傾 する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラ削り、内面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P77 10% 南東寄り覆土下層
		B (4.2)				
5	ミコニア 土 師 器	A 7.0	体部及び口縁部一部欠損。平底。 体部は偏平で、潰れた球形状を呈 す。口縁部は折り返しのある複 合口縁で、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラ削り、内面ヘラナデ。底部へ ラ削り。	砂粒・石英 にふい橙色 普通	P76 60% 南東寄り覆土下層
		B 6.1				
		C 3.2				

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第134図	6 刺 片	6.1	3.0	1.3	17.4	100	頁 岩	覆土中	Q9
	7 刺 片	4.6	3.0	1.5	13.9	100	頁 岩	覆土中	Q10
	8 刺 片	4.1	3.3	0.9	11.8	100	頁 岩	覆土中	Q11
	9 刺 片	2.5	3.0	0.9	5.3	100	頁 岩	覆土中	Q12
	10 不明石器	15.8	4.5	1.5	197.2	100	泥 岩	覆土中	Q13

第14号住居跡 (第135図)

位置 調査区の東部、K162区。

規模と平面形 本跡の北東側は調査区外のため発掘ができず規模は不明であるが、平面形は一辺5.65mの隅丸方形と推測される。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は35~47cmで、外傾して立ち上がる。

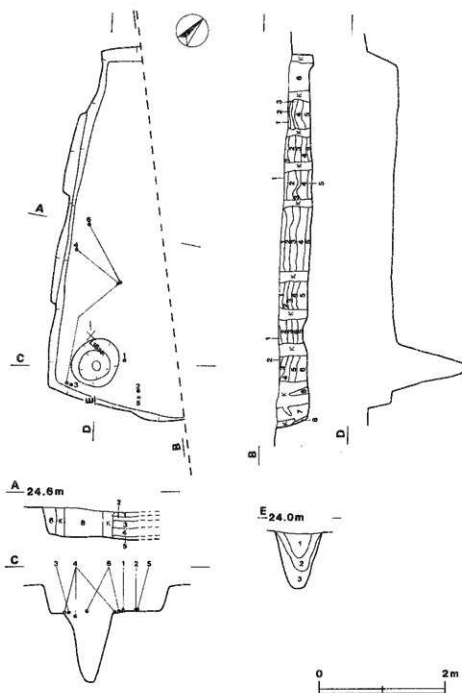
床 平坦で、踏み締まっている。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は径75cmの円形である。深さは105cmで、深鉢状に掘り込まれている。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量、炭化物少量
- 3 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、炭化粒子極微量

覆土 8層から成る。壁際から床面にかけて焼土粒子、ローム粒子を含む流れ込みと思われる褐色土が堆積し、床面上には炭化物を含む褐色土が堆積している。下層には褐色土が堆積し、中層から上層にかけて黒褐色土がレンズ状に堆積する。耕作による帯状の攪乱を受けているが、残存部分から自然堆積と考えられる。

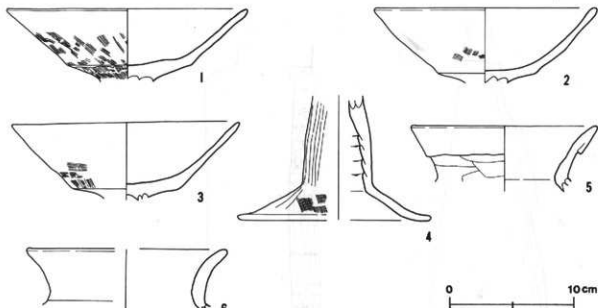


第135図 第14号住居跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック極微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量、粘性強 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック極微量 | 6 褐色 | 焼土粒子中量、炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量、ローム小ブロック微量、細まり強 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化物極微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子微量、ローム小ブロック極微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子微量、ローム小ブロック極微量 |

遺物 南コーナー寄りの床面直上から貯蔵穴内覆土上面から土師器片が少量出土している。第136図1～4の高環は、1～3が南寄りの床面直上から共に正位の状態、4が南西壁寄りと中央寄りの床面直上から出土している高環片が接合したものである。5・6の礎は、5が南西壁寄りの床面直上から、6が西寄りの床面直上から出土している。その他、貯蔵穴内覆土中層及び覆土下層から計2点の環が出土している。



第136図 第14号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、炭化材と焼土が床面から出土していることから焼失家屋と考えられる。時期は、出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 1	高 土 師 器	A 19.3 B (6.0)	坏部片。坏部は外傾して立ち上がる。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面斜位の刷毛目整形後ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	P79 50% 南寄り床面直上 外面塚付雷
2	高 土 師 器	A 17.8 B (6.0)	坏部片。坏部は内彎しながら立ち上がる。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面刷毛目整形後ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・石英 褐色 普通	P80 50% 南寄り床面直上
3	高 土 師 器	A 18.2 B (6.1)	坏部片。坏部は外傾して立ち上がる。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面刷毛目整形後ナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P81 50% 南寄り床面直上
4	高 土 師 器	D [15.5] E (10.0)	脚部から裾部の破片。脚部は柱状に開き、裾部は屈曲して大きく開く。	脚部外面縦位のヘラナデ。裾部外面刷毛目整形後ヘラナデ、内面ナデ。脚部内面輪横のみ。	砂粒・石英 褐色 普通	P82 45% 南西壁寄り床面直上
5	壺 土 師 器	A 14.8 B (4.3)	口縁部の破片。外傾して立ち上がり、折り返しのある複合口縁となり、「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P83 10% 南西壁寄り床面直上 内・外面剥離
6	壺 土 師 器	A [16.0] B (4.5)	口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P84 10% 西寄り床面直上

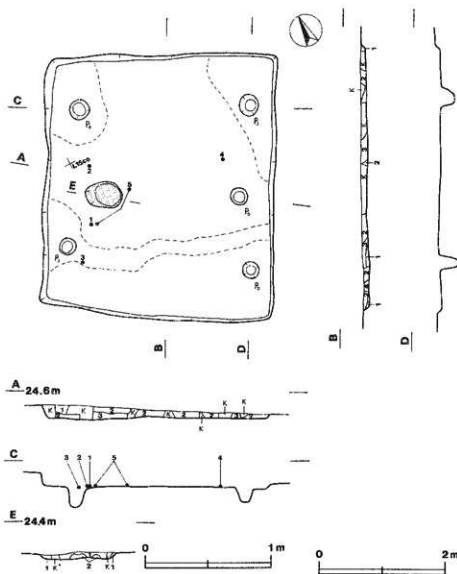
第15号住居跡 (第137図)

位置 調査区の東部中央付近, L15c区。

規模と平面形 長軸4.29m, 短軸3.61mの長方形。

主軸方向 N-30°-E

壁 壁高は5~20cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。



第137図 第15号住居跡実測図

床 平坦で、北、東両コーナー付近を除いて、ほぼ全体が踏み固められ堅緻である。

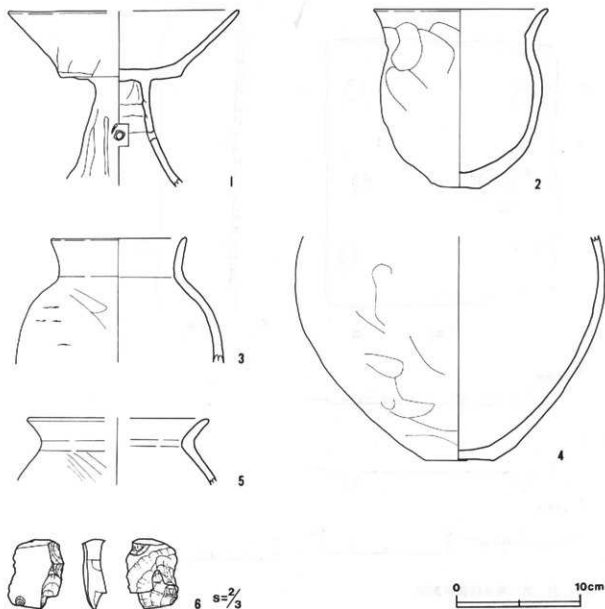
ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁・P₄・P₅は径27~33cm、深さ22~31cmの円形である。P₂・P₃は長径29~34cm、短径25~33cmで、深さ17~30cmの楕円形である。P₁~P₄は各コーナー付近に付設され、位置や配列から主柱穴と考えられる。P₅は中央付近から南東壁寄りに付設され、周りはやや踏み締まった高まりを持ち、位置や深さから出入口ピットと考えられる。

炉 中央から北西壁寄りに付設されている。長径59cm、短径41cmで、床面を約5cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉床はよく焼け赤変硬化している。

炉土層解説

1 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物極微量
 2 赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物極微量

覆土 4層から成る。掘り込みが浅いため土層としてとらえることができたのは3層のみである。床面上から上層にかけて褐色土、暗褐色土が堆積しているが、耕作による攪乱を細かく受けている。



第138図 第15号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物極微量
 2 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量、焼土小ブロック極微量
 3 褐色 焼土小ブロック・泥土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
 6 $s = \frac{2}{3}$

遺物 北西寄りの床面直上から土師器片が少量出土している。第138図1の高坏は北西寄りの床面直上から斜位の状態で出土している。2～5の壺は、2が北西寄りの床面直上から、3が西コーナー付近の床面直上から、4が東寄りの床面直上から出土し、5は北西寄りの床面直上から出土している壺片が接合したものである。その他、6の剥片が覆土中から出土しているが、混入したものと思われる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	高坏 土器器	A [18.4] B [14.1] E (8.0)	頸部及び口縁部一部欠損。頸部は下方に大きく開く。坏部は外傾して外上方に開き、下位に明確な棱を持つ。頸部中央に二つの円孔が前後して穿たれている。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。脚部外面縦位のヘラナデ。脚部内面輪横み直。	砂粒・雲母にふい橙色普通	P85 60% 北西寄り床面直上
2	壺 土器器	A 14.0 B 14.3 C 3.3	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反し、口唇部は僅かに反る。最大径を口縁部に持ち、頸部内面に弱い棱を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面縦位のヘラナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・石英・長石にふい赤褐色普通	P86 90% 北西寄り床面直上 体部外面横付着
3	壺 土器器	A [10.8] B (10.0)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は垂直気味に僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石にふい橙色普通	P87 30% 西コーナー付近 床面直上 体部外面横付着
4	壺 土器器	B (17.9) C 5.4	底部から体部中位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へく削り後ナデ、内面ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・長石にふい橙色普通	P88 40% 東寄り床面直上 内・外面横付着
5	壺 土器器	A [14.6] B (5.0)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラナデ、内面ナデ。	砂粒にふい橙色普通	P89 5% 北西寄り床面直上 外面横付着

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第138図6	刺片	2.8	2.1	0.8	4.8	100	メノウ	塚土中	Q14

第16号住居跡 (第139図)

位置 調査区の東部中央付近, L15a区。

規模と平面形 長軸6.84m, 短軸6.54mの方形。

主軸方向 N-51°-E

壁 壁高は18~34cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 2か所ある貯蔵穴付近を除いては、ほぼ全周している。上幅6~12cm, 深さ3~5cmで、断面形はU字形である。

床 やや凹凸があり、ほぼ全体が踏み締まっている。

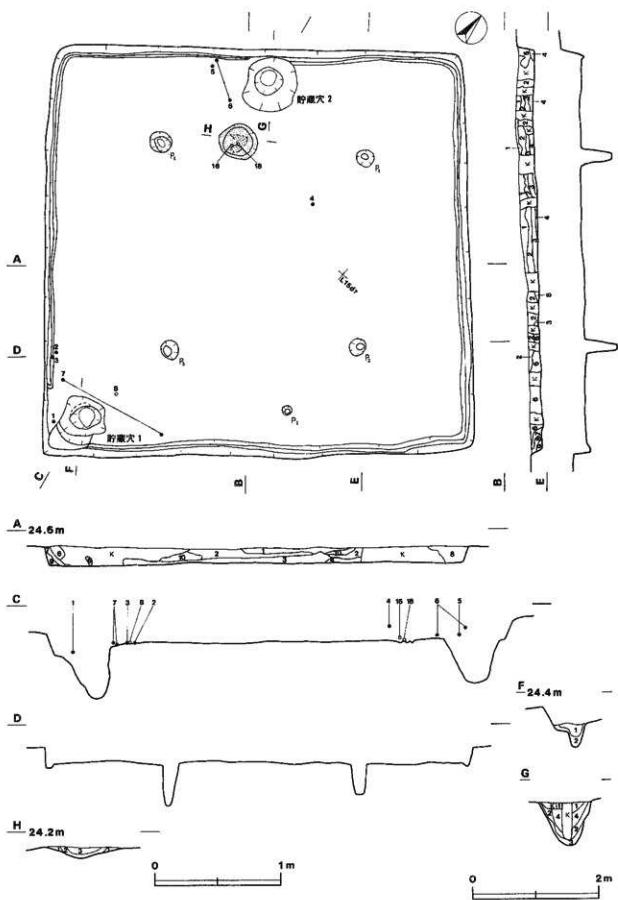
ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は長径28~35cm, 短径24~34cmで、深さ44~68cmの不整形円形である。各コーナーからやや中央に向かったところに付設され、位置や配列から支柱穴と考えられる。P₅は径15cm, 深さ18cmの円形である。中央から南東壁寄りに付設され、位置や配列から出入口ピットと考えられる。

炉 中央から北西壁寄りに付設されている。長径59cm, 短径41cmで、床面を約5cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉床はよく焼け赤変硬化している。

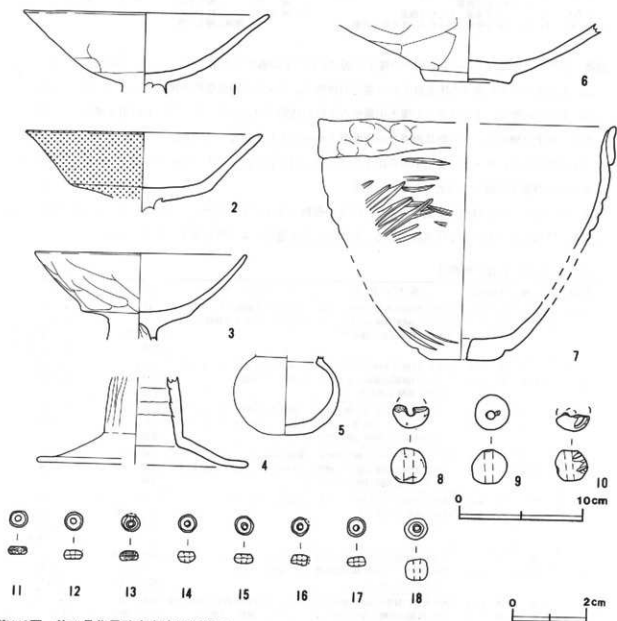
伊土層解説

- 褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量、炭化物微量
- 赤褐色 ロームブロック・ローム粒子中量、炭化物微量
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南コーナーに付設され、平面形は長径80cm, 短径60cmの不定形である。深さは80cmあり、断面は深鉢状で、約10°の傾きを持って内側に掘り込まれている。貯蔵穴2は北西壁の中央部に接し、壁面を延長して北西壁の一部となっている。平面形は長軸95cm, 短軸85cmの隅丸台形で、断面はU字形であ



第139图 第16号住居跡実測図



第140図 第16号住居跡出土遺物実測図

る。

貯蔵穴1土層解説

1 褐色 焼土小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
 2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量

貯蔵穴2土層解説

1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
 2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量
 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量

覆土 10層から成る。覆土下層から中層にかけて焼土粒子、炭化物、炭化粒子を含む暗褐色土が堆積し、中層から上層にかけてロームブロック、ローム粒子を含む褐色土が複雑に堆積している状況から、人為的に埋め戻されたものと考えられる。耕作による攪乱を広く受けている。

土層解説

1 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
 2 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

4	褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量, 綿まり類	8	暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
5	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	9	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック微量
6	褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子微量	10	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量, 綿まり類
7	褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物 南寄りの床面直上から北西寄りの覆土下層にかけて土師器片が少量出土している。第140図1～4の高坏は、1が南コーナー寄りの床面直上から逆位の状態、2・3が南東壁際の床面直上から、坏部を斜位の状態に重ねた状態で、4が北寄りの覆土中層から正位の状態でも出土している。5、6の埴と甕は、共に北西壁寄りの覆土下層から、7の甕は南寄りの床面直上から出土している。その他、8～10の土玉は、8が南寄りの床面直上から、9・10は覆土中から出土している。11～17の白玉の内、16が炉内覆土上面から、18のガラス玉は炉内覆土中層から出土したものである。

所見 本跡からの出土遺物は少量であるが、白玉が複数とガラス玉が出土していることから、祭祀行為との関連等、特殊な見方でもできる住居跡である。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種類	計測値(cm)	容 器 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第140図1	高坏 土師器	A 19.5 B (6.5)	坏部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに反る。坏部下位に極めて弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。坏部下位輪縁み痕。	砂粒・スコリア・パミス にぶい・橙色 普通	P90 30% PL32 南東壁際床面直上 内・外面煤付着
2	高坏 土師器	A 18.8 B (5.5)	坏部片。坏部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに反る。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。外面赤彩。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 普通	P91 45% 南東壁際床面直上
3	高坏 土師器	A 17.0 B (6.9)	坏部片。坏部は外上方に開きながら立ち上がり、その後、僅かに内傾する。坏部下位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面斜位のヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P92 50% 南東壁際床面直上
4	高坏 土師器	D [16.8] E (7.2)	脚部から頸部の破片。脚部は柱状に開き、裾部との境で屈曲し、裾部は大きく開き、端部は僅かに反る。	脚部外面縦位のヘラナデ。脚部内・外面ナデ。脚部内面輪縁み痕。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P93 40% 北寄り覆土中層
5	埴 土師器	B (6.3) C 2.0	底部から体部上位の破片。平底。体部は球形状を呈する。	体部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア にぶい・黄褐色 普通	P94 35% 北寄り覆土下層 外面割壊 内・外面煤付着
6	甕 土師器	B (5.0) C 5.8	底部から体部下位の破片。上げ底気味の突出した平底。体部は内傾しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・パミス・雲母 橙色 普通	P95 20% 北寄り覆土下層 外面煤付着
7	甕 土師器	A [23.8] B [14.6] C 4.9	底部及び口縁部の破片。単孔式の平底。体部は折り返しのある複合口縁で、ほぼ垂直に立ち上がり、口唇部はやや反る。	口縁部内・外面指調整。体部内面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい・橙色 普通	P96 25% PL32 南寄り床面直上 体部外面著しい 研削痕。

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径				
第140図8	上 玉	2.8	2.8	—	0.8	(9.4)	60	南寄り床面直上	DP 3
9	土 玉	2.8	2.7	—	0.7	18.9	100	覆土中	DP 4
10	土 玉	2.6	(2.5)	—	0.6	(7.2)	40	覆土中	DP 5

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第140図11	白 玉	0.4	0.4	0.2	0.2	0.1	100	滑 石	覆土中	Q15 PL34
12	Ff	0.5	0.5	0.2	0.15	0.1	100	滑 石	覆土中	Q16 PL34

図版番号	種 別		計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
			最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第140図13	白	玉	(0.4)	0.5	0.25	0.2	(0.1)	90	滑石	覆土中	Q17 PL34
14	白	玉	0.5	0.4	0.3	0.15	0.1	100	滑石	覆土中	Q18 PL34
15	白	玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	滑石	覆土中	Q19 PL34
16	白	玉	0.5	(0.4)	0.3	0.15	(0.3)	90	滑石	炉内覆土上面	Q20 PL34
17	白	玉	0.5	0.3	0.5	0.15	0.3	100	滑石	覆土中	Q21 PL34
18	ガラス	玉	0.6	0.6	0.6	0.2	0.2	100	—	炉内覆土中層	Q22

第17号住居跡 (第141図)

位置 調査区のほぼ中央部, L15g区。

重複関係 本跡は第1号溝により、壁、床の一部を南西から南東に掘り込まれ、南コーナーが削平している。

本跡のほうが古い。

規模と平面形 長軸7.28m, 短軸 [5.43m] の長方形。

主軸方向 N-40°-E

壁 壁高は8~17cmで、外傾して立ち上がる。掘り込みが浅いため、南コーナーから南東壁中央部にかけて耕作によって削平され残存しない。

床 平坦で、全体が軟弱である。南コーナー付近は第1号溝によって掘りこまれ残存しない。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁, P₂は長径25~35cm, 短径22~32cmの不整形円形で、深さ約36cmである。P₃, P₄は径20~22cm, 深さ約40cmのほぼ円形に近いピットである。P₁~P₄は各コーナー付近に付設され、位置や配列から支柱穴と考えられる。

炉 中央から北西壁寄りに付設されている。平面形は長径93cm, 短径65cmの長楕円形で、床面を約5cm掘り穿めた地床炉である。炉床は火熱を受け僅かに赤変している。

炉土層解説

1 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 炭化物極微量 2 赤褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量, 粘性・締まり強

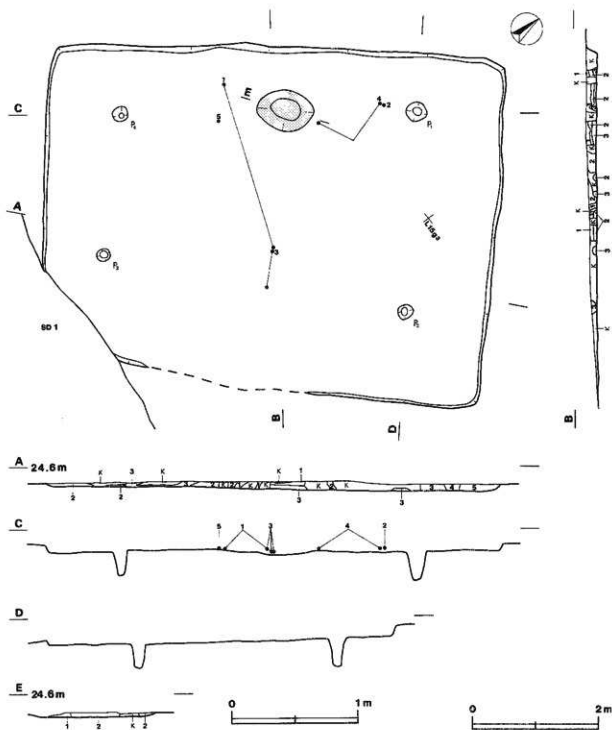
覆土 5層から成る。南東壁付近は削平されているため全体の層位関係を把握することはできないが、北西壁沿いの覆土下層から中層にかけて、焼土粒子、炭化粒子を含む褐色土の堆積がみられる。中層から上層にかけて部分的に炭化物とローム粒子を含む褐色土のレンズ状堆積がみられる。自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック微量 4 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム小ブロック微量
2 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化物微量
3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量 5 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量, 締まり強

遺物 北西寄りの覆土下層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第142図1の高坏は、北西寄りの床面直上から正位の状態で出土している坏部に、中央寄りの覆土下層から出土している高坏片が接合したものである。2~5の甕は、2が北寄りの覆土下層から、3が中央寄りの覆土中層から出土し、4が北寄りの覆土下層及び床面直上から出土している甕片と接合し、5が北西寄りの床面直上から出土している。

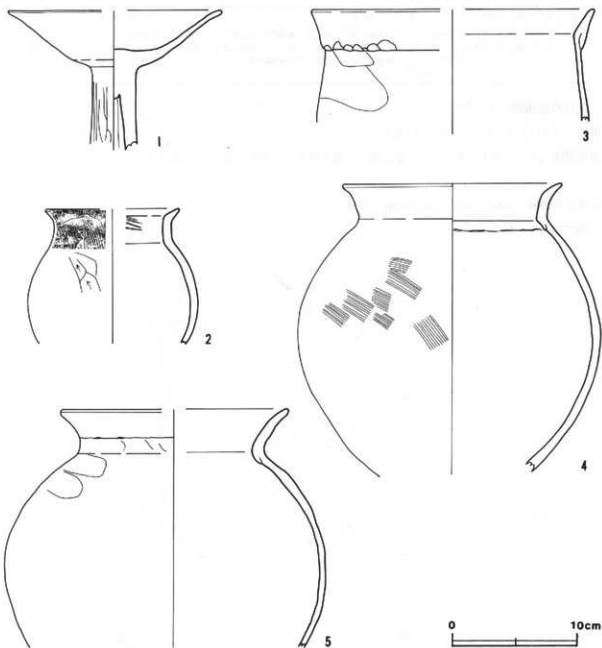
所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀前半と考えられる。



第141図 第17号住居跡実測図

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図 1	高 土 鉢 器	A [17.0] B (10.8) E (6.3)	脚部から口縁部の破片。脚部は柱状を呈し、坏部は緩やかに外傾して立ち上がり、口縁端部は反る。坏部下位に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。脚部内・外面縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石 による橙色 普通	P97 30% 北西寄り床面直上 脚部外面煤付着
2	焚 土 師 器	A [10.8] B (11.0)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、頸部は括れ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部内・外面刷毛目整形後ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P98 15% 北寄り覆土下層 体部内面煤付着



第142図 第17号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第142図 3	罐 土 器	A [22.6] B (9.0)	体部上位から口縁部の破片, 体部は中位が張り, 僅かに内彎しながら立ち上がる。口縁部は折り返しのある複合口縁で, やや外傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部内・外面ナゲ。口縁部外面指圧痕。	砂粒・石英・長石・バミス 褐色 普通	P99 15% 中央寄り覆土中層
4	罐 土 器	A 17.6 B (23.0)	底部及び口縁部一部欠損。体部は球形状を呈し, 内彎しながら立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面刷毛目整形後ナゲ, 内面ナゲ。	砂粒・石英・長石 明赤褐色 普通	P100 60% PL32 北寄り覆土下層 及び床面直上 体部外面曝付着

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第142図 5	壺 土 師 器	A (18.3) B (19.0)	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し、内彎しながら頸部に至る。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部内・外面ナデ。頸部外面粘土補強痕。内面輪積み痕。	砂粒・灰石・雲母 により橙色 普通	P101 40% 北西寄り床面直 上

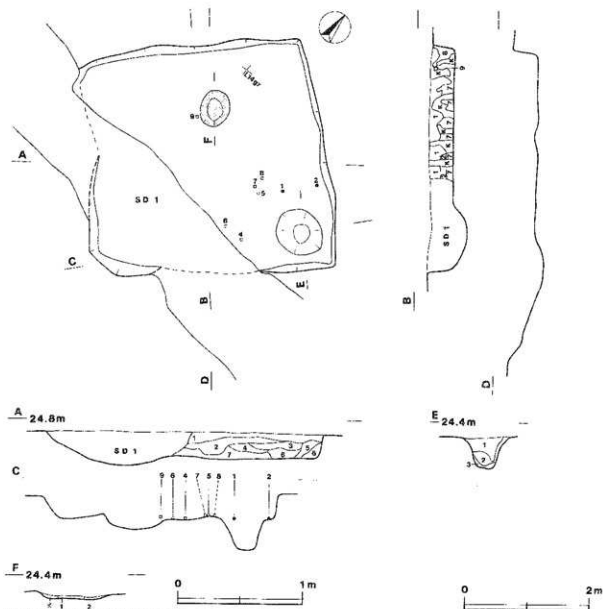
第18号住居跡 (第143図)

位置 調査区の中央部やや南西, L14g7区。

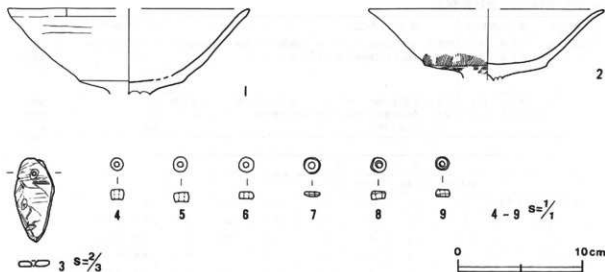
重複関係 本跡は第1号溝により, 壁, 床の一部を南西から南東に掘り込まれ, 削平している。本跡のほうが古い。

規模と平面形 長軸3.95m, 短軸3.63mの方形。

主軸方向 N-46°-E



第143図 第18号住居跡実測図



第144図 第18号住居跡出土遺物実測図

壁 壁高は30～38cmで、垂直に立ち上がる。南西壁中央から南東壁中央にかけて第1号溝が掘り込んであるため一部残存しない。

床 平坦で、全体が踏み締まっている。

炉 中央から北西寄りに付設されている。平面形は長径57cm、短径46cmの楕円形で、床面を約4cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

伊土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子微量、ローム小ブロック微量 2 濃い赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

貯蔵穴 東コーナー付近に付設され、平面形は長径84cm、短径66cmの楕円形である。深さは53cmで、断面は逆台形をしている。貯蔵穴周辺は踏み固められ、馬蹄形の高まりを持っている。

貯蔵穴土層解説

1 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化物極微量 2 褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量、焼土粒子極微量
3 褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量

覆土 9層から成る。部分的に自然堆積の様相もみられるが、床面上から上層までの複雑な堆積状況を見ると、遺構の上層部分まで人為的に埋め戻しが行われ、その後、自然堆積したものと思われる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量 5 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量 6 褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック少量、炭化粒子微量、締まり強
3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、締まり強 7 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック微量
4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 8 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
9 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック微量

遺物 覆土中層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第144図1・2の高坏は、共に東寄りの床面直上から正位の状態でも出土している。その他、3の刺形石製模造品が覆土中から出土し、4～8の白玉が東寄りの床面直上から、9の白玉が北西寄りの床面直上から出土している。

所見 本跡は出土遺物から祭祀行為との関係が推測される住居跡である。時期は、出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第144図 1	高 坏 土 師 器	A [19.4] B (8.8)	坏部片。坏部は外傾して、外上方に開く。坏部下位に明瞭な縁を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石・スロリア に多い褐色 普通	P102 40% 東寄り床面直上 二次焼成
2	高 坏 土 師 器	A [19.0] B (5.5)	坏部片。坏部は外傾して外上方に開き、口縁部は僅かに反る。坏部下位に強い縁を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面 胡毛目整形後へラナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P103 30% 東寄り床面直上 内面割離

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	製作率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第144図 3	和形石製模造品	3.3	1.6	0.3	0.2	2.4	100	片 岩	覆土中	Q23 PL34
4	白 玉	0.3	0.3	0.3	0.15	0.1	100	滑 石	東寄り床面直上	Q24 PL34
5	白 玉	0.4	0.4	0.3	0.15	0.1	100	滑 石	東寄り床面直上	Q25 PL34
6	白 玉	0.4	0.4	0.2	0.15	0.1	100	滑 石	東寄り床面直上	Q26 PL34
7	白 玉	0.4	0.4	0.1	0.15	0.1	100	滑 石	東寄り床面直上	Q27 PL34
8	白 玉	0.4	0.4	0.2	0.2	0.1	100	滑 石	東寄り床面直上	Q28 PL34
9	白 玉	0.4	0.4	0.2	0.15	0.1	100	滑 石	北西寄り床面直上	Q29 PL34

第19号住居跡 (第145図)

位置 調査区の南東部中央付近、L15_g区。

規模と平面形 長軸5.50m、短軸3.35mの方形。

主軸方向 N-47-E

壁 壁高は25~34cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西壁沿いを除いては、周回している。上幅4~8cm、深さ5~7cmで、断面形はU字形である。

床 平坦で、全体が踏み締まっている。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は長径24~30cm、短径20~26cmの不整形円形である。深さは40~45cmである。各コーナーからやや中央に向かったところに付設され、位置や配列から主柱穴と考えられる。P₅は径25cm、深さ18cmの円形である。中央から南東壁寄りに付設され、位置や配列から出入口ピットと考えられる。

炉 中央から北西壁寄りに付設されている。長径105cm、短径39cmで、床面を約5cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。炉床はよく焼け赤変硬化している。

炉土層解説

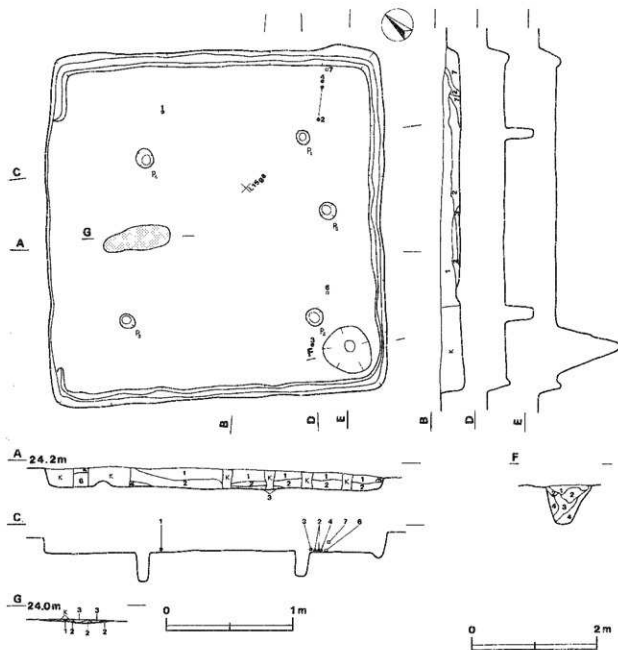
- 1 暗 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
2 洗七小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 3 暗 赤 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量

貯蔵穴 南コーナーに付設され、平面形は長径80cm、短径70cmの楕円形である。深さは65cmで、断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐 色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量、炭化物微量
2 明 褐色 炭化粒子中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 3 褐 色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
4 明 褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量

覆土 7層から成る。南西壁沿い及び北西壁際は大きく耕作による攪乱を受け、壁際の土層堆積状況が不明であるが、北東壁際から床面中央に向かって褐色土が流れ込んでいる。覆土下層には焼土粒子と炭化物を含む褐色土が堆積し、中層から上層にかけてロームブロック、ローム粒子を含む暗褐色土が複雑に堆積している



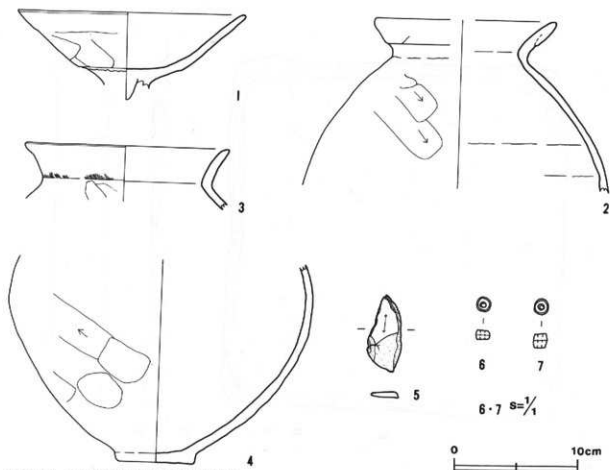
第145図 第13号住居跡実測図

状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量、締まり強 | 4 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量、締まり強 | 5 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量、締まり強 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量、炭化物・炭化粒少量、焼土粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量 |
| | | 7 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量 |

遺物 東寄りの覆土中層から床面直上にかけて、土師器片が少量出土している。第146図1の環杯は北寄りの覆土下層から出土している。2～4の壺は、2・4が東コーナー寄りの床面直上から、3が南コーナー寄りの覆土下層から出土している。その他、5の磁石が覆土中から、6の白玉が南コーナー寄りの床面直上から、7の白玉が東コーナー寄りの覆土中層から出土している。



第146図 第19号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第19号住居跡出土遺物観察表

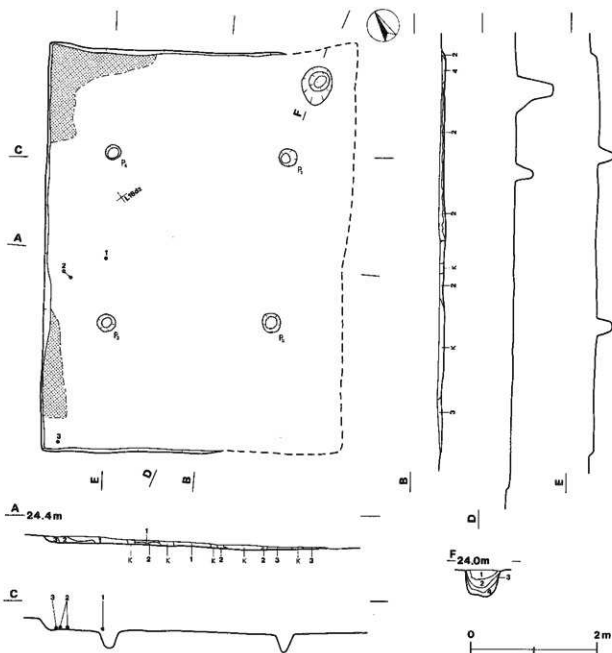
図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第146図 1	高 土 師 器	A 18.4 B (3.9)	坏部片。坏部は外傾して外上方に開く。坏部下位に倒い縁を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面斜位のヘラナデ、内面ナデ。坏部下位に接合部の突起が残る。坏部外面輪襖み張。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P104 40% 北寄り覆土下層 内・外面付着
2	壺 土 師 器	A [15.0] B (13.5)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は折り返しのある場合口縁で、「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・長石・スクリア にぶい褐色 普通	P105 35% 東コーナー寄り 床面直上 内面剥離
3	壺 土 師 器	A 16.4 B (4.5)	体部上位及び口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面刷毛目整形後ナデ。	砂粒・バミス 褐色 普通	P106 10% 南コーナー寄り 覆土下層
4	壺 土 師 器	B (16.2) C 6.3	底部から体部上位の破片。突出した平底。体部は球形状を呈し、内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・長石 黒褐色 普通	P107 30% 東コーナー寄り 床面直上

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量 (g)	現存率 (%)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第146図5	砥石	(6.1)	(2.3)	(0.5)	—	(8.0)	不明	粘板岩	覆土中	Q30
6	臼	0.4	0.4	0.25	0.15	0.1	100	滑石	南コーナー-覆土直上	Q31 PL34
7	臼	0.4	0.4	0.4	0.2	0.1	100	滑石	東コーナー-覆土中層	Q32 PL34

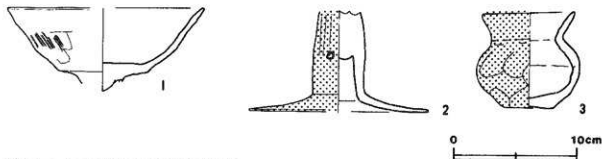
第20号住居跡 (第147図)

位置 調査区の北東部, L16a区。

規模と平面形 本跡の東コーナー付近から南東壁中央部にかけて、壁面が削平され規模は不明であるが、残存する壁面から長軸6.46m、短軸4.76mの長方形と推測される。



第147図 第20号住居跡実測図



第148図 第20号住居跡出土遺物実測図

主軸方向 N-37°-E

壁 壁高は4~23cmで、外傾する。

床 平坦であるが、踏み締まりはみられない。西コーナー付近と北コーナーには焼土の広がりが見られる。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は径24~34cmの円形で、深さは25cm~30cmである。各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 東コーナー付近に付設され、平面形は長径62cm、短径50cmの不整形円形で、深さは55cmで、円筒状に掘られている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量、粘性強
 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量
 3 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・炭化物微量
 4 褐色 ローム粒子多量、締り多量

覆土 4層から成る。東コーナーから南東壁中央部にかけての土層堆積状況は確認できないが、土層堆積状況のよい北西壁沿いには褐色土が堆積し、自然堆積の様相がみられ、覆土下層から上層にかけて、焼土粒子、炭化粒子を含む暗褐色土が厚く堆積している。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量、炭化粒子微量
 2 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、炭化粒子微量
 3 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
 4 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 南東寄りの床面上から土師器片が少量出土している。第148図1・2の高坏は、共に北西寄りの床面直上から逆位の状態出土し、3の壺は西コーナー寄りの床面直上から斜位の状態出土している。

所見 本跡の床面からは、炉が確認できなかったが、炭化材と焼成を受け硬化した不整形の粘土塊がみられ、西コーナー付近から北コーナーにかけ焼土の広がりもみられた。だが、床面全体の火熱を受けた硬化部分が確認できず焼失家屋と考えるには疑問が残る。本跡の時期は、出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第148図 1	高 坏 土 師 器	A [15.9] B (6.0)	坏体片。坏部は内・外面に歪みを持ちながら、外傾して外上方に立ち上がる。坏部下位に明瞭な線をもち、接合部の突起が残る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面刷毛目整形後ナデ、内面ナデ。	砂粒・スコリア にふいじ色 普通	P108 20% 北西寄り床面直上 内・外面刺摩
2	高 坏 土 師 器	B (8.0) D [14.5]	脚部から椗部の破片、脚部は柱状を呈し、椗部で緩曲し大きく開く。脚部中位に一つの円孔が穿たれ、反対面に孔を穿つ途中の痕跡が残る。	口縁部外面横位のヘラナデ、内面ナデ。椗部内・外面ナデ。外面赤彩。	砂粒・石英・長石 明赤褐色 普通	P109 36% 北西寄り床面直上 著しい内面刺摩

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図 3	壺 土師壺	A 7.4 B 7.7 C 3.8	口縁部一部欠損。平底。体部中に最大径を持ち、球形状を呈する。頸部は折れ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へうづり、内面ナデ。外面赤彩。	砂粒・石英・パミス・盤母 にふい橙褐色 普通	P110 98% PL32 西コーナー寄り 床面直上 体部外面横付着

第21号住居跡 (第149図)

位置 調査区の東部, L167r区。

規模と平面形 長軸4.52m, 短軸3.64mの長方形。

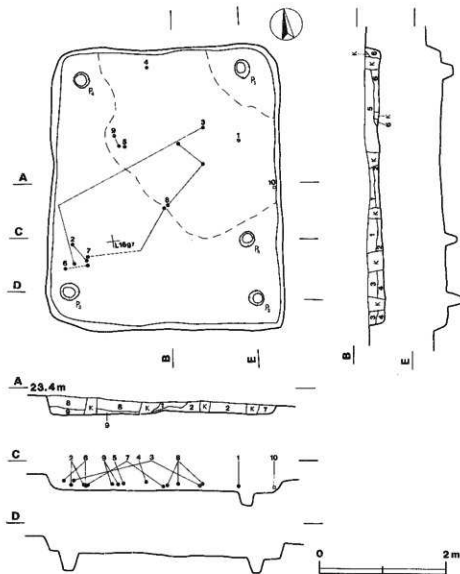
主軸方向 N-90°-E

壁 壁高は14~25cmで、外傾して立ち上がる。

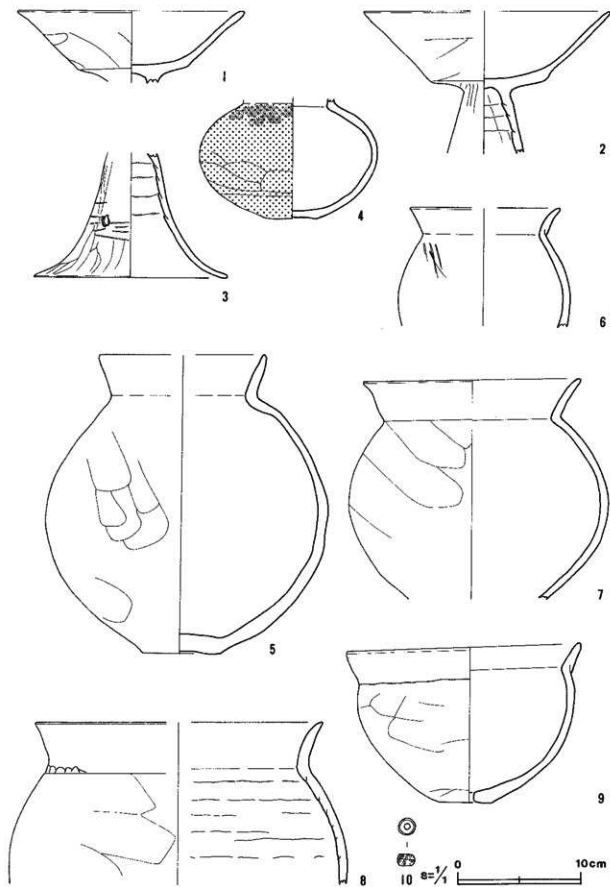
床 ほぼ平坦で、踏み締まっている。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は長径26~32cm, 短径22~30cmの不整形円形で、深さは16~29cmである。

各ピットはコーナー付近に付設され、規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は径25cmの円形で、深さは19cmである。南東壁際中央からやや南寄りになり、規模や位置から出入口ピットと考えられる。



第149図 第21号住居跡実測図



第150图 第21号住居跡出土遺物実測図

覆土 9層から成る。西壁の覆土下層から中層にかけて褐色土が堆積し、中層から上層にかけて暗褐色土が厚く堆積し、南壁際には覆土下層から上層にかけて褐色土が厚く堆積している。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子多量、綿まり強	6 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子極微量、綿まり強
2 暗褐色	ローム粒子中量	7 褐色	焼土粒子・ローム粒子中量、綿まり強
3 褐色	ローム粒子少量	8 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、綿まり強
4 褐色	ローム粒子少量	9 褐色	ローム粒子中量、綿まり強
5 黒褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量		

遺物 中央付近の覆土下層を中心に土器器片が中量出土している。第150図1～3の高坏は、1が北東寄りの覆土下層から逆位の状態で、2が南西寄りの覆土下層から正位の状態で出土している。3は北東寄り、西寄りの覆土中層から出土している高坏片が接合したものである。4の埴は北寄りの覆土中層から逆位で出土している。5～8の甕は、5が北西寄りの覆土中層から出土し、6が西コーナー寄りの覆土下層から斜位の状態で、7が中央及び西寄りの覆土下層から出土している甕片が接合し、8が中央寄りの覆土下層から出土し、9の甕が北寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡は、当遺跡内から確認した同時期の住居跡が概ね付設している炉及び貯蔵穴の何れも持たない住居跡であるが、床面の硬化した部分が確認され、遺物及び出土状況から住居跡として取り扱った。時期は、出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150図 1	高坏 土器器	A 18.3 B (5.7)	坏部は外傾して外上方に開く。坏部下位に明顯な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母に よび褐色	P111 50% PL33 北東寄り覆土下層
2	高坏 土器器	A [19.9] B (11.3) E (4.9)	脚部から坏部の破片。脚部は下方にラッパ状に開く。坏部は外上方に立ち上がり、下位に明顯な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ、内面ナデ。脚部外面縦位のヘラナデ、脚部内面横ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色	P112 40% 南西寄り覆土下層
3	高坏 土器器	D 15.5 E (10.0)	坏部欠損。脚部は下方にラッパ状に広がり、坏部は大きく開く。脚部中位に一つの孔を穿つ。	脚部外面縦位のヘラナデ、脚部外面横ナデ。脚部外面中位に横位の線刻。内面輪襷凸。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P113 50% PL33 北東寄り覆土中層 内・外面係付着
4	埴 土器器	B (9.5) C 4.2	口縁部一部欠損。平底。体部はソロバン玉状を呈し、最大径を体部中位に持つ。	体部外面上位刷毛目整形後ナデ、下位ヘラナデ、内面ナデ。外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P114 85% PL33 北寄り覆土中層 外面係付着 内面刷毛
5	甕 土器器	A [13.4] B 23.9 C 6.3	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・ スコリア に よび褐色 普通	P115 70% PL33 北西寄り覆土中層
6	小豆型 土器器	A [12.0] B (9.5)	体部中位から口縁部の破片。体部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がり、その後、逆に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のナデ、内面ナデ。	砂粒・バミス・雲母 に よび赤褐色 普通	P116 20% 西コーナー寄り 覆土下層 外面係付着
7	甕 土器器	A 17.5 B (17.8)	底部欠損。体部中位は球形状を呈し、内傾しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・バミス 褐色 普通	P117 60% PL33 中央及び西寄り 覆土下層 体部外面上位係付着
8	甕 土器器	A [23.0] B (13.0)	体部中位から口縁部の破片。体部は内傾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。胴部外面指圧痕。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P118 20% PL33 中央寄り覆土下層 口縁部内・外面係付着
9	甕 土器器	A 18.9 B 12.9 C 4.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は折り返しのある複合口縁で、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P119 90% PL32 北寄り覆土下層

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量 (g)	現存率 (%)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第150図10	白 玉	0.45	0.45	0.3	0.15	0.1	100	滑石	覆土中	Q33 PL34

(2) 竪穴遺構

当遺跡の調査では、炉を付設せず、対になる2本のピットをコーナーに持ち、明確に他の住居跡とは異なる構造物が推測できる遺構を調査区の北部で1基確認したので竪穴遺構とし、遺構及び遺物について記載する。

第1号竪穴遺構 (第151図)

位置 調査区の北部, K15g2区。

規模と平面形 長軸2.63m, 短軸1.65mの長方形。

長軸方向 N-20°-W

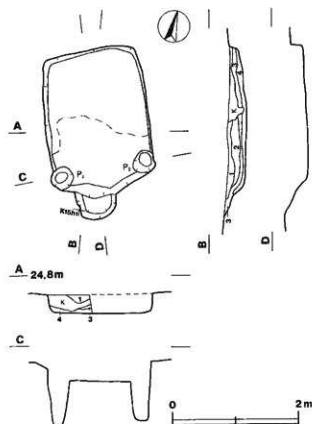
壁 壁高は15~33cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 出入口から中央部にかけては平坦で、中央部から北西壁にかけ緩やかに駆け上がる。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁, P₂は南西・南東両コーナーに壁面を延ばして、その一部となって付設され、

長径35~40cm, 短径31~34cmの不整形円形で、深さ60~70cmである。規模や位置から支柱穴と考えられる。

覆土 4層から成る。覆土中層から上層にかけて一部耕作による攪乱を受けているが、その他はレンズ状の堆積状況がみられる。覆土下層から中層にかけて焼土粒子を含む褐色土が堆積し、中層から上層にかけて焼土粒子、炭化物を含む黒褐色土が堆積している。



第151図 第1号竪穴遺構実測図

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・ローム中ブロック微量
2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量 4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック微量

遺物 覆土中から床面直上にかけて極めて少量で微細の土師器片が出土し、土師器の体部にはいずれも刷毛目整形痕が残る。

所見 本跡は、竈や炉を持たず、出入口と思われる部分に緩やかな傾斜を持ち、柱穴は東両コーナーに2か所付設されているところから、住居跡とは異なる片流れ屋根の掘立小屋といった上屋構造物が推測される。時期は、床面直上から出土している遺物が少量なので特定するには至らないが、土師器の様相から5世紀前半頃のものと考えられる。

(3) 土坑

今回の調査では、古墳時代の土坑を4基確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

第68号土坑 (第152図)

位置 調査区の中央部からやや南、L14a区。

規模と平面形 長径0.73m、短径0.64mの円形で、深さは0.33mである。

長径方向 N-37°-W

壁面 北東壁に段を築し、ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 南西側に落ち込みがみられる。

覆土 耕作による攪乱を受け、層位の把握ができなかった。

遺物 覆土中や底面から土師器13片が出土している。1の甕は覆土中から斜位の状態で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半のものと考えられる。性格は不明である。

第77号土坑 (第152図)

位置 調査区の東部、L16a3区。

規模と平面形 長径0.60m、短径0.51mの楕円形で、深さは0.56mである。

長径方向 N-53°-E

壁面 北東壁は垂直に立ち上がり、南西壁は外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

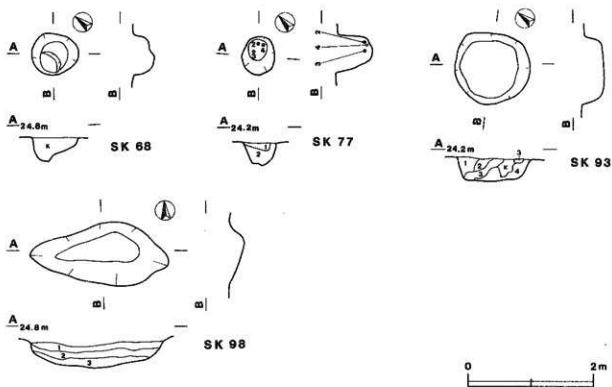
覆土 2層から成る。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 覆土中や底面から土師器13片が出土している。2の高環は正位の状態で底面から出土し、3の甕は斜位の状態で、底面から出土している。また、覆土中層から単孔円板が出土している。

所見 本跡出土の赤彩された高環及び有孔円板の出土状況から、何らかの祭祀行為との関係も推測される。また、遺構の形状や規模などから外部貯蔵施設として利用された可能性もある。時期は、5世紀後半頃と考えられる。



第152図 第68・77・93・98号土坑実測図

第93号土坑 (第152図)

位置 調査区の東部, M14a9区。

規模と平面形 長径1.18m, 短径1.11mの不整形円形で, 深さは0.35mである。

長径方向 N-39°-W

壁面 西側の壁面は外傾して立ち上がり, 東側はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層から成る。土層1から炭化物が, 土層3からは焼土粒子と炭化物が確認されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化物・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物 覆土中層から剣形石製模造品が出土している。

所見 出土遺物の剣形石製模造品は, 当遺跡内から出土しているものと類似するものであるが, 他の出土遺物がないことから, 時期の特定はできないが, 5世紀代に属するものと推測される。性格は不明である。

第98号土坑 (第152図)

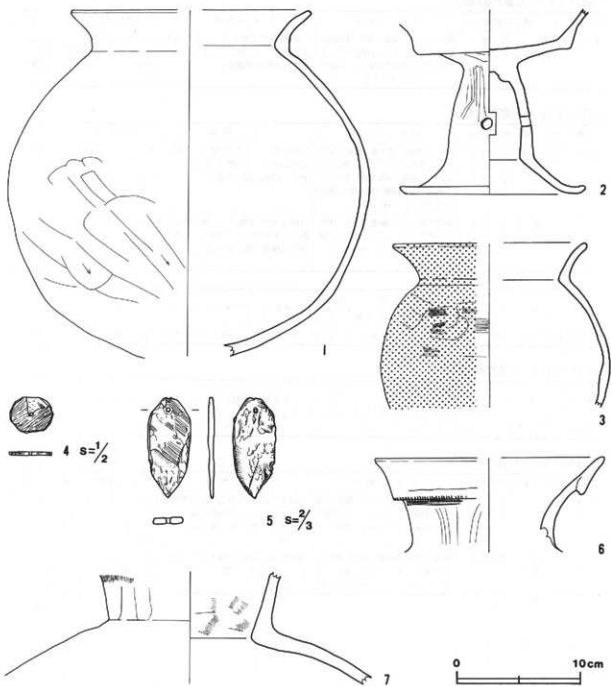
位置 調査区の中央部からやや東, K15a2区。

重複関係 本跡は, 第7号住居跡の中央部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径2.20m, 短径1.03mの不整形円形で, 深さは0.13mである。

長径方向 N-80°-W

壁面 緩斜する。



第153図 第68・77・93・98号土坑出土遺物実測図

底面 皿状である。

覆土 3層から成り、レンズ状の堆積状況がみられる。

土層解説

- 1 黒色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、炭化物・ローム小ブロック微量
- 3 赤褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

遺物 覆土中や底面から土師器62片が出土している。第153図6・7の壺は覆土中から出土したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から第7号住居跡とほぼ同時期の5世紀前半のころと考えられるが、第7号住居跡よりやや先行するものと考えられる。性格は不明である。

第68号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 1	壺 土師器	A [19.3] B (27.8)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、体部中に最大径を持ち、球形状を呈する。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中位斜位のヘラ削り、内面ナデ。頸部粘土紐状補強痕。	砂粒・石英・スコリア・バミス 黒褐色 普通	P120 40% 覆土中P.L.33 体部内・外面塗付着

第77号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 2	高坏 土師器	B (14.5) D 14.8 E 10.0	坏部及び裾部一部欠損。頸部は柱状を呈し、裾部は下位で大きく開き、頸部は反る。坏部は外反気味に立ち上がり、坏部下位に明確な唇を持つ。頸部中位四方に4つの孔を穿つ。	坏部外面ヘラナデ、内面ナデ。頸部外面縦位のヘラ磨き、裾部ヘラ磨き。頸部内面ヘラ削り。	砂粒・バミス・雲母 にぶい褐色 普通	P121 70% PL33 覆土下層
3	鉢 土師器	A [15.4] B (13.2)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目整形後ナデ、内面ナデ。頸部内面輪積み痕。外面赤彩。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P122 40% PL34 覆土下層 二次焼成

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第153図4	有孔円板	2.2	1.9	0.2	0.15	1.7	100	片岩	覆土下層	Q34 PL34

第93号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第153図5	煮炊た製模造品	4.0	1.7	0.3	1.5	3.8	97	安山岩	覆土中	Q35 PL34

第98号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 6	壺 土師器	A [18.3] B (7.3)	頸部から口縁部の破片。頸部は僅かに外反して立ち上がり、口縁部は折り返しのある複合口縁で、外上方に立ち上がる。	口縁部内面ナデ、外面刷毛目整形後丁寧なヘラナデ。頸部内面ナデ、外面刷毛目整形後丁寧な縦位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P123 20% 覆土中
7	壺 土師器	B (8.1)	体部上位から頸部の破片。体部上位に張りがあり、頸部は僅かに外反して立ち上がり、口縁部に歪る。	頸部内・外面刷毛目整形後ヘラ磨き。体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P124 10% 覆土中 二次焼成

4 その他の遺構と遺物

(1) 土坑

調査区の全域から確認した土坑には、形状や規模に各々差異が認められ、伴出遺物も殆どなく、時期や性格が不明のものも多い。ここでは、それらを一覧表(表20)に記載した。

表20 西ノ原遺跡土坑一覽表

土坑番号	位置	長径方向 (真方位)	平面形状	規模		壁面	底面	覆土	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)				
23	L13 _{c1}	N-28°-W	不整楕円形	1.12×0.87	61	傾斜	平坦	自然	
25	L13 _a	N-12°-E	不整円形	1.22×1.14	81	外傾	平坦	自然	
29	L13 _b	N 47° E	不整楕円形	1.23×0.83	80	外傾	平坦	自然	
30	L13 _a	N-54°-W	楕円形	0.95×0.72	57	外傾	平坦	自然	
32	L13 _b	N-38°-E	不整長方形	1.14×0.69	84	緩斜	凹状	自然	
34	K13 ₇	N-13°-E	不整楕円形	1.18×1.02	46	外傾	平坦	自然	
35	K13 _a	N 5° E	円形	1.20×1.17	74	外傾	凹凸	自然	
36	K14 ₁	N-26°-W	不整楕円形	1.40×0.99	68	直立	凹凸	自然	土師器片2(高坏1, 變1)
38	K14 ₂	N-13°-E	不整楕円形	1.03×0.87	70	外傾	凹状	自然	
40	K14 ₃	N-38°-W	楕円形	1.14×0.90	53	外傾	平坦	自然	
43	K14 ₄	N 76° E	不整楕円形	1.57×1.18	49	垂直	平坦	自然	
44	K14 ₅	N-25°-W	円形	0.60×0.55	43	垂直	平坦	自然	
45	K14 ₆	N 46° E	不整方形	0.68×0.63	39	垂直	凹凸	自然	
46	K14 ₈	N-22°-E	不整楕円形	0.74×0.66	36	外傾	平坦	自然	
47	K14 ₉	N-47°-W	不整長方形	1.14×1.11	49	垂直	平坦	人為	
48	K14 ₉	N-68°-E	不整長方形	1.20×0.98	70	外傾	凹凸	自然	土師器片5(變)
49	K14 ₁₀	N-84°-E	楕円形	0.63×0.41	42	垂直	凹状	自然	土師器片1(變)
50	K14 ₁₀	N-54°-E	不整楕円形	0.97×0.87	58	外傾	凹凸	自然	
52	K14 ₁₁	N-0°	不整方形	1.00×1.00	71	垂直	平坦	自然	
55	K14 ₇	N-80°-E	不整楕円形	1.54×0.85	23	緩斜	凹状	自然	
56	K14 ₁₁	N 56° W	不整長方形	0.90×0.65	34	緩斜	凹状	自然	
57	K14 ₁₁	N-78°-W	不整楕円形	1.00×0.78	44	緩斜	平坦	自然	
59	L14 _a	N 59° W	不整楕円形	1.82×1.03	96	垂直	凹凸	自然	
64	L14 _a	N-53°-E	不整円形	1.05×0.96	61	垂直	凹状	自然	
65	L13 _b	N-33°-W	不整長方形	1.27×0.96	30	緩斜	凹状	自然	
66	L13 ₇	N-10°-E	不整楕円形	1.02×1.19	48	外傾	平坦	自然	
68	L14 _a	N-37°-W	円形	0.73×0.64	33	垂直	凹状	自然	土師器片14(變)
69	L15 _a	N-22°-E	長楕円形	1.13×0.62	26	外傾	凹状	自然	土師器片4(變)
77	L16 _a	N-53°-E	楕円形	0.60×0.51	56	垂直	凹状	自然	土師器片13(高坏9, 變0, 石製模造品(双耳, 内腹), 灰文土器)
80	L16 ₇	N-32°-E	不整楕円形	0.76×0.66	38	外傾	凹状	自然	
83	L16 _a	N-21°-E	不整楕円形	0.82×0.62	34	垂直	凹凸	人為	土師器片1(變)
84	M16 _a	N-42°-E	不整長楕円形	3.72×1.24	80	外傾	凹凸	自然	
85	L16 _c	N-46°-W	長方形	0.81×0.71	23	垂直	凹凸	自然	
86	L15 ₇	N 33° W	円形	1.14×1.07	29	垂直	凹凸	人為	土師器片3(高坏2, 變1)
89	L15 ₇	N-46°-E	不整長方形	1.31×0.95	32	垂直	平坦	自然	土師器片48(變)
92	M14 _c	N-70°-W	不整楕円形	1.85×1.09	52	外傾	平坦	人為	土師器片9(變)
93	M14 _c	N-39°-W	不整円形	1.18×1.11	35	外傾	平坦	人為	土師器片8(高坏4, 變4), 石製模造品(朝形石製模造品)
94	M14 _a	N-16°-E	不整楕円形	0.73×0.55	76	垂直	平坦	自然	
96	M14 _a	N-66°-E	円形	0.95×0.90	70	垂直	平坦	自然	
97	M14 _a	N-73°-E	不定形	1.02×0.71	40	垂直	凹状	人為	
98	K15 ₁	N-80°-W	不整長楕円形	2.20×1.03	13	緩斜	凹状	自然	土師器片62(變), S17を掘り込んでいる。

(2) 溝

今回の調査では、時期不明の溝1条を確認した。以下、確認した遺構について記載する。

第1号溝 (付図2)

位置 調査区の西部から東部、L12_{CS}~L17_{J1}区。

確認状況 本跡は、遺構確認調査時から明瞭に確認出来た。

重複関係 本跡は第17・18号住居跡と重複する。本跡は第17・18号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と形状 全長182mで、端部はそれぞれ調査区外に延びている。最大幅は2.4mで、最小幅は0.9mである。

断面形は「U」字形をし、深さは最大で0.67mで、西部ほど浅くなる。底部は概ね皿状に掘り込まれている。

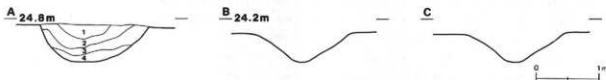
方向 N-80°-W

壁面 中位付近には凹凸がある。中位から上位にかけて耕作による攪乱を受けている。

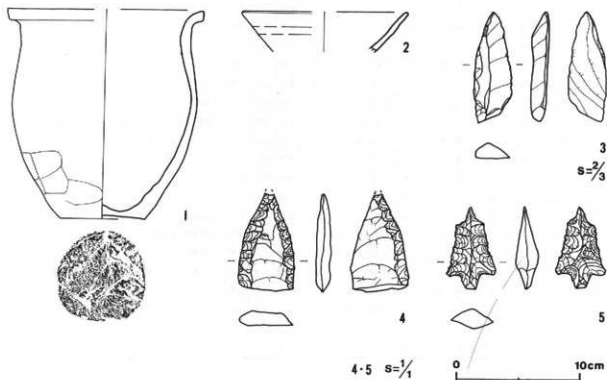
覆土 4層から成る。一部攪乱を受けている。自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|------|-------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量 | 3 褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子極微量 | 4 褐色 | 炭化粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子極微量 |



第154図 第1号溝断面図



第155図 第1号溝出土遺物実測図

遺物 覆土中から土師器片が少量と、黒曜石を石材とする剥片が少量出土している。第155図1の常総型甕は、溝の東端の覆土上層から出土したもので、2の須恵器の坏は中央部付近の覆土中から出土している。3のナイフ形石器、4の先頭器、5の石鏃はいずれも溝を構築するときに混入したものと思われる。

所見 本跡の時期と性格は不明である。

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第155図1	甕 土師器	A [15.7]	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、頸部は折れ、口縁部に至る。口縁部に最大径を持つ。	口縁部内・外面及び頸部横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	P125 50% PL34 覆土上層底部に 木炭痕
		B 16.6				
		C 6.8				
2	坏 須恵器	A (8.0)	体部及び口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口唇部に丸みを持つ。	体部外面横ナデ、内面ナデ。	石英・霏母 灰色 普通	P126 5% 中央部付近覆土中
		B (3.2)				

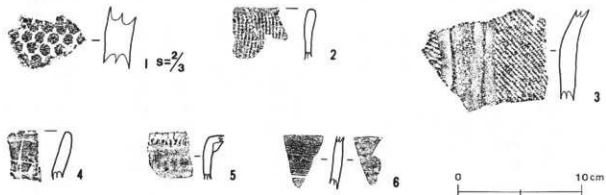
図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第155図3	ナイフ形石器	4.3	1.5	0.6	4.2	100	安山岩	覆土中	Q36 PL34
4	尖頭器	(2.6)	(1.5)	0.4	(1.6)	50	頁岩	覆土中	Q37
5	石鏃	2.2	1.3	0.6	1.0	100	黒曜石	覆土中	Q39 PL34

5 遺構外出土遺物

当遺跡からは、表採及び遺構確認の際に出土したものも含めた遺構に伴わない旧石器時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち、縄文時代の土器片及び古墳時代の土師器と須恵器片について解説をし、石製品と石製模造品及び土製品については一覧表で記載する。

縄文時代 (第156図)

1と2は早期の土器である。1は深鉢の胴部の破片で、鱗状の円形押型文が密接に施文されている。2は深鉢の口縁部片で、燃糸文が施文されている。夏島式土器である。3は中期後葉の土器である。深鉢の胴部片で、地文に単節縄文LRが縦位回転で施され、微隆起線の磨消し帯を垂下させている。加曾利E4式土器である。4は時期不明の土器である。深鉢の波状口縁部の破片で、細沈線が施されている。



第156図 遺構外出土遺物拓影

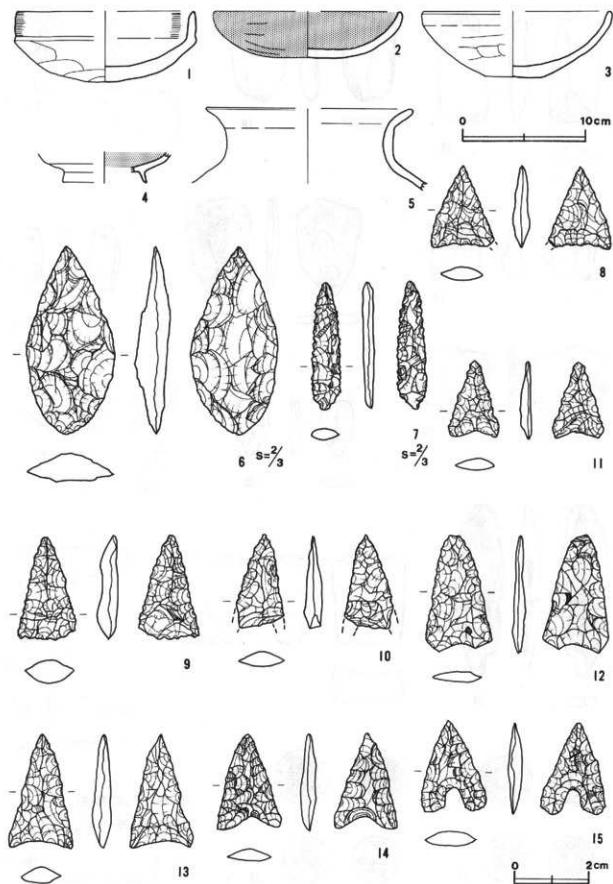
古墳時代 (第156図)

5は前期の土師器で、パレストタイプ壺の頸部破片である。頸部と口縁部の間に段を持ち、段部にヘラによる刻突状の刻みを施し、刷毛目調整痕を残している。内・外面は赤彩されている。6は中期の須恵器で、壺の体部片である。6条の櫛描波状文が施され、その下方には辻線がみられる。

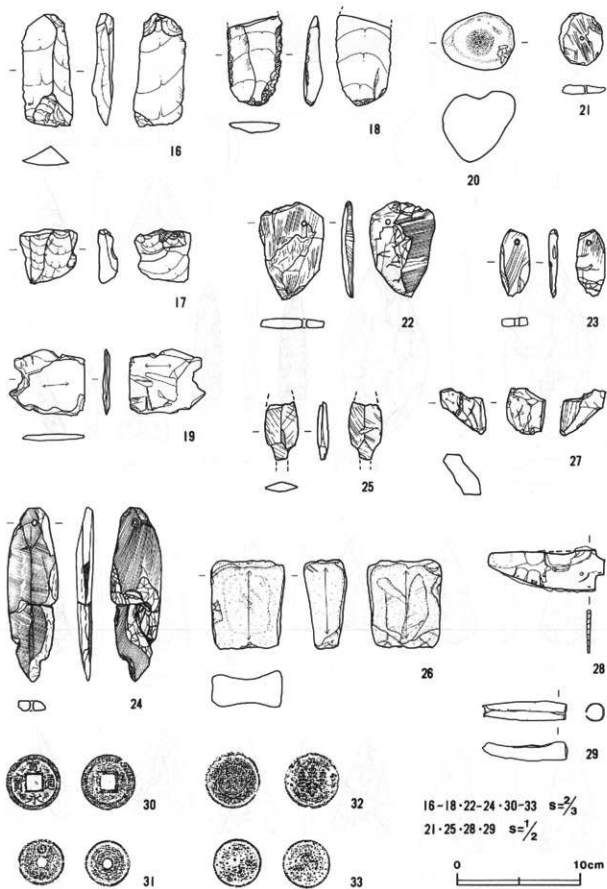
遺構外出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第157図 1	環 土 師 器	A [14.2]	体部及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部と体部との境に明瞭な段を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面傾位のヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・長石 に多い褐色 普通	P128 55% 覆土 二次焼成
		B 5.6				
2	環 土 師 器	A [15.1]	底部から口縁部の破片。底部は押し潰されたような平底である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面及び底部横ナデ。 内・外面黒色処理	砂粒・スコリア・ 雲母 に多い褐色 普通	P129 40% 覆土
		B 3.7				
		C 4.7				
3	杯 土 師 器	A [15.2]	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面傾位のヘラナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・バミス・長 石に多い黄褐色 普通	P130 65% 覆土
		B 5.3				
4	高台付杯 土 師 器	C 4.4	底部及び体部下位の破片。平底。高台は僅かに「」の字状に突き、底部は高台との間に幅の広い面を成す。体部は外傾しながら立ち上がる。	口縁部整形。内面ヘラ削り。高台部回転ヘラ削り後高台貼り付け。 杯部内面黒色処理	砂粒・スコリア・ 雲母 に多い褐色 良好	P131 10% 覆土
		B (2.3)				
		E 0.8				
5	壺 土 師 器	A [6.5]	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら頸部に至る。頸部は括れ、口縁部は反る。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・石英・スコリア・ 雲母 に多い赤褐色 普通	P133 10% 覆土
		B (5.9)				

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)					重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径	孔 径					
第157図6	木葉形尖頭器	7.5	3.5	1.3	—	25.5	100	安山岩	M16a区	Q40 PL34	
7	有爪尖頭器	5.1	1.1	0.4	—	2.8	100	頁 岩	表探	Q41 PL34	
8	石 鏃	(2.2)	1.6	0.4	—	(1.0)	90	頁 岩	表探	Q43 PL34	
9	石 鏃	(2.7)	1.5	0.6	—	(1.8)	80	頁 岩	表探	Q44 PL34	
10	石 鏃	(2.5)	1.3	0.4	—	(0.9)	70	チャート	表探	Q45 PL34	
11	石 鏃	(2.0)	1.3	0.3	—	(0.6)	95	チャート	表探	Q46 PL34	
12	石 鏃	(3.1)	(1.7)	0.3	—	(1.4)	90	頁 岩	裏探	Q47 PL34	
13	石 鏃	3.0	1.7	0.4	—	1.9	100	頁 岩	裏探	Q48 PL34	
14	石 鏃	2.5	1.7	0.4	—	1.2	100	頁 岩	表探	Q49 PL34	
15	石 鏃	2.5	1.8	0.4	—	1.4	100	チャート	L14a区	Q30 PL34	
第158図16	刺 片	4.5	2.1	0.8	—	6.5	100	頁 岩	表探	Q52	
17	刺 片	2.2	2.3	0.8	—	2.8	100	頁 岩	表探	Q33	
18	スクレイパー	(3.6)	2.2	0.6	—	(4.5)	50	頁 岩	裏探	Q54	
19	不明石製品	6.0	5.2	0.5	—	22.0	—	粘板岩	表探	Q39	
20	凹 石	5.8	4.6	5.8	—	181.7	100	礫 岩	K15a区	Q68 PL34	
21	有孔円板	2.8	2.4	0.5	0.15	4.0	100	チャート	L15a区	Q69	
22	彫形石製模造品	3.8	2.5	0.4	0.15	(5.5)	98	粘板岩	L17a区	Q70 PL34	
23	彫形石製模造品	2.7	1.2	0.3	0.2	(1.6)	98	粘板岩	L14a区	Q71 PL34	
24	彫形石製模造品	6.9	2.0	0.6	0.15	(9.6)	95	粘板岩	L14a区	Q75 PL34	
25	彫形石製模造品	3.0	1.8	0.5	—	(3.8)	50	粘板岩	表探	Q72	
26	砥 石	(7.0)	5.9	3.4	—	(186.0)	不明	砂 岩	表探	Q73	
27	砥 石	(3.6)	(3.6)	(3.3)	—	(22.9)	不明	凝灰岩	K15a区	Q74	



第157图 遺構外出土遺物実測図(1)



第158图 遼構外出土遺物実測図(2)

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第158図28	刀子	6.3	(2.4)	0.4	(19.2)	90	遺構外覆土	M1 PL34
29	管	(4.5)	0.9	—	(4.2)	80	表採	M2

図版番号	種別	初 勘 年		出土地点	備考
		時代	年号		
第158図30	水滌通瓦	明 (中国銭)	1408年	表採	M3
31	五銭白銅貨	大 正	1920年	L16a区	M4
32	一銭青銅貨	大 正	1916年	L16a区	M5
33	円貨銅貨	昭 和	1948年	表採	M6

表21 西ノ原遺跡住居跡一覧表

住居番号	位置	方位 (長軸方向)	平面形	規模 (m) (真横×短軸)	高さ (cm)	築期	内 部 施 設					炉	覆土	出土遺物	備考	
							暖爐	間仕切壁	土柱	軒窓	ドット					入口
1	K13a	[N-55-E]	[隅丸方形]	6.00×2.43	29-30	平坦	全周	—	2	—	3	1	—	自然	土師器(坏, 甕)	
2	L13a	N-37-W	方 形	7.40×6.97	48-50	平坦	全周	—	4	1	5	1	竪1	人為	土師器(坏, 甕, 甕), 石器(白石, 石製品(白玉, 磁石))	
3	K14a	N-47-E	不整形長方形	7.38×6.52	3-20	平坦	—	—	4	1	4	—	竪1	人為	土師器(坏, 小形甕, 甕), 石器(白石, 石製品(白玉, 磁石))	
4	K15a	N-32-W	方 形	6.16×5.98	33-40	平坦	全周	—	4	1	5	1	竪1	自然	土師器(坏, 小形甕, 甕), 石器(灰土甕), 土製品(土製土器)	
5	K15a	N-24-E	長 方 形	5.69×4.24	30-41	平坦	—	—	2	1	3	1	竪1	不明	土師器(坏, 高坏, 坏, 甕), 石製品(磁石)	
6	K15a	N 46° W	方 形	7.38×7.26	48-51	平坦	全周	—	4	1	5	1	竪1	自然	土師器(坏, 甕, 甕, 甕), 石製品(白石)	
7	K15a	N-50-E	方 形	4.66×4.65	10-15	平坦	—	—	4	2	4	—	竪1	人為	土師器(坏, 甕, 甕, ミニチュア土器), 石器(白石), 石製品(Fi石)	S20に埋め込まれている。
8	L14a	N-47-W	方 形	5.56×5.31	22-36	平坦	一部	—	4	1	5	1	竪2	人為	土師器(坏, 甕, 甕)	
9	L15a	N-38-W	方 形	6.82×6.54	22-48	平坦	全周	—	4	1	5	1	竪1	人為	土師器(坏, 小形甕, 甕), その他(炭灰片)	
10	L15a	N-47-E	方 形	6.12×6.10	16-26	平坦	—	—	4	1	5	1	竪1	自然	土師器(坏)	
11	L15a	N-57-W	方 形	2.40×2.24	6-7	平坦	—	—	—	—	—	—	—	自然	土師器(高坏)	
12	L15a	N-48-E	長 方 形	6.00×4.35	4-8	平坦	—	—	—	—	—	—	—	不明	土師器(坏, 手製土器)	
13	K15a	(N 50° W)	[方 形]	5.47×3.60	28-38	平坦	—	—	—	1	4	—	—	自然	土師器(高坏, 甕, ミニチュア土器), その他(不明白磁, 炭灰片)	地味確認
14	K16a	(N 32° W)	[隅丸方形]	5.63×1.49	35-47	平坦	—	—	—	1	—	—	—	自然	土師器(高坏, 甕)	地味確認
15	L15a	N 30° E	長 方 形	4.29×3.61	3-20	平坦	—	—	4	—	5	1	竪1	人為	土師器(高坏, 甕), その他(炭灰片)	
16	L15a	N 51° E	方 形	6.84×6.54	28-34	平坦	全周	—	4	2	5	1	竪1	人為	土師器(高坏, 甕, 甕), 石製品(白石), 土製品(土土), その他(ガラス玉)	
17	L15a	(N-40-E)	長 方 形	7.28×5.45	8-17	平坦	—	—	4	—	4	—	竪1	自然	土師器(高坏, 甕)	S20に埋め込まれている。
18	L14a	N-46-E	方 形	3.93×3.63	30-38	平坦	—	—	—	1	—	—	竪1	人為	土師器(高坏), 石製品(白石), 石製土器(高坏, 甕, 石製土器)	S20に埋め込まれている。
19	L15a	N-47-E	方 形	3.50×3.35	25-34	平坦	全周	—	4	1	5	1	竪1	自然	土師器(高坏, 甕), 石製品(白石, 磁石)	
20	L16a	(N-37-E)	長 方 形	5.46×4.76	4-23	平坦	—	—	4	1	4	—	—	自然	土師器(高坏, 甕)	地味確認の可能性がある。
21	L16a	N 90° E	長 方 形	4.52×3.64	14-25	平坦	—	—	4	—	5	1	—	人為	土師器(高坏, 甕, 小形甕, 甕), 石製品(白石)	

第4節 まとめ

当遺跡で確認した遺構は、竪穴住居跡21軒、竪穴遺構1基、土坑41基、陥し穴4基及び溝1条である。ここでは、時期別に各時代の主な遺構と遺物についての概要を述べ、まとめとする。

旧石器時代

木葉形尖頭器が表面採集され、剥片が表土中や後世の遺構の覆土中から出土している。木葉形尖頭器の出土地点は傾斜地で、ローム層の流失、または、耕作等による旧石器時代文化層の攪乱によって表面採集されたものである。石器集中地点は5か所確認したが、その他にも剥片等の出土地点を数か所確認している。今回確認した石器集中地点は、土壌の自然科学分析による指標テフラの堆積状況から、概ね南関東の武蔵野編年に対比させることができる。遺物の出土地点は黒色帯の上面、おおよそA T層準V層下部からVII層上部に相当するものであり、石刃素材のナイフ形石器の形態的特徴等から、橋本編年の武蔵野1c期段階（後期旧石器前半）に属するものと思われる。

当遺跡の石器集中地点は、その性格を二つの特徴からみることができ。一つは、石器製作に剥片を利用している点である。剥片生産の石器群という見方と石刃自体を他の場所から搬入し、大型の石刃を再利用しているという見方ができる。もう一つは、石材を黒曜石に求めている点である。出土遺物の大部分を占める黒曜石を石材とする剥片には細かなものも多く、半製品等の出土遺物がみられないことから少ない石材を有効に利用している様子が窺える。また、安山岩、ホルンフェルス及び流紋岩を石材とするナイフ形石器は、こうした石材の剥片及び破片がみられないことから製品として他所より搬入したものと思われる。

しかし、第5石器集中地点で確認したエンド・スクレイパーの出土層位と石刃素材のナイフ形石器とがほぼ同一の層位から出土していることなど、まだ層位的に不安定な部分も残る。さらに、石器石材の大部分を黒曜石にもとめていることから、原産地について具体的分析に基づく検討を試み、遠隔地石材との関係を明らかにしていく必要がある。

当遺跡で確認した石器集中地点は、遺物の出土している垂直分布図から一つの文化層と考えられる。

縄文時代

遺構は、詳細な時期は不明であるが4基の陥し穴が調査区の南西部を中心に散在して構築されており、谷津の低地に集まる動物の捕殺及び捕獲等を目的としたものと考えられる。当遺跡からは、早期から中期後葉の縄文土器片が極少量出土している。早期の土器片は押型文と捺糸文が施文され、中期後葉の土器片は微隆起線の磨消し帯を持つものである。特に、M14a区から出土した早期の鱗状の円形押型土器は、本県での出土例は少ない。傾斜地からの出土のため、表土の流失に伴うものと考えられる。石器では、有舌尖頭器及び石鏃が縄文時代に属するほか、剥片の一部も縄文時代に属する可能性もある。

古墳時代

当遺跡の中心となる時代で、竪穴住居跡、竪穴遺構及び土坑を確認した。当該期に属する竪穴住居跡21軒は何れも古墳時代のもので、時期は3期に分けることができる。

第1期（5世紀前半）

第7・14・17・18・19・20・21号住居跡、第1号竪穴遺構、第77・98号土坑の時期である。当遺跡におけるこの時期の住居跡は、地形的には平坦部から緩斜面に位置し、集落の中では外側から後世の遺構を取り囲むように位置している。出土遺物は土師器片の坏及び椀類の出土が少なく、供獻土器の割合が高い。第7号住居跡出土の高坏は脚部が下方に開き、坏部外面に刷毛目磨り消し痕が残っている。やや突出した平底を持つ壺及びミニチュア土器が出土しており、赤彩率は低いが刷毛目整形磨り消し痕を残しているものが多い。第17・18・19・20及び21号住居跡出土の高坏は脚部から裾部にかけて下方に大きく開き、口縁部下位に稜を持ち、第77号土坑出土の高坏は脚部にエンタシス状の膨らみを持ち、穿孔が穿たれて赤彩されている。壺はやや突出した平底を持ち、赤彩率は低いが刷毛目整形磨り消し痕を残すものが多くみられる。第14・17・19号住居跡及び第98号土坑出土の甕は口縁部に折り返しのある複合口縁がみられる。第1号竪穴遺構は、出入り口と思われる部分に緩斜面を設けている。本遺構の性格については、住居跡の付設する施設を持たないことから住居跡とは異なる上屋構造の存在が推測される。

第2期（5世紀後半）

第3・5・8・10・11・12・13・15・16号住居跡、第68号土坑の時期である。この時期の住居跡は、5世紀前半の住居跡からやや内側に位置するものが殆どである。住居跡の形態と規模及び付設する施設に一定の規格がみられない。出土遺物は土師器の坏、椀類の出土割合が低く、高坏、埴等の供獻土器の占める割合が高い。高坏は坏部下位に稜がみられ、埴は体部がソロバン玉状もしくは球形を呈するものが多くみられる。

第3期（6世紀後半）

第1・2・4・6・9号住居跡の時期である。この時期の住居跡は、集落の中で最も内側の平坦な部分に位置している。その規模と付設する施設はほぼ同一規格で構築され、1辺が6～7mの規模で、竈溝、支柱穴、貯蔵穴、出入口ピット及び竈の付設位置は同じで、ほぼ同一時期の単位で考えることができる。第2・4・6・9号住居跡の竈は壁外へ掘り込まれているが、使用頻度の高いものと低いものとがみられる。出土遺物では、大型の甕がみられ、坏は体部と口縁部との境に明瞭な稜を持ち、口縁部は直立し、黒色処理されたものが主体である。第114図4の須恵器短頸壺は混入したもので、TK216からTK208に併行するものである。当該期は、TK43からTK209に併行する時期と考えられる。

平安時代

この時期に伴う遺構は確認できなかったが、第1号溝の覆土中及び覆土上層から土師器の高台付坏片1点と常総型甕1点が出土している。

註

- (1) 橋本勝雄 「茨城の旧石器時代」茨城県考古学協会誌 第7号 1995年8月

参考文献

- 鉾千景原文化財センター「八千代市北海道遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書II』1985年3月
- 鉾栃木県文化振興事業団「栃木県埋蔵文化財調査報告第112集」『三ノ谷東・谷館野北遺跡』1990年3月
- 櫻村宣行「茨城県南部における丸高式土器について」『研究ノート2号』茨城県教育財団 1993年7月
- 浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器(II)」『研究ノート2号』茨城県教育財団 1993年7月

第5章 隼人山遺跡

第1節 遺跡の概要

隼人山遺跡は、牛久市の北北東、小野川支流の乙戸川右岸の洪積台地である標高24～25mの稲敷台地上に立地し、縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡である。調査区域は2区に分かれ、それぞれの調査前の現況は、山林及び畑地である。調査Ⅰ区は南北に約245m、東西に約54m、面積は13,239㎡、調査Ⅱ区はⅠ区から南西へ約70m離れた飛び地で、南北に50m、東西に65m、面積は3,242㎡である。

今回調査によって確認した遺構は、縄文時代の陥し穴8基、古墳時代中期の竪穴住居跡31軒、竪穴遺構3基、平安時代の竪穴住居跡1軒、その他に土坑93基、溝1条である。

縄文時代の8基の陥し穴は、何れも断面形はV字状で、調査Ⅰ区の中央部から北部付近に散在している。

古墳時代の住居跡は、調査区南部と北東部の2か所に集中して見られた。住居跡の形状はおおよそ方形ないし長方形のもので、間仕切り溝を伴う住居跡も確認された。中でも、当遺跡の第2号住居跡からは、刷毛目整形痕を残す土師器も出土している。また、第27号住居跡からは、赤彩された完形の土師器と共に、線刻された石製品も複数出土し、祭祀行為との関係も推測される。

平安時代の遺構としては、第35号住居跡1軒を確認した。北西壁に竈が付設され、出土遺物から時期は9世紀前半と考えられる。

その他の遺構としては、Ⅱ区の調査区で南東から北西へ延びる溝1条を確認した。この溝は、その形状と地形図からみた方位とが、西ノ原遺跡で確認した溝と合致するものと考えられる。

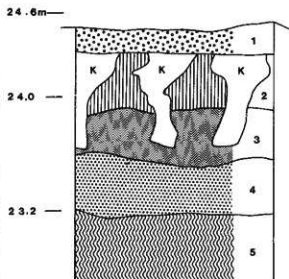
遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に50箱ほど出土している。旧石器時代の遺物は、調査Ⅱ区の遺構外の覆土中から黒曜石のナイフ形石器が出土している。縄文時代の遺物は、中期の縄文土器片や石鏝が遺構の確認面や覆土中から出土している。古墳時代の遺物は、土師器の坏、椀、高坏、甕、甕等が出土しており赤彩されたものも多くみられる。また、須恵器の坏、甕の口縁部片、把手付碗の破片が若干ではあるが出土している。その他、土製品の土玉、石製品の紡錘車、砥石のほか多数の白玉、石製模造品の有孔円板、勾玉、鉄製品の鏝が出土している。第6号住居跡の覆土中からはガラス玉も出土している。

第2節 基本層序

隼人山遺跡においては、調査区南東部V4区にテストピットを設定し、第159図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、褐色の耕作土で、厚さは15～22cmである。

第2層は、明褐色のソフトローム層への漸移層で、厚さは35～45cmである。第3層は、厚さ10～22cmで褐色のソフトローム層で、火山ガラス性物質が微量含まれ、A T降灰層に相当するものと考えられる。以下、各層からの火山ガラス性物質は減少する。第4層は、明褐色のハードローム層で、厚さは29～40cmである。第5層は、褐色



第159図 隼人山遺跡基本層序図

のハードローム層で、厚さは55～65cmである。

卑人山遺跡の遺構は、第1層下面及び第2層上面で確認されている。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 陥し穴

当遺跡で確認した101基の土坑の内、形状や規模から陥し穴と考えられる遺構を調査1区で8基確認した。出土遺物がないことから、ここでは遺構について記載する。

第1号陥し穴（第160図）

位置 調査区の中央部西側，E4区。

重複関係 本跡は、第18号住居跡に掘り込まれ、本跡の方が古い。

規模と平面形 長径(2.54)m，短径0.96mの長楕円形で、深さは1.05mである。

長径方向 N-54°-W

壁面 V字状に切り立ち、中位で緩やかな段を成して立ち上がる。

底面 皿状で、壁間は狭く、堅い。

覆土 9層から成る。覆土は暗褐色土及び褐色土で、各層にはロームブロックの混入が確認され、覆土中層の土層3・4・6には炭化粒子の混入もみられた。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック微量、輝石り類	6 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム中ブロック微量
2 褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量	7 暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
3 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量	8 褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
4 褐色	ローム粒子多量、炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量	9 褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム大ブロック微量
5 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量		

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第2号陥し穴（第160図）

位置 調査区の中央部東側，E5区。

規模と平面形 長径3.60m，短径1.06mの長楕円形で、深さは1.46mである。

長径方向 N-18°-W

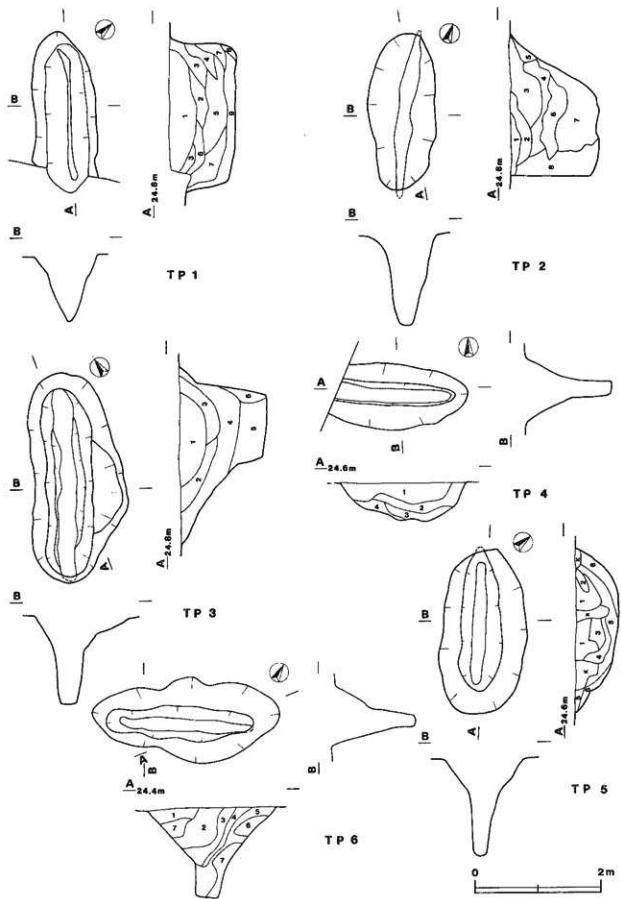
壁面 垂直に立ち上がる。

底面 皿状で、壁間は狭く、堅い。

覆土 8層から成る。土層3の褐色土を除く各層はロームブロックを含み、土層1から4の暗褐色土及び褐色土には炭化物の混入が確認できた。人為的に埋め戻しが行われたように思われる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・ローム小ブロック微量	6 明褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
2 褐色	炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子中量	7 におい褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量
3 褐色	焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量	8 橙褐色	ローム中ブロック・ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
4 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物少量、ローム中ブロック微量		
5 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量		



第160図 第1・2・3・4・5・6号陥し穴実測図

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第3号陥し穴 (第160図)

位置 調査区の中央部, E4₆₅区。

規模と平面形 長径3.32m, 短径1.39mの不定形で, 深さは1.47mである。

長径方向 N-32°-E

壁面 底面から中位にかけては垂直で, その後, 外傾して立ち上がる。

底面 平坦で, 壁間は狭く, 堅い。

覆土 6層から成る。覆土下層及び中層に堆積する土層4, 5の褐色土と上層に堆積する土層1の暗褐色土は焼土粒子を含み, 人為的に埋め戻されたものと思われる。

土層解説

1 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量	4 褐色	焼土粒子・ローム粒子極微量
2 褐色	ローム粒子微量, ローム小ブロック極微量	5 褐色	焼土粒子・ローム粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量	6 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子極微量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第4号陥し穴 (第160図)

位置 調査区の北西部, D4₄₄区。

規模と平面形 長径 [2.08m], 短径1.06mの長楕円形で, 深さは1.38mである。

長径方向 [N-82°-W]

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦で, 壁間は狭く, 堅い。

覆土 4層から成る。各層にはロームブロックが混入し, 人為的に埋め戻されたものと思われる。

土層解説

1 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量	3 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
2 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量	4 明褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量

遺物 出土していない。

所見 本跡の西側は調査区外のため未調査で詳細は捉えられないが, 遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第5号陥し穴 (第160図)

位置 調査区の北西部, D4₄₅区。

規模と平面形 長径2.63m, 短径1.33mの長楕円形で, 深さは1.53mである。

長径方向 N-49°-W

壁面 底面から中位にかけ垂直に立ち上がり, その後, 外傾して立ち上がる。

底面 皿状で, 壁間は狭く, 堅い。

覆土 6層から成る。土層2の暗褐色土を除いて各層にロームブロックが混入している。いずれも強い締まり

を有する。

土層解説					
1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子極微量、締まり強	5	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
2	暗褐色	ローム粒子微量、締まり強			
3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子極微量	6	褐色	ローム大ブロック微量、ローム中ブロック・ローム粒子微量
4	暗褐色	ローム小ブロック少量、ローム粒子極微量			

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第6号陥し穴(第160図)

位置 調査区の北部中央、C5es区。

規模と平面形 長径2.97m、短径1.31mの不定形で、深さは1.37mである。

長径方向 N-62°-E

壁面 底面から垂直に立ち上がり、その後、外傾して立ち上がる。

底部 平坦であるが、東側にやや傾斜している。

覆土 7層から成る。上層に堆積する土層1・2の暗褐色土及び5の褐色土には焼土粒子の混入が確認され、複雑な堆積状況を呈していることから人為的に埋め戻しが行われたものと思われる。

土層解説					
1	暗褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子・ロームブロック・ローム粒子微量	4	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化物・ローム中ブロック微量	5	褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
3	褐色	ローム中ブロック・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	6	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
			7	ぶい褐色	ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第7号陥し穴(第161図)

位置 調査区の北部中央、C5ii区。

規模と平面形 長径2.40m、短径1.13mの長楕円形で、深さは1.72mである。

長径方向 N-42°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

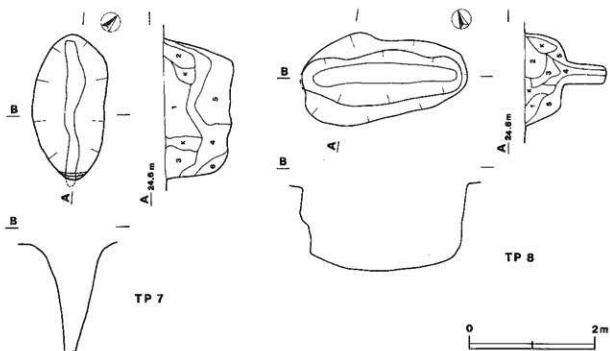
底部 平坦である。

覆土 6層から成る。土層1の暗褐色土を除いてすべて褐色土で、土層2の褐色土以外にはロームブロックの混入がみられる。土層の堆積状況に乱れがみられることから人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。

土層解説					
1	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量	4	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
2	褐色	ローム粒子極微量	5	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・ローム粒子極微量
3	褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量	6	褐色	ローム小ブロック少量、ローム粒子極微量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第161図 第7・8号陥し穴実測図

第8号陥し穴 (第161図)

位置 調査区の北部中央, C4a区。

規模と平面形 長径2.66m, 短径1.22mの長楕円形で, 深さは1.35mである。

長径方向 N-71°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底部 皿状で, 壁間は狭い。

覆土 5層から成る。各層にはロームブロックの混入がみられる。

土層解説

1	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量	4	褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
2	暗褐色	ローム粒子少量, 炭土粒子・ローム小ブロック微量	5	褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック少量, ローム小ブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量			

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 遺構の形態等から縄文時代の陥し穴と考えられる。

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では, 古墳時代の竪穴住居跡31軒, 竪穴遺構3基を確認した。これらのうち, 規模が極端に小型で, 他の住居と別の目的や用途を持ったものと考えられる建物跡や, 内部施設の有無等に差異がみられるものもあるが, ここでは住居跡として取り上げ, 確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

確認した竪穴住居跡は31軒 (S I-1~43のうち, 29・30・37~42は欠番) があるが, これらすべての住居跡は調査I区で確認したもので, そのうち調査区外へ延びる第6号住居跡は一部未調査である。

第1号住居跡 (第162図)

位置 調査区の南部, H4₄₅区。

規模と平面形 長軸2.74m, 短軸2.02mの長方形。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高は12~14cmで, 外傾して立ち上がるが, 北西壁はややゆるく外傾している。

床 全体的に凹凸があり, 中央付近に膨らみがある。あまり踏み締まった部分はみられない。

炉 中央部から北西壁方向に付設され, 長径55cm, 短径52cmの不定形で, 床面を23cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土はいずれも焼土粒子を含んでいる。焼土ブロックは少量みられるもの、炉床は赤変硬化していない。

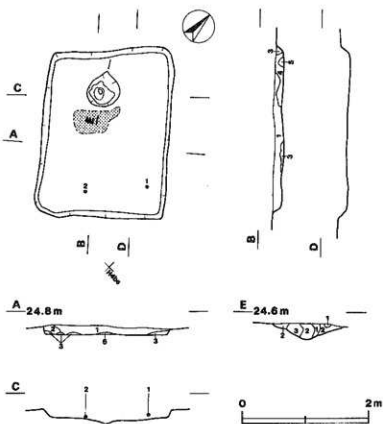
炉土層解説

- | | | |
|---|-------|----------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 3 | におい褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量 |

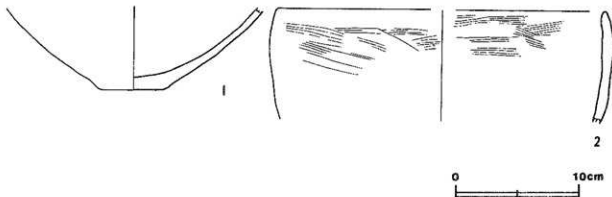
覆土 6層から成る。中央部付近に暗褐色土が厚く堆積し, 覆土下層付近と壁際に褐色土, 暗褐色土の重なりがみられる。土層3を除く各層は炭化粒子を含み, 土層3・6以外の覆土は焼土粒子を含んでいる。人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|----------------------|---|-----|---------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 | 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 焼土大ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 5 | 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量 | 6 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 |



第162図 第1号住居跡実測図



第183図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	形 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第163図 1	壺 土 師 器	B (6.4) C (5.0)	底部及び体部下位の破片。平底。 体部は内側しながら立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母・バミス において褐色 普通	P1 10% PL49 東コーナー寄り土層
2	甌 土 師 器	A [26.4] B (9.0)	体部上位から口縁部の破片。体部 は緩やかに立ち上がり、口縁部は 僅かに内傾する。	口縁部内・外面ナデ。体部外面刷 毛目整形後ナデ、内面刷毛目整 形。	砂粒・雲母 において褐色 普通	P2 5% 南東寄り床面直上 体部外面塗付前

遺物 覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第163図1の壺は、東コーナーに近い覆土下層から、2の甌は、南東寄りの床面直上から出土している。

所見 本跡は、ピットが確認されず、小規模で、炉の使用頻度も少ない。また、上記の出土遺物の整形痕等が隣接する第2号住居跡と合致するところから、その関連施設で住居以外の目的をもった建物跡と思われる。時期は、出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第2号住居跡 (第164図)

位置 調査区の南部、G4区。

規模と平面形 長軸5.37m、短軸5.24mの方形。

主軸方向 N-37°-W

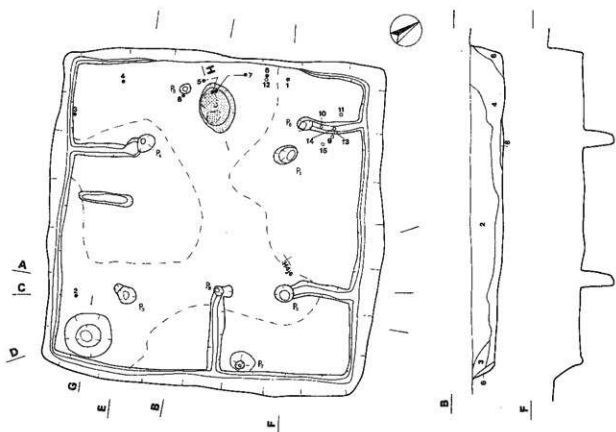
壁 壁高は34~55cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南西壁の一部を除き全周する。上幅8~16cm、深さ5~8cmで、断面形はU字形である。

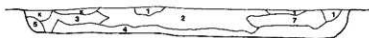
間仕切り溝 北東壁から2条、南東壁から1条、南西壁から2条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅18~25cm、深さは各10cmで、断面形はU字形である。

床 やや凹凸があり、中央付近が緩やかな皿状である。中央部から南、西コーナー付近にかけ踏み固められ、堅緻な部分が帯状に広がっている。

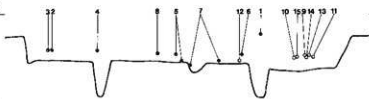
ピット 8か所 (P₁~P₈)。P₁~P₄は長径31~40cm、短径27~29cmの不整形円形または不定形で、深さは32~70cmである。何れも各コーナー付近に付設され、規模や位置から主柱穴と考えられる。P₅は炉の南西方向に付設され、長径18cm、短径14cmの楕円形で、深さは5cmと浅く、掘り込みの状況及び炉との位置関係から柱穴ではないとも考えられ、性格は不明である。P₆は間仕切り溝の突端に付設され、長径26cm、短径20cmの楕円形で、深さは40cmであるが、性格は不明である。P₇は南東壁から伸びる間仕切り溝の東側に付設され、径12cmの円形で、深さは9cmと浅いが、掘り込みの周りを灰白色の粘土で補強され、造りは強固である。そ



A 25.0m



C



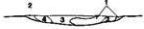
D



E



H 24.4m



G 24.4m



第164图 第2号住居跡実測图

の南西方向には出入口に伴うピットと考えられる柱穴もあることから、それを補強するような性格が考えられる。P₃は南東壁から伸びる間仕切り溝の先端に付設され、長径18cm、短径15cmの楕円形で、深さは23cmである。規模や位置から出入口に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径75cm、短径67cmの隅丸長方形で、深さ60cmである。断面はV字形で、底部は深鉢状である。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土小ブロック・炭化材・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量 | 3 暗褐色 | 焼土小ブロック・炭化材・炭化物・ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | 炭化材・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| | | 5 褐色 | ローム小ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量 |

炉 中央から北西壁寄りに付設され、長軸80cm、短軸55cmで、床面を14cm掘り窪めた隅丸長方形の地床炉である。炉床は火熱を受け焼土ブロックが厚く堆積し、赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量、炭化物微量 | 4 赤褐色 | 焼土中ブロック・小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |
| 3 暗褐色 | 焼土中ブロック・小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量 | | |

覆土 8層から成る。北西壁際には焼土粒子とロームブロックを含む暗褐色土及び焼土粒子と炭化物を含む極暗褐色土が堆積し、南東壁際には焼土粒子及び炭化物を含む黒褐色土が堆積している。それぞれの壁際では埋め戻された堆積状況の様子がみられるが、住居の中央付近では自然堆積の様相もみられることから、壁際は人為堆積による埋め戻しが行われ、中央付近は覆土が自然に堆積したものと考えられる。

土層解説

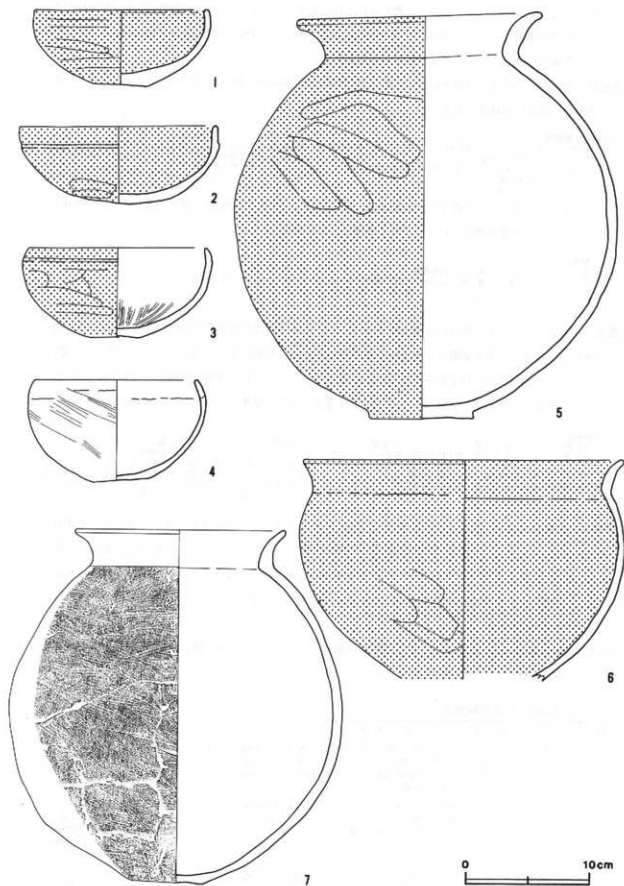
- | | | | |
|-------|------------------------------|--------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 | 5 極暗褐色 | ローム大ブロック中量、焼土粒子・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土中量、ローム粒子少量 | 7 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック微量 | 8 黒褐色 | 炭化物・炭化粒子・ローム粒子中量、焼土粒子少量、ローム大ブロック微量 |

遺物 北西壁際の覆土下層から遺物が集中して出土し、その他、中央及び南東の覆土下層からも少量出土している。第165図2・3は坏で、共に南西壁沿いの覆土下層から出土している。4の碗は北西壁沿いの覆土下層から正位の状態出土している。5・6・7は甕で、北西壁沿いの覆土下層から出土している。8は北西壁際出土の甕で、体部内から土玉が1点出土している。9～15の土玉は北コーナー付近の床面直上から集中して出土している。

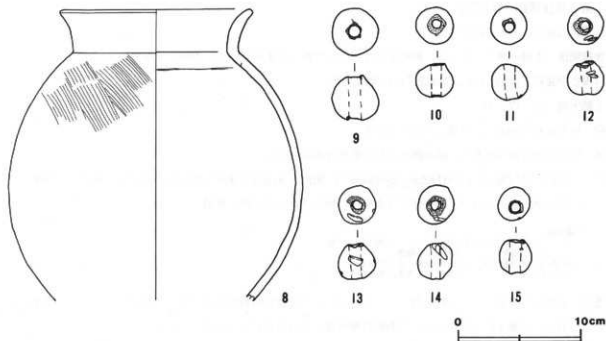
所見 本跡の遺物は完形品が多く、北西壁際から集中していることから意図的に投棄されたものと思われる。時期は、出土遺物から5世紀前半と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 1	坏 土師器	A 14.0	体部上位及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、中位で壁厚を減じる。口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面丁寧なナデ。内面ナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・バミス により褐色 普通	P3 90% PL49 覆土中 体部外面露付着
		B 6.1				
		C 4.1				
2	坏 土師器	A 15.8	体部中位一部欠損。偏平な丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は体部の下に明瞭な線をもち、直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 明褐色 普通	P4 80% PL49 北西壁沿い覆土下層 内面剥離 二次焼成
		B 6.2				
3	坏 土師器	A 14.3	底部及び体部下位一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部外面に弱い線をもち、口唇部はやや尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後丁寧なナデ。内面放射状のへラ磨き。底部へラ削り。外面赤彩。	砂粒・石英・長石・バミス により黄褐色 普通	P5 90% PL49 北西壁沿い覆土下層
		B 7.2				
		C 3.7				



第165图 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第166図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 4	柳土師器	A 14.5	体部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。刷毛目整形後ナデ。内面ナデ。底部へう削り。口縁部内・外面輪積み痕。	砂粒・石英・バミス にぶい褐色 普通	P 6 60% PL49 北西壁跡・土下層 底部外面保付着
		B 8.1				
		C 4.4				
5	壺土師器	A 19.8	体部下位一部欠損。やや突出した平底。体部は内彎しながら立ち上がり、中位に最大径を持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り後斜位のヘラナデ。内面ナデ。底部へう削り。体部外面赤彩。	砂粒・石英・長石 にぶい褐色 普通	P 7 90% PL49 北西壁跡・土下層
		B 32.5				
		C 8.4				
6	壺土師器	A 25.7	体部下位一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、体部上位に最大径を持つ。頸部は括れ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 にぶい褐色 普通	P 8 70% PL49 北西壁跡・土下層 体部外面保付着
		B (17.6)				
7	壺土師器	A 16.9	底部及び体部一部欠損。平底。体部は中位に最大径を持ち、内彎しながら立ち上がる。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目整形。内面ナデ。底部へう削り。	砂粒・石英・バミス 褐色 普通	P 9 95% 北西壁跡・土下層
		B 23.2				
第166図 8	壺土師器	A 15.4 B (23.2)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目整形後ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	P10 30% 北西壁跡

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径				
第166図9	土玉	(3.6)	3.8	—	1.0	(43.9)	90	北コーナ-付近縁部上	D P 1 PL55
10	土玉	(2.7)	3.1	—	0.8	(21.8)	95	北コーナ-付近縁部上	D P 2 PL55
11	土玉	(2.9)	2.9	—	1.0	(22.4)	95	北コーナ-付近縁部上	D P 3 PL55
12	土玉	(2.7)	3.0	—	0.7	(20.5)	95	北コーナ-付近縁部上	D P 4 PL55
13	土玉	(2.9)	3.0	—	0.8	(20.9)	95	北コーナ-付近縁部上	D P 5 PL55
14	土玉	(2.9)	(2.9)	—	0.9	(20.4)	90	北コーナ-付近縁部上	D P 7 PL55
15	土玉	(2.8)	2.6	—	0.9	(17.8)	98	北コーナ-付近縁部上	D P 6 PL55

第3号住居跡 (第167図)

位置 調査区の南部, G4区。

重複関係 本跡の南コーナーは, 第81号土坑によって掘り込まれている。本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸2.90m, 短軸2.74mの隅丸方形。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は6~16cmで, 外傾して立ち上がる。

床 中央付近に窪みがあり, 踏み固められた部分はみられない。

炉 北壁沿いに付設され, 長径62cm, 短径51cmで, 床面を5cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。炉内覆土は
いずれも焼土粒子を含み, 中央部には赤褐色の焼土ブロックが厚く堆積している。

炉土層解説

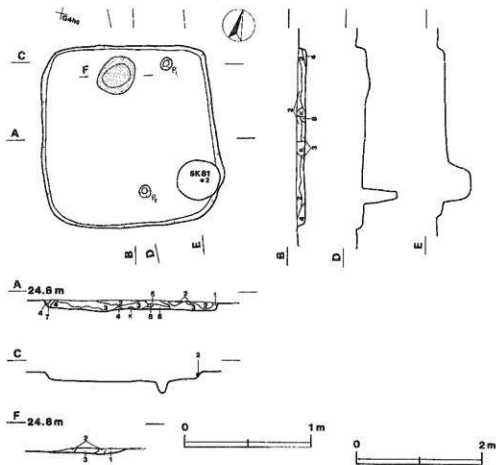
- 1 褐色 ローム粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子少量,
炭化物・ローム小ブロック微量
- 2 明褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化物微量
- 3 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, 炭化物少量

覆土 8層から成る。ローム粒子及びローム小ブロックを含む暗褐色土を主体に埋め戻されている。土層2,

4, 6中には焼土粒子が含まれ, 人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量 | 8 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |



第167図 第3号住居跡実測図



第168図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第168図 1	坏 土 器 器	A 13.2 B (4.3)	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は外面に極めて弱い稜を持ち、やや内傾し、その後直立する。口唇部は内削ぎ状に尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部内面赤彩。	砂粒・長石・パミス に多い橙色 普通	P11 5% 覆土中
2	坏 土 器 器	A 12.2 B 5.8 C 3.8	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部外面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面ナデ。底部へつ削り。口縁部外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石 に多い橙色 普通	P12 85% PL49 東コーナー部覆土中 内面割離

遺物 覆土中層から下層にかけて土器器片が少量出土している。第168図2の坏は東コーナー壁際の覆土中層から出土している。

所見 本跡は、炉の使用頻度も低く、柱穴を伴わず、その規模等から住居以外の目的をもった建物跡とも考えられる。また、隣接する住居跡の関連施設とも考えられるが根拠に乏しく、その関係は不明である。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第4号住居跡 (第169図)

位置 調査区の南部、G4区。

規模と平面形 長軸5.36m、短軸5.12mの方形。

主軸方向 N-43°-W

壁 壁高は31~55cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅12~20cm、深さ3~5cmで、断面形はほぼU字形で、一部逆台形をしている。

床 やや凹凸があり、中央付近が緩やかな皿状を呈し、南コーナーの貯蔵穴付近には高まりがみられる。中央付近には踏み固められた堅緻な部分が広がっている。

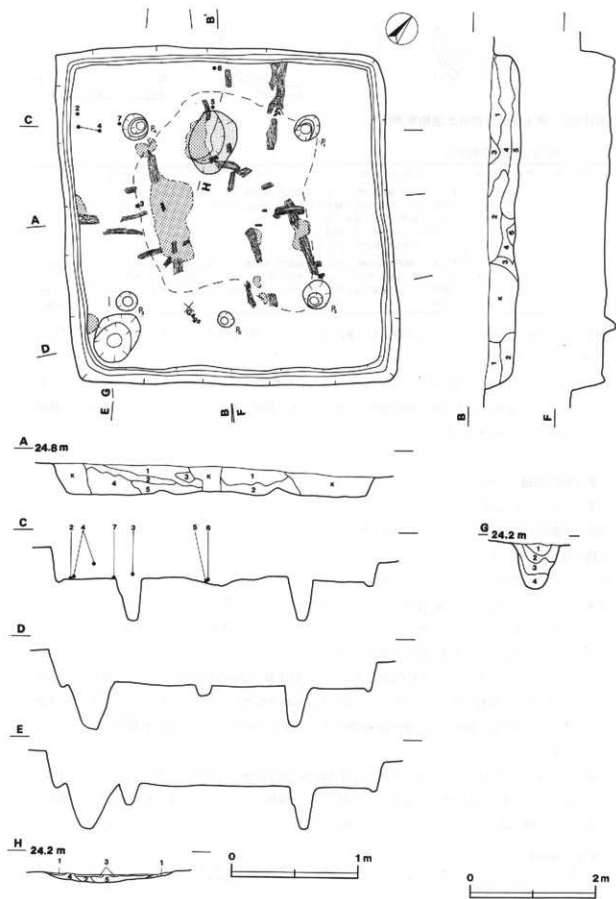
ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は長径35~47cm、短径36~43cmの楕円形または不整形楕円形で、深さは35~60cmである。何れも各コーナー付近に付設され、規模や位置から主柱穴と考えられる。P5は南東壁から中央寄りに付設され、長径27cm、短径23cmの楕円形で、深さは16cmである。規模や位置から出入口に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径85cm、短径65cmの不定形で、深さ70cmである。遺構の内側に傾斜をもつ。断面はU字形で、底部には内側下がりの傾斜がみられる。貯蔵穴覆土中層及び下層からは、家屋の焼失時に混入したと思われる炭化材が確認されている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|------|--------------------------------|-------|----------------------------|
| 1 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量 | 3 暗褐色 | 炭化材少量、炭化物・ローム少ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | 炭化物・ローム小ブロック少量、ローム粒子微量、土上粒子極微量 | 4 暗褐色 | 炭化材・炭化物・ローム粒子少量 |

炉 中央から北西壁寄りに付設され、長径100cm、短径75cmで、床面を6cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。



第169图 第4号住居跡実測图

炉床は火熱を受け焼土ブロックが厚く堆積し、赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|--------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化物中量、焼土粒子・ローム粒子少量 | 4 褐色 | 焼土粒子・ローム小ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物多量、焼土粒子中量、焼土中・小ブロック・ローム粒子少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子・ローム小ブロック中量、焼土中・小ブロック・炭化物・ローム粒子少量 |
| 3 赤褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物多量、ローム粒子極微量 | | |

覆土 6層から成る。床面上に家屋消失時の炭化材が広がり、北西壁には床面から壁面に沿って炭化材が鏡形状に折れた状態で出土している。土層4以外の各層は焼土粒子を含み、炭化物を含む黒褐色土と暗褐色土及び褐色土が互いに堆積し、南西及び北西方向から埋め戻されているように思われる。人為堆積である。

土層解説

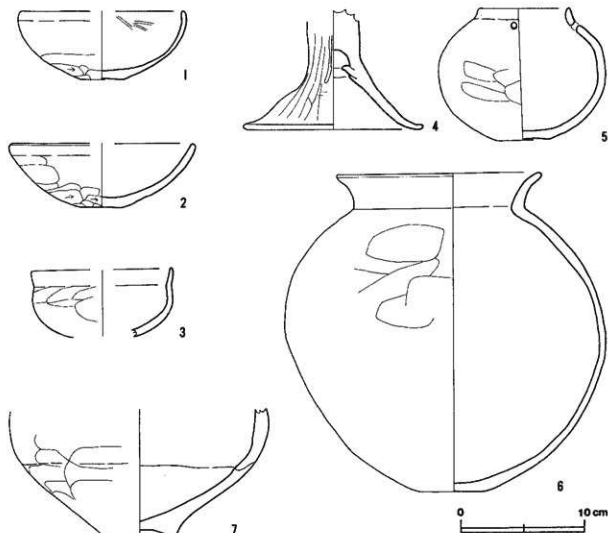
- | | | | |
|-------|--------------------------------|------|--------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物極微量 | 4 褐色 | ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、炭化物極微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、焼土粒子・炭化物極微量 | 5 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子極微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中ブロック極微量 | 6 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物極微量 |

遺物 覆土中層から床面直上にかけ出土している。第170図2の坏は西コーナー付近の覆土下層から斜位の状態、4の高坏は西コーナー寄りの覆土中層の高坏と覆土下層の高坏片が接合したものである。5の短頸壺は北西壁寄りの覆土下層から斜位の状態、6の甕は体部を北西壁に接して斜位の状態、7の甕は西コーナー付近の床面直上から出土している。

所見 本跡は、住居の建築材の一部と考えられる炭化材が良好な状態で残存している焼失家屋である。炭化材は、貯蔵穴内からも確認され、炭化材が周辺遺跡及び当遺跡内の他の住居跡出土の樹種と全く同じであるとして、炭化材樹脂同定の分析でも住居建築材が流入したとしても矛盾はないとしている。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第170図 1	土器器	A [12.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部外面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り後ナデ、内面ナデ。底部へう削り。	砂粒・石英・長石 黒褐色 普通	P13 25% PL49 覆土中 二次焼成
		B 5.5				
		C 3.4				
2	坏 土器器	A [14.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は外面に弱い稜を持ち、外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部緩なへう削り。内・外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石 にぶい褐色 普通	P14 30% PL49 西コーナー付近土層
		B 5.1				
		C 3.1				
3	碗 土器器	A [11.3]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は弓なり状に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り後へうナデ、内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P15 20% 覆土中
		B (5.4)				
4	高坏 土器器	D 14.4	頸部及び脚部の破片。脚部は柱状を呈し、頸部は「ハ」の字状に下方に開く。	脚部及び頸部外面側位のへうナデ、内面ナデ。脚部内面輪積み痕。	砂粒・長石・パミス にぶい褐色 普通	P16 40% 西コーナー付近土層
		E (8.6)				
5	短頸壺 土器器	A 7.6	体部下位一部欠損。平底。体部は内彎しながら口縁部に至る。口縁部は内傾して立ち上がり、口唇部は内削り状に直立する。体部上位に相対して二つの孔が穿たれている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り後ナデ、内面ナデ。底部へう削り。	砂粒・石英・長石 黒褐色 普通	P17 90% PL49 北西壁寄り覆土下層 二次焼成
		B 10.1				
		C 4.0				
6	甕 土器器	A 16.5	体部一部欠損。平底。体部は扁平ながら球形状を呈し、内彎しながら立ち上がり、口唇部で「く」の字状に反転する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へうナデ、内面ナデ。底部へう削り。	砂粒・石英・長石・ パミス 黒褐色 普通	P18 90% PL50 北西壁覆土中 二次焼成
		B 25.5				
		C 5.2				
7	甕 土器器	B (10.2)	底部から体部中位の破片。上げ底気味の平底。体部は内彎しながら中位で立ち上がる。	体部外面へう削り後へうナデ、内面ナデ。底部へう削り。体部内面輪積み痕。	砂粒・雲母・パミス にぶい褐色 普通	P19 30% 西コーナー付近土層上 二次焼成
		C 5.6				



第170図 第4号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡 (第171図)

位置 調査区の南部, G4a区。

規模と平面形 長軸3.07m, 短軸2.74mの長方形。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高は7~17cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。中央付近に踏み固められた堅緻な部分がみられる。

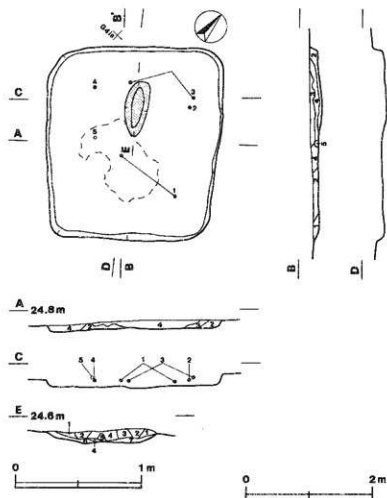
炉 中央から北西壁寄りに付設され, 長径90cm, 短径35cmで, 床面を10cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。

炉床は火熱を受けて赤変しているが, 硬化はしていない。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|-----------------------------------|
| 1 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子極微量 | 5 赤褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子極微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・ローム粒子微量, 炭化粒子極微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 焼土粒子極微量 |
| 3 赤褐色 | 焼土粒子・ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子極微量 | 7 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・ローム小ブロック中量, 炭化粒子極微量 |
| 4 赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 炭化粒子極微量 | | |

覆土 5層から成る。各層は焼土粒子, 炭化物及びロームブロックを含み, 土層4の極暗褐色土には炭化材の



第171図 第5号住居跡実測図

混入も見られ、南東方向から埋め戻されたものと考えられる。人為堆積である。

土層解説

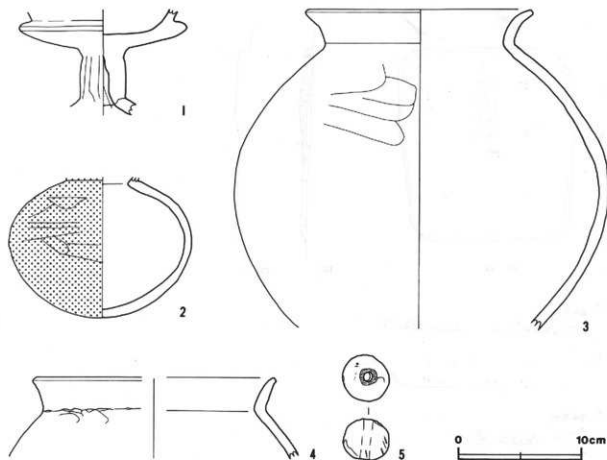
- | | | | |
|-------|-------------------------------------|--------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物物地微量 | 3 黒褐色 | 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量、ローム粒子極微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量、炭化粒子極微量 | 4 棕暗褐色 | 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化材微量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量 | | |

遺物 覆土中層から下層にかけて土師器片が中量出土している。第172図1の高坏は東コーナー付近の覆土下層出土の坏部片と中央覆土下層の脚部片が接合したものである。2の罫は北コーナー寄りの覆土中層から正位の状態出土し、3の罫は北西寄りの覆土中層から逆位で出土している罫の口縁部と北西壁寄りの覆土中層から出土している体部片が接合したものである。4の罫は西コーナーの覆土下層から斜位の状態出土している。

所見 本跡は、柱穴及び貯蔵穴の内部施設が確認されず、また、その規模等から考えて住居以外の目的を持った建物跡と考えられる。特に位置関係から隣接する第6号住居跡との関係が推測されるが、根拠に乏しい。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 1	高坏 土師器	B (8.3) E (5.0)	脚部から坏部の破片、脚部は柱状を呈し、坏部下位に張り出しのある段を有する。	坏部外面下位へラナダ、内面ナダ。 脚部外面縦位のへラナダ。	胎土・色調・焼成 砂粒・雲母に多い橙色 普通	P20 20% 東コーナー付近 覆土下層



第172図 第5号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 2	埴 土 師 器	B (11.0)	口縁部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、中位のやや上部に最大径を持ち、楕円形の標相を呈する。	体部外面丁寧なヘラナデ、内面ナデ。体部外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P21 80% PL50 Zコーナ-裏面1ヶ所 体部外面下位横ナデ
3	埴 土 師 器	A 18.0 B (25.8)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P22 35% 北西寄り覆土中層
4	埴 土 師 器	A [19.6] B (6.3)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎して口縁部に至る。口縁部は外横し、口唇部は僅かに反る。	口縁部内・外面中位横ナデ、外面下位縦位のヘラナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・バミス 橙色 普通	P23 5% 西コーナ-覆土下層

図版番号	種別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径				
第172図5	土 玉	3.2	3.7	—	0.7	38.3	100	覆土中	DP8 PL55

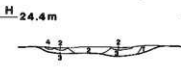
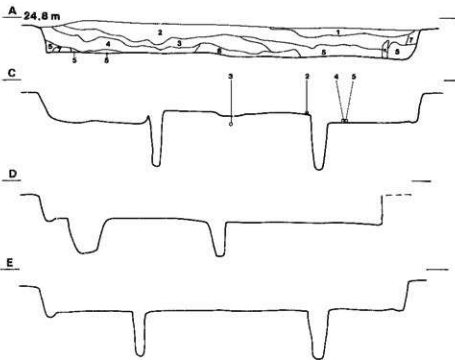
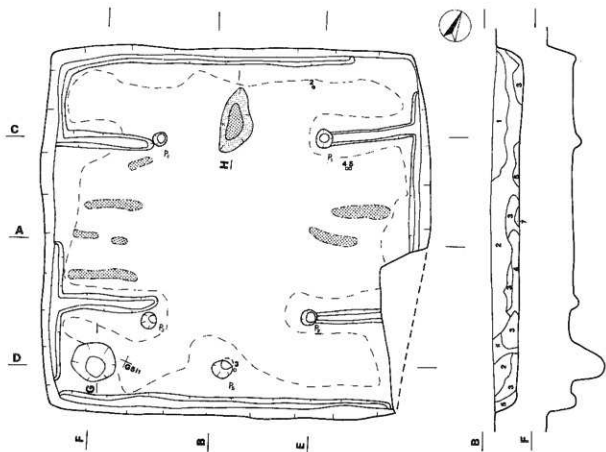
第6号住居跡 (第173図)

位置 調査区の南部、G5h1区。

規模と平面形 長軸6.18m、短軸5.82mであるが、東壁半ばから南東コーナ-にかけては調査区外へ伸びており、

完掘できなかつた。完掘できた部分から推定すると方形になるものと思われる。

主軸方向 N-24°-W



第173图 第6号住居跡実測図

壁 壁高は30~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 西壁際中央部及び北東コーナーの一部を除きほぼ全周する。上幅15~22cm、深さ3~10cmで、断面形はU字形または逆台形である。

間仕切り溝 東壁から2条、西壁から2条それぞれ中央に向かって伸びている。それぞれ幅20~25cm、深さ10cm、断面はU字形である。

床 ほぼ平坦であるが、北西、北東コーナー付近に僅かな窪みがみられる。全体に踏み固められた堅緻な部分がある。間仕切り溝とは異なった位置に、西壁際から3条、東壁際から2条の焼土がいずれも幅10~15cm、長さ40~95cmで中央に向かって伸びている。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は長径23~32cmの楕円形または不整形楕円形ピットで、深さは55~75cmである。各コーナー付近に付設され、規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は長径32cm、短径27cmの楕円形で、深さは55cmである。南壁から中央方向にあり、規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー付近に付設され、平面形は長径65cm、短径60cmの丸丸方形で、深さは55cmである。断面はU字形で、底部は皿状である。壁は内側が垂直に立ち上がり、外側は壁中段に緩い段を持ち、外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 炭化材・ローム小ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中ブロック微量
2 褐色 ローム小ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量 4 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック中量

炉 中央から北壁寄り付設され、長径107cm、短径50cmで、床面を7cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。

土層4の褐色土を除き、各層に焼土ブロックや炭化物の混入もみられる。また、土層2の暗赤褐色土からは極微量ながら炭化材も確認されている。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 濃い赤褐色 焼土中量、焼土小ブロック・炭化物少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
2 暗赤褐色 焼土中量、焼土小ブロック少量、炭化物微量、炭化材・ローム粒子微量 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック少量、炭化物微量、ローム粒子微量
4 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック中量

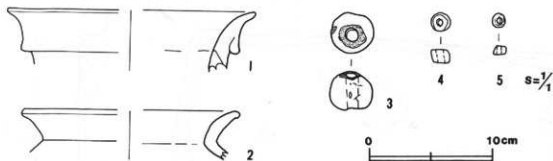
覆土 7層から成る。土層2の極暗褐色土以外は暗褐色土や褐色土が堆積し、土層1から土層6は炭化物やロームブロックが混入し、各壁際から埋め戻されていったように考えられる。壁際や下層に堆積する暗褐色土の土層5には灰の混入もみられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量 5 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物中量、炭化材少量、ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化物少量
2 暗褐色 焼土中量、焼土小ブロック少量、炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化材・炭化物少量
3 暗褐色 焼土粒子・炭化物中量、ローム粒子少量 7 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 褐色 ローム粒子少量、炭化物・ローム中・小ブロック微量

遺物 床面直上から少量の土師器片が出土している。第174図2の甕は北西壁寄りの床面直上から斜位の状態で出土している。3の土玉は出入口ピットの中層位から、4・5のガラス玉は共に北西寄りの床面直上から出土している。

所見 本跡は、床面に筋状の焼土や、覆土中に焼土ブロックと灰が確認されたが、床面上からは炭化材や多量の焼土が確認されていないことから焼失家屋とは考えにくい。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。



第174図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第174図 1	甕 土 師 器	A [20.0] B (4.5)	口縁部の破片。口縁部は折り返しのある複合口縁で、外反し、口唇部は丸味を持ちやや反る。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・霞母・スコリア に多い褐色 普通	P24 5% 覆土中
2	甕 土 師 器	A [17.5] B (3.4)	口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部に丸味を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・パミス 褐色 普通	P25 5% 北西寄り床面直上

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重 量 (g)	現 存 率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径				
第174図3	土 玉	(3.2)	3.5	—	1.0	(27.9)	95	出入口ピット中層	DP9 PL55

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重 量 (g)	現 存 率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径				
第174図4	ガラス玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	北西寄り床面直上	Q1
5	ガラス玉	0.35	0.35	0.2	0.1	0.05	100	北西寄り床面直上	Q2

第7号住居跡 (第175図)

位置 調査区の南部，G4m区。

規模と平面形 長軸6.32m，短軸6.26mの方形。

主軸方向 N-49°-E

壁 壁高は36～53cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

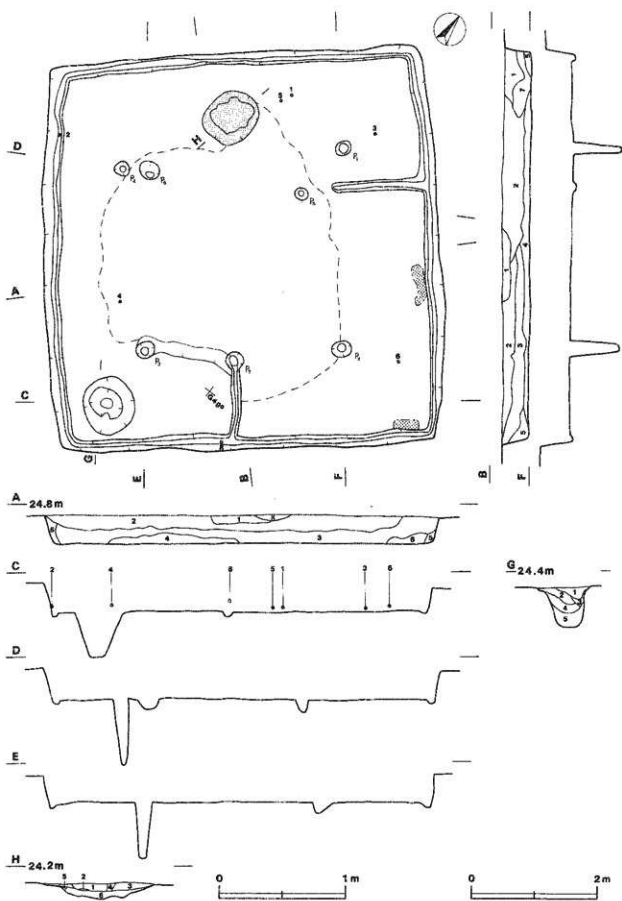
壁溝 全周している。上幅10～15cm，深さ4～8cmで，断面形はU字形である。

間仕切り溝 北東壁から1条，南東壁から1条それぞれ中央に向かって伸びている。幅12～17cm，深さ4～8cmで，断面はU字形である。

床 平坦で，中央付近に踏み固められた堅緻な部分が広がる。

ピット 7か所 (P₁～P₇)。P₁～P₄は長径23～30cmの楕円形または不整楕円形ピットで，深さは78～109cmである。各コーナー付近に付設され，規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は径18cmの円形で，深さは20cm，P₆は長径33cm，短径29cmの不整楕円形である。P₅はP₁の南方向，P₆はP₄の北東方向に付設され，規模や位置から補助柱穴と推測される。P₇は径27cmの円形で，南東壁から伸びる間仕切り溝の突端に付設されている。規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され，平面形は長径90cm，短径80cmの楕円形で，深さは62cmである。断面はV



第175图 第7号住居跡実測図

字形で、底部は平出である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量 |
| 2 明褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | 5 褐色 | ローム粒子少量、ローム中・小ブロック中量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、炭化物微量 | | |

炉 北西壁からやや中央寄り付設され、長軸87cm、短軸75cmで、床面を12cm掘り窪めた隅丸長方形の地床炉である。覆土は土層6の焼土ブロックを含む赤褐色土が下層に厚く堆積し、炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物少量 | 6 赤褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子中量、炭化物少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子中量、炭化物少量 | | |
| 4 暗褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物少量 | | |

覆土 7層から成る。何れも焼土粒子を含む。土層4の暗褐色土はロームブロックを少量含み、それ以外の各層からは炭化粒子は確認されていない。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------|-------|--|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・ローム中・小ブロック微量 | | |

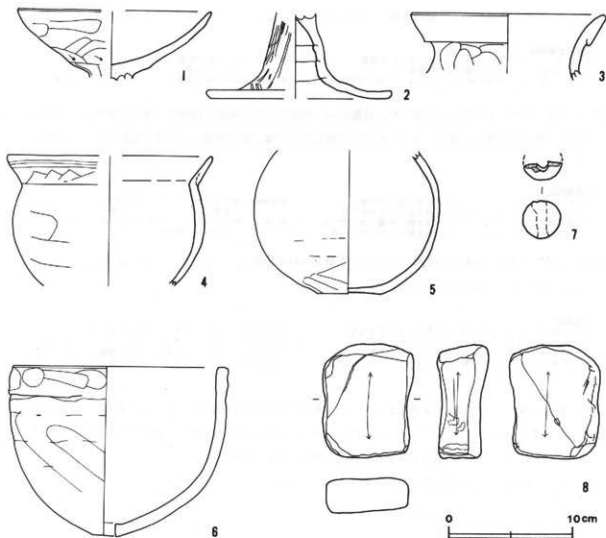
遺物 覆土下層から土師器片が少量出土している。第176図の1・2は高坏で、1は北西壁寄り、2は南西壁寄りの共に覆土下層から出土している。3の蓋は北東寄り、4・5の小形甕は南西壁寄りと北西寄りの覆土下層から出土している。6の甕は北東寄りの覆土下層から横位の状態で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第176図 1	高 坏 土 師 器	A [15.6]	坏部の破片。下位に横を持ち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ、内面ナデ。接合部外面垂直のヘラナデ。	砂粒・石英・長石 淡黄褐色 普通	P26 35% 北西壁寄り覆土下層 外面横付着
		B (5.3)				
2	高 坏 土 師 器	D [14.9]	脚部の破片。脚部は下方に緩やかに開き、底部で大きく開く。底部はやや中反る。	脚部外面縦位のヘラ磨き。内面輪横み痕。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P27 40% 北西壁寄り覆土下層
		E (6.8)				
3	蓋	A 15.8	頸部から口縁部の破片。頸部は緩やかに外傾し、口縁部は折り返しのある複合1線となる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ、内面ナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石 淡黄褐色 普通	P28 20% 北東寄り覆土下層
		B (4.8)				
4	小形甕 土 師 器	A [16.4]	体部下位から口縁部の破片。体部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面上位横ナデ、外面下位ヘラナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。口縁部外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石・雲母 淡黄褐色 普通	P29 10% 南西壁寄り覆土下層 口縁部外3本の沈線
		B (10.4)				
5	小形甕 土 師 器	B (11.3)	底部から体部上位の破片。平底。体部は内傾しながら立ち上がり、球形を呈する。	体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 褐色 普通	P30 10% 北西寄り覆土下層 体部外面横付着
		C 4.9				
6	甕 土 師 器	A 17.2	口縁部一部欠損。無底式。底部に半孔が穿たれ、体部は内傾しながら立ち上がる。	口縁部内面横ナデ、外面縦圧痕。体部外面横ナデ、内面ナデ。体部外面横み痕。	砂粒・石英・長石 淡黄褐色 普通	P31 95% PL50 北東寄り覆土下層
		B 13.6				

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径				
第176図7	土 甕	(3.1)	(3.1)	—	0.8	(10.6)	50	覆土中	D P10 PL56



第176図 第7号住居跡出土遺物実測図

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第176図8	砥石	9.0	7.1	3.8	338.4	100	砂岩	覆土中	Q3

第8号住居跡 (第177図)

位置 調査区の南部, G4d区。

規模と平面形 長軸5.00m, 短軸3.96mの長方形。

主軸方向 N-42°-E

壁 壁高は22~35cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で, 全体が踏み固められており, 特に中央付近に堅緻な部分が広がる。西コーナー付近に木根痕による落ち込みがある。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は長径17~25cmの楕円形または不整楕円形で, 深さは25~35cmである。南東壁沿いに各ピットが並ぶように付設されている。P₁, P₂は付設する位置が不規則で主柱穴とは考えにくく, 性格は不明である。P₃は規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東壁際の中央付近に付設され、平面形は長径60cm、短径45cmの不定形で、深さは30cmである。断面はU字形で、底部は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

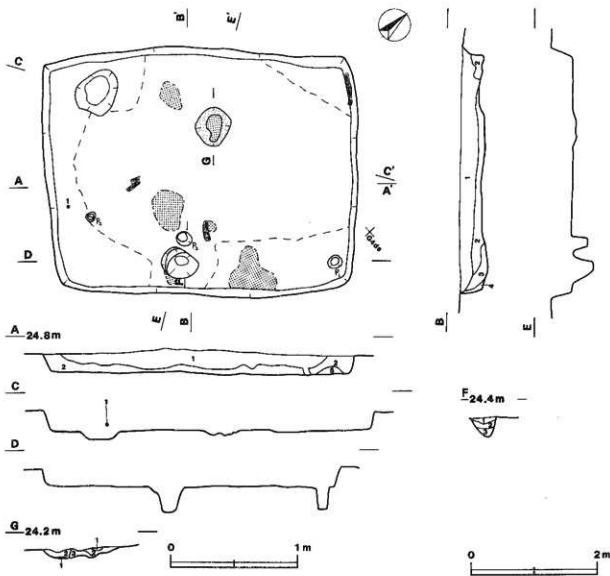
- 1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化材・炭化物・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量

炉 中央からやや北西寄りに付設され、長径60cm、短径55cmで、床面を7cm掘り窪めた不整楕円形の地床炉である。覆土は炉の中央部分に土層3の焼土ブロックを含む暗褐色土が厚く堆積し、それを囲むように土層2の褐色土が堆積しており、炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

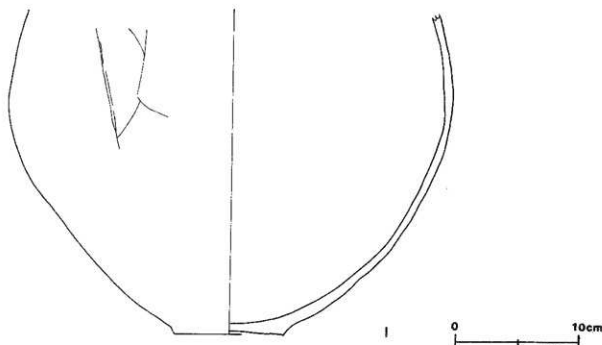
炉土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化物微量
- 3 暗褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量、炭化物微量

覆土 5層から成る。焼土粒子や炭化粒子を含む土層1、2の黒褐色土及び暗褐色土が下層から上層にかけて大部分を占める。



第177図 第8号住居跡実測図



第178図 第8号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム少 | 3 黒褐色 | 炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| | 炭化物・炭化粒子・ローム少ブロック・ローム粒子 | 5 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | 少量、焼土粒子微量 | | |

遺物 覆土下層から土師器片が少量出土している。第178図の1は土師器の甕で、南西壁際の覆土下層から正位の状態出土している。

所見 本跡は、支柱穴となるビットが、視乱を全く受けていない北コーナー付近からも確認できなかったことから、片流れ屋根の建物といった上屋構造物も推測される。また、床面から確認されている炭化材については、炭化材樹脂同定により本住居跡の構築材であることが確認されている。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第178図 1	甕 土師器	B (25.7) C 8.8	底部から体部上位の破片。平底。 体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ。底部ヘラ削り。	赤褐色系長石質 褐色 青透	P32 50% 南西壁際覆土下層 内面割離

第9号住居跡 (第179図)

位置 調査区の南部、G4a区。

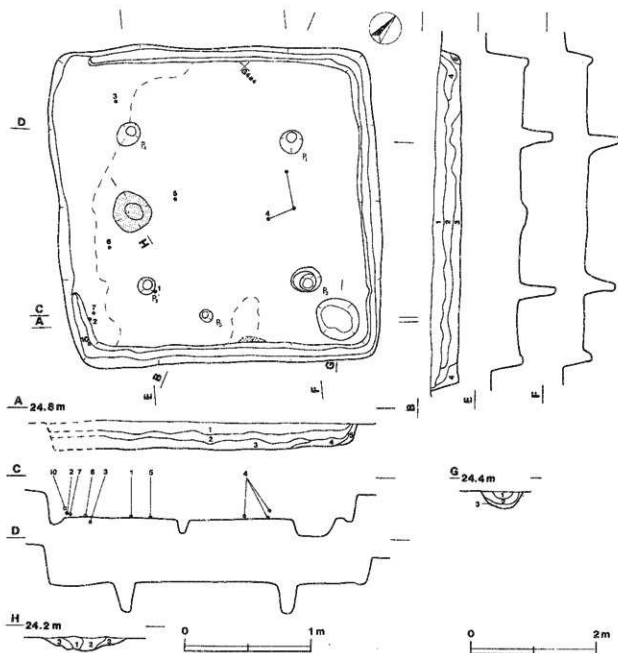
規模と平面形 長軸5.14m、短軸4.96mの方形。

主軸方向 N-45-E

壁 壁高は34~60cmで、傾斜して立ち上がる。

壁溝 南西壁際を除いて、周回している。

床 平坦で、南西壁沿いを除いて全体的に踏み固められ、堅緻な部分が広がる。



第179図 第9号住居跡実測図

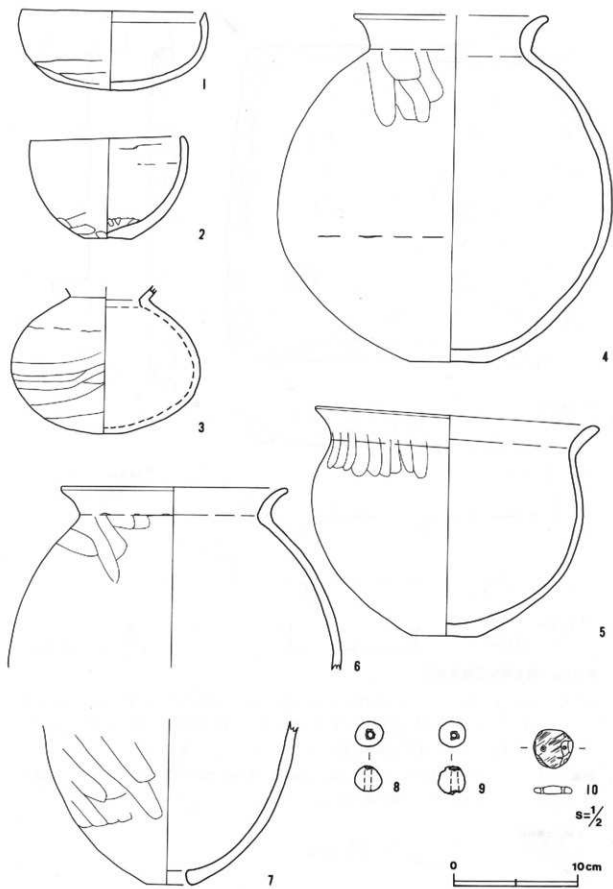
ピット 5か所 (P₁～P₅)。P₁～P₄は長径25～50cmの楕円形または不整形楕円形、深さは45～55cmである。各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は径20cmの円形で、深さは20cmである。南東壁から中央寄りに付設され、規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 東コーナー付近に付設され、平面形は長径75cm、短径63cmの楕円形で、深さは25cmである。断面は浅い楕円形で、底部は皿状である。壁は緩く立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子極微量
- 3 褐色 ローム小ブロック極微量

炉 中央から南西寄りに付設され、長径65cm、短径55cmで、床面を10cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。覆土は焼土ブロックを含む暗赤褐色土を暗褐色土が囲むように堆積している。炉床は火熱を受けて赤変硬化し



第180图 第9号住居跡出土遺物実測図

ている。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック微量
 2 暗赤褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量
 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量

覆土 6層から成る。焼土粒子やローム粒子を含む黒褐色土及び暗褐色土が厚く堆積し、各壁際には暗褐色土及び褐色土が流れ込みの様相で堆積している。自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物・ローム粒 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
 2 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化物微量 5 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子微量 6 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化物微量

遺物 覆土下層から床面直上にかけて出土している。第180図1の坏は南側の床面直上から正位の状態出土し、2の椀と7の甌は、南コーナー寄りの覆土下層から高坏の坏部、椀、甌の順に正位の状態で重なり合って出土している。4の壺は北東寄りの覆土下層から床面直上の土師器片が接合したものである。5・6の甕は中央及び南側の床面直上から斜位の状態出土したものである。10の双孔円板は覆土中層位から出土している。所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第180図1	坏 土師器	A 14.7	体部下位から口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり。口縁部は内折ぎ状に突る。内面に割れ線を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面丁寧なナデ、内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア・バミスに多い褐色普通	P33 60% PL50 南側床面直上 内面斜縁
		B 6.3				
2	椀 土師器	A 12.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 淡赤褐色普通	P34 95% PL50 北コーナー寄り土層
		B 8.2				
3	甕 土師器	B (11.5)	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、潰れた球形状を呈する。	体部外面横位のヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・バミス に多い褐色普通	P35 90% 覆土中
		C 2.5				
		A [15.8]				
4	甕 土師器	A 27.8	体部中位から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 に多い褐色普通	P36 70% PL51 北東寄り覆土下層 二次焼成
		B 27.8				
		C 6.4				
5	甕 土師器	A 22.3	体部中位一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する。最大径を口縁部に持つ。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面上斜位のヘラナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・スコリア に多い黄褐色普通	P37 86% PL51 中央床面直上 二次焼成
		B 18.3				
		C 5.7				
6	甕 土師器	A 18.0	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・バミス に多い褐色普通	P38 40% PL51 南側床面直上
		B (14.5)				
7	甌 土師器	B (12.8)	底部から体部中位の破片。無底式。底部に果孔が穿たれ、体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・雲母・バミス に多い褐色普通	P39 50% 北コーナー寄り土層 二次焼成
		C 3.5				
		A [15.8]				

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径				
第180図8	土	玉 (2.0)	2.2	—	0.5	(8.1)	98	覆土中	D P11 PL55
9	土	玉 (2.2)	2.1	—	0.5	(7.5)	98	覆土中	D P12 PL55

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第180図10	双孔円板	-	2.1	0.4	0.15	3.0	100	片岩	覆土中層	Q4

第10号住居跡 (第181図)

位置 調査区の南西部、G4a5区。

重複関係 本跡の東コーナーは、第82号土坑によって掘り込まれている。本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸2.59m、短軸2.33mの方形。

主軸方向 N-25°-W

壁 壁高は8~20cmで、南壁は垂直に、西壁及び東壁は外傾して立ち上がり、北壁は緩く外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央付近に踏み固められた堅軟な部分がみられる。

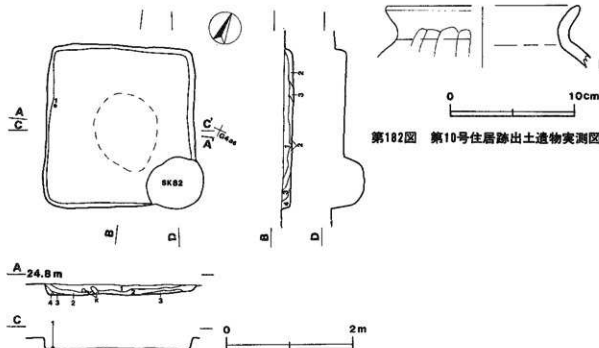
覆土 4層から成る。下層から上層には暗褐色土が厚く堆積し、下層の一部に褐色土が堆積している。各層とも焼土粒子及びローム粒子を含み、暗褐色土にはロームブロックが混入している。人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化物微量
 2 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 3 褐色 炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
 4 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子微量

遺物 覆土下層から少量の土師器片が出土している。第182図1の壺は南西壁際の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、炉及び柱穴等の内部施設を伴わない小規模の建物跡であることから、住居以外の目的をもった建物と考えられる。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。



第182図 第10号住居跡出土遺物実測図

第181図 第10号住居跡実測図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第182図 1	甕 土器	A [15.6] B 4.2	口縁部の破片。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内面横ナデ、外面上位横ナデ・下位緩位のヘラナデ。	砂粒・雲母・バミス により橙色 普通	P41 5% 南西側階土下層

第11号住居跡 (第183図)

位置 調査区の南東部, G4b区。

重複関係 本跡の南西壁は, 第83号土坑によって掘り込まれている。本跡の方が古い。

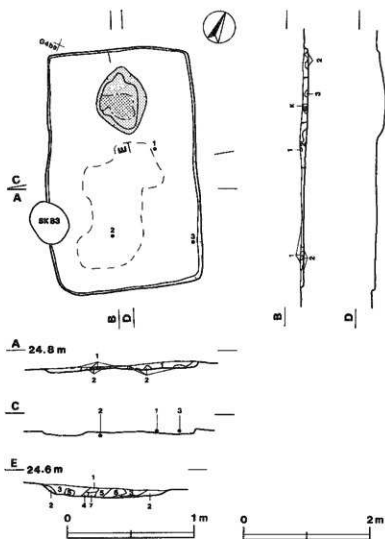
規模と平面形 長軸3.84m, 短軸2.42mの長方形。

主軸方向 N-27°-W

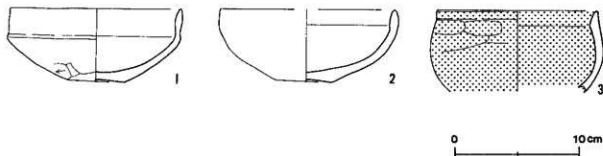
壁 壁高は2~7cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 やや凹凸があり, 中央部から南東部に踏み固められた堅固な部分が見られる。

炉 北西壁寄りに付設され, 長径108cm, 短径80cmの楕円形で, 床面を約7cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土下層から上層にかけて焼土ブロックの堆積が見られたが, 炉床はさほど赤変硬化していない。



第183図 第11号住居跡実測図



第184図 第11号住居跡出土遺物実測図

伊土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------------|--------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量 | 5 赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物少量, 炭化材・ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量, 炭化物極微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化材・炭化物少量, ローム粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化物少量, 焼土小ブロック極微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子極微量 |
| 4 明赤褐色 | ローム粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物少量, ローム小ブロック極微量 | | |

覆土 4層から成る。覆土中からはロームブロック及び炭化物が確認され、黒褐色土からは炭化材と埋め戻しに伴うものと思われる遺物の混入もみられる。人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土小ブロック・炭化材・炭化物・ローム粒子少量 | 3 明褐色 | 焼土粒子・炭化物少量, 焼土粒子・ローム粒子極微量 |
| 2 明褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化物微量 | 4 赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量 |

遺物 覆土下層から床面直上にかけて少量出土している。第184図1の坏は中央付近の床面直上から逆位の状態で出土し、2の坏は南寄りの床面直上から正位の状態で出土している。3の碗は東寄りの覆土下層から斜位の状態で出土している。

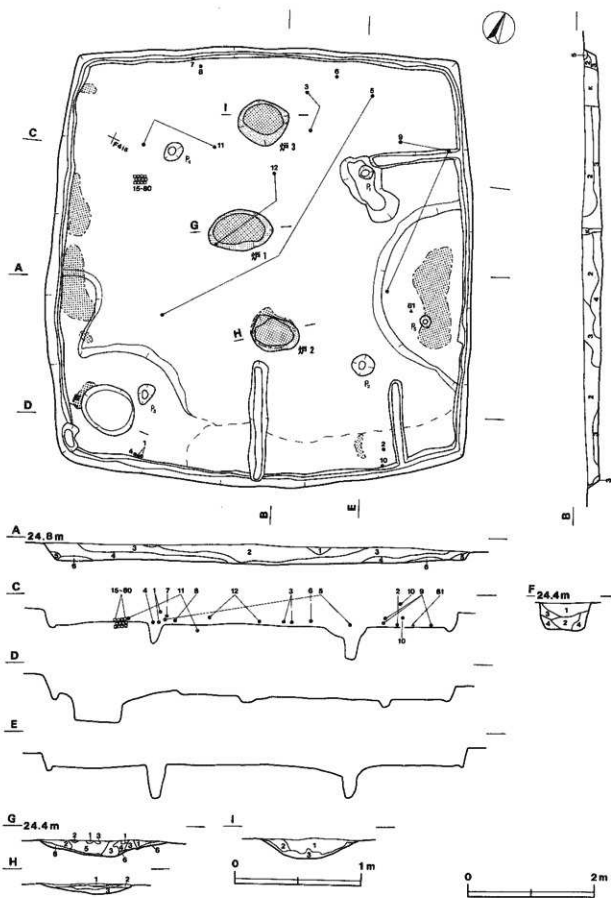
所見 本跡は、柱穴等の内部施設を伴わない小規模の建物跡で、確認された他の小規模建物跡が中規模ないし大型の住居跡に隣接しているのに対し、本跡に隣接する建物跡は確認されず、その性格は不明であるが、住居もしくはそれ以外の目的をもった建物跡とも考えられる。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第184図 1	坏 土師器	A 13.8	体部一部欠損。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部は外面に線をもち、直立する。口唇部は内削ぎ状にやや尖る。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面ナゲ、内面磨き。底部へラ削り。体部内・外面赤彩痕。	砂粒・石英・雲母 灰褐色 普通	P42 95% PL51 中央付近床面直上
		B 6.0				
		C 4.4				
2	坏 土師器	A [14.0]	体部下位から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は内面に削い線を持ち、ほぼ直立する。口唇部は内削ぎ状にやや尖る。	口縁部内・外面横ナゲ。体部内・外面丁寧なヘラナゲ。底部へラ削り。内・外面赤彩痕。	砂粒・長石・雲母 よい褐色 普通	P43 60% 南寄り床面直上 二次焼成
		B 5.8				
		C 4.2				
3	碗 土師器	A 12.8	体部上位から口縁部破片。体部は内彎しながら口縁部に至る。口唇部は内面に明瞭な線をもち、内削ぎ状に直立する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へラ削り後ナゲ。内面磨き。内・外面赤彩。	砂粒・石英・スコリア 赤褐色 普通	P44 40% 東寄り覆土下層 二次焼成
		B (6.5)				

第12号住居跡 (第185図)

位置 調査区の南西部, F46区。



第185图 第12号住居跡実測図

規模と平面形 長軸6.94m, 短軸6.76mの方形。

主軸方向 N-25°-W

壁 壁高は18~29cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅10~16cm, 深さ3~8cmで、断面はU字形である。

間仕切り溝 北東壁から1条, 南東壁から2条, それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅18~28cm, 深さは各10cmで、断面は逆台形である。

床 ほぼ平坦であるが、北東壁沿いに半円形状の高まり, 南コーナー付近に約7~8cmの高まりがみられ、どちらも踏み固められている。南東壁沿いにも幅80~90cmの範囲で帯状に堅緻な部分が見られる。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は長径21~35cm, 短径21~32cmの不整形楕円形または不定形で、深さは32~55cmである。何れも各コーナー付近に付設され、規模や位置から支柱穴と考えられる。P₅は北東壁寄りに付設され、長径20cm, 短径16cmの楕円形で、深さは57cmである。規模と位置から支柱穴の補助的なものと考えられるが、具体的な性格は不明である。

炉 3か所。炉1~炉3は南東壁から北西壁の中央線上に南側から炉2, 1, 3の順に付設されている。炉1は長径100cm, 短径65cmで、床面を13cm掘り窪めた楕円形の地床炉である。覆土は焼土粒子を含み、炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉2は長軸75cm, 短軸55cmで、床面を8cm掘り窪めた隅丸長方形の地床炉である。覆土上層には焼土ブロックを含む赤褐色土が筋状に堆積している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉3は長軸83cm, 短軸73cmで、床面を15cm掘り窪めた隅丸方形の地床炉である。覆土は焼土粒子を含む土層1の褐色土が厚く堆積し、下層には褐色土が堆積している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉1土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|----------------|---|------|---------------------------------------|
| 1 | にがい赤褐色 | 焼土粒子少量 | 5 | 明赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土中ブロック微量 |
| 2 | 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量 | 6 | 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子微量, ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量 |
| 3 | 赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土粒子少量 | | | |
| 4 | 赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土粒子少量 | | | |

炉2土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|---|--|--|--|
| 1 | 赤褐色 | 焼土粒子少量 | | | |
| 2 | 赤褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量 | | | |
| 3 | 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム大ブロック微量 | | | |

炉3土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|--|--|--|--|
| 1 | 黒褐色 | 焼土粒子・ローム小ブロック極微量 | | | |
| 2 | 赤褐色 | 焼土中ブロック多量 | | | |
| 3 | 褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量 | | | |

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径90cm, 短径75cmの楕円形で、深さ41cmである。円筒形に掘り込まれ、底部はほぼ平坦である。

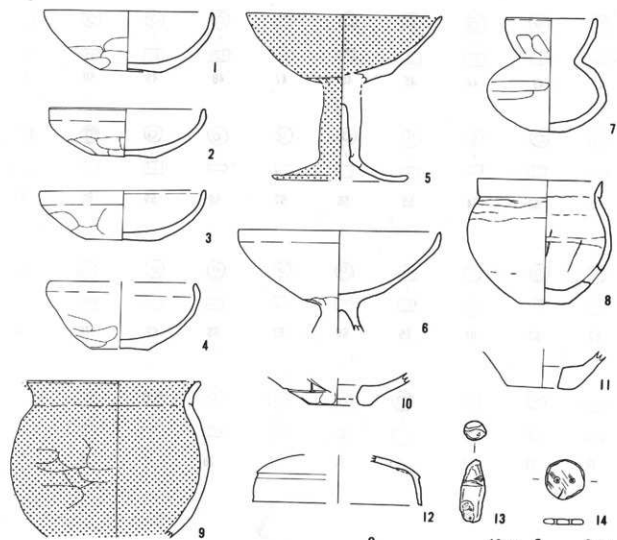
貯蔵穴土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|--------------------------|--|--|--|
| 1 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | | | |
| 2 | 褐色 | ローム小ブロック微量 | | | |
| 3 | 褐色 | ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子極微量 | | | |
| 4 | 褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック極微量 | | | |

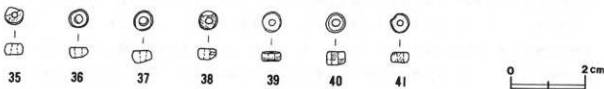
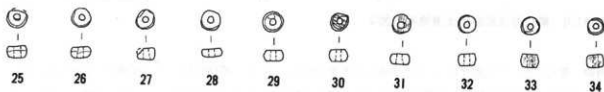
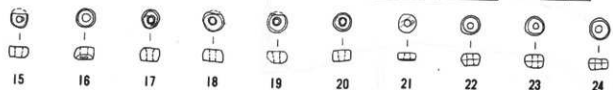
覆土 6層から成る。土層5の暗褐色土以外の各層は焼土粒子を含み、また、土層1の褐色土を除く各層には炭化物の混入がみられる。人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|---|---|-----|---------------------------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 焼土粒子極微量 | 4 | 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック極微量 |
| 2 | 暗褐色 | 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化物極微量 | 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化物・ローム小ブロック極微量 |
| 3 | 褐色 | 焼土粒子中量, 焼土粒子・ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック・炭化物極微量 | 6 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量 |

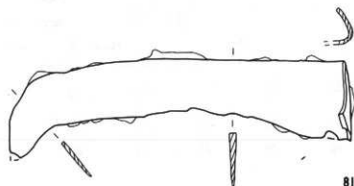


0 10cm 0 2cm



0 2cm

第186图 第12号住居跡出土遺物実測図(1)



第187図 第12号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物 覆土上層から床面直上にかけて土師器片が多量に出土している。第186図1の坏は南東寄りの覆土中層から出土している土師器片と床面直上から出土している坏が接合したものである。2の坏は東寄り、3の坏は北西寄り、4の坏は南寄りの床面直上及び覆土下層から出土している。5の高坏は北側の覆土下層から正位の状態出土したものが、南寄りの覆土下層から出土した口縁部片と接合したものである。6の高坏は北西壁寄りの覆土下層から斜位の状態出土している。7、8の埴と広口壺は北西壁際の覆土下層から逆位と斜位の状態出土している。9の甕は北東壁際や北東方向の覆土下層から出土している土師器片が接合したものである。11の甕は覆土下層から出土している甕片と床面直上から出土している土師器片が接合したもので、12の須恵器坏蓋は中央寄りの覆土下層から出土し接合したものである。15～80の白玉は西コーナー寄りの床

面直上から、81の鉄線は北東寄りの床面直上から出土している。

所見 本跡は、当遺跡の同規模の住居跡と比較しても出土遺物や、使用頻度の高い炉を3基付設するなど内部施設の状況から、祭祀行為との関係が考えられる特殊な性格を持った住居跡と思われる。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第186図 1	坏 土 師 器	A 13.5	口縁部一部欠損。平底。体部は内 彎しながら立ち上がり、口縁部に 至る。口縁部は僅かに内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部 へラ削り。	砂粒・石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P45 90% PL50 南東寄り覆土中層 内面刺痕
		B 4.9				
		C 4.7				
2	坏 上 師 器	A 12.5	口縁部一部欠損。平底。体部は内 彎しながら立ち上がり、口縁部に 至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 縦位のへラ削り後ナデ、内面彎る。 底部へラ削り。	砂粒・石英・長石 にぶい褐色 普通	P46 85% PL50 南東寄り覆土中層 内面刺痕
		B 4.0				
		C 5.6				
3	坏 土 師 器	A 13.2	体部下位から口縁部一部欠損。平 底。体部は内彎しながら立ち上 がる。口縁部は内傾し、外方に C 5.8	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラナデ、内面ナデ。底部へラ削 り。内・外面赤形痕。	砂粒・石英・長石・パ ミスにぶい褐色 普通	P48 55% 北西寄り覆土下 層
		B 4.1				
		C 5.8				
4	坏 土 師 器	A [11.6]	体部中位から口縁部一部欠損。平 底。体部は内彎しながら立ち上 がり。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラナデ、内面ナデ。底部へラ削 り。体部外面赤形痕。	砂粒・石英・長石・ 雲母・スコリア 褐色 普通	P49 65% 南寄り床直上 及び覆土下層 体部外面研刺痕
		B 5.4				
		C 4.6				
5	高 上 師 器	A 15.8	頸部及び口縁部一部欠損。頸部は 柱状を呈し、頸部は下位で大きく 開き縮部は反る。坏部は下位に E [10.9] D (6.9)	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・ 外面ナデ。坏部外面及び頸部外面 縦位のへラナデ。底部へラ削り。内・ 外面赤形痕。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P50 70% PL51 北側壁土下層
		B [13.4]				
		D [10.9]				
		E (6.9)				
6	高 土 師 器	A 16.2	坏部の破片、坏部下位に削い B (8.2)	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・ 外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P51 50% 北西寄り覆土 下層
		B (8.2)				
7	坏 土 師 器	A 7.4	口縁部一部欠損。平底。体部はソ ロバン玉状を呈し、口縁部はやや C 2.9	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラナデ。底部へラ削り。口縁部 内面赤形痕。	砂粒・長石・雲母・スリ アにぶい褐色 普通	P53 98% PL51 北西寄り覆土下 層
		B 9.2				
		C 2.9				
8	広 土 師 器	A [10.0]	口縁部一部欠損。平底。体部は内 彎しながら立ち上がり、上位に最 大径を持つ。口縁部は折り返し のある複合口縁となり、内彎ぎ状 に直立する。口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部 へラ削り、体部内・外面輪磨み痕。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P54 90% PL51 北西寄り覆土下 層
		B 9.9				
		C 3.8				
9	小形 土 師 器	A 14.0	体部中位から底部欠損。体部は内 彎しながら立ち上がり、頸部は折 れ、口縁部は反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へラ削り。内面ナデ。内・外面赤 形痕。	砂粒・石英・パミス やや不良	P55 50% PL50 北側壁土下層 二次焼成
		B (12.5)				
10	瓶 土 師 器	B (2.1)	底部から体部下位の破片、やや平 底気味の無底式。底部に単孔が穿 たれ、体部は外上方に立ち上がる。	体部外面縦位へラ削り、内面ナデ。	砂粒・石英・長石・ 雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P56 5% 覆土中 底部外面研刺痕
		C 4.9				
11	甕 土 師 器	B (2.7)	底部の破片。平底。底部に単孔が 穿たれている。	底部内・外面ナデ。	砂粒・石英・スコリア・パミス 浅黄褐色 普通	P57 5% 覆土下層
		C 5.3				
12	坏 土 師 器	A [13.6]	天井部から口縁部にかけての破片。 天井部下位は縦向きに内彎し、外 面に明確な稜を持つ。口縁部はやや 内傾し、端部は平坦な面を成す。	巻き上げ、横ナデ整形。内・外面 横ナデ。	砂粒 灰白色 不良	P58 15% 中央寄り覆土下 層
		B (3.8)				

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	保存率(%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径				
第186図13	不明土製品	3.3	1.2	1.2	—	2.7	100	覆土中	D P19

图版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 徑					
第186図14	双孔円板	—	2.1	0.3	0.15	2.9	100	片岩	床面直上	Q5
15	白 玉	(0.4)	0.5	0.4	0.2	(0.1)	80	片岩	床面直上	Q6
16	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	床面直上	Q7
17	白 玉	0.4	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q8
18	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q9
19	白 玉	(0.4)	0.5	0.3	0.2	(0.1)	80	片岩	床面直上	Q10
20	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q11
21	白 玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q12
22	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q13
23	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q14
24	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q15
25	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q16
26	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q17
27	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.1	(0.1)	98	片岩	床面直上	Q18
28	白 玉	0.5	0.5	0.2	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q19
29	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	(0.1)	98	片岩	床面直上	Q20
30	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.15	(0.1)	85	片岩	床面直上	Q21
31	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q22
32	白 玉	0.5	0.5	0.35	0.15	(0.1)	95	片岩	床面直上	Q23
33	白 玉	0.5	0.5	0.35	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q24
34	白 玉	0.45	0.45	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q25
35	白 玉	0.45	0.5	0.3	0.15	(0.1)	85	片岩	床面直上	Q26
36	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q27
37	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	(0.1)	70	片岩	床面直上	Q28
38	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	(0.1)	98	片岩	床面直上	Q29
39	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q30
40	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	床面直上	Q31
41	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q32
第187図42	白 玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q33
43	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q34
44	白 玉	(0.5)	0.6	0.3	0.2	(0.1)	70	片岩	床面直上	Q35
45	白 玉	(0.5)	0.5	0.4	0.2	(0.1)	85	片岩	床面直上	Q36
46	白 玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q37
47	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q38
48	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q39
49	白 玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q40
50	白 玉	0.5	0.3	0.2	0.1	0.1	50	片岩	床面直上	Q41
51	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q42
52	白 玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.05	100	片岩	床面直上	Q43
53	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	床面直上	Q44
54	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q45
55	白 玉	(0.45)	0.5	0.3	0.15	(0.1)	60	片岩	床面直上	Q46
56	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q47
57	白 玉	(0.4)	(0.45)	0.3	0.15	(0.1)	70	片岩	床面直上	Q48
58	白 玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.05	100	片岩	床面直上	Q49
59	白 玉	0.5	0.5	0.4	0.2	(0.1)	65	片岩	床面直上	Q50
60	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q51

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
61	白 玉	0.5	(0.5)	0.4	0.2	(0.1)	65	片岩	床面直上	Q52
62	白 玉	0.5	0.5	(0.3)	0.2	(0.1)	75	片岩	床面直上	Q53
63	白 玉	(0.5)	0.5	0.2	0.2	(0.1)	95	片岩	床面直上	Q54
64	白 玉	0.5	0.5	0.4	0.15	0.2	100	片岩	床面直上	Q55
65	白 玉	(0.4)	0.5	0.3	0.15	(0.1)	95	片岩	床面直上	Q56
66	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q57
67	白 玉	0.45	0.45	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q58
68	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q59
69	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.15	0.1	100	片岩	床面直上	Q60
70	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	(0.1)	70	滑石	床面直上	Q61
71	白 玉	0.5	(0.5)	0.3	0.2	(0.1)	70	滑石	床面直上	Q62
72	白 玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q63
73	白 玉	(0.5)	0.5	0.3	0.2	(0.1)	80	片岩	床面直上	Q64
74	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	(0.1)	90	滑石	床面直上	Q65
75	白 玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.2	100	片岩	床面直上	Q66
76	白 玉	(0.5)	(0.4)	0.3	0.2	(0.1)	50	片岩	床面直上	Q67
77	白 玉	(0.5)	0.5	0.35	0.2	(0.1)	90	滑石	床面直上	Q68
78	白 玉	0.5	0.5	0.2	0.2	0.1	100	滑石	床面直上	Q69
79	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	100	片岩	床面直上	Q70
80	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	床面直上	Q71

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
第187図81	鏝	(18.3)	4.3	0.4	250.0	90	北東寄り床面直上	M1 PL55

第13号住居跡 (第188図)

位置 調査区の南西部, F4b4区。

規模と平面形 長軸6.38m, 短軸6.16mの方形。

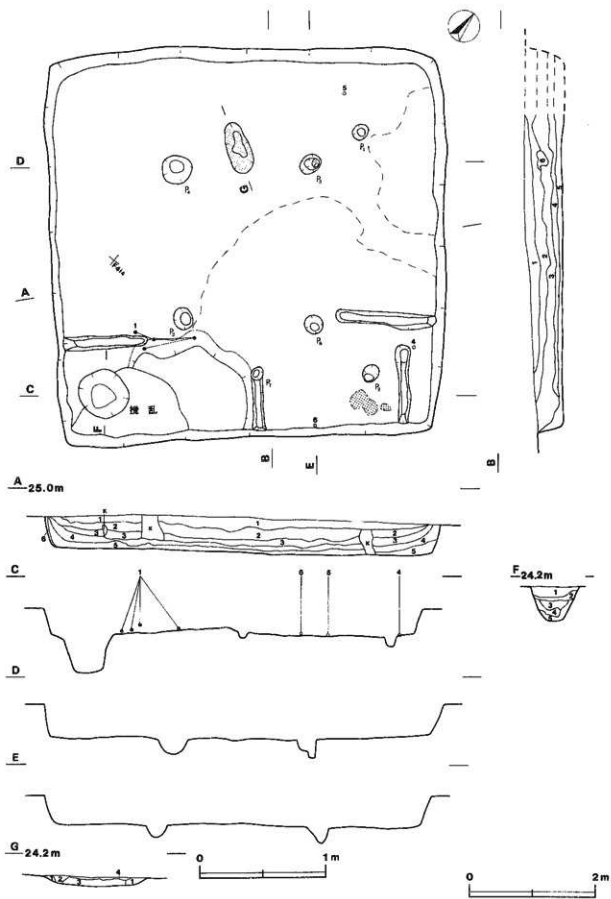
主軸方向 N-40°-E

壁 壁高は35~64cmで, 外傾して立ち上がる。

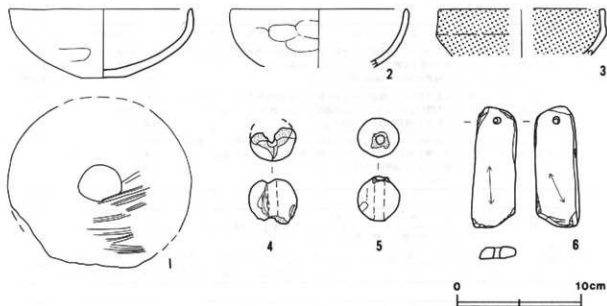
間仕切り溝 北東壁から1条, 南東壁から2条, 南西壁から1条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅15~28cm, 深さは10~12cmで, 断面はU字形ないし逆台形である。

床 平坦である。南コーナー付近から南東壁に沿って高さ7~8cmの不定形の高まりがみられ, 出入口に伴う施設と考えられる。踏み固められた堅軟な部分は住居の東側全体にみられる。南コーナー付近は木根による攪乱を受けている。

ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁~P₄は長径25~50cm, 短径20~45cmの楕円形または不整楕円形で, 深さは26~49cmである。何れも各コーナーからやや中央寄りに付設され, 規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は長径35cm, 短径30cmの楕円形, P₆は径30cmの円形である。それぞれ深さは20~27cmで, P₁, P₂からさらに中央中心部に向かって付設され, 規模や位置から主柱穴の補助的な性格をもつものと考えられる。P₇は南東壁からやや中央寄りの間仕切り溝突端に接して付設され, 長径22cm, 短径16cmの不整楕円形で, 深さは22cmである。規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。



第188图 第13号住居跡実測图



第189図 第13号住居跡出土遺物実測図

炉 北西壁から中央寄りに付設され、長径82cm、短径35cmで、床面を8cm掘り窪めた長楕円形の地床炉である。

覆土下層から上層には暗褐色土が堆積し、その周りに褐色土が堆積している。各層とも焼土粒子及び炭化粒子を含み、炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子極微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子極微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量 |

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長軸77cm、短軸72cmの隅丸方形で、深さは55cmである。断面はU字形で、底部は皿状である。東側半分は根による攪乱を受けている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子・炭化粒子極微量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量、ローム小ブロック極微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量 | 5 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック少量、焼土粒子・ローム粒子微量 | 6 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |

覆土 6層から成る。各層の堆積土には、土層2の極暗褐色土を除いてロームブロックの混入がみられるが、土層の乱れが殆どみられずレンズ状の堆積を成していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------------|------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化物・ローム粒子極微量 | 4 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物極微量 |
| 2 極暗褐色 | 焼土小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物極微量 | 5 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量 | 6 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |

遺物 覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第189図1の坏は南側の覆土下層及び床面直上から出土した土師器片が接合したものである。4・5の土玉は東寄りと北寄りの床面直上から出土し、6の砥石は南東壁際の床面直上から横位の状態で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種 別	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・形成	備 考
第189図	坏 土 師 器	A 14.6	体部中位から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・スクリアに多い褐色普通	P40 70% 緑土層 二試 体部外面磨痕
		B 5.5				
		C 3.1				
2	坏 土 師 器	A [14.0]	体部7位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面ナデ。体部外面へテ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石に多い褐色普通	P59 19% 覆土中
		B (4.6)				
3	坏 土 師 器	A [13.3]	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・バミス赤褐色普通	P60 5% 覆土中
		B (3.7)				

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 徑				
第189図4	土 皿	(3.5)	3.5	—	0.8	(24.8)	60	東寄り床面直上	D P13 PL55
5	土 皿	(3.5)	3.3	—	0.7	(31.2)	98	北寄り床面直上	D P14 PL55

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量 (g)	現存率 (%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 徑					
第189図6	磁 瓦	(9.7)	(3.5)	1.9	0.5	78.9	不明	砂岩	南東壁埋戻直上	Q72 PL55

第14号住居跡 (第190図)

位置 調査区の南東部, F5a区。

規模と平面形 長軸6.06m, 短軸5.92mの方形。

主軸方向 N-62°-W

壁 壁高は30~42cmで, 垂直に立ち上がる。

間仕切り溝 北東壁から1条, 南西壁から2条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅17~23cm, 深さは8~10cmで, 断面はU字形である。

床 ほほ平坦で, 南東壁沿いの一部を除いて全体が踏み固められ, 堅緻である。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は長径25~33cm, 短径22~26cmの楕円形または不整形楕円形で, 深さは75~88cmである。何れも各コーナーからやや中央寄りに付設され, 規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は長径32cm, 短径25cmの楕円形で, 規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

炉 中央から北西壁寄りに付設され, 長径70cm, 短径55cmの不整形楕円形で, 床面を7cm掘り窪めた床炉である。焼土ブロックを含む赤褐色土が覆土の大部分を占め, 炉の中央部覆土下層から上層にかけて褐色土が帯状に堆積している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

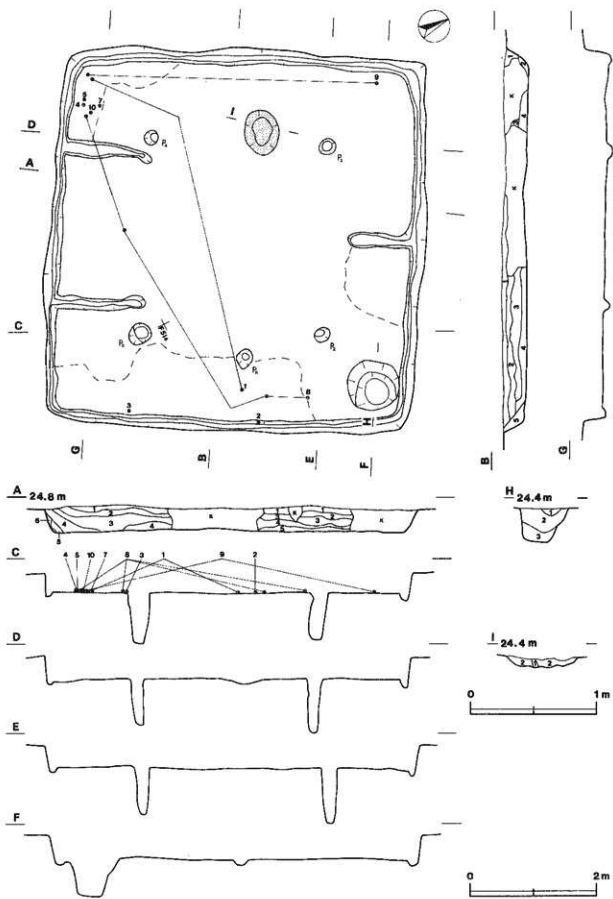
1 褐色 焼土粉少量, ローム小ブロック・ローム粒子極微量 2 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯蔵穴 東コーナー付近に付設され, 平面形は長軸80cm, 短軸75cmの隅丸方形で, 深さ61cmである。断面形はU字形で, 底部は皿状である。北西壁上部に張り出しがみられる。

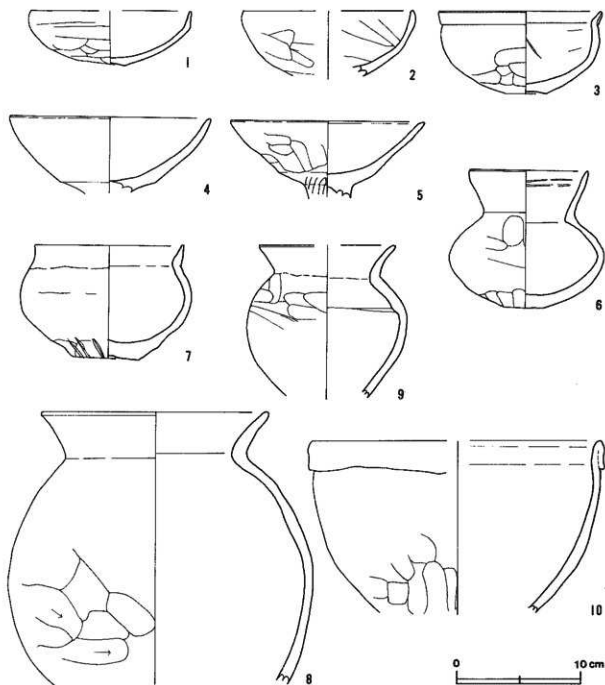
貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
2 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
3 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量

覆土 6層から成る。南東壁付近はロームブロックを含む暗褐色土が人為的に埋め戻され, その他の部分は堆



第190图 第14号住居跡実測图



第191図 第14号住居跡出土遺物実測図

積状況が乱れておらず、自然堆積と考えられる。木根による攪乱を受けている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---|--------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子 | 4 黒褐色 | 炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭土粒子極微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物・ローム中ブロック少量、焼土粒子極微量 | 5 極暗褐色 | 炭化物少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物極微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 |

遺物 西コーナー付近の床面直上及び南東壁寄りから土師器片が中量出土している。第191図1の環と8の壺は共に、西コーナー付近と南東壁寄りの床面直上から出土したものが接合し、9の小形壺は西コーナーと北コーナー付近の床面直上から出土したものが接合したもので、それぞれ意図的に投棄されたものとおもわれる。

3の椀は南東壁寄りの床面直上から正位の状態出土している。4・5の高坏は西コーナー寄りの床面直上から坏部を正位に重ねた状態で出土し、7の壺と10の甔は高坏に接する状態で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から、隣接する第15号住居跡と時期的に重なると思われる部分があるが、建物構造上と出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 1	坏 土師器	A 12.3	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・石英・長石 に多い褐色 普通	P61 60% PL51 西コーナー付近床面直上 二次焼成
		B 4.2				
		C 3.4				
2	坏 土師器	A [13.5]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は僅かに内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面斜位のへラナデ。	砂粒・石英・長石 に多い褐色 普通	P62 35% 覆土中 二次焼成
		B (5.3)				
3	椀 土師器	A 14.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は折り返しのある複合口縁で、内面に線をもち、外縁する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り後ナデ。体部外面赤彩痕。	砂粒・石英・長石・ スコリア 褐色 普通	P63 95% PL51 南東壁寄り床面直上
		B 6.6				
		C 3.3				
4	高坏 土師器	A 16.2	坏部片。下位に線をもち、外上方にやや内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面へラ磨き。坏部外面赤彩痕。	砂粒・石英・スコリア・ピリス 黒褐色 普通	P64 50% 西コーナー付近床面直上 二次焼成
		B (6.0)				
5	高坏 土師器	A 15.4	坏部片。外面下位に弱い線をもち、外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面へラナデ、内面磨き。	砂粒・石英・長石・ピリス に多い褐色 普通	P65 50% 西コーナー付近床面直上 二次焼成
		H (6.2)				
6	壺 土師器	A 9.7	体部中位一部欠損。平底。体部はソノバシ玉状を呈し、頸部は折れ、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ、内面ナデ。底部へラ削り後ナデ。	砂粒・石英・長石 に多い黄褐色 普通	P66 75% PL51 覆土中 二次焼成
		B 11.1				
		C 3.1				
7	香 土師器	A 12.0	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、上位で内彎し、頸部に至る。口縁部は内割ぎ状にやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横なへラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り。口縁部外面接合痕。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 不良	P67 60% 南東壁寄り床面直上 二次焼成
		B 9.2				
		C 5.2				
8	甔 土師器	A 18.1	体部下位及び口縁部一部欠損。体部は球形状を呈する。口縁部は頸部から「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面縦位のへラナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 に多い褐色 普通	P68 50% PL52 南東壁寄り床面直上 二次焼成
		B (21.6)				
9	小形壺 土師器	A [10.8]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。体部上位に最大径を持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・ピリス に多い褐色 普通	P69 40% 西コーナー及び 北コーナー付近 床面直上
		B (12.3)				
10	甔 土師器	A [25.2]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は折り返しのある複合口縁となる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横なへラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・ピリス に多い黄褐色 普通	P70 25% 西コーナー寄り 床面直上
		B (13.7)				

第15号住居跡(第192図)

位置 調査区の南東部、F5g3区。

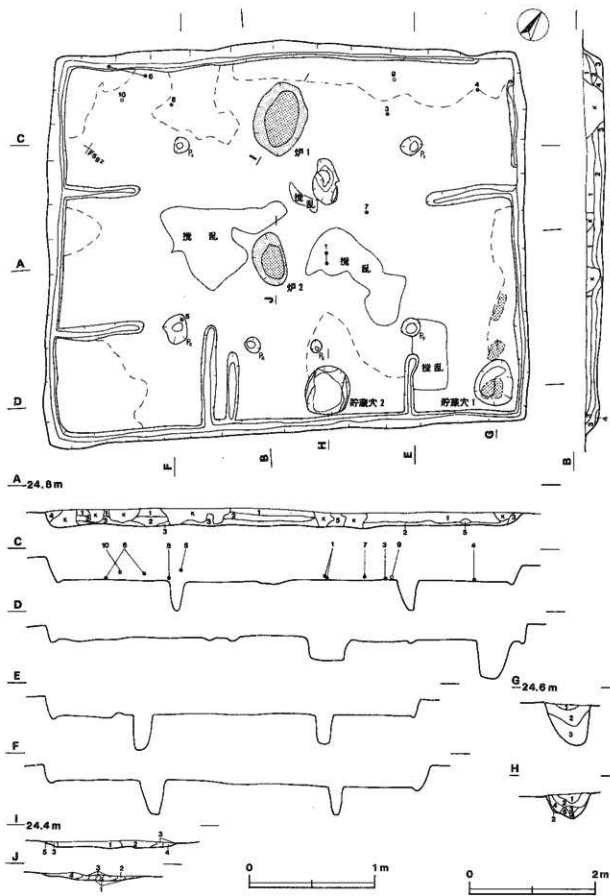
規模と平面形 長軸7.74m、短軸6.18mの長方形。

主軸方向 N-54°-E

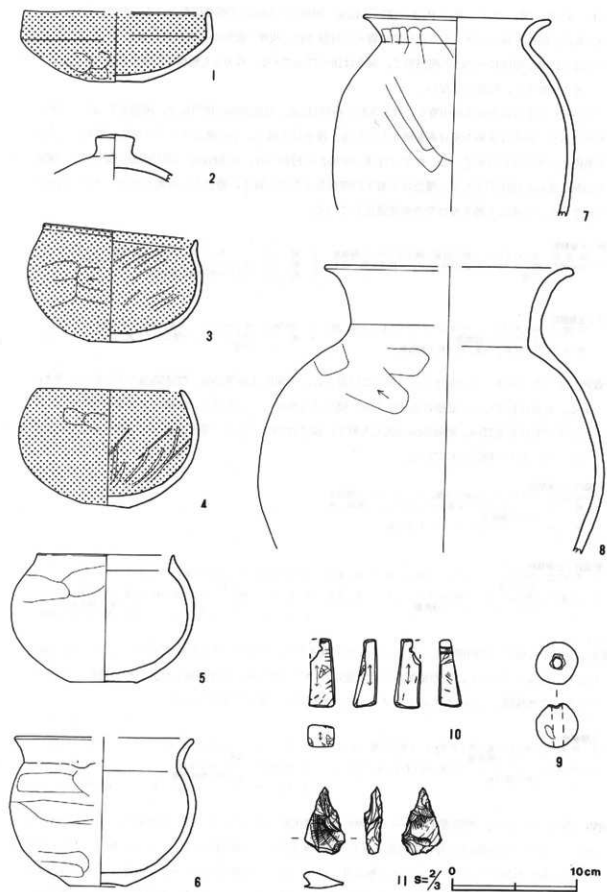
壁 壁高は20~37cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

間仕切り溝 北東壁から1条、南東壁から3条、南西壁から2条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅15~25cm、深さは3~12cmで、断面はU字形及び逆台形である。

床 ほぼ平坦で、各コーナー付近や壁沿いの一部を除いて全体が踏み固められ、堅緻である。中央付近は木根による攪乱を受けている。



第192图 第15号住居跡実測图



第193图 第15号住居跡出土遺物実測図

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁~P₄は長径25~42cm, 短径25~32cmの不整楕円形及び不定形で、深さは47~58cmである。何れも各コーナーからやや中央寄りに付設され、規模や配列から支柱柱と考えられる。P₅, P₆は長径22~25cm, 短径17~23cmの楕円形で、深さは18~27cmである。双方とも規模や位置から出入口に伴うピットと考えられるが、明確ではない。

炉 2か所。炉1は中央から北西寄りに付設され、長径112cm, 短径80cmの楕円形で、床面を7cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。覆土は土層1, 2の焼土ブロックを含む暗褐色土及び明赤褐色土が大部分を占めている。炉2は住居の中央部に付設され、長径85cm, 短径50cmの楕円形で、床面を4cm掘り窪めた地床炉である。覆土は土層1の暗褐色土及び土層4の褐色土から焼土ブロックの堆積が確認されている。炉床は火熱を受けやや赤変硬化している。

炉1土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・ローム粒子微量, 焼土小ブロック極微量	3 褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子極微量
2 明赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量, 硝まり強	4 褐色	焼土小ブロック・ローム大ブロック極微量
		5 褐色	焼土粒子極微量, 粘性強

炉2土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土中ブロック極微量	3 明褐色	焼土大ブロック多量, 焼土粒子少量, 硝まり強
2 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子極微量	4 褐色	焼土中ブロック・焼土粒子少量, 焼土小ブロック極微量

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は東コーナー付近に付設され、平面形は長径75cm, 短径55cmの不定形で、深さ64cmである。断面はU字形で、底部は皿状である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。貯蔵穴2は南東壁際中央に付設され、平面形は長軸77cm, 短軸70cmの隅丸方形で、深さは40cmである。覆土下層から中層の暗褐色土には焼土ブロックの混入が確認されている。

貯蔵穴1土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・ローム粒子少量, ローム小ブロック極微量
2 褐色	ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量, 焼土粒子極微量
3 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯蔵穴2土層解説

1 黒褐色	炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量	3 明褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2 暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化物・ローム小ブロック極微量	4 暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子少量, 炭化材微量, 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
		5 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量

覆土 5層から成る。北西壁際にロームブロックの混入がみられるが、その他の部分には大きな堆積状況の乱れはみられないことから、北西壁側から北東壁にかけて一部人為的に埋め戻しが行われ、遺物が投棄され、その後、自然堆積していったものと考えられる。木根による攪乱を受けている。

土層解説

1 黒褐色	炭化物少量, 焼土粒子・ローム粒子微量, ローム小ブロック極微量	3 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化物極微量
2 暗褐色	ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化物・ローム粒子極微量	4 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化物極微量
		5 褐色	ローム小ブロック少量, ローム粒子微量

遺物 西コーナー付近の壁際覆土中から土師器片が投棄状態で出土し、その他、床面直上から土師器片が中量出土している。第193図1の坏は中央部の覆土下層と床面直上の土師器片が接合し、3の椀は北寄りの床面直上から正位の状態でも出土している。4の椀は北コーナー寄りの床面直上から逆位の状態でも、5の椀は南寄りの覆土下層から出土したものである。6の小形甕、8の甕は西コーナー付近の壁際にみられる投棄状態の土師器片の中より出土しているものである。7の甕は覆土下層から押し潰された状態で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から隣接する第14号住居跡と時的に重なる部分のみられるが、建物構造上と出土遺物の前後関係から5世紀後半と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第193図 1	坏土師器	A [14.8]	体部下位から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P71 35% 中央部覆土下層
		B 5.5				
		C [4.0]				
2	蓋土師器	B (3.2)	天井部からつまみにかけての破片。天井部はわずかに内彎する。つまみ部は薄やかな宝珠状を呈する。	つまみ部ヘラナデ、側面ヘラナデ。天井部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・パミス にぶい橙色 普通	P72 5% 覆土中
		F 3.0				
		G (1.8)				
3	椀土師器	A 12.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内側ぎ状に直立し、口唇部は尖る。内面に横溝を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面磨き。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 明赤褐色 普通	P73 98% PL52 北寄り床面直上
		B 9.3				
		C 3.3				
4	椀土師器	A 11.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。体部は潰れた球形状を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面放射状のヘラ磨き。底部ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P74 98% PL52 北コーナー部直上 内・外面部付着
		B 9.4				
		C 3.7				
5	椀土師器	A 10.9	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はやや内側ぎ状に直立し、口唇部はやや尖る。内面に弱く横溝を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面丁寧なヘラナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・ 雲母・パミス 赤褐色 普通	P75 85% PL52 南寄り覆土下層 体部内・外面部付着
		B 10.1				
		C 5.2				
6	小形壺土師器	A [14.3]	体部下位から口縁部一部欠損。平底。体部は球形状を呈し、頸部はやや括れ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母・パミス 黒褐色 普通	P77 60% 西コーナー付近直上 二次焼成
		B 11.9				
		C 4.5				
7	壺土師器	A 14.8	体部中位から口縁部の破片。体部は長筒状を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面下位縦位のヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 淡赤褐色 普通	P78 45% 覆土下層 二次焼成
		B 15.6				
8	壺土師器	A [20.2]	体部中位から口縁部の破片。体部は球形状を呈し、頸部は長筒状を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部及び体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	P79 40% 覆土中
		B (22.8)				

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径				
第193図9	土玉	3.4	3.4	—	0.8	31.7	100	覆土中	D P 15 PL55

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第193図10	磁石	5.5	2.0	1.8	(0.4)	25.7	80	砂砂	覆土中	Q73
11	剝片	2.6	1.5	0.6	—	15.5	100	黒曜石	覆土中	Q74

第16号住居跡 (第194図)

位置 調査区の南東部、F5c3区。

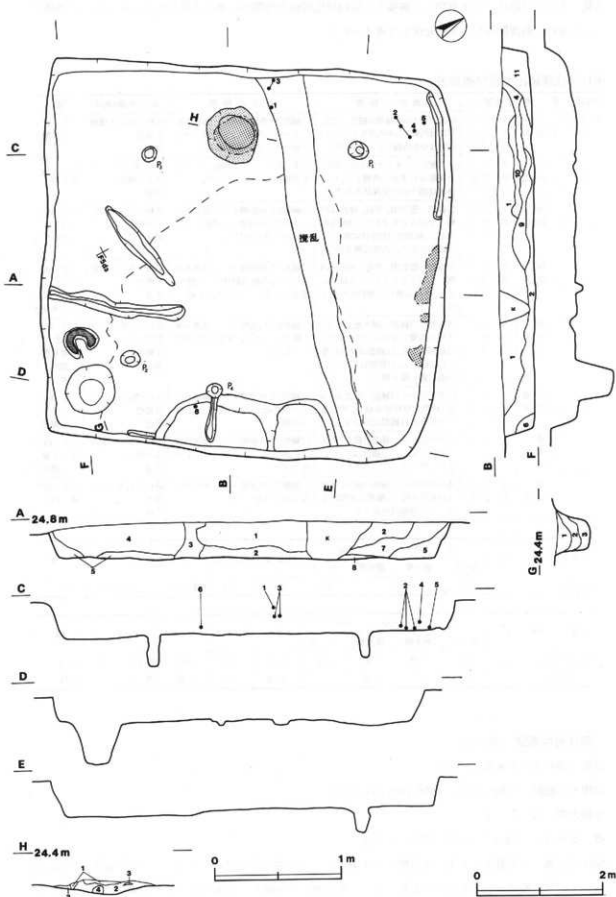
規模と平面形 長軸6.48m、短軸6.16mのほぼ方形。

主軸方向 N-31°-E

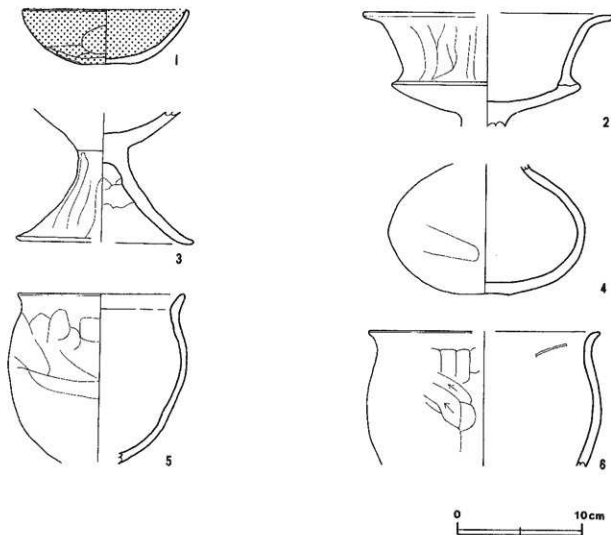
壁 壁高は37~52cmで、外傾して立ち上がる。

間仕切り溝 南東壁から1条、南西壁から1条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅8~27cm、深さは10cm程で、断面はU字形及び不定形である。南西壁の中央寄りに南東方向に伸びる溝状の攪乱がみられる。

床中央部はほぼ平坦であるが、南西部には部分的に凹凸がみられる。中央部から南東部を除いて踏み固めら



第194图 第16号住居跡実測图



第195図 第16号住居跡出土遺物実測図

れ、堅緻になっている。また、南東壁際には長さ290cm、幅80cm、高さ5~7cmの高まりと、南コーナーからやや西側に馬蹄形の粘土貼りがみられる。北西壁中央部付近から南東壁東部にかけて幅45cmの根切り溝による攪乱を受けている。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁, P₃は径23~25cmの円形で、P₂は長径32cm、短径25cmの不整楕円形である。深さはそれぞれ35~40cmである。P₁~P₃はコーナーからやや中央寄りに付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₄は南東壁中央部から伸びる間仕切り溝の先端に付設され、径24cmの円形で、深さは10cmである。規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

炉 北西壁からやや中央寄りに付設され、長径95cm、短径70cmの不定形で、床面を10cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロックを含む暗赤褐色土が厚く堆積し、炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化物中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム粒子少量
 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物少量、ローム粒子極微量
 3 におい赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化物・ローム粒子極微量
 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は径78cmの円形で、深さは50cmである。円筒状に掘り込まれ、底部は皿状である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物極微量	3 明褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2 褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、炭化物極微量		

覆土 11層から成る。南西側に焼土粒子混じりの極暗褐色土が厚く堆積しているが、その他は黒褐色土及び暗褐色土が覆土の大部分を占めて厚く堆積している。特に、北西側の一部には他の部分と比べて堆積状況の乱れが顕著にみられることから、北西壁際から埋め戻しが人為的に行われていったものと考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量	7 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化物極微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック極微量	8 褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量	9 黒褐色	ローム粒子少量
4 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子極微量	10 暗赤褐色	ローム粒子少量、炭化物極微量
5 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子極微量	11 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック極微量
6 暗褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量		

遺物 覆土上層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第195図1の坏は北西壁際の覆土上層から正位の状態、3の高坏は、ほぼ同位置の覆土中層から出土している土師器片が接合している。2の高坏は坏部が正位の状態で出土し、他の坏部片と接合したもので、4の罫は正位の状態、5の小形甕は斜位の状態それぞれ北コーナの覆土下層から集中して出土している。6の甕は南東付近の覆土下層から出土している。

所見 本跡の床面にみられた馬蹄形の粘土貼りは、その形状から柱等のものを補強する目的を持っていたのではないとも考えられる。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表

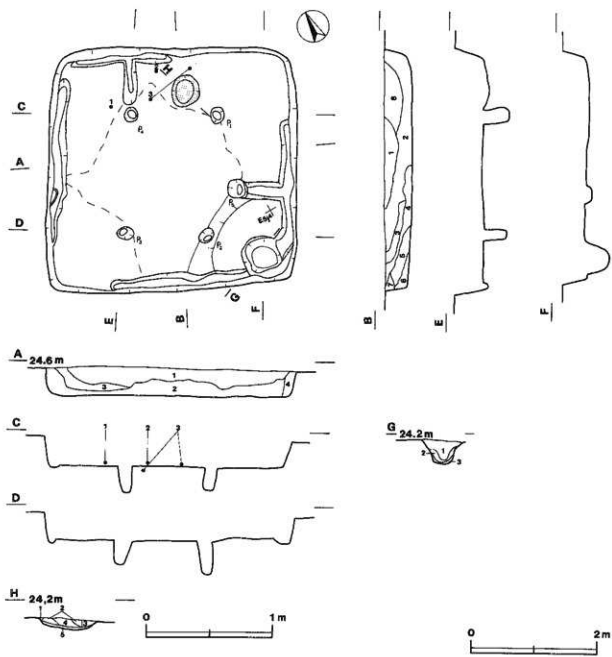
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第195図 1	坏 土師器	A 13.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母 に多い褐色 普通	P80 90% 北西壁際土上層 二次焼成
		B 4.3				
		C 3.4				
2	高坏 土師器	A 20.0	坏部の破片。坏部下に張り出しのある段を持ち、口縁部は外上方に立ち上がり、口唇部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面縦位のへラ削り、内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 に多い褐色 普通	P81 40% 北コーナ覆土下層 二次焼成
		B (9.0)				
3	高坏 土師器	B (10.6)	坏部下位から裾部の破片。脚部から裾部にかけてラッパ状に大きく開く。坏部下位に弱い段を持つ。	坏部下位外面へラ削り、内面ナデ。脚部外面縦位のへラ削り後ナデ。裾部内・外面横ナデ。脚部内面輪襷み減。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P82 40% 北西壁際土中層
		D [13.7]				
		E 7.3				
4	罫 土師器	B (10.4)	口縁部欠損。平底。体部は潰れた球形状を呈する。	体部内・外面ナデ。底部へラ削り後ナデ。	砂粒・石英・スコリア に多い黄褐色 普通	P83 80% PL52 北コーナ覆土下層 二次焼成
		C 3.8				
5	小形甕 土師器	A 13.3	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、頸部は折れ、口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 に多い褐色 普通	P84 90% PL52 北コーナ覆土下層 二次焼成
		B (13.6)				
6	甕 土師器	A [18.6]	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面中位横ナデ。下位縦位のへラナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・スコリア 黒褐色 普通	P85 10% 南東付近土下層
		B (10.7)				

第17号住居跡 (第196図)

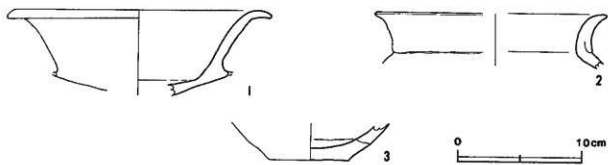
位置 調査区の南東部、E54区。

規模と平面形 長軸4.00m、短軸3.84mの方形。

主軸方向 N-63°-W



第196图 第17号住居跡実測图



第197图 第17号住居跡出土物実测图

壁 壁高は30~47cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東コーナー、西コーナー及び北コーナー付近の一部を除き、全周状態で巡っている。上幅10~25cm、深さ5~8cmで、断面形はほぼU字形である。

間仕切り溝 北東壁から1条、南東壁から1条それぞれ中央に向けて伸びているが、南東壁の1条については梯子ピットに接しているところから、本来の間仕切り溝としての機能を持っていたかは不明である。

床 ほぼ平坦で、中央付近に踏み締まって硬化した部分のみみられる。また、東コーナー付近には扇状に硬化した高まりがみられ、出入口として使用され踏み締まったものと考えられる。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は長径25~27cm、短径18~23cmの楕円形または不整形楕円形で、深さは35~40cmである。各コーナーから、やや内側に入った所に付設され、規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は長径30cm、短径25cmの楕円形で、東コーナーからやや北東付近に付設されている。規模や位置及び周辺の床面の高まりから梯子ピットと考えられる。

貯蔵穴 南コーナーに付設され、平面形は長・短径とも55cmの不整形円形で、深さ38cmである。断面はほぼU字形を呈している。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 明褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物少量、ローム中ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

炉 中央から北東壁寄りに付設され、平面形は長径55cm、短径45cmの楕円形で、床面を19cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は焼土ブロック、焼土粒子を含む褐色土及び暗褐色土が堆積しているが、長期間使用されたような焼土のブロックの固まりはあまりみられない。

炉土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化物微量
- 2 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 4 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子少量、焼土中ブロック・焼土小ブロック中量

覆土 8層から成る。土層7を除く各層にはロームブロックが混入し、各層は南西壁から北東壁に向かって傾斜し、斜位の状態に堆積している。人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック少量
- 4 明褐色 炭化物粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 7 褐色 ローム粒子少量、粘性土
- 8 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第197図1~3は共に北東付近の覆土下層から出土したもので、1の高環は坏部を逆位の状態で、2の甕は正位の状態で上部から押し潰された状態で、3の甕は底部が他の土師器片と共に出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 1	高環土師器	A 21.2 B (6.8)	坏部の破片。下位に張り出しのある段を持ち、外上方に立ち上がり、口縁部は大きく反る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。	砂粒・雲母・バミス に多い褐色 普通	P86 50% 北東付近覆土下層
2	壺土師器	A [18.5] B (3.9)	口縁部の破片。折り返しのある複合口縁で、やや反る。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・バミス 浅黄褐色 普通	P87 50% 北東付近覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 3	要 土師器	B (3.1) C 6.4	底部の破片。やや突出した平底。	体部外面へう磨り、内面ナデ。底部へう磨り。	砂粒・雲母・パミス にふい褐色 普通	P88 10% 北条付近覆土下層

第18号住居跡 (第198図)

位置 調査区の北西部, E4a区。

重複関係 本跡は、北西壁のほぼ中央で第1号陥し穴を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸6.94m, 短軸6.68mの方形。

主軸方向 N-50°-E

壁 壁高は17~34cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅14~20cm, 深さ5~10cmで、断面形はほぼU字形である。

間仕切り溝 北東壁から3条, 南東壁から1条, 南西壁から3条それぞれ中央に向かって伸びている。

床 平坦で、広い範囲に踏み締まって硬化した部分が見られる。南コーナー付近から中央に向かって方形の耕作による攪乱を受けている。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₃は長径25~40cm, 短径23~37cmの楕円形または不整形楕円形で、深さは60~65cmである。それぞれコーナー付近に付設され、規模や配列から支柱穴と考えられる。P₄は長径26cm, 短径18cmの不定形で、中央から南東壁沿いに付設されている。規模や位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴 南コーナーに付設され、平面形は長軸95cm, 短軸70cmの隅丸長方形で、深さは40cmである。断面は逆台形状を呈している。北東側半分が攪乱により残存しない。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|--|------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子
少量, 炭化物・粘土粒子極微量 | 4 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子
少量, 焼土粒子・炭化物極微量 | 5 褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子
少量 |
| 3 明褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 | | |

炉 2か所。炉1は中央から北西壁寄りに付設され、長径110cm, 短径73cmの楕円形で、床面を17cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土は各層に焼土ブロックを含み、土層4以外の覆土には少量の炭化物及び灰と併せて少量の土師器片が混入している。炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉2は中央からやや北東方向に付設され、長径75cm, 短径50cmの楕円形で、床面を5cm掘り窪めた地床炉である。土層4以外の各層は焼土ブロック及び炭化物を含み、炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉1土層解説

- | | | | |
|---------|--|--------|--|
| 1 褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量,
炭化物微量, 灰極微量 | 3 明赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量, 灰中量 |
| 2 ぶい赤褐色 | 焼土大ブロック・焼土中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・ローム粒子少量, 粘土粒子極微量, 灰少量 | 4 赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・ローム粒子少量 |

炉2土層解説

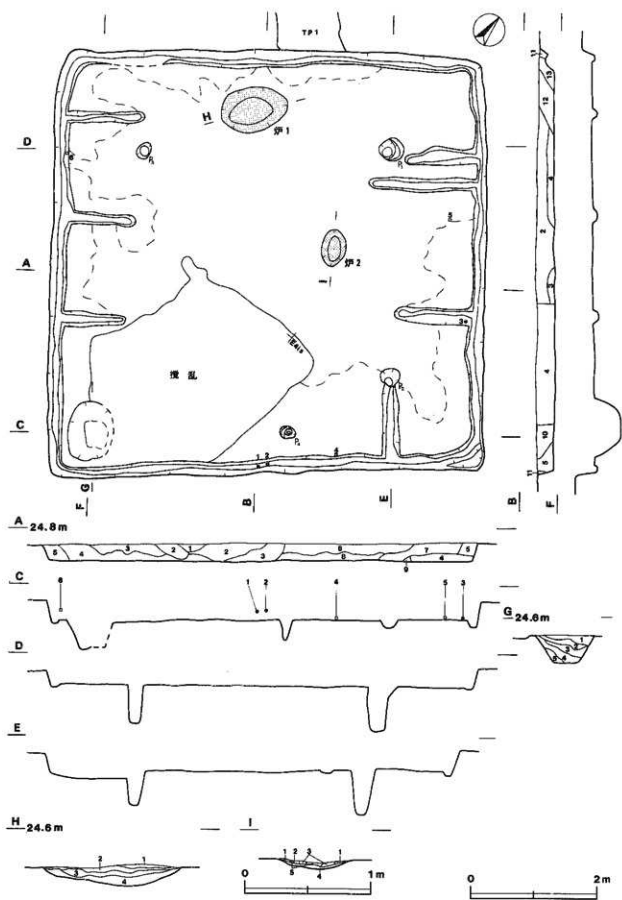
- | | | | |
|--------|------------------------------------|------|----------------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物極微量 | 4 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物極微量 | 5 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物極微量 |
| 3 明赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・ローム粒子少量,
炭化物極微量 | | |

覆土 13層から成る。床面から上層にかけロームブロックを含む黒褐色土及び暗褐色土が複雑に堆積している。

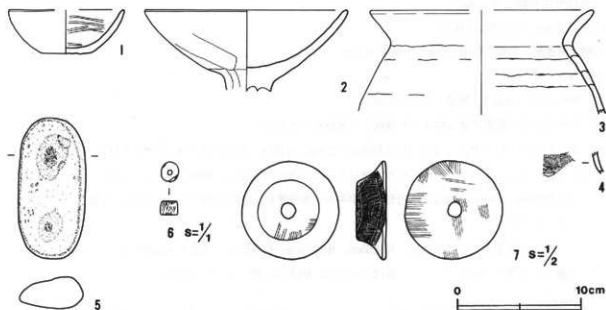
中央から南コーナーにかけて攪乱を受けている。人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------|-------|--|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 2 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量 |
|-------|---------|-------|--|



第198图 第18号住居跡実測图



第199図 第18号住居跡出土遺物実測図

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|---------|-------------------------------------|
| 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中ブロック微量 | 9 褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 10 暗褐色 | ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・ローム粒子微量、焼土粒子極微量 |
| 5 黒褐色 | ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量 | 11 褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 極暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 | 12 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量、ローム中ブロック極微量 |
| 7 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中ブロック極微量 | 13 極暗褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、炭化物極微量 | | |

遺物 覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第199図1の坏は斜位の状態、2の大坏は正位の状態で南東壁際の覆土中層から出土し、3の甕は北東壁際の床面直上から出土している。4の須恵器は甕で、体部上位に波状文が施され、覆土中から出土している。5の凹石は南東壁際から、6の白玉は北東寄りの床面直上からそれぞれ出土し、7の紡錘車は南西壁際の覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考				
							最大長	最大幅	最大厚	孔径
第199図1	土師器	A [9.2]	口縁部一部欠損。丸底気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面及び底部縮みヘラ削り、内面ナデ。外面赤彩痕。	砂粒・石英・炭石・パミスにふい煙色	P89 80% PL52 南東壁際覆土中層				
		B 3.5								
		C 3.8								
2	高坏土師器	A 16.3	坏部の破片。体部は外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・炭石・パミス 煙色 普通	P90 50% 南東壁際覆土中層				
		B (6.5)								
3	土師器	A [18.0]	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部内面輪轆み痕。	砂粒・雲母・パミス 灰褐色 普通	P91 10% 北東壁際床面直上				
		B (8.1)								
図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第199図5	凹石	11.2	5.1	2.6	—	240.7	100	蛇紋岩	南東壁際床面直上	Q75 PL55
6	白玉	0.5	0.5	0.4	0.1	0.1	100	片岩	北東寄り床面直上	Q76
7	紡錘車	5.2	5.2	1.6	0.7	61.1	100	片岩	南西壁際覆土中層	Q77南東壁際埋土L33

第19号住居跡 (第200図)

位置 調査区の北西部, D4c3区。

規模と平面形 長軸5.26m, 短軸3.84mの長方形。

主軸方向 N-39°-E

壁 壁高は22~30cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 広い範囲に踏み締まった硬化した部分が見られる。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は長径20~25cm, 短径18~25cmの楕円形または不整形楕円形で, 深さは28~35cmである。各コーナーからやや内側に入った付近に付設され, 規模や配列から主柱穴と考えられる。

P₅は長径20cm, 短径15cmのはほぼ楕円形で, 中央から南東壁沿いに付設されている。規模や位置から出入口ピットと考えられる。

炉 中央から北西壁寄りに付設され, 長径55cm, 短径50cmの楕円形で, 床面を8cm掘り窪めた地床炉である。

炉内覆土の中層位に焼土ブロックの堆積が見られ, 炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|--------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 明赤褐色 | 焼土粒子・ローム小ブロック極微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼七粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子極微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子極微量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 4 赤褐色 | ローム粒子少量, ローム中ブロック・小ブロック極微量 | | |

覆土 9層から成る。南西から北東方向にかけての層位はレンズ状を成し, 各層は何れもロームブロックを含み, 土層4, 6, 7以外の層からは焼土粒子が, 土層5, 7以外の各層からは炭化粒子が確認されている。

また, 南西壁から北西壁にかけての壁際は壁面に沿って褐色土及び暗褐色土が流れ込んでいる状況がみられるところから, 一部人為的に埋め戻され, その後自然堆積したものではないかと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------------|-------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子・ローム中ブロック極微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量 | 6 暗褐色 | 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量 | 7 褐色 | ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・ローム中ブロック極微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量 |
| | | 9 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子極微量 |

遺物 土師器片の壺が床面直上から少量出土している。その他, 双孔円板, 白玉が床面直上から出土している。

第201図1の壺は南東寄りの床面直上から出土し, 3の双孔円板は北コーナー付近の覆土下層から, 4~6は

白玉で, それぞれ中央付近の床面直上, 南西寄りの床面直上, 北コーナー付近の床面直上から出土している。

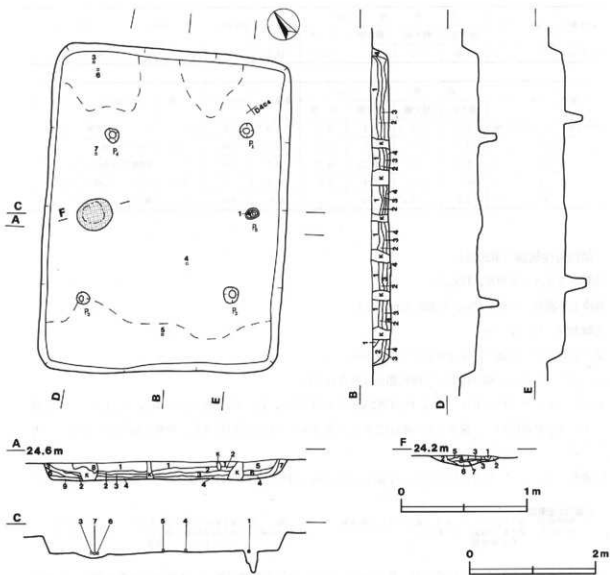
7の剥片は混入したものとも考えられる。

所見 本跡は, 他の住居跡に付設されている貯蔵穴を持たないが, 遺構の確認状況, 炉及びピットの様子から

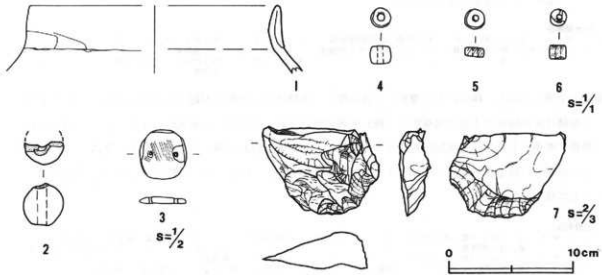
住居跡とした。時期は, 出土遺物から古墳時代中期 (5世紀中頃) と考えられる。

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第201図 1	壺 土師器	A [20.1] B (5.2)	体部上位から口縁部の破片, 体部は腰やかな傾斜を持って頸部に至る。口縁部は折り返しのある複合口縁となり, ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・パミスにふい責褐色 普通	P92 5% 南東寄り床面直上 外周面付着



第200图 第19号住居跡実測图



第201图 第19号住居跡出土遺物実測图

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径				
第201図2	土 玉	(3.3)	3.2	—	0.8	(14.2)	50	覆土中	D P 16 PLS5

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第201図3	双 孔 円 板	2.6	2.5	0.4	0.15	4.8	100	チャート	北コーナー-覆土層	Q78
	4 白 玉	0.5	(0.5)	0.5	0.2	(0.2)	80	片岩	中央付近床面直上	Q79
	5 白 玉	0.5	0.5	0.25	0.15	0.1	100	片岩	南西寄りの床面直上	Q80
	6 白 玉	(0.5)	0.45	0.4	0.2	(0.2)	90	片岩	北コーナー付近の床面直上	Q81
	7 割 片	4.7	3.5	1.4	—	16.9	100	メノウ	覆土中	Q82

第20号住居跡 (第202図)

位置 調査区の南東部, D506区。

規模と平面形 長軸5.17m, 短軸5.02mの方形。

主軸方向 N-43°-E

壁 壁高は12~21cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦であるが, 踏み締まった硬化部分はみられない。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁, P₃は径25cmのほぼ円形で, P₂, P₄は長径25~30cm, 短径20~27cmの楕円形または不整形円形で, 深さは35~65cmである。各コーナー付近に付設され, 規模や配列から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され, 平面形は径63cmの円形で, 深さは65cmである。断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|--------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子極微量 | 3 褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子極微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子微量, 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 炭化粒子・ローム中ブロック微量 |

炉 中央から北西壁寄りに付設され, 長径70cm, 短径55cmの不整形円形で, 床面を13cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土の土層3には焼土ブロックの堆積がみられ, 炉床は火熱を受け赤変硬化しているが, 長期にわたって使用された様子はみられない。

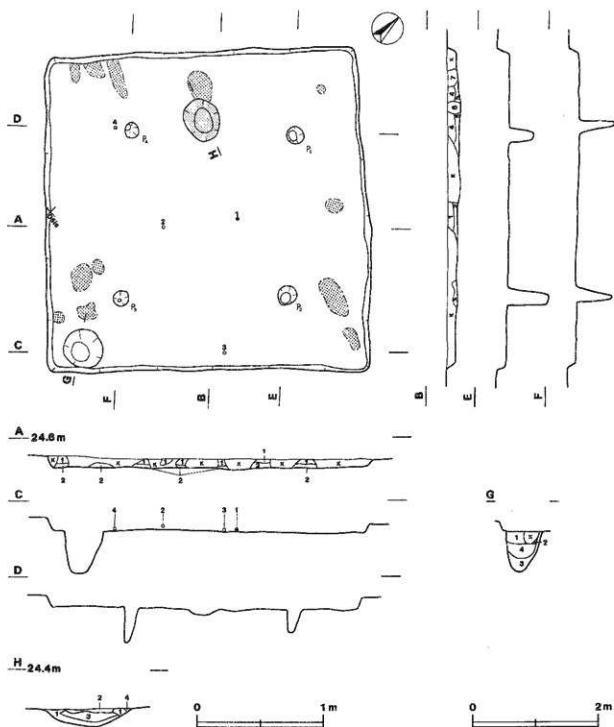
炉土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子・ローム粒子微量, 炭化物極微量 | 3 赤褐色 | 焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量, ローム粒子極微量 |
| 2 ぶい赤褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子微量, 炭化物微量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量, ローム小ブロック極微量 |

覆土 7層から成る。耕作による攪乱で全体の覆土の堆積状況の把握は困難であるが, 南西から北東方向の覆土堆積状況が暗褐色土及び黒褐色土の概ね2層に分けられるのに対し, 南東から北西方向では層位が比較的複雑に堆積しあっている状況がみられる。土層1, 2を除く何れの層からも炭化粒子が確認され, 土層3を除く各層には焼土粒子及びロームブロックの堆積がみられる。また, 全ての層にローム粒子が含まれている。人為堆積と考えられる。

土層解説

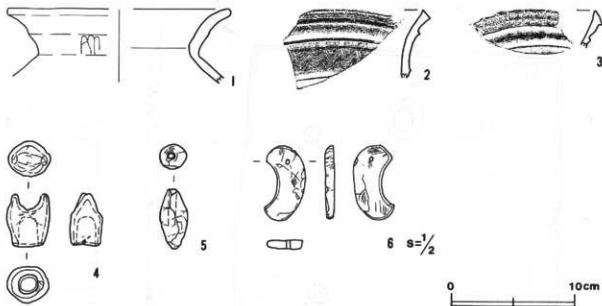
- | | | | |
|-------|--|-------|---|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・ローム小ブロック少量, 炭化物微量 | 4 黒褐色 | ローム小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量, ローム大ブロック微量, 焼土小ブロック極微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・ローム小ブロック少量, 炭化物・ローム大ブロック微量 | 5 黒褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量, ローム大ブロック微量, 炭化粒子極微量 | | |



第202図 第20号住居跡実測図

6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒 7 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極微量

遺物 南寄りの覆土下層から中央付近の床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第203図1の壺は中央付近の床面直上から出土したものである。2, 3は須恵器の壺口縁部片で、2の口唇部近くには稜がみられ、稜の下位に波状文が施され、3の口唇部近くには稜がみられる。共に覆土中層から出土している。4, 5は不明土製品で、中央付近と南東壁際の覆土下層から共に横位で出土し、6の勾玉は西寄りの覆土下層から出土している。



第203図 第20号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第203図 1	埴器 土師器	A [17.8] B (5.5)	口縁部の破片、頸部中に腰やかな段を有し、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面中位横ナデ、下位縦位のヘラナデ。	砂粒・骨母・パミス 灰黄褐色 普通	P93 5% 床面

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径				
第203図4	不明土製品	2.75	2.1	1.7	1.0	7.7	100	中央付近覆土下層	DP17 一部穿孔あり PL55
5	不明土製品	3.2	1.4	1.4	4.0	4.3	100	南東壁層土下層	DP18 一部穿孔あり

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第203図6	勾玉	3.9	2.1	0.45	0.2	6.0	100	滑石	西寄り覆土下層	Q83 PL55

第21号住居跡 (第204図)

位置 調査区の南東部, D5es区。

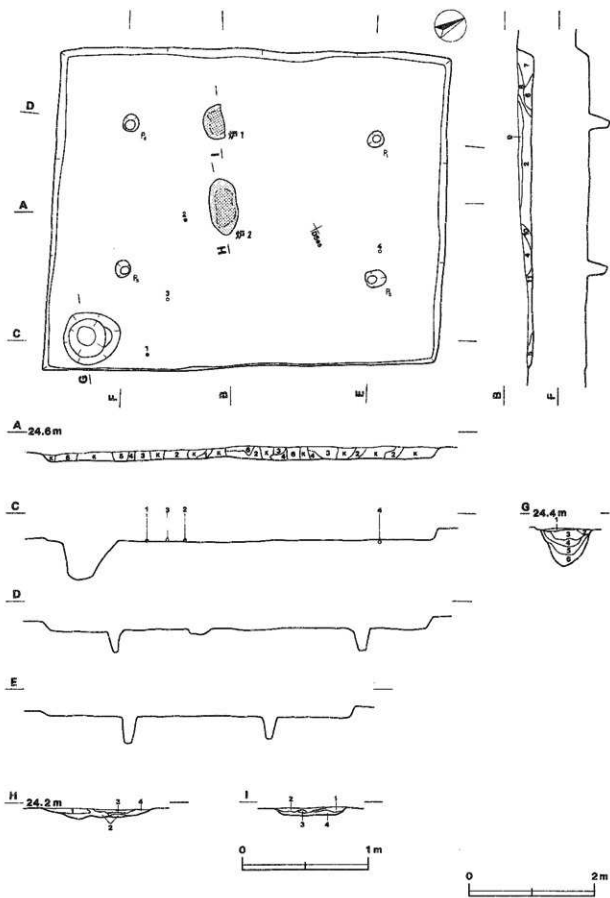
規模と平面形 長軸6.26m, 短軸5.01mの長方形。

主軸方向 N-30°-E

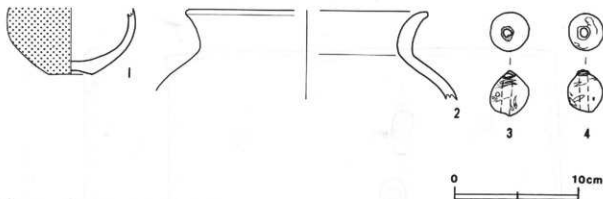
壁 壁高は3~24cmで、外傾して立ち上がる。南東壁の立ち上がりは、壁面が削平され全体の把握が困難である。

床 平坦であるが、踏み締まった硬化部分はみられない。

ピット 4か所 (P1~P4)。P1, P3, P4は径25cmのほぼ円形, P2は長径35cm, 短径25cmの不整楕円形で、深さは30~40cmである。各コーナー付近に付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。



第204图 第21号住居跡実測图



第205図 第21号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径90cm、短径80cmの不整形円形で、深さは60cmである。断面はU字形で、底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック微量、ローム小ブロック極微量 | 4 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック極微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 5 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量、ローム中ブロック極微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック極微量 | 6 褐色 | ローム小ブロック極微量 |

炉 2か所。炉1は中央から北西壁寄りに付設され、長径55cm、短径30cmの半円形で、床面を5cm掘り窪めた地床炉である。覆土には焼土ブロックが堆積し、炉床は火熱を受け赤変硬化している。規模の割りに使い込まれた様子が感じられる。中央から北側半分が耕作による攪乱を受け残存しない。炉2は中央付近に付設され、長径90cm、短径45cmの長楕円形で、床面を7~9cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土に焼土ブロックの堆積があまりみられず、使い込まれた様子が感じられない。炉を挟み南、北両側が攪乱により残存しない。

炉1土層解説

- | | | | |
|---------|--------------------------------------|--------|--|
| 1 暗赤褐色 | ローム小ブロック中量、焼土小ブロック少量、焼土中ブロック・ローム粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土大ブロック・焼土小ブロック極微量 |
| 2 近い赤褐色 | 焼土粒子微量、ローム小ブロック・ローム粒子極微量 | 4 赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子微量、ローム小ブロック極微量 |

炉2土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|------|--|
| 1 褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化物極微量 | 3 褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量、焼土小ブロック・炭化物極微量 |
| 2 赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 4 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム大ブロック微量、ローム中ブロック極微量 |

覆土 11層から成る。土層1, 9, 11を除く覆土は焼土粒子を含み、土層2の褐色土は覆土下層から上層に跨がり、その他の堆積状況も複雑である。また、その土層2以外の覆土にはロームブロックの混入もみられることから、人為的に埋め戻されたものではないかと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|--------|---|
| 1 褐色 | ローム大ブロック中量、ローム小ブロック微量、ローム粒子極微量 | 6 暗褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量、ローム小ブロック極微量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子微量、炭化粒子・ローム中ブロック・小ブロック・ローム粒子極微量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・ローム粒子微量、焼土粒子極微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量 | 8 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量、炭化粒子極微量 |
| 4 明褐色 | 焼土粒子・炭化粒子極微量 | 9 褐色 | ローム小ブロック微量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中ブロック微量 | 10 褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量 |
| | | 11 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量 |

遺物 覆土下層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第205図1の椀は南寄りの床面直上から、2の壺は中央付近の床面直上から出土し、3・4の土玉は南と北東寄りの床面直上から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205図 1	陶土師器	B (5.4) C 3.6	底部から体部中位の破片。やや上底気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部へう割り後ナデ。体部外面赤彩、内面赤彩痕。	砂粒・石英・長石・ハイス 赤褐色 普通	P94 15% 南寄り床面直上
2	陶土師器	A (19.4) B (7.0)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 ぶい・黄褐色 普通	P95 10% 中央付近床面直上 口縁部外周縁付着

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径				
第205図3	土玉	(3.5)	3.1	—	0.7	(25.5)	90	南寄り床面直上	D P20 PL55
4	土玉	(3.1)	2.8	—	0.6	(22.6)	98	北寄り床面直上	D P21 PL55

第24号住居跡 (第206図)

位置 調査区の南東部, D4c4区。

規模と平面形 長軸2.25m, 短軸1.69mの長方形。

主軸方向 N-71'-W

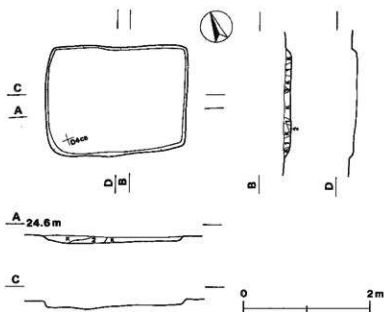
壁 壁高は5~10cmで、外傾して立ち上がるが、南西壁はやや外傾気味の立ち上がりが見られる。

床 南東から南西方向に僅かな高まりを持ち、緩斜している。踏み締まった硬化部分は見られない。

覆土 2層から成る。それぞれの覆土は炭化物及びロームブロックを含み、床面から覆土上層にかけ縦長に堆積している。人為的に埋め戻されたものと考えられる。中央部は耕作による攪乱を受けている。

土層解説

1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子 少量、焼土粒子・炭化物微量
2 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、炭化物微量



第206図 第24号住居跡実測図

遺物 覆土中から土師器の坏、甕片が14点出土しているが、遺構の掘り込みが浅く、本跡に伴うものか確認できなかった。

所見 本跡は、炉、貯蔵穴及び柱穴等が確認されなかったが、遺構の確認状況などから住居跡もしくは倉庫的な建築物であったように考えられる。時期は、出土している土師器の様相から5世紀後半頃と思われる。

第25号住居跡 (第207図)

位置 調査区の南東部, D4no区。

重複関係 本跡は、第84号土坑によって掘り込まれている。本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸4.40m, 短軸4.32mの方形。

主軸方向 N-44°-E

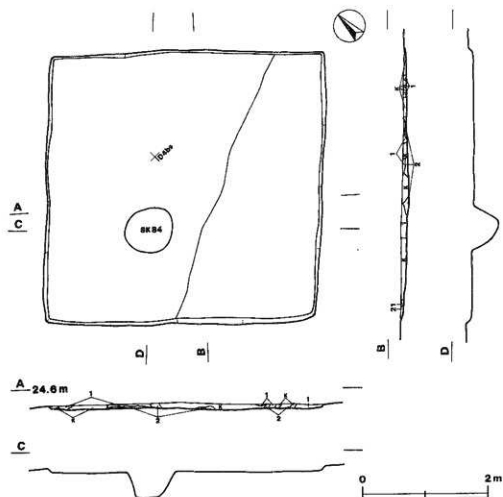
壁 壁高は5~7cmで、やや外傾し、各壁際は耕作により攪乱されている。

床 皿状に中央がやや窪む。踏み締まった硬化部分は見られない。

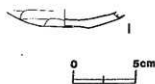
覆土 2層から成る。どちらの層もロームブロックを含み、床面から覆土上層にかけ縦長に堆積している。人為的に埋め戻されたものと考えられる。中央部は耕作による攪乱を受けている。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量



第207図 第25号住居跡実測図



第208図 第25号住居跡出土遺物実測図

遺物 覆土中から土師器の坏，葉片が少量出土している。

所見 本跡は，炉，貯蔵穴及び柱穴等が確認されなかったが，遺構の確認状況及び規模などから住居跡として取り扱った。時期は，出土している土師器の様相から5世紀後半頃と考えられる。

第25号住居跡出土遺物観察表

図解番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第208回 1	土師器 坏	B (1.1) C 3.8	底部及び体部下位の破片。平底。体部は緩やかに外傾して立ち上がる。	体部外面へラ削り，内面ナデ。底部へラ削り。	砂鉄・石灰・炭石・パミス にふい橙色 普通	P96 10% 覆土中

第26号住居跡 (第209図)

位置 調査区の北部，C4₇区。

規模と平面形 長軸4.90m，短軸4.83mの方形。

主軸方向 N-65°-W

壁 壁高は2~16cmで，外傾して立ち上がるが，北西側は耕作による削平により壁面が殆ど残存しない。

床 ほぼ平坦であるが，南コーナー付近に僅かに高まりがみられる。床面の踏み固まった硬化部分はみられない。東コーナー付近は耕作による攪乱を受けている。

ピット 3か所(P₁~P₃)。P₁~P₃は径25cmの円形で，深さはそれぞれ60~65cmである。コーナーから中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 中央から北西寄りに付設され，長径75cm，短径55cmの不定形で，床面を15cm掘り窪めた地床炉である。炉内覆土の中層から上層には焼土ブロックを含む赤褐色土及び焼土ブロックや炭化物を含む暗褐色土が堆積し，炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

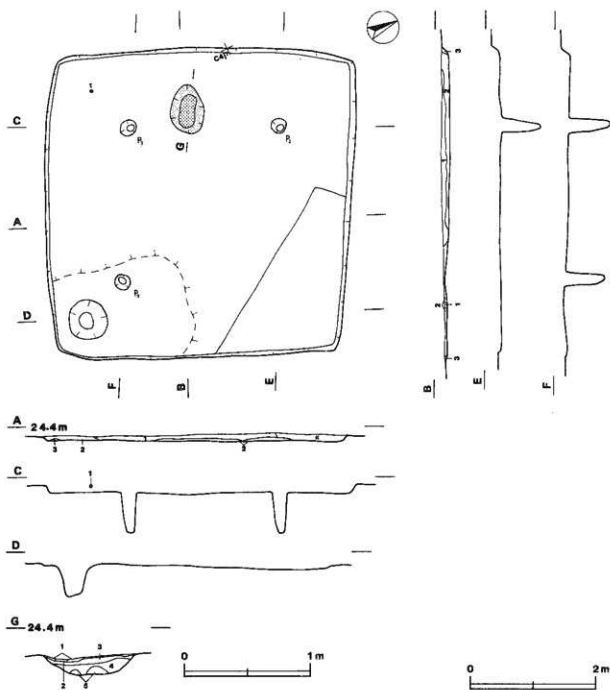
- | | | | |
|--------|---------------------------------|-------|--|
| 1 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化物少量，ローム粒子微量 | 4 赤褐色 | 焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，焼土中ブロック少量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量 | 5 赤褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量 | | |

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され，平面形は径60cmの円形で，深さは45cmである。V字状に掘り込まれ，底部は皿状である。壁はほぼ外傾して立ち上がる。

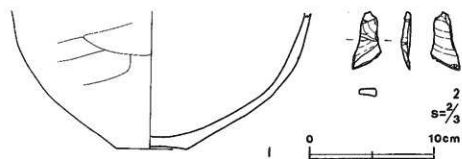
貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量 | 3 明褐色 | ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，炭化物微量 | | |

覆土 3層から成る。覆土の大部分は焼土ブロック及び焼土粒子混じりの暗褐色土で，南東付近の覆土堆積状



第209图 第26号住居跡実測图



第210图 第26号住居跡出土遺物実測图

況の把握は殆どできない。人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量 3 に多い褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中ブロック微量

遺物 覆土中から土師器片が少量出土している。第210図1の裏は西寄りの覆土下層から逆位の状態で出土し、

2のナイフ形石器片は炉内焼土中より出土したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考				
第210図1	壺	B (11.0)	底面から体部中位の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナダ、内面ナダ。底面ヘラナダ。	砂粒・石英・長石に多い黄褐色普通	P97 40% 西寄り覆土下層二次焼成				
	土師器	C 5.6								
図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	材質	出土地点	備考
第210図2	ナイフ形石器片	最大長	最大幅	最大厚	孔径	(0.6)	不明	頁岩	炉内焼土中	Q64 PL55
		(2.3)	(1.1)	0.3	—					

第27号住居跡 (第211図)

位置 調査区の北部中央, C5₄区。

規模と平面形 長軸5.19m, 短軸5.14mの方形。

主軸方向 N—55°—E

壁 壁高は49~60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

間仕切り溝 南東壁から1条、北西壁から1条それぞれ中央付近に向かって伸びている。幅20cm, 深さは5~7cmで、断面はU字形である。

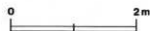
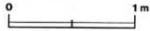
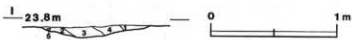
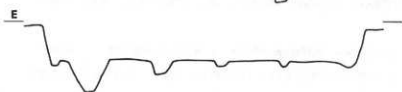
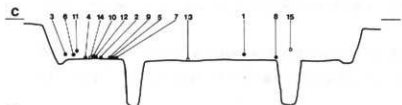
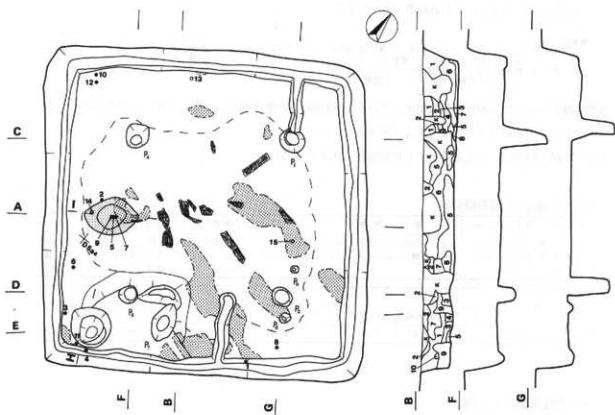
床 ほぼ平坦であるが、南東壁際から南コーナー付近に長さ175cm, 幅125cm, 高さ5~10cmの高まりがみられ、出入口施設に伴うものと考えられる。また、床面からは多量の炭化材が確認されている。壁沿いを除いて全体が踏み固められ、堅微である。

ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁~P₄は長径30~40cm, 短径25~30cmの楕円形及び不整形楕円形で、深さは28~72cmである。何れも各コーナーから中央寄りに付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅, P₆は長径13~18cm, 短径10~15cmの円形に近い形で、深さは9~10cmである。双方とも規模や位置からP₂の補助的な柱穴であったと考えられる。P₇は長径65cm, 短径35cmの楕円形で、深さは20cmである。規模や位置から出入口ピットと考えられる。

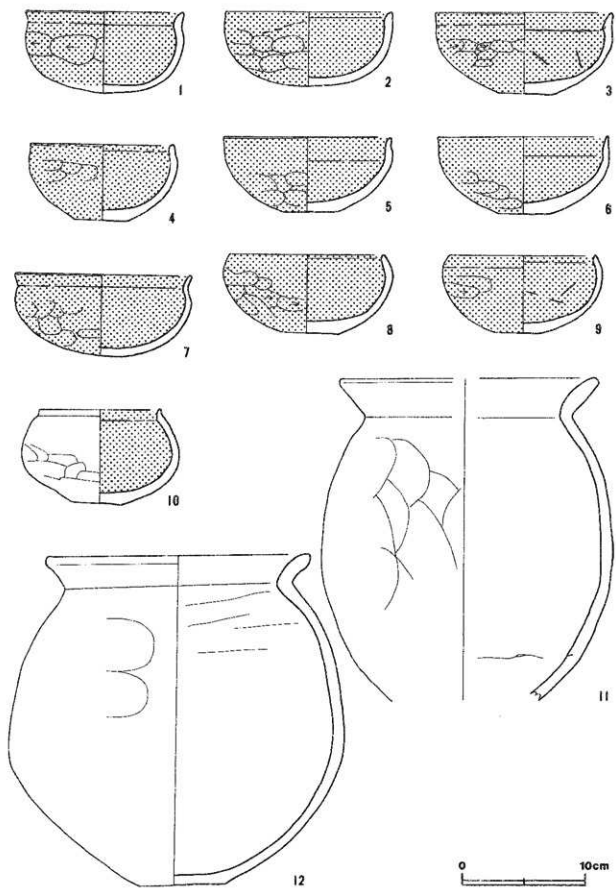
炉 中央からやや南西寄りに付設され、長径85cm, 短径60cmの楕円形で、床面を9cm掘り窪めた地床炉である。覆土はいずれも焼土ブロックを含み、土層3の赤褐色土からは炭化物が、土層4の暗赤褐色土からは炭化材が確認されている。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

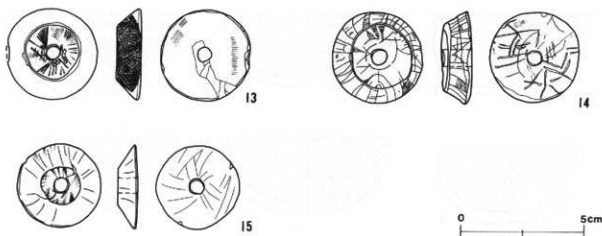
- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量、炭化材・ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土中ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック微量 5 暗褐色 焼土小ブロック少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化物中量、ローム粒子微量



第211图 第27号住居跡実測图



第212图 第27号住居跡出土遺物実測図(1)



第213図 第27号住居跡出土遺物実測図(2)

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は径70cmの円形で、深さ45cmである。断面はU字形で、底部は皿状である。壁は外傾して立ち上がる。覆土には焼失時に混入したと思われる炭化材と炭化物が確認されている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|--------|--|------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化材微量 | 4 褐色 | 炭化材中量、焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化物中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化材少量、ローム粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物微量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | | |

覆土 9層から成る。南東壁付近及び北西方向に堆積の乱れがみられ、覆土下層から上層にかけては焼土粒子や炭化物及びロームブロックの混入がみられることから、南東壁際及び北西壁際は人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。耕作による攪乱を大きく受けている。

土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|--------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量 | 6 黒褐色 | 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量 |
| 2 褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量 | 7 褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 9 暗褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化物微量 | 10 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |

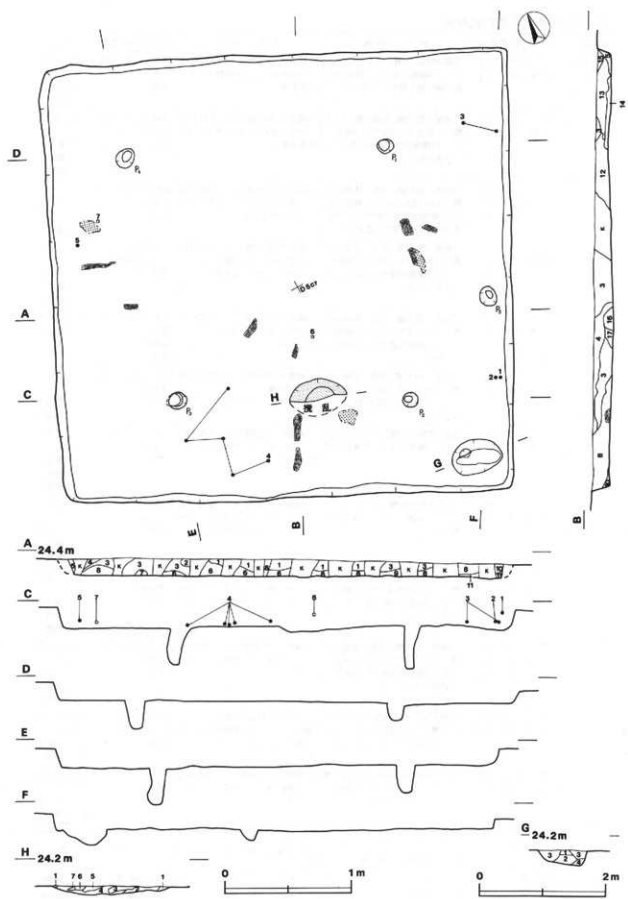
遺物 覆土下層から床面直上にかけて土師器の完形品が大量に出土し、石製品も3点出土している。第212図1～9は坯のほぼ完形品である。1は南東壁際の覆土下層から斜位の状態、2は炉内覆土上面から正位の状態、3と4は南コーナー付近の覆土下層から正位と斜位の状態、5・7・9は炉内覆土上面から意図的行為と思われる正位の重なり合いの状態、6は南西壁際付近の覆土下層から、8は東コーナー寄りの覆土下層から正位の状態で出土している。10の椀は西コーナー寄りの床面直上から、潰れた甕の体部の間から正位の状態で出土している。11・12の甕は、11が南コーナー付近の覆土下層から、12が西コーナー付近の床面直上から共に横位の状態で出土している。第213図13・14・15の紡錘車は、それぞれ北西壁寄りの覆土下層、炉内覆土上面、南東壁際覆土下層から出土している。

所見 本跡は、床面から住居の建築材と思われる炭化材が多量に確認され、炭化材樹脂同定の分析でも住居建築材とする結果が出ている焼失家屋で、その後、人為的に埋め戻しが行なわれている。出土遺物から祭祀行為との関係及び特別な建物跡であったように考えられる住居跡である。時期は、5世紀後半と考えられる。

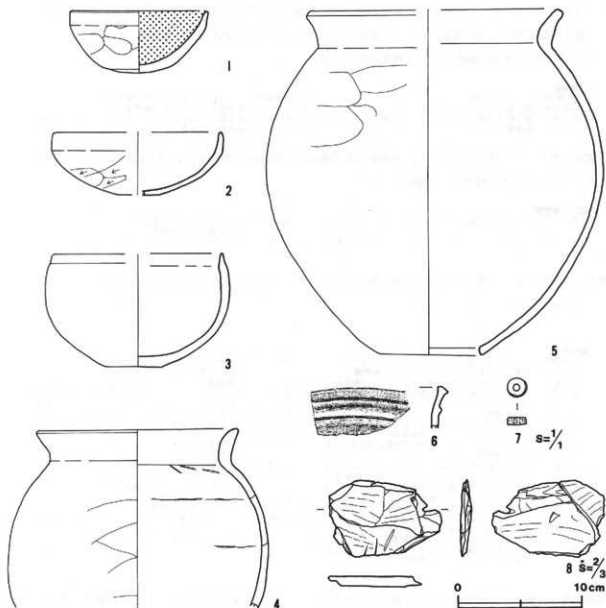
第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第212図 1	坏 土 師 器	A 12.7	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内面に弱い稜を持ち、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面磨き。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P98 100% PL52 南東遺跡遺土下層 二次焼成
		B 6.5				
2	坏 土 師 器	A 13.3	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内側に直立し、口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P99 98% PL52 伊内覆土上面 二次焼成 内面割離
		B 5.8				
3	坏 土 師 器	A 14.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内側に稜を持ち、口唇部は内側に直立し、直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り。内面ナデ。底部へつ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P100 98% PL52 駒ヶ谷遺跡遺土層 二次焼成
		B 6.5				
		C 4.5				
4	坏 土 師 器	A 11.5	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は僅かに内傾し、その後直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面ナデ。底部へつ削り。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P101 95% PL52 駒ヶ谷遺跡遺土層 二次焼成 内面割離
		B 6.1				
		C 4.3				
5	坏 土 師 器	A 13.4	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は直立し、口唇部はや中反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石・ 雲母・スコリア 赤褐色 普通	P102 95% PL52 伊内覆土上面 二次焼成
		B 6.0				
		C 4.5				
6	坏 土 師 器	A 13.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内側に直立し、直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面ナデ。底部へつ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P103 95% PL52 南西遺跡遺土下層 二次焼成
		B 6.2				
		C 3.7				
7	坏 土 師 器	A 14.2	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P104 100% PL53 伊内覆土上面 二次焼成 内面割離
		B 6.5				
8	坏 土 師 器	A 12.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面ナデ。底部へつ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P105 100% PL52 駒ヶ谷遺跡遺土層 二次焼成 内面割離
		B 6.4				
		C 4.4				
9	坏 土 師 器	A 11.9	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内側に直立し、口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面ナデ。底部へつ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・パミス 明赤褐色 普通	P107 98% PL53 伊内覆土上面 二次焼成 内面割離
		B 6.2				
		C 3.6				
10	碗 土 師 器	A 9.7	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内側に直立し、口唇部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面ナデ。内面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P106 95% PL53 駒ヶ谷遺跡遺土 二次焼成 内面割離
		B 7.6				
		C 3.6				
11	罐 土 師 器	A [21.0]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり、口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面中位横ナデ。下位破片のへらナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒・石英・スコリア に近い橙色 普通	P109 40% PL53 駒ヶ谷遺跡遺土 二次焼成
		B (25.8)				
12	罐 土 師 器	A 20.9	体部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後ナデ。内面ナデ。底部へつ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	P108 60% PL53 駒ヶ谷遺跡遺土下層 二次焼成
		B 26.8				
		C 6.8				

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土状況	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第213図13	紡 織 車	4.8	4.8	1.3	0.7	45.8	95	片岩	北西寄り遺土層	Q6747(1)図版13
14	紡 織 車	4.8	4.8	1.4	0.8	49.8	100	片岩	伊内覆土上面	Q6747(1)図版14
15	紡 織 車	4.5	4.5	1.0	0.8	28.0	100	片岩	南東遺跡遺土下層	Q6747(1)図版15



第214图 第28号住居跡実測图



第215図 第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡 (第214図)

位置 調査区の北東部, D5c7区。

規模と平面形 長軸7.46m, 短軸6.94mの長方形。

主軸方向 N-63°-W

壁 壁高は14~33cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦である。床面の広い範囲から炭化材が少量ずつ確認されている。床面の踏み固まった硬化部分はみられない。耕作による攪乱を受けている。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁, P₂, P₄は長径30cm, 短径25cmの不整楕円形で, P₃は径25cmの円形である。

深さはそれぞれ25~70cmである。各コーナーから中央寄りに付設され, 規模や配列から主柱穴と考えられる。

P₅は長径30cm, 短径25cmの不整楕円形で, 深さは15cmである。南東壁の中央部付近にあり, 出入口ピットと考えられる。

炉 南西壁から中央寄りに付設され、長径95cm、短径60cmの不定形で、床面を9cm掘り覆めた地床炉である。

土層3の暗赤褐色土から焼土ブロックが確認されている。炉床は火熱を受け赤変硬化している部分がありみられない。南半分は耕作によって攪乱を受けている。

炉土層解説

1 明褐色	ローム粒子微量	4 暗赤褐色	ローム粒子少量、焼土粒子極微量
2 暗褐色	焼土粒子・ローム粒子少量	5 赤褐色	焼土粒子・ローム粒子極微量
3 暗赤褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子極微量	6 暗褐色	焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
		7 黒褐色	焼土粒子極微量

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は長径80cm、短径55cmの楕円形で、深さは25cmである。船底形に掘り込まれ、底部は南西方向に傾斜している。

貯蔵穴土層解説

1 褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量	3 暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
2 褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量	4 明褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

覆土 17層から成る。覆土の大部分は焼土粒子及び炭化粒子を含み、全体に土層堆積の乱れがみられ、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・ローム小ブロック微量、炭化粒子・ローム中ブロック極微量	11 褐色	炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック極微量
2 暗褐色	ローム中量、焼土粒子微量、ローム小ブロック微量	12 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量、焼土粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック極微量
3 暗褐色	ローム粒子中量、炭化物・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量	13 褐色	炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
4 暗褐色	ローム中ブロック微量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量	14 暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム大ブロック微量、炭化粒子極微量
5 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量、焼土粒子・炭化粒子極微量	15 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量、焼土中ブロック・炭化粒子微量、焼土小ブロック・ローム中ブロック極微量
6 暗褐色	炭化物・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量	16 褐色	ローム中ブロック微量、焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極微量
7 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量	17 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量
8 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック極微量		
9 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム小ブロック極微量		
10 褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、炭化粒子・ローム中ブロック極微量		

遺物 覆土上層から床面直上にかけて土師器片が中量出土している。第215図1・2の坏は南東壁際の覆土上層及び覆土中層から出土している。3の椀は東コーナー付近の覆土下層から出土している土師器片が接合したものである。4の甕は南西寄りの覆土下層から出土し、5の甕は北西付近の覆土下層から出土している体部片と破片が接合したものである。6は須臾器の甕片で、口唇部付近に稜がみられ、稜の近くには波状文が施されている。7の白玉は北寄りの覆土中層から、8の不明石製品は北西寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡は、当遺跡最大の住居跡である。床面の広範囲にわたって焼土と炭化材が確認されていることから焼失家屋と思われる。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第215図 1	坏 土師器	A 11.1	体部及び口縁部一部欠損。平底気味の丸底。体部は内轡しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はほぼ直立するが、口唇部はやや反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ、内面赤彩、外面赤彩汎。	砂粒・バミス 褐色 普通	P110 55% 南東壁際覆土上層
		B 5.9				
2	坏 土師器	A [13.6]	径部から口縁部の破片、平底。体部は内轡しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はやや内轡して、立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう張り、内面ナデ。底部へう張り後ナデ。	砂粒・石英・長石・バミス 淡黄褐色 普通	P111 30% 南東壁際覆土中層
		B 5.0				
		C [3.4]				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第215図 3	陶 土 師 器	A [13.6] B 9.1 C 4.3	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内削り状に立ち上がり直立する。口唇部は突る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位へラ磨き、下位及び内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P112 35% 東コーナー付近 覆土下層
4	陶 土 師 器	A 16.3 B (14.4)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・長石・ バミス にぶい赤褐色 普通	P114 25% 南西寄り覆土下 層 二次焼成
5	陶 土 師 器	A [21.0] B 27.3 C 8.1	体部一部欠損。無底式で穿孔が穿たれている。体部は内彎しながら立ち上がり、体部中位に最大径を持ち、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	砂粒・石英・長石・ 雲母・スクリップ にぶい橙色 普通	P113 55% PL54 北西付近覆土下 層

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第215図7	臼	0.5	0.5	0.2	0.2	0.1	100	滑石	北寄り覆土中層	Q88
8	不明石製品	4.5	3.0	0.4	—	7.2	不明	粘板岩	北寄り覆土下層	Q89

第31号住居跡 (第216図)

位置 調査区の北東部、C5a区。

規模と平面形 長軸7.90m、短軸5.48mの長方形。

主軸方向 N-39°-E

壁 壁高は20~28cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北東壁際の一部を除いて、ほぼ全周する。

床 平坦である。北西方向の広い範囲から少量の炭化材及び焼土粒子が確認されている。床面の踏み固まった硬化部分は見られない。耕作による攪乱を受けている。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₃は長径25~40cm、短径20~35cmの楕円形及び不整形円形で、P₄は径25cmの円形である。深さ70~100cmで、各コーナーから中央寄りに付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 中央から北西寄りに付設され、長径62cm、短径45cmの楕円形で、床面を6cm掘り窪めた地床炉である。覆土は2層に分かれ、土層1のにぶい赤褐色土及び土層2の暗赤褐色土からは焼土ブロックが確認されている。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

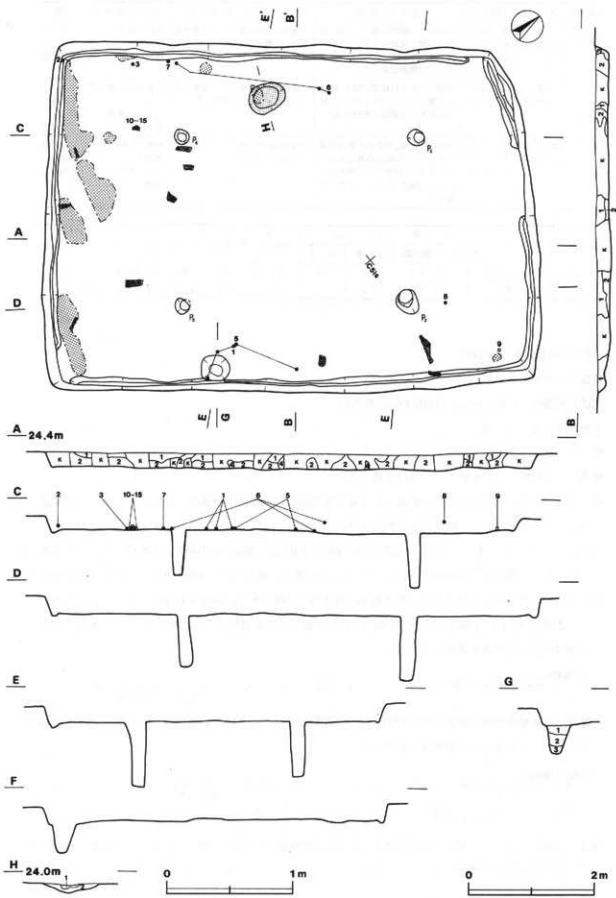
1 にぶい赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量 2 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、ローム粒子微量

貯蔵穴 南東壁中央部の壁際付近に付設され、平面形は長径45cm、短径40cmの隅丸長方形で、深さは49cmである。断面形はU字形で、底部は皿状である。

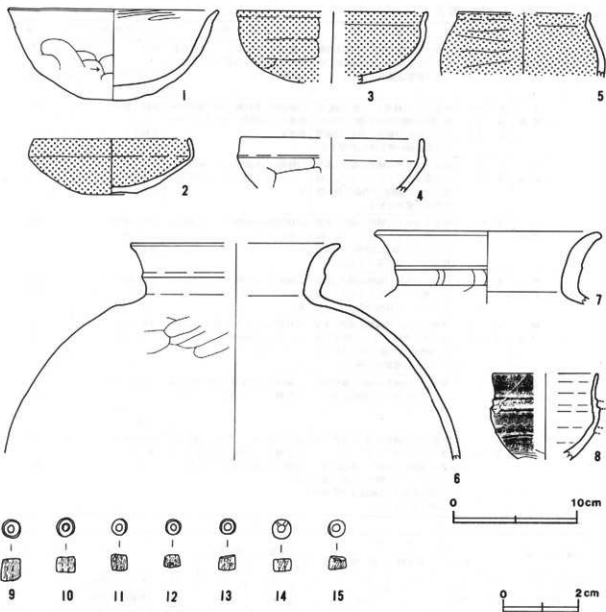
貯蔵穴土層解説

1 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量 3 明褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量

覆土 4層から成る。土層1の黒褐色土及び土層2の暗褐色土が覆土下層から上層に厚く堆積し、焼土ブロックと炭化物の混入が確認でき、また、各層にはロームブロックの混入もみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。



第216图 第31号住居跡実測図



第217図 第31号住居跡出土遺物実測図

覆土土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロッ | 3 褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ク・焼土粒子・炭化物微量 | 4 褐色 | ローム中ブロック多量、ローム粒子中量 |
| | ローム中アブロック・ローム粒子中量、ローム小ブ | | |
| | ック少量、焼土粒子・炭化材・炭化物微量 | | |

遺物 覆土中層から床面直上にかけて土師器片が中量出土し、その他、須恵器片も出土している。第217図1の
 坏は、南東寄りの床面直上から逆位の状態で出土している坏に土師器片が接合したもので、2・3の坏は西
 コーナー付近の覆土下層と床面直上から出土している。5の碗は南東壁寄りの床面直上の土師器片が接合し、
 6の甕は北西寄りの床面直上から正位の状態では出土している口縁部に土師器片が接合したものである。7の
 甕は北西壁際の床面直上から、8の須恵器の把手付碗は東寄りの覆土中層から斜位の状態では出土している。
 9～15の白玉は、9の白玉が東コーナー付近の床面直上から出土している以外は、全て西寄りの床面直上か
 ら集中して出土している。

所見 本跡は、床面から確認された炭化材及び焼土から焼失家屋と考えられる。時期は、出土遺物から5世紀
 後半と考えられる。

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第217図 1	坏 土師器	A 16.9	体部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口部は僅かに反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面僅かへう削り、内面ナデ。底部へう削り後ナデ。	砂粒・スコリア・パミス にふい橙色	P116 80% PL53 南東寄り床面直上 二次焼成
		B 7.2				
		C 3.8				
2	坏 土師器	A 12.6	体部から口縁部に一部欠損。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は外面に弱い稜を持ち、内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部へうナデ。内・外面赤彩。	砂粒・炭母・パミス 赤褐色 西コーナー付近 直上層	P117 60% PL33 西コーナー付近 直上層
		B 4.4				
		C 4.2				
3	坏 土師器	A [15.3]	体部下位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は内面に弱い稜を持ち、僅かに反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へうナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・パミス 赤褐色 普通	P118 20% 西コーナー付近 床面直上
		B (5.7)				
4	坏 土師器	A [14.8]	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は外面に明瞭な稜を持ち、ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へうナデ。	砂粒・炭母・パミス にふい橙色 普通	P119 20% 覆土中
		B (4.2)				
5	碗 土師器	A [10.6]	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・炭母・パミス 赤褐色 普通	P120 10% 南東壁寄り床面 直上
		B (5.0)				
6	罍 土師器	A [17.0]	体部中位から口縁部の破片。体部は大きく内彎しながら頸部に至る。頸部中位に張り出しのある稜を持ち、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面及び頸部上位横ナデ。下位及び体部外面へう削り後ナデ。内面へうナデ。	砂粒・長石・パミス にふい褐色 普通	P121 15% 北西寄り床面直上
		B 17.3				
7	罐 土師器	A 18.3	頸部から口縁部の破片。頸部中位に弱い稜を持ち、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面及び頸部内・外面中位横ナデ。下位縦位のへうナデ。	砂粒・石英・長石・パミス にふい黄褐色 普通	P122 5% 北西壁際床面直上
		B (5.3)				
8	把手付 須恵系	A [8.5]	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、中位に1条、口縁部との境に2条の凸縁と段を持ち、その間に、7条の縞模倣状文を施す。口縁部はやや外傾気味に立ち上がる。	巻き上げ、横ナデ成形。口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位及び内面横ナデ。体部外面下位回転へうナデ。	砂粒・長石 黄灰色 良好	P123 15% PL53 東寄り覆土中間
		B (6.9)				

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第217図9	白 玉	0.5	0.5	(0.6)	0.2	(0.2)	80	滑石	東コーナー付近直上	Q90
10	白 玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.2	100	滑石	西寄り床面直上	Q91
11	白 玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.2	100	滑石	西寄り床面直上	Q92
12	白 玉	0.4	0.4	0.3	0.2	0.1	100	滑石	西寄り床面直上	Q93
13	白 玉	0.4	0.4	0.4	0.2	0.2	100	滑石	西寄り床面直上	Q94
14	白 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	100	片岩	西寄り床面直上	Q95
15	白 玉	0.4	0.4	0.3	0.2	0.1	100	滑石	西寄り床面直上	Q96

第33号住居跡 (第218図)

位置 調査区の北西部, C4区。

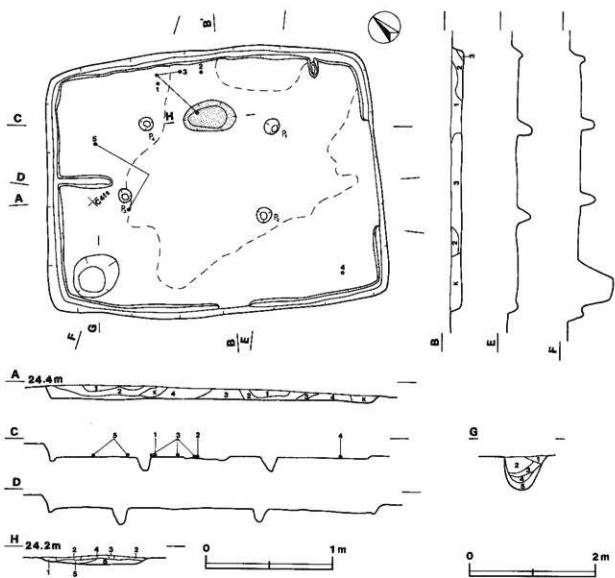
規模と平面形 長軸5.40m, 短軸4.20mの長方形。

主軸方向 N-47°-W

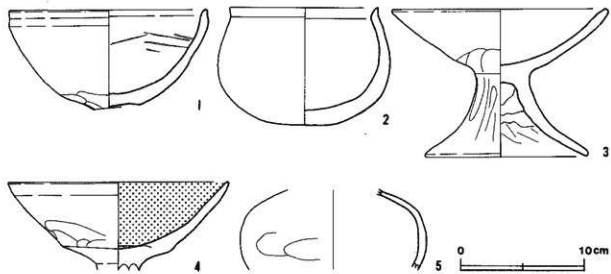
壁 壁高は9~23cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 南東壁際と南西壁際の一部を除いて、ほぼ全周する。

間仕切り溝 北東壁から1条、北西壁から1条それぞれ中央に向かって伸びている。幅15~20cm, 深さ7~14cmで、断面はU字形である。北東壁から伸びる間仕切り溝はビット状に深い掘り込みを持っている。



第218图 第33号住居跡実测图



第219图 第33号住居跡出土遺物実测图

床 平坦である。中央付近の床面には踏み固まった硬化部分の広がりが見られる。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₂, P₄は長径23~25cm, 短径20~23cmの楕円形で, P₁, P₃は径20~25cmの円形である。深さは20~25cmで, それぞれ中央寄りに付設され, 配列的には他の住居で確認できたピットより接近し過ぎているが, 主柱穴と考えられる。

炉 中央から北東寄りに付設され, 長径85cm, 短径50cmの楕円形で, 床面を7cm掘り窪めた地床炉である。下層にあたる土層5, 6のふいふ赤褐色土及び赤褐色土からは焼土ブロックが中量ないし多量確認されており, 土層3の暗褐色土には粘土粒子の混入もみられる。炉床は火熱を受け赤硬化している。

炉土層解説

1	暗赤褐色	焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量	4	ふいふ赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量, 炭化物・ローム粒子・粘土粒子少量
2	褐色	焼土小ブロック中量, 焼土粒子・炭化物少量, ローム粒子微量	5	ふいふ赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量, ローム粒子少量, ローム粒子微量
3	暗褐色	焼土小ブロック・焼土中量, 炭化物・ローム粒子微量	6	赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量, 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量

貯蔵穴 西コーナー付近に付設され, 平面形は長径80cm, 短径65cmの楕円形で, 深さは55cmである。断面はU字形で, 底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量, 炭化物・ローム小ブロック微量	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化物微量
2	暗褐色	ローム小ブロック中量, 炭化物・ローム粒子少量, 焼土粒子・ローム中ブロック微量	5	褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
3	黒褐色	炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量			

覆土 4層から成る。覆土は, 全体的に堆積状況に乱れが見られ, 各層にはロームブロックの混入が確認され, 南東及び北西方向からの人為的な埋戻しが行われたものと考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック微量	3	褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量	4	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量

遺物 北寄りの床面直上から土師器片が中量出土している。第219図1の坏は, 北寄りの床面直上から正位の状態出土している3の高坏の下から, 重なり合うように正位の状態出土している。2の椀は北東壁際付近の床面直上から, 4の高坏は南コーナー付近の床面直上から正位の状態出土している。5の埴は北寄りの床面直上から出土している土師器片が接合したものである。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第219図1	坏	A 15.6	体部及び口縁部一部欠損。平底, 体部は扁平で, 外縁して立ち上がる。口縁部外面に強い稜を持ち, 口唇部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ, 下位へラ削り, 内面へラナデ。底部へラ削り。体部内面へラ削り。	砂粒・長石・雲母 普通	P124 80% 北寄り床面直上 二次焼成
	土師器	B 8.0				
	C 3.8					
2	腕土師器	A 11.9	体部から口縁部一部欠損, 平底気味の丸底。体部は内張りしながら立ち上がり, 口縁部に至る。口縁部は内張り状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	P128 65% PL53 北東壁際付近床面直上 二次焼成
	B 9.4					
3	高坏	A 17.1	裾部及び坏部一部欠損。脚部はラック状に下方に開く。坏部下位に強い稜を持ち, 外上方に開く。	口縁部内面横ナデ, 坏部外面へラナデ, 内面ナデ。坏部下位から脚部縦位のへラナデ, 脚部内面横ナデ。	砂粒・石英・長石 ふいふ褐色 普通	P126 75% PL53 北寄り床面直上
	土師器	B 11.8				
	D [12.8]					
	E 6.6					

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第219図 4	高 坏 土 師 器	A 18.6 B (7.1)	坏部の破片。下位に椀を持ち、外上方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ、内面ナデ。内面赤彩。	砂粒・長石・霏母にふい橙色普通	P127 40% 南コーナー付近 床面直上 外面煤付着
5	塔 土 師 器	B (6.4)	体部中位の破片。中位は潰れた球形形状を呈する。	体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・霏母 橙色 普通	P125 10% 北寄り床面直上 体部外面煤付着

第34号住居跡 (第220図)

位置 調査区の北西部, C4区。

規模と平面形 長軸1.98m, 短軸1.96mの方形。

主軸方向 N-23°-E

壁 壁高は5~10cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた堅緻な部分のみられない。

覆土 4層から成る。土層1, 2の黒褐色土及び褐色土には炭化物及びロームブロックの混入が見られ、南東方向から埋め戻されたものと考えられる。人為堆積である。

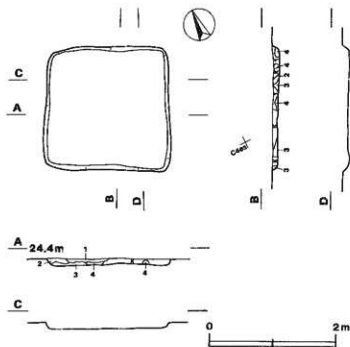
土層解説

1 黒褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量 3 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量

2 褐色 ローム粒子中量, 炭化物・ローム小ブロック少量 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 確認面に近い覆土上層から少量の土師器片が出土していたが、遺構に伴う出土遺物なのかは確認できなかった。

所見 本跡は、当遺跡の中で最も小型の建物跡で、炉、柱穴及び貯蔵穴の内部施設が確認されないことから、住居以外の目的をもった遺構と考えられる。特に、位置関係から隣接する住居跡との関係が推測できる。時期は、出土している土師器片の様相から5世紀後半頃と思われる。



第220図 第34号住居跡実測図

第36号住居跡（第221図）

位置 調査区の北西部，C4a区。

規模と平面形 長軸6.00m，短軸5.80mの方形。

主軸方向 N-13°-E

壁 壁高は22~37cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 東壁及び南壁の一部を除いて周回する。幅25cm，深さは15~25cmで，断面はU字形である。

床 ほぼ平坦である。床面は壁沿いを除いて全体が踏み固められ，堅緻である。

ピット 4か所（P₁~P₄）。P₁~P₄は長径85~100cm，短径70~100cmの楕円形及び不定形で，深さは95~100cmである。何れも各コーナーから中央寄りに付設され，規模や配列から主柱穴と考えられる。各ピットとも柱穴の周囲を大きく掘鉢状に掘り込み，その後，深く掘り下げている。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，
ローム中ブロック極微量 | 4 暗褐色 | ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，ローム中
ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量，焼土
粒子極微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中
ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロッ
ク少量，炭化物微量 | | |

炉 中央から西壁寄りに付設され，長径110cm，短径65cmの楕円形で，床面を6cm掘り窪めた地床炉である。覆土は2層に分かれ，いずれも暗赤褐色土で焼土ブロックを含み，炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|--|--------|---------------------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化物・ローム中
ブロック少量，ローム粒子極微量 | 2 暗赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒中量，
炭化物・ローム粒子微量 |
|--------|--|--------|---------------------------------------|

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され，平面形は径70cmの円形で，深さ65cmである。南東壁は垂直に立ち上がり，西壁は傾斜して立ち上がっている。底部は平坦である。覆土中層から上層の堆積土には焼土粒子や炭化物の混入が確認されている。

貯蔵穴土層解説

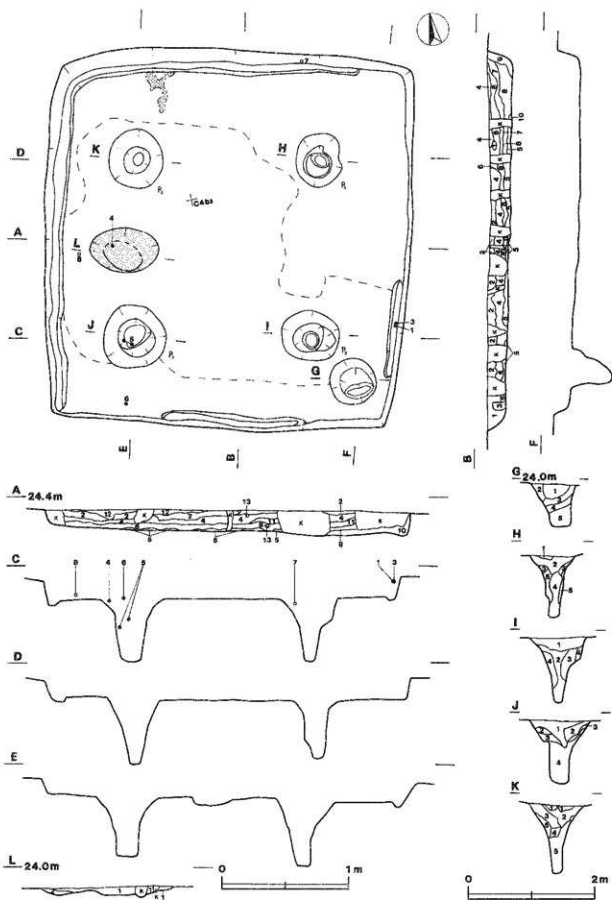
- | | | | |
|-------|---|-------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブ
ロック微量，ローム粒子極微量 | 4 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック微量，焼土粒子・炭化物・ローム
粒子極微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中
ブロック微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子
極微量 | | |

覆土 13層から成る。土層10の褐色土を除く各層から焼土粒子が確認され，土層9，10，12以外の各層からは炭化粒子も確認されている。覆土の堆積状況に大きな乱れはみられないが，覆土中の混入物から人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。

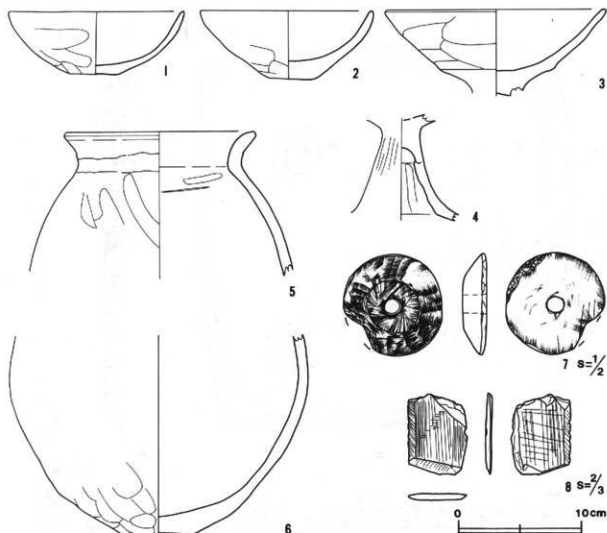
土層解説

- | | | | |
|-------|--|--------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化粒子・ローム
小ブロック極微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子極微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・ローム小ブロッ
ク極微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブ
ロック極微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量 | 9 褐色 | 焼土粒子微量，ローム粒子極微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化粒子・ローム
中ブロック・ローム小ブロック極微量 | 10 褐色 | ローム小ブロック微量，ローム中ブロック・ローム
粒子極微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブ
ロック微量 | 11 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブ
ロック極微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブ
ロック極微量 | 12 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック極微
量 |
| | | 13 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |

遺物 覆土上層から床面直上にかけて土師器片が少量出土している。第222図1の環と3の高環は，正位の状態
で出土している環に高環の環部が逆位に伏せた状態で出土し，その内部からアカニシが1点出土している。
4の高環は北西寄りの床面直上から，6の甕は南寄りの床面直上から斜位の状態
で出土している。5の甕はP₃の覆土中層位から出土している土師器片が接合したものである。その他，7の紡錘車が北壁際の壁溝の中



第221图 第36号住居跡実測図



第222図 第36号住居跡出土遺物実測図

から、8の不明石製品は西壁寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡は、当遺跡の住居跡の中でも取り分け大きな柱穴痕がみられ、出土遺物などから祭祀行為との関係が考えられる。時期は、5世紀後半と思われる。

第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第222図 1	坏 土 器	A 14.0	体部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。底部へラ削り。内・外面赤彩痕。	砂粒・長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P133 75% PL54 覆土上面 二次焼成
		B 5.3				
		C 3.8				
2	坏 土 器	A 13.9	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は外上方に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石・雲母 にふい褐色 普通	P134 65% 覆土中
		B 5.5				
		C 3.8				
3	高 坏 土 器	A 17.9	坏部の破片。下位に明瞭な稜を持ち、外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・石英・バミス にふい褐色 普通	P135 40% PL54 覆土上面
		B (6.5)				
4	高 坏 土 器	B (8.5)	脚部の破片。下方に、ラッパ状に開く。	脚部外面縦位のへラナデ。内面輪痕み痕。	砂粒・長石・雲母 にふい黄褐色 普通	P136 20% 北西寄り床面直上
		E (7.2)				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第222図 5	嬰 土 師 器	A 15.0	体部中位から口縁部の破片。体部 は内彎しながら立ち上がり、口縁 部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 斜位のヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P137 20% 覆土中 二次焼成
		B (11.0)				
6	嬰 土 師 器	B (15.9)	体部から体部中位の破片。平底。 体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面縦なヘラ削り、内面ナデ。 底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・ 雲母・バミス により黄褐色 やや不貞	P138 45% 南寄り床面直上 内面縁付着
		C 5.8				

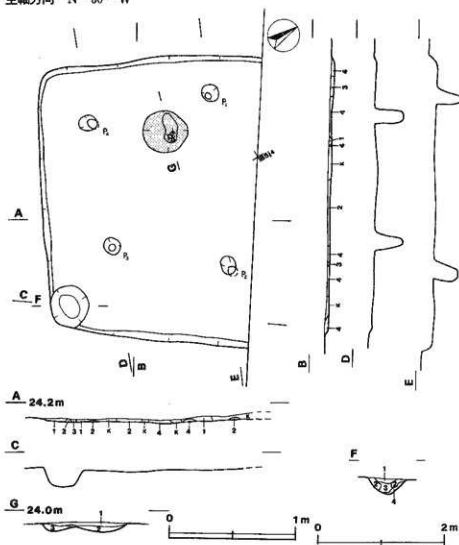
図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第222図7	紡 錘 車	(5.4)	5.3	1.3	0.9	50.4	80	片岩	北壁溝覆土中	Q99 PL55 体部外面縁刻
8	不明石製品	3.2	2.3	0.2	—	2.9	不明	粘板岩	西壁寄り覆土下層	Q100

第43号住居跡 (第223図)

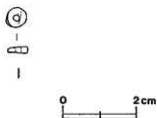
位置 調査区の北部中央, B5₃区。

規模と平面形 長軸4.62m, 短軸(3.63)mで、本跡の北側は調査区外に延びているため、平面形は長方形と推定される。

主軸方向 N-60°-W



第223図 第43号住居跡実測図



第224図 第43号住居跡出土遺物実測図

壁 壁高は2～15cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦である。床面には踏み固められた堅緻な部分が見られない。

ピット 4か所 (P₁～P₄)。P₁～P₄は長径27～30cm、短径25～27cmの楕円形及び不整形円形で、深さは35～45cmである。何れも各コーナーから中央寄りに付設され、規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 中央からやや西壁寄りに付設され、径70cmの円形で、床面を8cm掘り窪めた地床炉である。土層1、2のよい赤褐色土及び赤褐色土には焼土ブロックの混入が確認された。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 濃い赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
 2 赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子少量

貯蔵穴 南コーナー付近に付設され、平面形は径60cmの円形で、深さ25cmである。断面はU字状で、底部は皿状である。

貯蔵穴土層解説

- 1 極暗赤褐色 炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量、焼土小ブロック微量
 2 極暗赤褐色 焼土中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
 3 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
 4 暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土 4層から成る。覆土の堆積状況は浅く、全体の層位の把握は困難であるが、土層1、3の焼土粒子及び土層1～3の炭化物の混入をみると、人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量
 2 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量、炭化物微量
 3 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量
 4 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物 覆土上層から土師器片が少量と、覆土中から白玉が1点出土している。

所見 本跡の時期は、出土している土師器片から5世紀後半と考えられる。

第43号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	孔径					
第224図1	白 玉	0.5	0.5	0.2	0.1	0.1	100	片岩	覆土中	Q101

(2) 竪穴遺構

竪穴住居跡として調査した第29号、31号及び32号住居跡は、内部施設を付設せず、遺構の確認状況が他の住居跡と明確に区別できるため、住居以外の目的をもつ建物跡と考えられる。そこで、これらの3軒を第1～3号竪穴遺構とし、遺構と遺物について記載する。

第1号竪穴遺構 (第225図)

位置 調査区の北東部, C5₆区。

規模と平面形 長軸4.36m, 短軸3.87mの長方形。

長軸方向 N-57°-W

壁 壁高は7~14cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 踏み固まった部分はみられない。

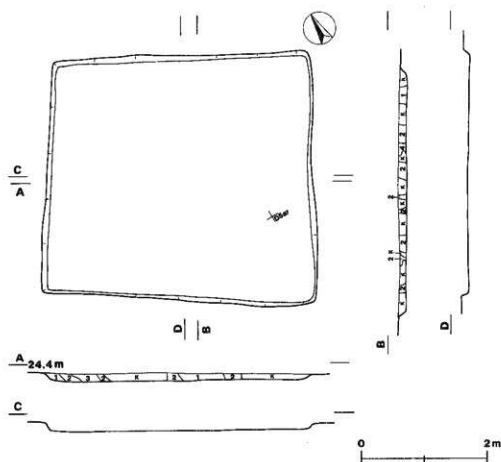
覆土 3層から成る。にぶい褐色土及び褐色土にはロームブロックの混入が確認され, 層位の乱れもみられ, 人為堆積の様相を呈している。

土層解説

- | | | |
|---|-------|------------------------------|
| 1 | にぶい褐色 | ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量 |
| 3 | 褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 |

遺物 覆土中から土師器の坏, 甍片が79点と, 須恵器片が2点出土している。

所見 本跡は, 住居跡にみられる内部施設を持たず, 住居以外の目的をもった建造物であったように考えられる。時期は, 出土している土師器片の様相から, 5世紀後半頃と考えられる。

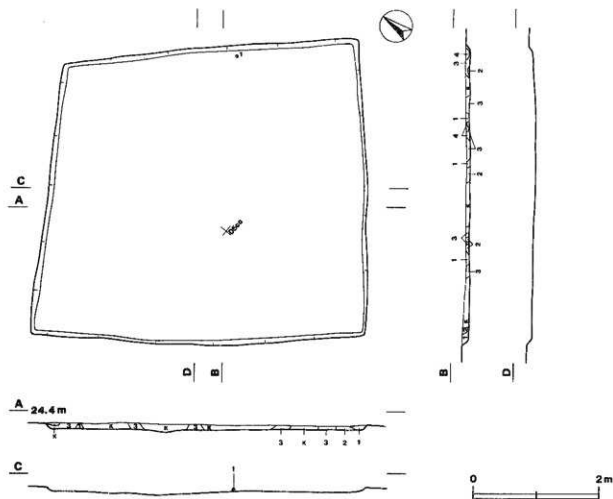


第225図 第1号竪穴遺構実測図

第2号竪穴遺構 (第226図)

位置 調査区の北東部, D5_c区。

規模と平面形 長軸5.29m, 短軸4.69mの長方形。



第226図 第2号竖穴遺構実測図



第227図 第2号竖穴遺構出土遺物実測図

長軸方向 N-40°-W

壁 壁高は4~9cmで、外傾して立ち上がる。

床 やや凹凸がみられ、踏み固まった部分はみられない。

覆土 3層から成る。各層にはロームブロックの混入がみられ、中央部の一部には堆積状況のやや乱れも確認できることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック散見
- 2 明褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック散見
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物 覆土中から環片2点、壺片2点が出土しているが、掘り込みが浅く、遺構に伴うものは壺片の中の1点

である。

所見 本跡は、住居跡にみられる内部施設を持たず、規模的には他の住居と変わらぬ様相を呈するが、遺構の確認状況が明確でないこともあり、ここでは竪穴遺構として扱った。時期は、覆土中から出土している土師器片から5世紀後半頃と考えられる。

第2号竪穴遺構遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第227図 I	壺 土師器	B 1.7 C 4.7	底部から体部下位の破片。上げ蓋 気味の平底。	体部外面へラ削り後ナデ、内面ナ デ。底部へラ削り。	砂粒・石英・長石・ バミス に多い赤褐色 普通	P115 5% 覆土中 体部外面残存着

第3号竪穴遺構(第228図)

位置 調査区の北西部、C4c区。

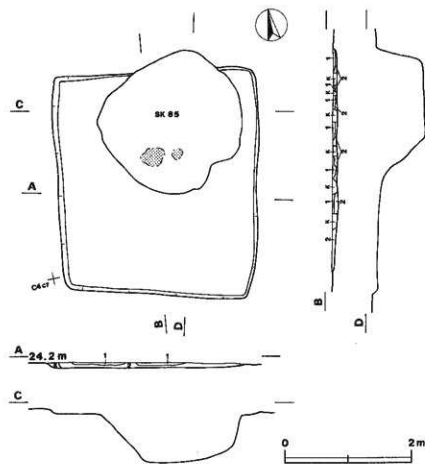
重複関係 本跡の中央部から北壁の一部にかけ、第85号土坑によって掘り込まれている。本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸3.66m、短軸3.14mの長方形。

長軸方向 N-27-E

壁 壁高は3~9cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 土坑によって掘り込まれているため、全体の様子は把握できないが、おおよそ平坦な形状を呈しているものと思われる。踏み固まった部分はみられない。



第228図 第3号竪穴遺構実測図

覆土 2層から成る。いずれもロームブロックを含む褐色土である。

土層解説

1 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量 2 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

遺物 覆土中から極少量の土師器片が出土している。

所見 本跡は、住居跡にみられる内部施設を持たず、生活痕跡がみられないことから、住居以外の目的をもった建造物として建てられた可能性が考えられる。時期は、出土している土師器片の様相から5世紀後半頃と考えられる。

(3) 土坑

今回の調査では、古墳時代の土坑を2基確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

第37号土坑 (第229図)

位置 調査区の中央部、E5b2区。

規模と平面形 長径2.12m、短径2.08mの不整形円形で、深さは2.37mである。

長径方向 N-49°-W

壁面 底部から中位にかけて壁は垂直に立ち上がり、その後、外傾して立ち上がる。

底面 平坦。粘土層で堅い。

覆土 9層から成る。覆土中層位まで堆積する第1, 2, 4, 5層は焼土粒子及び炭化物を含み、土層7以下は粘土粒子及び粘土ブロックを含み、砂の混入もみられる。覆土下層から中層は自然堆積と考えられるが、上層は人為的に埋め戻されたものと思われる。

土層解説

1 褐色 褐色 焼土粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量、焼土粒子・ローム粒子微量 6 におい褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量 7 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、粘土粒子・粘土ブロック少量
3 におい褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量 8 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム小ブロック・粘土粒子微量
4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量 9 におい褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、粘土粒子・粘土ブロック微量
5 褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量

遺物 覆土中層から上層にかけて土師器片が少量出土している。第230図1の環、2の甕はいずれも覆土上層から中層位にかけて出土したものである。

所見 本跡は、底面から白色粘土が確認され、詳細な性格は不明であるが、遺構の形状から井戸状遺構の可能性もある。本跡の時期は、出土遺物から5世紀後半と思われる。

第81号土坑 (第229図)

位置 調査区の南部、G4b6区。

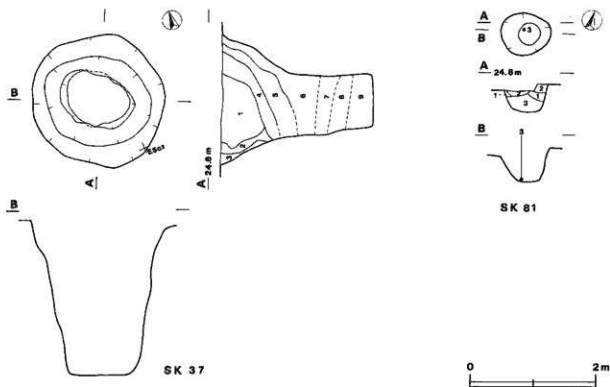
重複関係 本跡は、第3号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径0.79m、短径0.65mの楕円形で、深さは0.48mである。

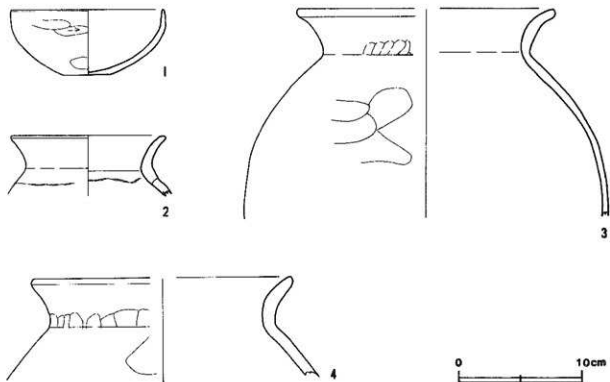
長径方向 N-74°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状で、堅い。



第229図 第37・81号土坑実測図



第230図 第37・81号土坑出土遺物実測図

覆土 3層から成る。いずれも暗褐色土で、ロームブロックを含んでいる。人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量
2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量

3 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子極微量

遺物 覆土中から土師器片131点が出土している。第230図3、4の壺が覆土下層から正位の状態出土している。

所見 本跡は、第3号住居跡と重複し、その位置関係から貯蔵穴の可能性も考えられたが、土層の堆積状況から土坑として取り扱った。時期は、出土遺物から5世紀後半と考えられる。

第37号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第230図 1	坏 土師器	A 12.2 B 5.2 B 3.6	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・石英・長石・バミス に多い赤褐色 普通	P139 60% 覆土上層及び中層
2	壺 土師器	A 12.4 B (4.7)	頸部から口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・バミス 赤褐色 普通	P140 10% PL54 覆土上層及び中層

第81号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第230図 3	壺 土師器	A [20.7] B (16.5)	体部中位から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は丸味を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。頸部外面指圧痕。口縁部外面赤彩痕。	砂粒・石英・雲母 に多い褐色 普通	P141 15% 覆土下層
4	壺 土師器	A [20.6] B (8.0)	体部上位から口縁部の破片。口縁部はやや緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。頸部外面指圧痕。	砂粒・石英・長石・バミス に多い黄褐色 普通	P142 15% 覆土下層

3 平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

当遺跡からは、調査区の北西部で平安時代の竪穴住居跡を1軒確認した。以下、その特徴や主な出土遺物について記載する。

第35号住居跡 (第231図)

位置 調査区の北西部、C4a区。

規模と平面形 長軸5.10m、短軸3.80mの長方形。

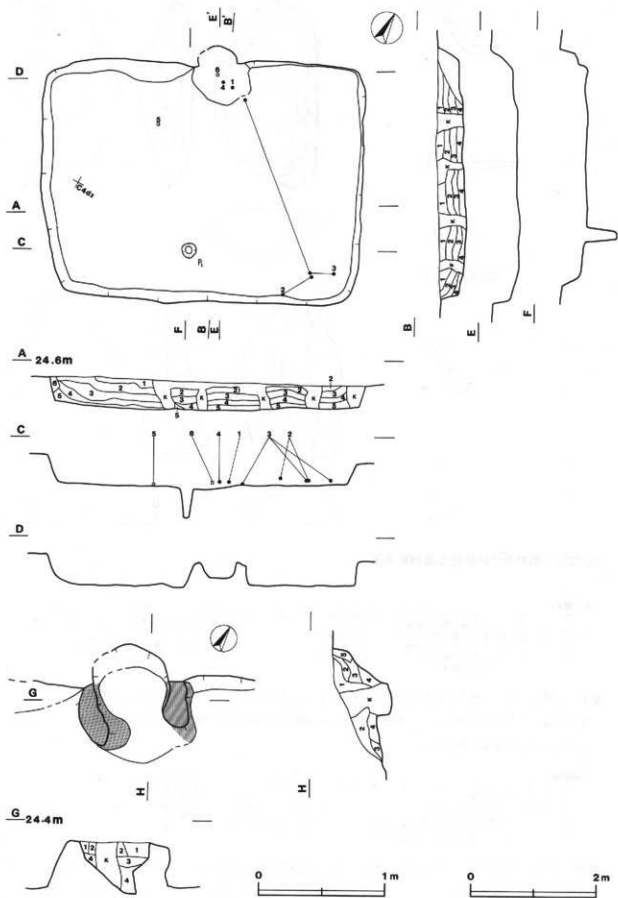
主軸方向 N-30°-W

壁 壁高は26~43cmで、垂直に立ち上がる。

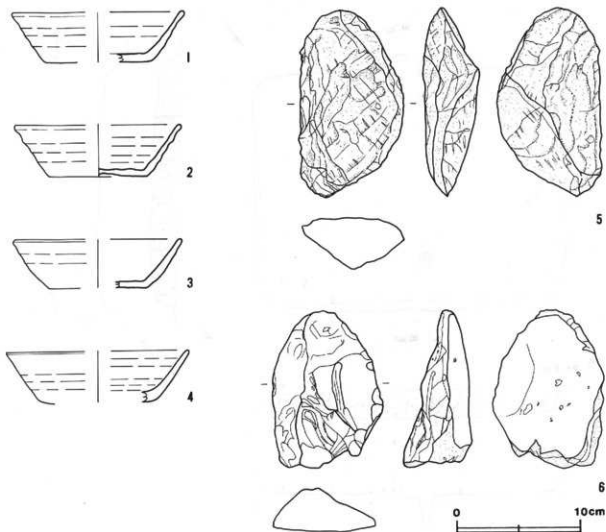
床 中央付近に僅かに窪みがある。床面には踏み固まった硬化部分はみられない。

ピット 1か所(P₁)。P₁は南東壁から中央寄りに付設され、径23cmの円形で、深さは45cmである。規模や位置から出入口に伴うピットと考えられる。

竈 北西壁中央からやや北寄りの壁面を約35cm壁外に掘り込み、砂混じりの粘土で構築されている。規模は、長さ90cm、幅90cmである。天井部は崩落し、両袖部の一部は削平されているが残存状態は良い。燃焼部には焼土ブロック、炭化物の堆積がみられる。火床部は5cm掘り窪められ、熱を受けて赤変硬化し、内壁の一部も焼土化している。煙道の立ち上がりは確認できなかったが、火床部から奥壁の立ち上がりは約30度である。竈中央部は北西方向から南東方向に向かって攪乱を受けている。



第231图 第35号住居跡・竈突測図



第232図 第35号住居跡出土遺物実測図

覆土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------------|---------|---|
| 1 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、焼土中ブロック・炭化物・灰微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化材・炭化物・ローム粒子少量、粘土微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化材・炭化物・ローム粒子・灰微量 | 5 ぶい赤褐色 | ローム粒子中量、炭化物・灰微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・灰微量 | | |

覆土 6層から成る。覆土の堆積状況に乱れがみられず、各層にはロームブロックの混入も確認されているが、覆土下層にみられる土層4、5の褐色土及びぶい褐色土の混入物に焼土粒子や炭化物が含まれていないことなどから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量 | 4 褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 5 ぶい褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子微量 | 6 明褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量 |

遺物 竈内覆土下層と東コーナー付近の覆土下層から須恵器片が少量出土している。第232図1と4の坏片は竈内覆土下層から横位と斜位の状態で出土している。2の坏片は、東コーナー付近の覆土下層から出土している坏片が接合したものである。3の坏は竈付近と東コーナー付近の床面直上から出土している坏片と覆土下

層から出土している破片が接合したものである。5の不明石製品は西寄りの床面直上から出土し、6の石製支脚は竈内覆土下層から出土している。

所見 本跡は、この住居跡の竈は、両袖部を耕作による攪乱で削平されているものの、全体の残存状態は比較的良好なものであった。住居内からは主柱穴が確認できず、遺構外に構築されていたものと思われる。時期は、出土遺物から9世紀前半と考えられる。

第35号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第232図 1	環須恵器	A [13.6] B 4.0 C [8.0]	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	体部内・外面横ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石・雲母 明褐色 普通	P129 60% PL54 竈内覆土下層 二次焼成
2	環須恵器	A [13.4] B 4.2 C 7.9	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部へラ削り。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	P130 60% PL54 東コーナー付近 覆土下層
3	環須恵器	A [13.6] B 3.9 C [4.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部へラ削り。	砂粒・石英・雲母 灰色 普通	P131 40% 竈付近及び東 コーナー付近の 覆土下層
4	環須恵器	A [14.4] B 4.2 C [8.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P132 15% 竈内覆土下層

図版番号	種別	計測値 (cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第232図5	不明石製品	15.0	8.1	4.5	568.3	100	雲母片岩	西寄り床面直上	Q97
6	石製支脚	12.6	5.5	3.5	296.7	100	花崗岩	竈内覆土下層	Q98 支脚への転用

4 その他の遺構と遺物

(1) 土坑

調査区の全域から確認した土坑には、形状や規模に各々差異が認められ、伴出遺物も殆どなく、時期や性格が不明のものも多い。ここでは、特徴的な土坑について取り上げ、その他は一覧表(表22)に記載した。

第35号土坑(第233図)

位置 調査区の中央部、E4区。

規模と平面形 長軸2.35m、短軸1.52mの隅丸長方形で、深さは1.04mである。

長径方向 N-55°-E

壁面 南西壁に段を持ち、外傾して立ち上がる。

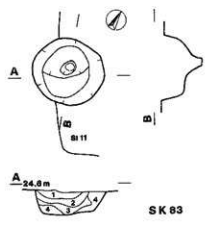
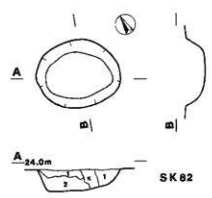
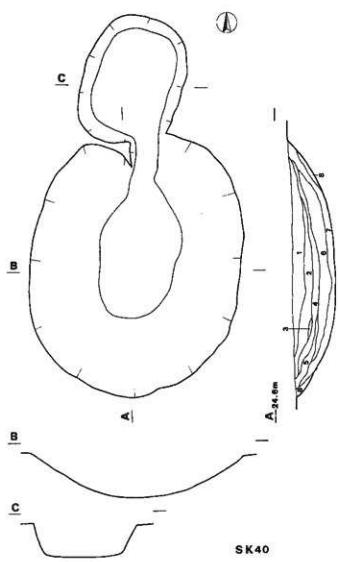
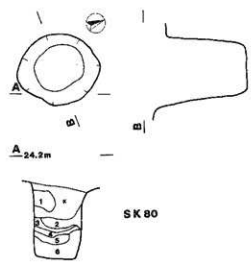
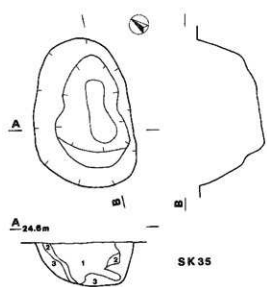
底面 南西側に落ち込みがみられ、やや傾斜している。

覆土 3層から成る。土層1は焼土粒子、炭化材及び炭化物を含む暗褐色土で覆土下層から上層にかけ厚く堆積している。堆積状況の乱れから人為的に埋め戻しが行われたものと考えられる。

土層解説

- 褐色 ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化材微量
- 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 明褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック微量

遺物 出土していない。



第233图 第35·40·80·82·83号土坑实测图

所見 本跡は、出土遺物がないことから時期や性格は不明である。

第40号土坑（第233図）

位置 調査区の中央部，D4_南区。

規模と平面形 長径6.00m，短径3.15mの不定形で，深さは0.70mである。

長径方向 N-8°-E

壁面 緩やかな外傾部分と，外傾して立ち上がる部分とに分けられる。

底面 皿状の部分と平坦な部分とに分けられ堅い。

覆土 8層から成る。覆土は暗褐色土，暗赤褐色土及び褐色土から成り，土層2，3，5，7には炭化材及び炭化物の混入がみられる。覆土中層の土層4には砂や灰の混入もみられる。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

1 暗赤褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化物少量	5 暗赤褐色	炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 暗赤褐色	焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化材・炭化物微量	6 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
3 暗褐色	炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化材微量	7 暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化材・炭化物微量
4 暗褐色	焼土粒子少量，焼土小ブロック・砂・灰微量	8 褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

遺物 覆土中や底面から土師器片27点及び瓦片1点が出土している。

所見 本跡は，溜鉢状の遺構を35cmの通路状の掘り込みで結び付けた隅丸長方形の小形遺構と結びつけた形状を呈し，その通路状にあたる部分の底部からは少量の炭化材が出土している。この付近では天井部を持たない，こうした炭焼窯が存在していたとの話が地元住民からあり，それから考えると，溜鉢状の遺構が窯体部にあたり，隅丸長方形の遺構が焚口部にあたるのではないかと考えられるが，窯体部にあたる部分からは焼土等も確認されず，底部も熱を受け赤変硬化していないことから，炭焼窯跡の可能性はあるが実態は不明である。時期は，遺構の形態及び地元住民の話から近世以降に構築された可能性が高い。

第80号土坑（第233図）

位置 調査区の北東部，D6_北区。

規模と平面形 長径1.32m，短径1.11mの楕円形で，深さは1.25mである。

長径方向 N-13°-E

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 ほぼ平坦で，堅い。

覆土 6層から成る。各層からロームブロックの混入が確認され，その内，覆土中層にあたる土層4の褐色土には炭化物及び灰の混入が確認されている。人為堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量	4 褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・灰中量，炭化物微量
2 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量	5 褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
3 褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量	6 明褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量

遺物 土坑の中央部覆土上層から土師器片4点が出土している。

所見 本跡は，遺構の形態から井戸状遺構の可能性はあるが，性格の実態は不明である。時期は，底面からの

出土遺物がなく、上層から出土している遺物は流れ込みと考えられることから不明である。

第82号土坑（第233図）

位置 調査区の南西部，G4a5区。

重複関係 本跡は、第10号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径0.65m，短径0.53mの楕円形で、深さは0.35mである。

長径方向 N-35°-E

壁面 僅かに内彎して立ち上がる。

底面 平坦で、柔らかい。

覆土 2層から成る。いずれも暗褐色土で、ロームブロックを含んでいる。人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、第10号住居跡と重複し、その位置関係から貯蔵穴の可能性も考えられたが、土層の堆積状況から土坑として取り扱った。時期は、出土遺物がないので不明である。

第83号土坑（第233図）

位置 調査区の南東部，G4b6区。

重複関係 本跡は、第11号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.16m，短径1.03mの楕円形で、深さは0.63mである。

長径方向 N-75°-E

壁面 僅かに内彎して立ち上がる。

底面 皿状の様相を呈しているが、中央部に根によるとと思われる落ち込みがみられる。

覆土 4層から成る。覆土は暗褐色土及び褐色土で、各層からはロームブロックの混入がみられ、土層2からは焼土粒子と炭化物の混入もみられた。人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量

3 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量

4 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、第11号住居跡と重複しており、貯蔵穴の可能性も考えられたが、北西壁を大きく掘り込んでいることから、土坑として取り扱った。時期は、出土遺物がないことから不明である。

表22 単人山遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)				
2	G4a	N-64°-W	円形	1.24 × 1.15	56	緩斜	皿状	人為	土師器片20(燻)
3	G5c1	N-71°-E	不整形円形	1.13 × 0.84	26	緩斜	皿状	自然	
6	G5a1	N-61°-W	不整形円形	(2.23) × 0.83	25	緩斜	皿状	自然	土師器片9(燻)
7	G5a	N-54°-W	不整形円形	1.58 × 1.04	34	緩斜	皿状	自然	

土坑番号	位 置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	備 考
				長径×短径(m)	厚さ(cm)				
8	G5a	N-45°-W	不整楕円形	1.62 × 1.39	30	緩斜	皿状	人為	
9	G5a	N-8°-W	楕 円 形	2.06 × 1.23	25	緩斜	皿状	自然	
10	G4a	N-68°-E	不整方形	1.29 × 1.20	39	緩斜	皿状	自然	
11	F4a	N-13°-E	円 形	1.17 × 1.15	27	緩斜	皿状	自然	
12	G4a	N-10°-W	楕 円 形	0.95 × 0.82	21	緩斜	皿状	人為	土師器片3(要)
13	G4r	N-48°-W	不整円形	0.66 × 0.64	26	緩斜	皿状	自然	
14	F4a	N-9°-W	楕 円 形	1.10 × 0.98	12	外傾	皿状	自然	土師器片2(要)
15	F4a	N-44°-E	楕 円 形	1.11 × 0.93	30	外傾	皿状	人為	
16	F5a	N-69°-W	楕 円 形	1.95 × 1.24	32	緩斜	皿状	人為	
17	F5a	N-78°-W	楕 円 形	1.18 × 1.01	45	外傾	皿状	自然	
20	F5a	N-42°-W	円 形	0.84 × 0.81	42	外傾	皿状	人為	
21	F5a	N-86°-W	長楕円形	2.20 × 0.89	26	緩斜	皿状	人為	
22	F5a	N-64°-E	楕 円 形	2.20 × 1.42	26	緩斜	皿状	自然	
23	F5a	N-78°-W	不整楕円形	0.88 × 0.67	14	外傾	皿状	自然	
26	E4a	N-31°-W	楕 円 形	0.99 × 0.76	18	外傾	皿状	人為	
27	D4a	N-70°-W	不整楕円形	0.88 × 0.69	20	緩斜	皿状	自然	
30	E4r	N-35°-E	不整方形	1.32 × 1.24	23	外傾	平坦	自然	
32	E4r	N-87°-E	楕 円 形	0.86 × 0.64	25	外傾	皿状	自然	
33	E4a	N-76°-E	楕 円 形	0.93 × 0.74	25	緩斜	皿状	自然	
34	E4a	N-65°-E	楕 円 形	1.31 × 0.84	27	緩斜	皿状	自然	
35	E4a	N-55°-E	隅丸長方形	2.35 × 1.52	104	外傾	皿状	人為	
37	E5a	N-49°-W	不整円形	2.12 × 2.06	237	垂直	平坦	人為	土師器3(環2,要1),井戸状遺構の可能性あり。
38	E4a	N-43°-E	楕 円 形	1.10 × 0.92	25	外傾	平坦	自然	
40	D4a	N-8°-E	不 定 形	6.00 × 3.15	70	緩斜	皿状	人為	土師器片27(環2,要25),瓦片1,近世炭層遺構の可能性あり。
42	D4a	N-74°-W	楕 円 形	0.72 × 0.59	20	外傾	皿状	自然	
45	D4a	N-3°-E	楕 円 形	1.54 × 0.82	20	外傾	皿状	自然	
47	C4a	N-44°-W	不整楕円形	1.51 × 1.15	21	外傾	円凸	人為	
48	D4a	N-50°-E	不整楕円形	1.16 × 0.99	21	外傾	皿状	人為	
51	D4a	N-31°-W	楕 円 形	1.03 × 0.69	26	緩斜	皿状	自然	
52	D4a	N-75°-E	楕 円 形	1.07 × 0.68	22	外傾	皿状	自然	
65	C5a	N-18°-W	円 形	1.04 × 1.00	52	緩斜	平坦	人為	
69	C4a	N-65°-E	円 形	0.85 × 0.82	24	外傾	平坦	自然	
70	C4a	N-10°-E	円 形	0.70 × 0.68	39	外傾	平坦	自然	土師器片8(環4,要4)
71	C4a	N-36°-E	楕 円 形	1.24 × 1.12	15	緩斜	平坦	自然	土師器片4(要)
72	C5a	N-64°-E	不整楕円形	1.48 × 1.12	50	緩斜	皿状	自然	
74	C5a	N-70°-E	円 形	0.99 × 0.90	25	緩斜	鉢状	自然	
77	F5a	N-81°-W	楕 円 形	1.24 × 1.04	27	外傾	皿状	自然	土師器片12(環1,要11)
78	F5a	N-18°-E	長楕円形	1.87 × 0.84	28	外傾	平坦	自然	
80	D6a	N-13°-E	楕 円 形	1.32 × 1.11	125	垂直	平坦	人為	土師器片4(環2,要2),井戸状遺構の可能性あり。
81	G4a	N-74°-E	楕 円 形	0.79 × 0.65	48	垂直	皿状	人為	土師器片131(要),S13を掘り込んでいる。
82	G4a	N-35°-E	楕 円 形	0.65 × 0.53	35	外傾	平坦	人為	S10を掘り込んでいる。
83	G4a	N-75°-E	楕 円 形	1.16 × 1.03	63	外傾	平坦	人為	S11を掘り込んでいる
84	D4a	N-78°-W	楕 円 形	0.80 × 0.70	43	外傾	皿状	自然	土師器片15(要),S125を掘り込んでいる。
85	C4a	N-69°-E	不整方形	2.16 × 1.97	75	垂直	平坦	自然	土師器片3(環1,要2)
88	E5a	N-29°-W	不整方形	0.74 × 0.69	26	緩斜	平坦	自然	
89	D4a	N-75°-W	楕 円 形	1.45 × 0.92	21	緩斜	平坦	自然	

土坑 番号	位 置	長深方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
90	D3 ₁	N-36°-E	楕円形	0.83 × 0.68	14	緩斜	凹状	自然	
96	I4 ₁	N-85°-W	楕円形	1.58 × 1.31	42	外傾	平坦	自然	土師器片7(壺)
97	I4 ₁	N-51°-E	楕円形	1.31 × 1.11	35	外傾	凹凸	人為	
98	I4 ₁	N-4°-E	不整形円形	1.77 × 1.14	32	緩斜	平坦	自然	土師器片2(坏)
99	J4 ₁	N-54°-E	楕円形	1.33 × 1.03	34	外傾	平坦	人為	
100	J4 ₁	N-68°-E	不整形円形	1.22 × 1.03	25	外傾	平坦	自然	
101	J4 ₁	N-38°-E	楕円形	1.45 × 0.73	28	外傾	凹状	自然	
102	J4 ₁	N-13°-E	不整形円形	1.13 × 0.88	32	緩斜	凹状	自然	土師器片1(壺)
104	I3 ₁	N-8°-E	楕円形	1.29 × 0.86	27	外傾	凹状	自然	土師器片3(壺)
105	I3 ₁	N-69°-W	不整形円形	1.19 × 0.78	37	外傾	平坦	自然	
106	I3 ₁	N-12°-E	不整形円形	1.20 × 0.64	47	外傾	凹状	自然	
107	I3 ₁	N-62°-E	楕円形	1.20 × 0.76	50	垂直	平坦	自然	
108	J3 ₁	N-30°-E	楕円形	1.40 × 1.90	48	外傾	凹状	自然	
109	J3 ₁	N-17°-E	不整形円形	1.31 × 1.26	42	外傾	凹状	自然	
110	J3 ₁	N-26°-E	楕円形	1.62 × 0.90	34	外傾	平坦	人為	
111	J4 ₁	N-47°-E	楕円形	1.10 × 0.64	30	外傾	凹状	人為	土師器片1(壺)
112	J4 ₁	N-47°-E	不整形円形	0.90 × 0.84	37	外傾	凹状	自然	土師器片2(壺)
113	J3 ₁	N-47°-W	不整形円形	1.12 × 1.04	35	外傾	凹状	人為	
114	J4 ₁	N-61°-E	不整形円形	1.20 × 0.90	31	外傾	凹状	人為	土師器片3(壺)
115	J4 ₁	N-90°-W	不整形円形	1.59 × 1.16	18	外傾	凹状	人為	土師器片4(坏1, 壺3)
116	J4 ₁	N-80°-W	楕円形	0.95 × 0.75	28	緩斜	凹状	自然	
117	J4 ₁	N-90°-W	不整形円形	0.92 × 0.82	27	緩斜	凹状	自然	
118	J4 ₁	N-64°-E	楕円形	1.09 × 0.96	24	外傾	凹状	自然	
119	J4 ₁	N-78°-W	楕円形	1.06 × 0.78	26	緩斜	凹状	人為	
120	J4 ₁	N-10°-E	楕円形	1.19 × 0.90	22	外傾	凹凸	自然	
121	K4 ₁	N-15°-W	長楕円形	2.10 × 0.79	34	外傾	凹状	人為	
122	J4 ₁	N-4°-E	楕円形	0.82 × 0.71	29	外傾	凹状	人為	
123	J4 ₁	N-82°-W	楕円形	1.16 × 0.77	22	外傾	凹状	自然	
124	I3 ₁	N-44°-W	楕円形	0.84 × 0.68	33	外傾	凹状	自然	
125	I3 ₁	N-85°-W	不整形円形	1.50 × 1.10	27	外傾	凹状	人為	土師器片2(壺)
126	I3 ₁	N-26°-E	不整形円形	1.70 × 1.49	40	外傾	平坦	自然	
127	I3 ₁	N-36°-W	楕円形	1.20 × 0.87	37	外傾	凹状	自然	土師器片2(壺)
128	I3 ₁	N-26°-E	不整形円形	0.74 × 0.62	40	外傾	凹状	自然	土師器片2(壺)
129	J3 ₁	N-9°-W	不整形円形	0.84 × 0.76	32	外傾	凹状	人為	
130	J3 ₁	N-65°-W	楕円形	0.85 × 0.72	38	外傾	平坦	自然	
131	J3 ₁	N-23°-E	楕円形	0.83 × 0.59	37	外傾	凹状	自然	
132	J3 ₁	N-43°-W	楕円形	1.06 × 0.83	33	外傾	平坦	自然	土師器片3(壺)
133	J3 ₁	N-15°-W	楕円形	1.15 × 0.97	39	外傾	凹状	自然	
134	J3 ₁	N-83°-W	楕円形	2.48 × 1.70	30	外傾	凹状	人為	
135	J3 ₁	N-10°-W	長楕円形	2.24 × 1.07	40	外傾	凹状	自然	
136	J3 ₁	N-66°-W	不整形円形	1.21 × 1.09	52	外傾	凹状	自然	
137	J3 ₁	N-57°-E	不整形円形	2.14 × 1.21	25	外傾	平坦	人為	
138	K3 ₁	N-29°-W	楕円形	1.82 × 1.39	26	緩斜	平坦	人為	

(2) 溝

当遺跡の調査では、調査Ⅱ区から時期不明の溝1条を確認した。以下、確認した遺構について記載する。

第1号溝（付図3）

位置 調査Ⅱ区の南部，K4a区。

規模と形状 北西から東方向に直線的に延びており，全長47mで，端部はそれぞれ調査区外に延びている。最大幅は2.7mで，最小幅は1.2mである。断面は「U」字形をし，深さは最深0.75mで，東部ほど浅くなる。底部は概ね皿状に掘り込まれている。

方向 N-80°-W

断面 中位付近には凹凸がある。

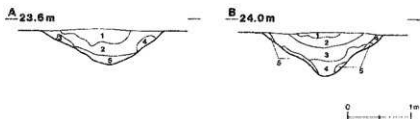
覆土 A，Bは5層から成る。土層3，4の堆積状況に乱れがみられるが，これは溝の土砂運搬作用のために，その後の覆土堆積状況はほぼ安定している。自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量，ローム大ブロック微量 | 4 極暗褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子中量，赤土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，炭化物極微量 | | |

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は，調査Ⅱ区の南部を北西から東方向に延び，西ノ原遺跡のⅠ号溝と規模や形状が類似し，方角的にも一致することから両遺跡の溝は同一遺構になるものと考えられる。時期については，本跡に伴う遺物が出土していないことから不明である。



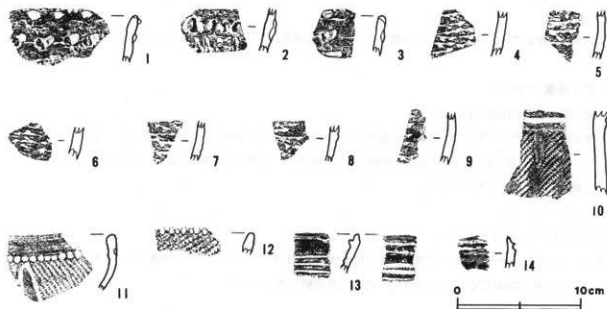
第234図 第1号溝断面図

5 遺構外出土遺物

当遺跡からは，表探及び遺構確認の際に出土したものも含めた遺構に伴わない旧石器時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち，縄文時代の土器器片及び古墳時代の特徴的な須恵器片について解説をし，石製品と石製模造品については一覧表で記載する。

縄文時代（第235図）

1から9は前期後半の土器である。1・3は深鉢の口縁部片，2は深鉢の胴部片で，輪積み痕を残し，貝殻腹縁による貝殻文が連続施文されている。4から9は深鉢の胴部片で，刺突文が不連続的に施文されている。浮島Ⅱ式土器である。10と11は中期後葉の土器である。10は深鉢の頸部片で，胴部と頸部の間に沈線がめぐり口縁部と胴部文様帯を区画し，頸部以下にLRの縄文が施された後，縦方向に磨消しがはいる。加曾利EⅠ式土器である。11は鉢の口縁部片で，胴部と口縁部の間に刺突文が連続的に施され，口縁部と胴部文様帯が区画されている。胴部はLRの縄文が施され，その後，縄文帯と無文帯を区画する逆U字状の磨消帯が施されてい



第235図 遺構外出土遺物拓影図

る。加曾利EⅢ式土器である。12は中期後半の土器である。鉢の口縁部片で、口唇部に棒状工具による押捺が施され、下方には縄文が施されている。加曾利E式に入る土器である。13は後期中葉の土器である。鉢形土器の口縁部片で、胴部に平行沈線による口縁部と胴部文様帯の区画がされ、口縁部内側には刻み目帯が設けられている。加曾利BⅠ式土器である。

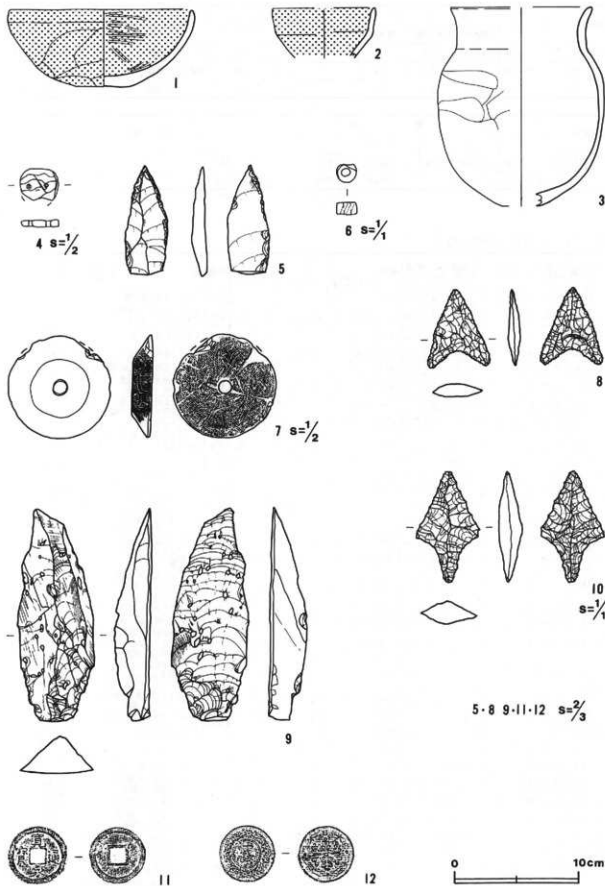
古墳時代 (第235図)

14は古墳時代中期の須恵器である。把手付碗の体部から口縁部にかけての破片で、体部中に2条の凸線を持ち、その下方に8条の櫛描波状文が施されている。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第236図 1	環 土 師 器	A 14.7	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はほぼ直立する。外面に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面へラ磨き。底部へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・パミス 赤褐色 普通	P143 60% 表土中
		B 6.1				
		C 4.3				
2	埴 土 師 器	A [8.2]	口縁部の破片。中位に弱い段を持ち、ほぼ直立する。	内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母 赤褐色 普通	P144 10% 表土中
		B (4.0)				
3	壺 土 師 器	A [11.2]	底部から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。胴部は括れ、口縁部は弓なり状に反る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。底部へラナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリア に白い褐色 普通	P145 30% PL54 表土中 二次焼成
		B 15.8				
		C [3.0]				

図版番号	種 別	計 測 値 (cm)				重量(g)	現存率(%)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚	孔 径					
第236図4	双孔円板	2.1	(1.7)	0.4	0.2	(2.1)	80	チャート	C5a区	Q103
5	削 器	(4.3)	1.7	0.6	—	(2.8)	80	頁岩	E4a区	Q104 PL55
6	白 玉	(0.5)	0.5	0.3	0.2	(0.2)	80	片岩	F4a区	Q105
7	紡 織 車	(5.4)	5.4	1.0	0.8	(42.8)	90	チャート	試掘	Q106体部外面 線刻PL55



第236图 遼朝外出土遺物実測図

図版番号	種別	計測値 (cm)				重量(g)	保存率(%)	材質	出土地点	備考	
		最大長	最大幅	最大厚	孔径						
第236図	8 石	楕	3.1	2.5	0.5	—	2.4	100	チャート	表採	Q107 PL55
	9	ナイフ形石器	8.5	3.1	1.4	—	27.3	100	黒曜石	表採	Q108 PL55
	10	石	楕	3.0	1.7	0.6	—	1.6	100	チャート	表採

図版番号	種別	初 期		年 号	出土地点	備考
		時代	年号			
第236図	11 青永通寶	江戸期	明治中期	1636年	表採	M3
	12 一銭青銅貨	大正		1916年	表採	M4

表23 華人山遺跡住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内 部 施 設				扉	覆土	出土産物	備考			
							扉	障子	土柱	貯蔵					ピット	入口	
1	H4a	N-41°W	長方形	1.74×2.02	12-14	凹凸	—	—	—	—	—	伊1	人為	土器(埴、甕)			
2	G4a	N-37°W	方形	5.37×5.24	10-55	凹凸	5	4	1	8	1	伊1	人為	土器(灰、甕、土)			
3	G4a	N-17°W	隅丸方形	2.99×2.74	6-16	凹凸	—	—	—	2	—	伊1	人為	土器(灰、甕)			
4	G4a	N-43°W	方形	5.36×5.12	10-55	凹凸	全周	—	4	1	5	1	伊1	人為	土器(灰、甕、灰、甕、土)	SKM-遺跡平面的ではない。	
5	G4a	N-41°W	長方形	3.07×2.74	7-17	凹凸	—	—	—	—	—	伊1	人為	土器(灰、甕、土)	SKM-遺跡平面的ではない。		
6	G5a	N-24°W	方形	6.18×5.82	36-40	凹凸	全周	4	4	1	5	1	伊1	人為	土器(甕、土、土)	その他(ガラス玉)	
7	G4a	N-43°W	方形	5.36×5.12	36-33	平坦	全周	2	4	1	7	1	伊1	人為	土器(甕、灰、土、土)	土器(甕、土)	
8	G4a	N-42°E	長方形	6.00×3.90	22-35	平坦	—	—	1	3	1	伊1	人為	土器(甕)			
9	G4a	N-45°E	方形	5.14×4.96	30-40	平坦	—	—	4	1	5	1	伊1	自然	土器(灰、甕、土)	土器(甕、土)	
10	G4a	N-25°W	方形	2.59×2.33	6-29	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	土器(甕)	SKM-遺跡平面的ではない。		
11	G4a	N-27°W	長方形	3.84×2.40	2-7	凹凸	—	—	—	—	—	伊1	人為	土器(灰、甕)	SKM-遺跡平面的ではない。		
12	F4a	N-25°W	方形	6.84×6.76	18-29	凹凸	全周	3	4	1	5	1	伊3	人為	土器(灰、甕、土)	土器(灰、甕、土)	
13	F4a	N-40°E	方形	6.38×6.16	25-64	平坦	—	4	4	1	7	1	伊1	自然	土器(灰、甕、土)		
14	F5a	N-62°W	方形	6.06×3.92	30-42	凹凸	全周	3	4	1	5	1	伊1	人為	土器(灰、甕、土)		
15	F5a	N 54° E	長方形	7.74×6.18	20-37	凹凸	全周	6	4	2	6	[2]	伊2	人為	土器(灰、甕、土)		
16	F5a	N-31°E	方形	6.48×6.16	37-32	凹凸	—	2	3	1	4	1	伊1	人為	土器(灰、甕、土)		
17	E5a	N-63°W	方形	4.00×3.85	30-47	凹凸	—	2	4	1	5	1	伊1	人為	土器(灰、甕、土)		
18	F4a	N 50° E	方形	6.84×6.66	17-34	平坦	全周	7	3	1	4	1	伊2	人為	土器(灰、甕、土)		
19	D4a	N 30° E	長方形	3.20×3.54	22-30	平坦	—	—	—	5	1	伊1	人為	土器(甕)			
20	D5a	N-43°E	方形	5.17×5.02	12-21	平坦	—	—	4	1	4	—	伊1	人為	土器(甕)		
21	D6a	N-30°E	長方形	6.26×5.01	2-24	平坦	—	—	4	1	4	—	伊2	人為	土器(甕)		
22	D4a	N-71°W	長方形	2.25×1.69	5-10	傾斜	—	—	—	—	—	—	人為	土器(灰、甕、土)			
24	D4a	N-44°E	方形	1.40×4.32	5-7	傾斜	—	—	—	—	—	—	人為	土器(灰)			
26	C47	N 60° W	方形	4.90×4.83	2-16	凹凸	—	—	3	1	3	—	伊1	人為	土器(甕)		
27	C3a	N-55°E	方形	6.12×5.14	40-60	凹凸	全周	2	4	1	7	1	伊1	人為	土器(灰、甕、土)		
28	D5a	N-63°W	長方形	7.46×6.94	14-32	平坦	—	—	4	1	5	1	伊1	人為	土器(灰、甕、土)		
31	C5a	N 39° F	長方形	7.50×4.88	20-28	平坦	—	—	4	1	4	—	伊1	人為	土器(灰、甕、土)		
33	C4a	N-47°W	長方形	5.40×4.20	9-23	平坦	—	—	2	4	1	4	—	伊1	人為	土器(灰、甕、土)	
34	C4a	N 23° E	方形	1.98×1.96	5-10	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	土器(甕)			
35	C4a	N-30°W	長方形	5.18×3.80	30-43	凹凸	—	—	—	1	1	—	人為	土器(甕)			
36	C4a	N-13°E	方形	6.00×5.80	25-37	凹凸	—	—	4	1	4	—	伊1	人為	土器(灰、甕、土)		
43	B5a	(N 60° W)	長方形	4.82×3.65	2-15	凹凸	—	—	4	1	4	—	伊1	人為	土器(甕)		

第4節 まとめ

当遺跡で確認した遺構は、竪穴住居跡32軒、竪穴遺構3基、土坑93基、陥し穴8基及び溝1条である。

ここでは、時期別に各時代の主な遺構と遺物についての概要を述べ、まとめとする。

旧石器時代

当遺跡からは、黒曜石を石材とし縦長剥片を素材とするナイフ形石器、頁岩を石材とし石刃素材のナイフ形石器が表面採集されている。その他、少数ながら剥片が表土中や後世の遺構の覆土中から出土している。確認されている石器の石材は、黒曜石、頁岩及びメノウで、いずれも本県の主要な石器石材で、この付近でみられる標準的な石材といえる。表面採集されている旧石器時代の遺物は、今回の調査区が平地地でローム層の流失が考えられないことから、耕作等による旧石器時代生活面の攪乱によって表面採集されたものと考えられるが、生活面をもつ文化層は確認されていない。

縄文時代

前期後半の浮島I式、中期後葉の加曾利EⅠ式、加曾利EⅢ式、後期中葉の加曾利BⅠ式に比定される縄文土器片が表面採集されている。遺構としては、詳細な時期は不明である8基の陥し穴が、調査区の中央部から北部を中心に散在して構築されている。これらは、乙戸川から深く入り込む谷津の低地及び湿地等に集まる動物の捕殺及び捕獲等を目的としたものと考えられる。

古墳時代

当遺跡の中心となる時期で、竪穴住居跡、竪穴遺構及び土坑を確認した。竪穴住居跡31軒が当該期に属する。当遺跡の集落は、遺構の分布図から2つの形態を持った集落群として捉えられる。一つは、中央の空間地域を住居跡群を取り囲むように配置され、一つの集落を形成しているとするみかたと、もう一つは、E5a区の第17号住居跡を含めた調査区南部に広がる集落と、D5a区の第20号住居跡を含む調査区北部に広がる集落群とに分けて捉えるみかたであり、その集落群からは、その集落の中でも特殊な立場に位置していると思われる住居跡（第2号、12号）を各1軒ずつ確認している。また、第36号住居跡は環に高坏を伏せ、その中からアカニシが出土している祭祀行為との強い関係が考えられる遺構である。時期的に3期に分けることができる。

第1期（5世紀前半）

第1、2、12号住居跡の時期である。第1号住居跡は一辺が2m台の規模で、炉以外の内部施設を持たず、第2号住居跡は一辺が5m台の中規模住居跡で、付設する施設は塹溝、間仕切り溝、主柱穴、貯蔵穴及び出入口ピットを備えている。出土遺物は土師器の坏、椀、埴、甕及び甌である。坏は平底と丸底がみられ、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に弱い稜を持つ。整形はヘラナデ、ヘラ磨きがみられる。すべて赤彩されている。椀は平底で、整形は体部外面に刷毛目擦り消痕を残している。埴は平底と丸底がみられ、体部は潰れた球形状やソロバン玉状を呈している。整形はヘラ削り後ナデが施されている。甕は平底とやや突出した平底がみられ、体部は内彎しながら立ち上がり、体部中位から上位に最大径を持つ。整形は外面に刷毛目整形が施されている。第1号住居跡から出土している甌は、体部外面に刷毛目擦り消痕がみられる。当遺跡では、第1号住

居跡のように小規模で内部施設をもたない建物跡が7軒確認されているが、これらは使用効率から倉庫的な利用がなされていたものと考えられる。第1号住居跡も第2号住居跡と関連した建物跡としてセットで考えることができる。

第2期（5世紀後半）

第3～14, 16～18, 19～21, 23～34, 36, 43号住居跡, 第37, 81号土坑の時期である。規模と付設する施設に特定の企画性がみられない。出土遺物は土師器の坏、椀、高坏、埴、甕及び甗、須恵器の把手付き椀及び坏蓋である。坏は平底と丸底がみられ、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部外面に弱い稜を持つ。整形はヘラナデ、内面ヘラ磨きもみられる。50%以上が赤彩されている。椀は平底で、体部内面に稜を持ち、折り返しのある複合口縁もみられる。整形はヘラナデ、内面ヘラ磨きが施され、約半数は赤彩されている。高坏は脚部が柱状を呈し、裾部は下方に「ハ」の字状に開き、坏部下位に張り出しのある段を有するものがみられる。整形はヘラナデ、ヘラ磨きが施されている。甕は平底とやや突出した平底で、体部は球形状をしている。口縁部に複合口縁もみられる。甗は平底気味のものと同定式のものがあり、単孔を穿つ。第31号住居跡出土の須恵器把手付き椀はT K 216からT K 206に併行する時期のものと考えられる。

第3期（5世紀後期後半）

第15号住居跡の時期である。時期的には5世紀後半に入らない段階と考える。出土遺物は土師器の坏、椀、小形甕及び甕である。このうち、坏と椀は平底で、坏の体部外面及び内面にヘラナデあるいはヘラ削り後ヘラ磨きが施され、体部と口縁部の境に弱い稜がみられる。小形甕は、平底で体部は球形状を呈する。

平安時代（9世紀前半）

第35号住居跡の時期である。本跡の窟内から須恵器の坏が出土している。

参考文献

- 櫻村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート2号』茨城県教育財団 1993年7月
- 浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅱ）」『研究ノート2号』茨城県教育財団 1993年7月
- 茨城県教育財団「牛久市北部特定区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第81集』1993年3月
- 茨城県教育財団「牛久市北部特定区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第86集』1993年9月
- 茨城県教育財団「（仮称）上高津団地建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 寄居遺跡・うぐいす平遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第84集』1994年3月

付 章

西ノ原遺跡・隼人山遺跡自然科学分析報告

パリオ・サーヴェイ株式会社

I. はじめに

茨城県南部に広がる常陸台地は、霞ヶ浦や北浦を含むいくつかの谷によって開析され、東茨城・鹿島・行方・新治・稲敷などの台地にわかれていく。

今回の自然科学分析調査は、常陸台地南部の稲敷台地上に立地する西ノ原遺跡・隼人山遺跡を対象として行う。西ノ原遺跡ではローム層序の対比を、隼人山遺跡では住居構築材の選択についての検討を行う。

II. 西ノ原遺跡のローム層序

茨城県南部に広がる常陸台地は、霞ヶ浦や北浦を含むいくつかの谷によって開析され、東茨城・鹿島・行方・新治・稲敷などの台地にわかれていく。これらの台地の地形・地質は坂本(1986)により以下のように記載されている。常陸台地は下総台地に対比される段丘で、その構成層は後期更新世の海成層である見和層である。見和層は最終間氷期の下末古海進に伴って堆積したものである。その上位に堆積する茨城粘土層は、下総台地をはじめとする関東平野中南部の台地に広く認められる常総粘土層に対比される。常総粘土層は、菊地(1981)によれば約4万9千年前に噴出した(町田・鈴木, 1971)箱根—東京軽石の降灰直前まで堆積したとされる。さらに、その上位には褐色火山灰土層(いわゆるローム層)が認められる。

常陸台地の南部に位置する稲敷台地は、北を桜川に南と西を小貝川の低地に東を霞ヶ浦により限られている。南部では、台地は花室川や小野川とその支流の乙戸川や桂川などにより開析が進んでいる。

西ノ原遺跡は、この稲敷台地の中央部の乙戸川と小野川に挟まれた台地上に位置する。

今回の発掘調査により、旧石器時代、古墳時代の遺構・遺物が検出されている。とくに古墳時代中期から後期までは、集落が形成されていたと考えられている。

今回の自然科学分析調査では、本遺跡のローム層の層序対比を行うために火山ガラス比分析および重鉱物分析を行う。火山ガラス比分析では、ローム層中に混入する指標テフラ由来の細粒の火山ガラス産状を調べることで、降灰層準を推定する。重鉱物分析では、ローム層中の重鉱物組織を調べ、その層的变化を指標として対比に用いる。本分析法は、武蔵野台地の立川ローム層で対比資料が比較的多く蓄積されているためとくに有効な手段となっている。本遺跡周辺では分析例は少ないが、武蔵野台地や栃木県—茨城県北部のローム層との対比を行いたい。

1. 試料

テストピットの土層断面は上位より1層～12層に分層されている。1層・2層は明褐色ローム層、3層～7層は褐色ローム層、8層はふい褐色ローム層、9層～12層はふい橙色ローム層とされている。ローム層の最上部に認められることが多いソフトローム層は、本地点で認められない。

試料は1層～12層まで上位より試料番号1～45が採取されている。この中から本地域のローム層上部の指標テフラである立川ローム層最上部ガラス質火山灰(UG:山崎, 1978)や始良Tn火山灰(AT:町田・新井, 1976)が検出されると考えられる試料番号1～16の計16点の試料番号を選択する。同一試料を二分して、両分析に用いた。以上の1層～3層までの柱状図と試料の採取位置を図1に示す。

2. 分析方法

(1) 重鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散，250メッシュの分析篩を用いて水洗し，粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後，篩別し，得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をボリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離，重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの薄射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は，「その他」とする。

(2) 火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察，火山ガラスとそれ以外の砕屑物を250粒を計数し，砕屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，便宜上軽鉱物にいい，その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は，バブル型は薄手平板状，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり，軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

3. 結果

結果を表1・図1に示す。

表1 西ノ原遺跡重鉱物および火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	45	124	23	3	27	28	250	109	2	3	136	250
2	62	123	22	1	19	23	250	132	0	5	113	250
3	44	142	22	1	23	18	250	132	0	4	114	250
4	51	133	16	0	27	23	250	79	0	1	170	250
5	83	115	18	1	15	18	250	88	0	0	162	250
6	97	99	10	0	8	36	250	78	0	2	170	250
7	133	75	7	2	10	23	250	10	1	2	237	250
8	125	71	10	4	4	36	250	9	1	2	238	250
9	122	70	10	7	5	36	250	1	1	5	243	250
10	119	85	11	3	10	22	250	0	1	2	247	250
11	122	77	14	7	3	27	250	0	0	2	248	250
12	111	90	8	9	11	21	250	0	1	3	246	250
13	120	75	11	12	6	26	250	1	0	0	249	250
14	145	66	8	9	4	18	250	0	1	0	249	250
15	147	65	4	2	7	25	250	0	2	1	247	250
16	151	61	2	6	8	22	250	0	0	1	249	250

(1) 重鉱物分析

カンラン石は試料番号2・7に量比の極大層準が，試料番号3・12に極小層準が認められる。

斜方輝石と単斜輝石はカンラン石とはほぼ逆の傾向を示す。試料番号3に量比の極大層準が認められるが，他の量比の極大および極小層準はやや不明瞭である。角閃石は下部の試料番号8～16で微量認められる。

(2) 火山ガラス比分析

試料番号1～6ではバブル型火山ガラスが比較的多く認められる。下位より見て，試料番号7から6で急増，試料番号6から4で大きな増減はほとんどなく，試料番号4から3で増加，試料番号3と2では量比は変わらず，試料番号2から1で減少する。この火山ガラスは，その形態と色調および産出層準からATに由来すると考えられる。ATは，

鹿児島県の始良カルデラを給源とし，降灰年代は約2.1～2.5万年前と考えられている（町田・新井，1992）。一般に，土壌中に特定のテフラが混合して産出する場合，テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い（早津，1988）。これに従えば，本地点のATの降灰層準は試料番号6の2層最上部付近と考えられる。

4. 考察

本地域のローム層上部の指標テフラには，UGやATなどがある。UGは，浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており，その降灰年代は約1.2万年前とされている（町田・新井，1992）。武蔵野台地の立

川ローム層の標準層序におけるⅢ層上部が降灰層準と考えられており、南関東地方に広く分布する。一方、当社によるこれまでの分析例により、UGによく類似するテフラが栃木県～茨城県北部に広く分布することが認められており、その降灰層準もローム層の最上部にある場合が多い。UGやUGに類似するテフラの由来と考えられている浅間軽石流期のテフラには、浅間板鼻黄色テフラ (As-YP) やAs-YPと同一噴火輪廻のテフラと考えられている浅間草津テフラ (As-K) などがある (町田・新井, 1992)。As-YPの分布主軸は東南東で、主に群馬県南部に分布し、その降灰年代は約1.3～1.4万年前と考えられている (町田・新井, 1992)。As-K (引用文献中ではAs-YPk) に対比されるテフラは、東北地方南部から中部でも認められている (小岩・早田, 1994)。UGまたはUGに類似するテフラは、いずれにしてもこれらの浅間火山のテフラに由来すると考えられる。今回の分析結果ではUGの降灰層準が認められなかったために、その降灰層準は1層よりさらに上位である。したがって、本地点では、ローム層の最上部が削剝を受けていると考えられる。

ATの降灰層準は、武蔵野台地の立川ローム層の標準層序では第二暗色帯 (BBII) のⅦ層上限付近にある場合が多い。また、栃木県～茨城県北部では、ATの降灰層準は田原ローム層と宝木ローム層の境界層の暗色帯の上部 (町田・新井, 1976) におかれている。今回の分析結果から、2層最上部付近武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるⅦ層上限に対比される。また、栃木県～茨城県北部のローム層との対比では、2層最上部付近が宝木ローム層の最上部に対比される。

重鉱物組織上の指標には、武蔵野台地の立川ローム層の第一暗色帯 (BBI) のⅤ層上限付近の輝石の極大がある。(小林ほか, 1971など) また、詳細な対比ではないが、Ⅴ層で輝石の量比が高いことも認められている。今回の分析結果のATの産状を考慮すると、立川ローム層の第一暗色帯 (BBI) のⅤ層上限付近の輝石の極大は試料番号1以上の可能性が高い。また、下位では当社の分析例により、ATの降灰層準 (Ⅶ層上限) のやや下位のカンラン石の極大層準が指標として認められている。今回の分析結果から、試料番号7の2層上部のカン

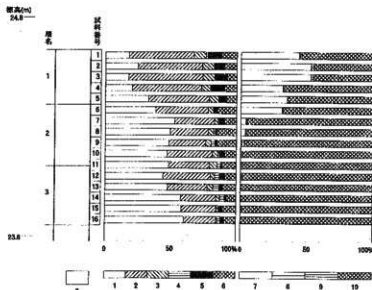


図1 西ノ原遺跡柱状図・試料採取位置および重鉱物組成・火山ガラス比

- a : ローム。
 1 : カンラン石。2 : 斜方輝石。3 : 単斜輝石。
 4 : 角閃石。5 : 不透明鉱物。6 : その他。
 7 : バブル型火山ガラス。8 : 中間型火山ガラス。
 9 : 軽石型火山ガラス。10 : その他。

ラン石の極大層準がこれにあたる。

角閃石は栃木県～茨城県北部の分析例では、宝木ローム層の上部(暗色帯上部)付近すなわちATの降灰層準付近において下位に向かって増加することが認められている。この角閃石は、宝木ローム層の中部に降灰層準がある赤城鹿沼沼石(Ag-KP:新井, 1962)に由来すると考えられる。Ag-KPは赤城火山を給源とし、降灰年代は約3.1～3.2万年前と考えられている(町田・新井, 1992)。本遺跡の角閃石の産状は、栃木県～茨城県北部の宝木ローム層とやや類似する。

以上のように、本遺跡のローム層の重鉱物組成には、栃木県～茨城県北部のローム層の重鉱物組成と南関東のローム層の重鉱物組成の両方の特徴が認められている。

層序対比をまとめると、1層中部～下部が立川ローム層の標準層序におけるVI層、2層以下が同じくVII層以下に対比される。また、栃木県～茨城県北部のローム層との対比では1層以上が田原ローム層、2層以下が宝木ローム層に対比される。

ローム層(ここではいわゆる関東ローム層のような細粒の火山砕屑物を母材とする土壌をさすものとして用いる)の成因については、従来は小噴火による降下火山灰の累積したもの(たとえば町田(1964)など)とする説が主に支持されてきた。これに対して、いったん堆積した火山灰が風によって移動させられて累積したものとする説も主張されるようになってきている。この説は、中村(1970)により提示され、早川(1986)、早川・由井(1989)、早川(1990)、早川(1995)などにおいて、火山学および火山灰編年学上の種々の観察事実を根拠として述べられている。この説に従えば、ローム層も黒ボク土層も火山の噴火とは関係なく常に降りつめる風塵によって形成されたことになる。また、最近では鈴木(1995)により、過去5万年間に堆積した火山灰土が層厚1mを上回る地域では、ローム層は広域テフラや小規模な噴火によりテフラが一次的に累積したものといったん降灰したテフラが二次堆積したものが混在するが、地域によりその構成物の割合は変化すると述べられている。いずれにしても、風成の火山噴出物に由来する砕屑物が二次堆積を繰り返し、さらに土壌生成作用を受けながら少しずつ累積し、ローム層が形成されていると考えられる。本分析結果におけるATの産状はそのことをよく表している。

また、ローム層の鉱物組成にはおもに周辺の火山噴出物の鉱物組成が反映されており、それは同じ地域、同じ時期では類似すると考えられる。したがって、同じ地域において鉱物組成の層位の変化を調べることにより、対比の指標が導き出され、今回のように層序対比が可能となっている。

<引用文献>

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, 4, p.1-79.
早川由起夫(1986) 火山灰土の成因と堆積速度。1986年度春季大会日本火山学会講演予稿集, p.34.
早川由起夫(1990) 堆積物から知る過去の火山噴火。火山第2集, 34, 火山学の基礎研究特集号, p. S121-S130.
早川由起夫(1995) 日本に広く分布するローム層の特徴とその成因。火山, 40, p.177-190.
早川由起夫・由井将雄(1989) 草津白根火山の噴火史。第四紀研究, 28, p.1-17.
早津賢治(1988) テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー—ATにまつわる議論に關係して—。考古学研究, 34, p.18-32.
菊地隆男(1981) 常総粘土總の堆積環境。地質学論集, 20, p.129-145.
小林達夫・小田静夫・羽島謙三・鈴木正男(1971) 野川先土器時代遺跡の研究。第四紀研究, 10, p.231-252.

- 小岩直人・早田 勉 (1994) 東北地方中南部に分布する更新世末期のガラス質テフラ。地学雑誌, 103, p.68-76.
- 町田 洋 (1964) Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史—第四紀末期について— (その1) (その2)。地学雑誌, 73, p.293-308, 337-350.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—。科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。276p., 東京大学出版会。
- 町田 洋・鈴木正男 (1971) 火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年—フィッション・トラック法による試み—。科学, 41, p.263-270.
- 中村一明 (1970) ローム層の堆積と噴火活動。軽石学雑誌, 3, p.1-7.
- 坂本 亨 (1986) 3.4関東平野北部の更新統 (9) 常陸台地。「日本の地質3 関東地方」。p.189-190, 共立出版。
- 鈴木毅彦 (1995) いわゆる火山灰土 (ローム) の成因に関する一考察 —中部—関東に分布する火山灰土の層厚分布—。火山, 40, p.167-176.
- 山崎晴雄 (1978) 立川断層とその第四紀後期の運動。第四紀研究, 16, p.231-246.

III. 単人山遺跡の住居構築材

単人山遺跡は、稲敷台地の中央部の乙戸川と小野川に挟まれた台地上に位置する。今回の発掘調査により、古墳時代中期および平安時代の遺構・遺物が検出されている。とくに古墳時代中期には、集落が形成されていたと考えられている。今回の自然科学分析調査では、古墳時代中期の住居構築材の選択について検討を行うために、住居跡から出土した炭化材の樹種同定を行う。

1. 試料

試料は、古墳時代の竪穴住居跡 (SI4, 8, 27) から出土した炭化材3点 (試料番号168, 197, 582) である。各試料の詳細については、樹種同定結果と共に表3に記した。

2. 分析方法

木口 (横断面) ・柾目 (放射断面) ・板目 (接線断面) の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

結果を表2に示す。試料はいずれもコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

表2 華人山遺跡炭化材の樹種

番号	出土遺構・出土位置・試料名	時代・時期	用途など	樹種
168	SI 8 壁ぎわ 炭化材	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
197	SI 4 貯蔵穴 炭化材 No.11	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
582	SI27 遺構内 炭化材	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

●コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.)

ブナ科

環孔材で孔圈部は1～3列，孔圈外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

4. 考察

住居跡から出土した炭化材は，いずれもクヌギ節であった。これらの炭化材のうち，SI 8とSI27が住居構築材と考えられる。SI 4から出土した炭化材は，構築材が周辺の土壌とともに貯蔵穴内に流入した可能性もあるが，出土状況や性格について詳細は不明である。

牛久市では，これまでにヤツノ上遺跡や中久喜遺跡で古墳時代の構築材について樹種同定が行われており，クヌギ節・コナラ節が多数確認されている（未公表資料）。同様の例は，水海道市や岩井市でも確認されており（パリーノ・サーヴェイ株式会社，1986a，1986b；未公表資料），本地域でクヌギ節・コナラ節の木材が構築材として広く利用されていることがうかがえる。

住居構築材は，これまでの調査結果から遺跡周辺で構築材としての条件（強度・長さ・径・形状などと考えられる）を満たす木材を選択・利用したと考えられている（高橋・植木，1994）。太平洋岸の日立市諏訪遺跡や水戸市白石遺跡でアカガシ亜属などが確認された結果（嶋倉，1980；未公表資料）は，太平洋岸と内陸部で植生が異なっていたことを反映したと考えられている。（高橋・植木，1994）。今回の結果から，本遺跡では古墳時代の住居構築材を遺跡周辺のクヌギ節・コナラ節を中心とする落葉広葉樹林から得ていたことが推定される。

SI 4の炭化材は住居構築材に由来するのかわからない。樹種は他の住居跡と全く同じであり，貯蔵穴の埋設に伴い住居構築材が流入したとしても矛盾はない。

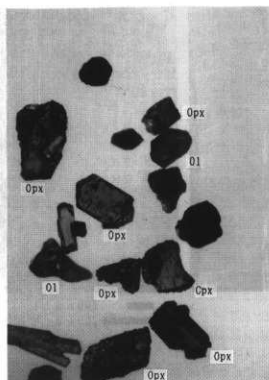
〈引用文献〉

パリーノ・サーヴェイ株式会社（1986a）奥山A遺跡出土試料 炭化材同定報告，茨城県教育財団文化財調査報告 第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告2 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」，p.239-240，財団法人茨城県教育財団。

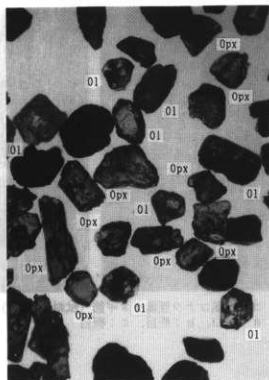
パリーノ・サーヴェイ株式会社（1986b）西原遺跡出土試料種子及び材同定報告，茨城県教育財団文化財調査報告 第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告2 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」，p.241-243，財団法人茨城県教育財団。

嶋倉巳三郎（1980）日立市諏訪遺跡出土木炭の樹種について，「諏訪遺跡発掘調査報告書」，P.188，日立市教育委員会。

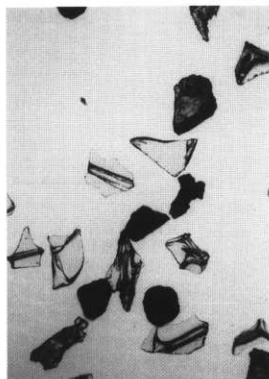
高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択，PALYNO，2，P.5-18。



1. 重鉱物 (試料番号 3)



2. 重鉱物 (試料番号 7)

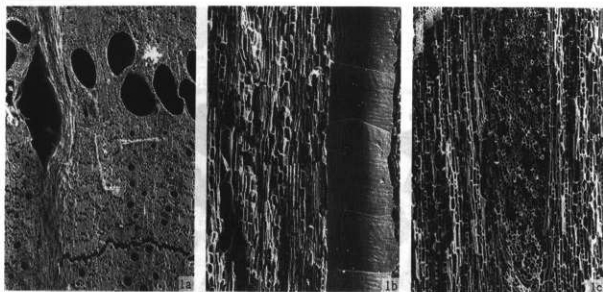


3. AT火山ガラス (試料番号 2)

01 : カンラン石 Opx : 斜方輝石 Cpx : 単斜輝石

0.5mm

図版 隼人山遺跡炭化材



1. コナラ属コナラ亞属クスギ節 (試料番号197)
a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c